頭註

# 國譯本草綱目

第一冊

春陽堂藏版

原著　明　李時珍

監修・校註　理學博士　白井光太郎

顧問　木村博昭

考定　理學博士　牧野富太郎

考定　理學博士　脇水鐵五郎

考定　岡田信利

考定　矢野宗幹

考定　木村康一

譯文　鈴木眞海

## 寫眞說明

昭和二年二月，米國のW. T. Swingl氏が本草に關する古籍訪求の目的で來朝した際，氏の請に依り，吾が內閣文庫所藏の萬曆庚寅―日本天正十八年・西曆一五九〇年―初版本草綱目，所謂金陵本の一部分を撮影したものである。

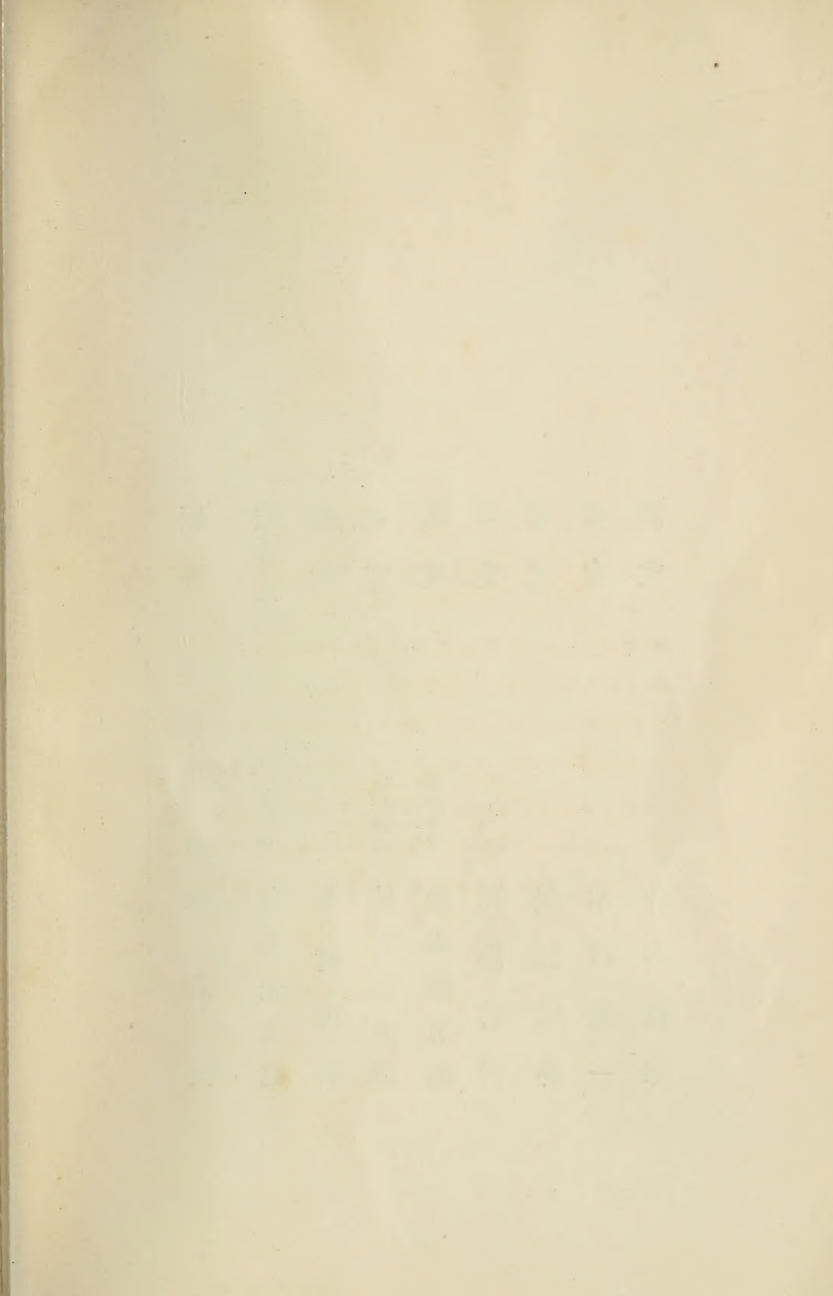
**第一・二葉** 弇州王世貞撰序文の首・尾各一紙。

**第三・四葉** 輯書姓氏。特に初版のみに存するもの。

**第五葉** 本文の一部分，序例の第一紙。

**第六葉** 本文の一部分，穀部玉蜀黍の條。

**第七・八葉** 附圖。金石部・穀部の各一部分。

金陵版本草綱目は，支那に於ては早く已に亡佚し，世界に現存するものは，內閣文庫所藏一部の外，京都恩賜植物園大森文庫所藏一部，伊藤篤太郎博士所藏一部，及び二百餘年前，和蘭人Gearg Eberhart Runph氏が支那より齎し還り，現に伯林王立圖書館に收藏する一部，都て四部に過ぎぬのである。

## 寫眞說明

昭和二年二月，米國のW. T. Swingl氏が本草に關する古籍訪求の目的で來朝した際，氏の請に依り，吾が內閣文庫所藏の萬曆庚寅一日本天正十八年・西曆一五九〇年一刻版本草綱目，所謂金陵本の一部分を撮影したものである。

**第一・二葉**　弇州王世貞撰序文の首・尾各一紙。

**第三・四葉**　輯書姓氏。特に初版のみに存するもの。

**第五葉**　本文の一部分，序例の第一紙。

**第六葉**　本文の一部分，穀部玉蜀黍の條。

**第七・八葉**　附圖。金石部・穀部の各一部分。

金陵版本草綱目は，支那に於ては早く已に亡佚し，世界に現存するものは，內閣文庫所藏一部の外，京都恩賜植物園大森文庫所藏一部，伊藤篤太郎博士所藏一部，及び二百餘年前，和蘭人Gearg Eberhart Rumph氏が支那より齎し還り，現に伯林王立圖書館に收藏する一部，都て四部に過ぎぬのである。

# 本草綱目序

紀稱望龍光知古劍覘寶氣辯明珠故萍實商羊非天明莫洞厥後博物稱華辯字稱康析寶玉稱倚頓亦僅僅晨星耳楚蘄陽李君東璧一日過予弇山園謁予留飲數日予窺其人晬然貌也癯然身也津津然譚議也

博支機之石必訪賣卜予方著弇州
巵言恚博古如丹鉛巵言後乏人也
何幸覩茲集哉茲集也藏之深山石
室無當盍鍥之以共天下後世味太
玄如子雲者　旹
萬曆歲庚寅春上元日弇州山人鳳
洲王世貞拜撰

## 輯書姓氏

勅封文林郎四川蓬溪縣知縣蘄州李時珍編輯

雲南永昌府通判男李建中

黄州府儒學生員男李建元　校正

應天府儒學生員　黄申　高第　同閱

太醫院醫士男李建方

蘄州儒學生員男李建木重訂

生員孫李樹宗

生員孫李樹聲次卷

生員孫李樹勳

荆府引禮生孫李樹本楷書

金陵後學胡承龍梓行

序例上

## 歷代諸家本草

神農本草經　掌禹錫曰舊說本草經三卷神農所作而不經見漢書藝文志亦無錄焉漢平帝紀云元始五年舉天下通知方術本草者所在軺傳遣詣京師樓護傳稱護少誦醫經本草方術數十萬言本草之名蓋見于此唐李世勣等以梁七錄載神農本草三卷推以為始又疑所載郡縣有後漢地名似張機華佗輩所為皆不然也按淮南子云神農嘗百草之滋味一日而七十毒由是醫方興焉蓋上世未著文字師學相傳謂之本草兩漢以來名醫益衆張華輩始因古學附以新說通為編述本草由是見于經錄也寇宗奭曰漢書雖言本草不能斷自何代而作世本淮南子雖言神農嘗百草以和藥亦無本草之名惟帝王世紀云黃帝使岐伯嘗味草木定本草經造醫方以療衆疾乃知本草之名自黃帝始蓋上古聖賢具生知之智故能辨天下品物之性味合世人疾病之所宜後世賢智之士從而和之又增其品焉韓保昇曰藥有玉石草木蟲獸而云本草者為諸藥中草類最多也

名醫別錄　李時珍曰神農本草藥分三品計三百六十五種以應周天之數梁陶弘景復增漢魏以下名醫所

功同時珍

根主治煮汁服利小便止喘滿燒灰酒服治產難有效時珍

附方新一 小便不通止喘 紅秫散用紅秫黍根二兩扁蓄一兩半燈心百莖每服半兩流水煎服張文叔方

玉蜀黍綱目

釋名玉高粱

集解時珍曰玉蜀黍種出西土種者亦罕其苗葉俱似蜀黍而肥矮亦似薏苡苗高三四尺六七月開花成穗如秕麥狀苗心別出一苞如椶魚形苞上出白鬚垂垂久則苞拆子出顆顆攢簇子亦大如椶子黃白色可炸炒食之炒拆白花如炒拆糯穀之狀

米氣味甘平無毒主治調中開胃時珍

根葉氣味主治小便淋瀝沙石痛不可忍煎湯頻飲時珍

粱別錄中品

校正別錄中品有青粱米黃粱米白粱米今併為一

# 本草綱目附圖卷之上

階文林郎蓬溪知縣男李建中輯
府學生男李建元圖
州學生孫李樹宗校

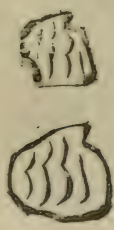
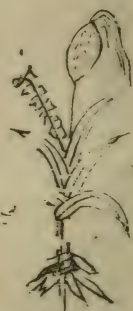
## 金石部金類附圖

水金

銀

山金

錫悋脂
銀膏

穀部稷粟類附圖
稷不粘
黍粘
玉蜀黍
穇子
粱
粟
秫
黍
稗
秫粘

# 頭註國譯本草綱目序

本草ノ一科ハ漢土原史時代ニ創マリ後漢ノ世ニ筆録セラレ歴代ノ名醫碩學ノ研鑽增脩シ以テ今日ニ至リシモノニシテ其内容ハ主トシテ不老長生食治却病治療疾病ニ関スル動植鑛ノ天産物及其製品ニ就テ一一其名称形狀產地效用用法等ヲ考究シ漢土ニ於ケル醫術衛生ヨリ名物物產ニ亘リ人世必須ノ學問智識ノ基礎ヲナスモノナリ就中本草綱目ノ一書ハ明ノ蘄州ノ名醫李時珍東璧ノ編輯スル所ニ係リ漢土歴代ノ本草ヲ經トシ諸子百家七百十餘家ノ書ヲ緯トシテ品物一千八百九十二種ニ就キ一一釋名集解氣味主治脩治發明正誤附方ノ七項ニ分説シテ歴代ノ名醫碩學ノ諸説ヲ參輯評論シテ自己ノ見識

ヲ以テ之ヲ判定セルモノニシテ全部五十二巻本草學上空前絶後ノ大著ト稱セラル其記述スル所漢土古代ノ傳說妄信不老神仙ノ說陰陽五行五運六氣ノ說等近時學說ヲ以テシテハ了解ニ苦ムモノ尠カラズト雖モ漢土周代ニ大ニ發達セル經驗醫學ニ關スル漢土四千年ニ亘ル歷代ノ名醫ガ沈痾ヲ醫シ痼疾ヲ療シタル名方奇藥ノ經驗ヲ集錄シタルモノナレバ醫藥ニ關スル無比ノ寶典ニシテ三百年ノ今日尚ホ燦トシテ其聲價ヲ失ハザルモノナリ本書ハ明ノ萬曆庚寅即我天正十八年ニ始メテ上木セラレ幾モナク我邦ニ渡來シ醫家ハ勿論碩學鴻儒ノ參考書トナリ林道春中村惕齋貝原益軒新井白石等ガ研鑽怠ラザリシモノニシテ就中稻若水松岡恕菴小野蘭山山本亡羊等名

物物産家ノ輩出ヲ促カシ国利民福ヲ増進スルニ與テ力アリシナリ徳川氏時代ニアリテハ漢學ノ隆盛ナリシ為メ原書ニ就テ之ヲ講求スルコト容易ナリシモ明治時代ニ入リ漢医方ノ廢壓ト共ニ漢學ノ講習衰退シ此有用ノ書モ棄テ顧ミザルコト土芥ノ如ク高閣ニ束ネラレテ蠹魚ノ巣窟ト変セリ然レトモ明玉如何ニカ光耀ヲ発セサラン近時欧米ノ學者此書ニ注目シ之ヲ講求スル事漸ク行ハルヽヨリ本邦ノ學徒亦之ヲ参考セントスルノ気運ニ向ヘリ然ルニ上文字ノ佶屈聱牙ナル字句ノ通解シ易カラザル参考ニ由ナシ春陽堂主人茲ニ慨アリ本書頭註國譯監修ノ事ヲ以テ予ニ囑セラル予浅學菲才其任ニ非スト雖モ廢ヲ起シ絶ヲ續クノ念息ム能ハズ同志ヲ鳩合シテ

以テ其事ニ當ルコト、セリ大方ノ讀者此書ニ因リテ東洋ニ發達セル醫方藥物ノ精髓ヲ咀嚼スルコトヲ得テ之ヲ實地ニ應用セバ予輩區々ノ努力モ亦國利ヲ起シ民瘼ヲ救フニ於テ小補ナクンバアラザルベシ

昭和四年四月

理學博士　白井光太郎識

# 例

本草の典籍には、學術的にも、實用的にも、近代の智識を刺戟する多くの事實を蘊んでゐた。或は科學の將來に貽された、太古以來の一大祕寶藏とさへ嘆稱されてゐるのである。しかし、如何せん、その內容に向つて研究を進むるには、先づ第一に難關がある。それは、その學問の目的からいへば、殆ど重要意義のないものではありながら、而も近代人の訪問を遮つた、極めて頑堅な鐵扉であつたのだ。記述の難解難讀が實にそれである。

それも、國語の相異といふだけならば、さして問題ではない筈だが、本草の典籍は、必しもさう簡單には行かぬのである。その全體の結構として、太古以來、各時代、各學者の學說記述そのままを、雜然と綜蒐されたものである上に、幾度か數へ難き傳寫、版刻を經てゐるところから、舛訛謬誤がその都度加はつて、層層重積されて來たのである。所謂淄澠を分つは、如何にも容易なことでなくなつた。支那歷代の學者の間に、屢繰返された激しい論爭も、その紛端の多くはこの點にあつたのだ。難關の扉は、かくて

早くも二重になつてゐたのである。

翻つて、吾邦に傳承された斯學の有樣はどうであつたか。明治文運の打開已前には、百般の學問、主として支那の文字に頼り來つたものではあるが、起原し發達した支那に在つてなほ難解な典籍が、國語の異る邦人に容易に取扱はれやうわけは固よりない。如何に苦心慘澹であつたかは、現存數種の和刻本草綱目を繙かれる何人も、直に首肯せらるるところであらう。單なる點劃、字句の誤は際限がない。就中目立て甚しいものは傍訓であつて、原書の誤寫に更に誤讀を重ねたものや、全然原文の意味を反對に讀んだものや、一たびそれに逢着すれば、進むも退くも、終に要領を得やうのない場合が屢ある。益軒、若水等諸碩儒が手澤を加へられたと稱するものでさへ、なほ往往類似の誤を免れない。難關はここに正に三重に築かれたわけである。かやうな有樣だから、吾邦文化の過渡期に際し、本草學が危く置き忘れられたのも、全く理由なしとはいはれなかつた。

凡そ支那古來の學問で、諸般の文化科學の範圍に入る方面は、多くはその學問の內容と、その國語、文章と、極めて密接な關係がある。それ等の學問が近代文化の世界に

新なる異彩として認めらるるに至つたには、互に相輔け相俟つほどの深い因縁が結ばれてあつたのだ。然るに、自然科學の範圍に入る學問、而も特殊な體系を有つた本草の學問では、頗る趣を異にした。相輔け相俟つ役目はおろか、その國語、文章は、その學問を湮沒の危殆にまで驅り導いた、怖るべき厄介な障碍物であつたのだ。ために、極めて少數特殊の專門學者以外の近代一般人には、その門戶をさへ窺ふ由なき有樣なのである。況や多くの文物はますます漢字、漢文と遠ざからうとする今日、本草の典籍を依然として漢文の堅扉に鎖して置くことは、苟も文化に關心を有つ者の看過し得ないことであらう。國語、文體の如何は、固より學問そのものの目的と相干るものではないにしても、本草の場合に於ける關係は頗る重大な問題のやうに思はれる。私が本草綱目五十二卷全譯の僭なる企は、かやうな考から夙に胚芽し來つたものである。

偶、恩師故澀川玄耳氏の舊藏本一部を巻間に獲て、慨然として孤志を振ひ、遂に譯稿の筆を起し、首尾完きを得んためには、一腔の心血を傾け盡さんことを、竊に自ら誓つたのであつた。幸に、辱知井上通泰博士の激發あり、吾邦斯學の權威者白井光太郎博

士に請ふて、親しく監修の勞を惠まるるの金諾を蒙り、ここに譯業は頓に光明を得て、凡て白井博士の懇切周到なる提撕の下に、大略左の如き要領を以て終に譯了し得たのである。

一、譯文。舊本の疑誤は、各種刊本並に原著者引用の典籍と參校刊正し、譯文はすべて現代語を用ゐた。直譯の方が正確のやうにもあるが、概して直譯なるものは本文の意味を解するに紛錯を招き勝な難がある。ここにはなるだけ現代一般人に解し易きを要とした。藥物標名下の和名、學名の註記は、すべて監修、考定諸家に仰いだものである。

一、不譯語。病名、術語等の特殊の語には、神農以來の古代語が多く、その含蓄された內容を表すべく、適當な譯語の全く見當らないものがある。強ひて新語、造語に附會するは、頗る危險なことでもあり、それらはすべて原語そのままを存置して、意義解釋は、一に監修白井博士の頭註、並に顧問、考定各專門諸家の審按に仰ぎ、地理の一門に就てのみ、纔に私の私註を書き入れた。

一、振假名。やや六ヶ敷い文字には振假名を施した。藥名、病名、術語等の讀音は、勉

めて舊來の讀み習はしに據らうとしたのであるが、適、舊讀音の現在に傳らぬものもある。かたがた近似を斟酌し、正しきに從はうと努めたが、漢音、呉音、俗音等の間には或は淆訛を免れなかつたことと思ふ。

一、圖。唐本、和刻本、いづれも或は一括し、或は各册に配當してあるが、閲覽上必しも便でない。本書は、唐愼微證類本草の例の如く、すべて各條に挿入した。

一、分量。合藥分劑上尤も重要緊切な關係に在る今古秤量の換算、並に考證に就ては、別に分量の一門を設けて編述し、本書末尾に附載した。

一、增廣。刊行に方り、清の趙學敏撰本草綱目拾遺十卷の全譯、並に新修の索引を増附した。又、第一册に序例の原漢文を添へたのは、特に一斑の對照を請はんとする微意である。

鑒るに前蹤なきと、力能く副はざると、ために前賢の遺寶を殘賊するの罪甚だ深きを懼れる。忝く監修白井博士の詳明なる校註、並に木村國手、牧野博士、脇水博士、岡田氏、矢野氏、木村氏等諸碩學の嚴密なる考定を戴いて上梓し得たことは、まことに瓦礫放光の多幸である。又、長く編稿の朽缺を救はんがために、春陽堂主人和田利彦氏、特

に資を投じて版行の事に從はれ、組版その他の手數に多くの我儘を容された芳情は、尤も多とするところである。竝に、謹で感謝の意を篇端に記す。

昭和四年四月八日

駒込桔梗舺廬にて　鈴木眞海誌

# 頭註國譯本草綱目ノ底本ニ就テ

頭註國譯本草綱目ヲ作ルニ就キ、成ル可ク正確ヲ期スル爲メ、底本ヲ擇ビ誤謬ヲ減ズルコトヲ圖リ、最初ハ本草綱目ノ初版本ニ就テ譯出センコトヲ企テタリ。然レドモ、初版本ハ現今ニアリテハ稀有ニ屬シ、之ヲ得ルコト容易ナラザルヨリ、第二版江西本草綱目ノ和刻本ヲ使用スルコトヽセリ。和刻本ヲ擇ビシハ、之ヲ得ルコト容易ナルガ爲ニシテ、江西本草綱目モ唐本ハ已ニ現今稀有ニ屬シ、之ヲ得ルコト容易ナラザレバナリ。江西本草綱目ハ明ノ萬曆癸卯、卽我慶長八年ノ開版ニシテ、初版字畫ノ漫漶ナルヲ訂正シ、別ニ奇經八脉攷、脉訣攷證、瀕湖脉學ノ三書ヲ附刻セシモノナリ。此本ノ和刻ハ寬永十四年初春、京都ニ於テ發行セラレタリ。而シテ江西本草綱目ハ初版本ノ字畫ヲ訂正シ、時珍著ノ脉學ニ關スルモノ三種ヲ附刻セルノミニテ、其圖畫ハ初版ヲ模刻セルモノナレバ、頗ル粗拙ナルヲ免レズ。是ニ於テ、明ノ崇禎庚辰、我寬永十七年ニ第三版武林錢衙版本草綱目出デヽ、其圖畫ヲ改正セリ。承應二年、寬永版江西本草綱目發行書肆野田彌次右衛門此書ヲ得テ、崇禎版本草綱目ノ小引及圖畫ヲ新刻シ、之ヲ寬永版江西本草綱目ニ附加セリ。之ヲ承應版本草綱目トス。頭註國譯本草綱目モ、其本文ハ第二版ノ和刻本ニ據リタルモノナレドモ、其圖畫及崇禎版本草綱目小引ハ承應版ヲ採用

セルモノナリ。而シテ脉學ニ關スル三種ノ書物ハ之ヲ刪除スルコトヽセリ。寛文十二年、校正本草綱目和刻本出ヅ。是ハ和名入本草綱目トモ稱ス。貝原益軒ガ監脩セシモノニシテ、別ニ傍訓本草綱目品目及附錄ノ一冊ヲ附刻セリ。是ハ崇禎重刻武林錢衙版本草綱目全部ヲ翻刻セルモノニシテ、江西本草綱目ニ比シ、字句ノ改正初版本草綱目ト相違スルモノ稍多シ。此書ニハ世間往々本邦本草學者ガ本草綱目ニ引用セル原書ニ就テ、綱目本文ノ誤字ヲ訂正セル書入本アリ大ニ考勘ニ益アリ。予幸ニ一本ヲ藏シ、岡田信利氏亦一本ヲ藏セラルヽヲ以テ、頭註國譯本草綱目編輯ニ當リ、之ヲ參考シテ本文ノ誤謬ヲ訂正セルコト少カラズ。又、初版金陵本本草綱目ハ世間稀有ノ書ナレドモ、幸ニ京都植物園大森文庫ニ一本ヲ收藏セラルヽモノアリ。參考トシテ之ヲ使用スルノ許可ヲ得タルハ、編輯者ノ感謝ニ堪ヘザル所ナリ。和刻本草綱目ニハ稻若水新校正本草綱目ト稱スルモノアリ。此書正德二年刻版ノ業ヲ創メ、三載ヲ經テ正德四年ニ成功ス。書肆唐本屋淸兵衞萬屋作右衞門等、稻若水ニ請ヒテ江西本草綱目ノ字ヲ正シ訛ヲ訂スノ本ニシテ、草部ノ萑草、果部ノ沒離梨ノ如キ、時珍ノ原本倶ニ脫漏セルヲ補入シ、蟲魚草木ノ名稱ニ至リテハ、舛訛ヲ釐正スルコト頗ル多シ、頭註國譯本草綱目亦此書ヲ參考シテ訂正スル所アリ。

初版本草綱目ハ我内閣文庫ニモ一本ヲ收藏ス。本書卷頭ニ揭出スル寫眞版ハ、同書ノ王世貞ノ序文

及輯書姓氏ナリ。此輯書姓氏ハ第二版以下ニハ省キテ載セザレバ、其舊態ヲ見ルガ爲ニ之ヲ掲グ。

本草綱目品物ノ和名ヲ考定セルモノニ本草綱目啓蒙アリ、小野蘭山ノ著ハス所ニシテ、最モ該博整備ノ書ト稱セラル。然レドモ百餘年前ノ著ニシテ、洋名及羅丁名ヲ缺如ス。頭註國譯本草綱目ハ此書ヲ參考シ、加フルニ洋名及羅丁名ノ對照シ得べキ者ハ之ヲ記入シ、以テ學者ノ參考ニ便セリ。（礫水記）

# 頭註國譯本草綱目　第一册

## 目次

## 本草綱目序例第二卷

# 本草綱目序（萬曆庚寅初版）

（一）紀に（二）『龍光を望んで古劍を知り、（三）寶氣を覩つて明珠を辯ず』といつてあるが、（四）萍實や商羊まで知つてゐたといふことは、天の明智ならでは能はぬことだ。その後も、物に博きは（五）華を稱し、字を辯ずるは（六）康を稱し、寶玉を析つは（七）倚頓を稱したが、それ等の明智は誠に稀なること曉の星にも比すべきものである。

楚の蘄陽の李東璧君が、たまたま予の弇山園へ訪ねられて、親しく數日間を過されたが、その爲人を見るに、（八）睟然たるその風貌、（九）癯然たるその體軀、（一〇）津津然たるその譚議、まことに北斗以南の一人者である。その旅裝に帶びたものとては、他に何等の長物もない、ただ數十卷の本草綱目一書のみであつた。そして謂はれるには、『時珍は荊楚の田舍者で、幼時から羸疾多く、資性鈍椎な人間であるが、典籍に耽ることが生れつきで、（一一）蔗飴を啖ふが若しといふ有樣、遂に羣書を漁り、百家の說を搔き集め、凡そ子、史、經、傳、聲韻、農圃、醫卜、星相から樂府のやうなものまでも、やや理解したものをばぼつぼつ書留めた。中に、古から傳る本草の一書

（一）紀トハ傳、紀ヲ云フ。
（二）王勃ガ滕王閣ノ序ニ、物華天寶龍光射牛斗之墟ノ文アリ。註ニ云フ、晉書ニ載アリ、干將ト曰ヒ、莫邪ト曰フ。其龍文光彩直ニ牛斗二星ノ間ヲ射ル。雷煥之ヲ得、張華其一ヲ分ツトアリ。
（三）南越叢志ニ、撫州昔寶ヲ積ウ。光アリ夜夜桂上ノ穴ヨリ出デテ滿室如月。大守異物ヲ知ツテ吏卒ヲ集メテ桂ヲ碎ケバ、乃チ大ナル蚌公アリ、長サ柱ニ亙ル、腹中珠ヲ得タリ。大サ鷲卵ノ如シ、圓瑩光彩アリ。

がある。神農の當時から漢、梁、唐、宋、下つては國朝に至るまで、隨分永い間、多くの人人に依つて註解を試みられたものであるが、如何にもその中には舛謬、差譌、遺漏、枚擧に遑あらざる有樣だ。それで、敢て僭越にも整理編纂の野心を起し、三十年の歲月を費して、參考書を調べること八百餘家、原稿を更めること前後三回、重複は芟り、缺漏は緝め、不正確なものは飽くまで正しき據を究め、舊本の一千五百十八種に對して新に三百七十四種の藥を增し、十六部、五十二卷に纏め上げた。集成などいふ程のものではないけれども、麤ぼ大體を完備し得たつもりで、僭に本草綱目と名けることにした。是非一篇の序文を戴いて、不朽のものにしたいと思ふ」といふのであつた。

そこで卷を開いて熟讀して見ると、藥每に正名を標して綱と爲し。釋名を附し目と爲して始を正し。次に集解、辯疑、正誤ではその產地や形狀を詳にし。次に氣味、主治、附方で體と用とを備にし、上は三皇五帝當時の文獻から、下は小說、戲曲等の文藝物に至るまで、苟も關係のあるものは悉く引用して飽くまで精細を極めて居る。さながら(一三)金谷の別業へ入つて、目を奪ふ珍奇さまざまなものに接し、

(四)萍實ヤ商羊ノ事ハ家語ニ其紀事アリ。此文ハ孔子ノ博聞多識ヲ例ニ擧ゲタモノナリ。
(五)華ハ晉ノ張華字茂先ヲ指ス。博物志二十卷ヲ撰ス。
(六)康ハ嵇康。三國時代魏ノ人、竹林七賢人ノ一人。
(七)倚頓ハ春秋時代魯ノ富人、能ク玉理ヲ知リテ其情ヲ失ハズト云フ。
(八)睟然ハツヤツヤシキヲイフ、孟子ニ、睟然見於面トアリ。
(九)癯然ハ瘠セタル形ナリ。
(一〇)淡ニシテ味アルヲ津津トイフ。
(一一)蔗ハ甘蔗、サタウキビ、飴ハアメ。
(一二)子ハ諸子、史ハ歴史、經傳ハ六經及諸儒ノ傳註。聲音ハ

字書ノ類、爾雅說文、玉篇等。農圃ハ農業ニ關スル書。醫卜ハ醫者卜者ノ書。星相ハ天文、望氣、風水、相術。樂府ハ音樂、歌謠ノ書。

（一三）金谷ハ晉ノ石崇ノ園名。河南縣ノ界ニ在リ。淸泉、茂林、雲甍ヲ以テ當時ニ著聞ス。

（一四）氷壺ハ瑩徹透明ノモノ。玉鑑ハ明鏡ヲイフ。

（一五）性理ハ性命ノ理ナリ。易說卦ニ、理ヲ窮メ性ヲ盡シテ以テ命ニ至ルトアリ。

（一六）格物ハ大學ニ、知ヲ致スハ物ニ格ルニアリトアリ。

（一七）祕籙ハ卽チ最モ玄妙ナル祕文圖籙ノ意ナリ。

（一八）碔ハ玉ニ似テ非ナル石。

龍王の宮殿へ行つてあらゆる貴寶の陳列してあるを見るやうだ。（一四）氷壺玉鑑に對して毛髪の末まで明に見るやうな感じがする。如何にも該博であつて、しかも繁雜ではなく、極めて詳細であつて、しかも要領明快だ。綜核究竟して直ちに幽遠な理論の深奥に徹して居る。これは決して單なる醫書としてのみ觀るべきものではあるまい。實に（一五）性理の精微、（一六）格物の通典、帝王の（一七）祕籙、臣民の重寶だ。研究、貢獻に於ける李君の努力は、まことに偉大なものと謂はねばならぬ。

ああ、（一八）碔やら玉やら判らず、（一九）朱も紫も混淆され、その弊たるやまことに久しいものであつた。（二〇）專車の骨を辯するには必ず魯儒を竢たねばならず、（二一）支機の石を精しくするには必ず賣卜を訪はねばならぬといふことだが、予もさきに弇州卮言を著して、かの（二二）丹鉛卮言の如き博古のものは、到底後代の人の手によつて現れないことを甚だ遺憾に思つたのである。ところが何等の幸ぞ、ここに斯の如き書を見ることを得やうとは。この書の如きは決して（二三）深山石室に藏してしまふべきものではない。これは是非公刊して、天下後世の（二四）太玄を味ふこと子雲の如きものの爲にせねばならないものである。

時に萬曆庚寅の歲春上元の日　(三五)弇州山人　鳳洲　王世貞　拜撰

(二九)朱ハ正色、紫ハ間色。

(三〇)昔、吳、越ヲ伐チ會稽ヲ隳シテ車ニ滿ツル程ノ大ナル背椎骨ヲ獲タルトキ、之ヲ孔子ニ示シテ何物ナルカヲ質問シタルニ、防風氏ノ骨ナリト云フ事ヲ答ヘタリ。魯儒トハ孔子ヲ指ス。國語ニ出ヅ。

(三一)支機石トハ、天漢ノ織女ノ用ウル支機石。賣トトハ漢ノ嚴遵字君平、臨邛ノ人、トヲ成都ノ市中ニ賣ル。或人舟ニ乘リ、絕海ニ航シ天河ノ畔ニ到リ、織女ヨリ一石ヲ得テ歸リ、君平ニ問フ。君平答テ、此レ織女ノ支機石ナリトイフ。此故事ヲ引用セルナリ。

(三二)丹鉛巵言ハ楊用修ノ著書。名愼、字用修、升菴ト號ス。四川新都ノ人、博學著述多シ。明ノ正德嘉靖ノ間、翰林修撰諫議タリ。

(三三)漢書列傳三十二司馬遷傳ニ、太史公ガ書、之ヲ名山ニ藏ス、副ハ京師ニアリ。以テ後ノ君子ヲ竢ツトアリ。註ニ曰ク、山ニ藏スルハ亡失ニ備フルナリ、其副貳ノ本之ヲ京師ニ止ムトアリ。

(三四)太玄ハ漢ノ楊雄字子雲ノ著書ノ名。易經ニ擬シ作リタルモノニシテ、大ハ則チ宇宙ヲ包ミ、細ハ則チ毛髮ニ入ル、天地人ノ道ヲ合シテ一ト爲スモノト稱セラル。此處ノ文ハ、深遠ノ學理ヲ好ム子雲ノ如キ者ノ爲ニ公刊セヨトノ意ナルベシ。

(三五)王世貞ハ明太倉ノ人、字ハ元美、鳳州又ハ弇州山人ト號ス。官刑部尙書ニ至ル。ソノ詩文ハ李攀龍ト名ヲ齊ウス。弇州山人ノ號ハ世貞ノ家園ニ因ムモノニシテ、ソノ家園ハ江南通志ニ據レバ、鎭洋縣隆福寺ノ西ニ在リ。名勝志ニハ、大倉州城內隆福寺前ニ在リトイフ。ソノ鉅麗吳中ニ冠タリシト傳フ。世貞手記ノ弇山園記ニ『寺之右卽吾弇山園也。亦名弇州園』トアリ。鳳州ノ號ハソノ生地大倉州ノ雙鳳鄕ニ因ムモノニ似タリ。

## 本草綱目序

紀稱望龍光知古劍覘寶氣辨明珠故萍實商羊非天明莫洞厥後博物稱華辨字稱康析寶玉稱倚頓亦僅僅晨星耳楚蘄陽李君東璧一日過予弇山園謁予留飲數日予窺其人睟然貌也癯然身也津津然譚議也眞北斗以南一人解其裝無長物有本草綱目數十卷謂予曰時珍荊楚鄙人也幼多羸疾質成鈍椎長耽典籍若啖蔗飴遂漁獵群書搜羅百氏凡子史經傳聲韻農圃醫卜星相樂府諸家稍有得處輒著數言古有本草一書自炎皇及漢梁唐宋下迨國朝註解群氏舊矣第其中舛繆差譌遺漏不可枚數迺敢奮編摩之志僭纂述之權歲歷三十稔書考八百餘家稿凡三易複者芟之闕者緝之譌者繩之舊本一千五百一十八種今增藥三百七十四種分爲一十六部著成五十二卷雖非集成亦麤大備僭名曰本草綱目願乞一言以託不朽予開卷細玩每藥標正名爲綱附釋名爲目正始也次以集解辯疑正誤詳其土產形狀也次以氣味主治附方著其體用也上自墳典下及傳奇凡有相關靡不備采如入金谷之園種色奪目如登龍君之宮寶藏悉陳如對冰壺玉鑑毛髮可指數也博而不繁詳而有要綜核究竟直窺淵海茲豈禁以醫書觀哉實性理之精微格物之通典帝王之秘籙臣民之重寶也李君用心加惠何勤哉噫碔玉莫剖朱紫相傾弊也久矣故辯專車之骨必竢魯儒博支機之石必訪賣卜予方著弇州巵言恚博古如丹鉛巵言後乏人也何幸覩茲集哉茲集也藏之深山石室無當盍鍥之以共天下後世味太玄如子雲者旹

萬曆歲庚寅春上元日弇州山人鳳洲王世貞拜撰

# 重刊本草綱目序（萬曆癸卯再版）

余は(一)萬暦二十九年から乏を江西の地方廳に承けて居るが、(二)按察司の事務は閑散なもので餘暇も多いところから、書庫に在る舊刻の書籍を手當り次第に目を曝した。が、それは(三)晉の陶侃が氣力の衰耗を防ぐ爲に、朝夕屋敷の内から外、外から内へ甓を運び移すことを日課にしたといふ話と、意味は殆ど近かつた。ある日長官の(四)御史中丞桐洲の夏公に會つたときのこと、『本草綱目なる書籍は大に國民の保健、衛生に裨益するところのもので、ただもの知りの材料だけの性質のものではない。しかるに(五)初版は印刷もまだ精工でなく、一般的にもまだ行渡つてゐないから、一つこれが普及の方法を講じて見たいと思ふがどうであらう』といふ話があつた。そこで手に取つて見ると、それは楚の名醫李時珍が編輯したもので、嘗て(六)神宗皇帝の獻覽を賜り、宮廷並に官廳に所藏せられたものであつた。

そもそも「本草」なる學問は、その起原をいへば頗る悠遠なものである。上古聖人はまことに人民を愛撫されたもので、(七)羲皇のときには八卦の排列を創意し、(八)炎

(一)萬曆。明神宗ノ年號、二十九年ハ西暦千六百一年ニ當ル。

(二)地方各道ノ司法官、提刑按察司ト稱ス。

(三)陶侃、東晉ノ大司馬。

(四)地方ノ省ノ司法長官ノ首席也。當時夏公ノ官名ハ、都察院副都御史ナリ。

(五)初版ハ金陵版ト稱シ、今ノ南京ニ於テ胡承龍ト云フ人ノ開刊シタモノ、萬曆庚寅ノ王世貞ノ序アリ、其書林氏ヲ刻記シテ夏ノ序文ハナク、圖ハ集メテ上下二卷トシ別冊トナシテアリ。

(六)神宗、明朝第十

門主名ハ胡鈎、穆宗ノ子ナリ。
（七）義皇ハ太昊伏羲氏ヲ云フ。
（八）炎帝ハ神農氏ヲ云フ。

帝のときには百草の性能を試驗せられた。八卦を畫するの眞意は吉に趨き凶を避け、天行と人爲との諧和を得せしめんといふにあり、百草を嘗めた目的は生を繕め死を救ひ、人民をして充分天壽の福を享けしめやうといふにあつたのだ。つまり「易」なるものが創作せられると殆と前後して、この「本草」なる學問が濫觴したものだといひ得るのである。人生に最も重要な、最も切實な問題は何かといへば、人間の行爲の問題と人間の生命の問題に過ぐるものはない。故に古聖神農氏は萬機の政務遑あらざる中にあつて、而も眇たる一草一木に對し、非常な熱心を以て尋求せられたものであらう。その重要さが認められなかつたとしたならば、自ら暇あれば、自ら無爲安逸を樂み得べき王者の身を以て、何を苦んで一日の間に七十の毒に遇ひ、區區の臟腑を以て藥物の性能の剛、柔、升、伏、等千變萬化の別を實驗攻究するの勞苦に堪へ得られやうか。

かやうにして成立した本草の學も、その後しばらく埋沒した。漢の蕭何が（九）亡秦の府庫を引繼いだ際にも、その引繼日錄に載らず、官命を受けて（一〇）陳農が天下の遺書を搜蒐した際にも、まだその書をば發見されず、（一一）樓護の如き、醫方、本草

（九）漢高祖元年、高祖項羽ニ先ジテ咸陽ニ入リ、丞相蕭何秦ノ府庫ニ入ツテ書冊典籍ヲ調ベ、之ヲ封シタル爲メ、兵火ヲ

數萬言を誦したといふ人が現れてさへ、尙ほ本草經三卷の書名は典籍の記錄にも現れてゐなかつた。しかし漢の末葉まで、神農本經の藥品として三百六十餘種だけは傳へられてゐたのであつた。それに對し爾來(一二)陶弘景、蘇恭、李珣、韓保昇等諸學者が相繼いて增益し、宋朝には(一三)唐愼微が圖經以外に涉つて廣く旁摭し、再びその品目が增加して、その數は千五百餘種にも及んだのである。まことに蔚乎として豐富なものにはなつたのだが、その種類、名稱は却て頗る煩雜となり、就中宋代の人人の著錄に至つては舛謬殊に甚しいものだつた。著者李君はそれを遺憾とし、その重複を删り、その遺漏を補ひ、新に三百七十四種を增加し、十有六部に分ち、すべて正確な名稱を據として別號まで解釋し、然る上に集解、辯疑で諸說の誤を正し、生產地、形態、氣味を詳記してその物の實際を明にし、主治、諸方を附してその應用を明示した。その書を「本草綱目」と命名したのである。蓋しこの學に於ける今古諸學說の一大集成の大業であつた。

或者に言はせると『病を患ふものは(一四)五臟であり、病源は(一五)七情に過ぎない。故に古の達人の處方、制劑は數種のものを用うるに過ぎなかつたのだ。然るに故

免レタリ。

(一〇)漢ノ成帝河平三年、光祿大夫劉向ガ、謁者陳農ヲ使トシテ遺書ヲ天下ニ求メシコトアリ。

(一一)樓護字君卿、漢ノ王莽時代ノ人。

(一二)梁ノ陶弘景、神農本草經集註七卷ヲ作ル。唐ノ蘇恭、新脩本草ヲ註解ス。唐ノ李珣、海藥本草六卷ヲ作ル。僞蜀ノ韓保昇、蜀本草ヲ作ル。

(一三)唐愼微、經史證類備急本草三十二卷ヲ作ル。

(一四)五臟ハ肝、心、脾、肺、腎。

(一五)七情ハ喜、怒、哀、懼、愛、惡、慾。

(一六)漢ノ文帝ノ時ニ、淳于意ガ芫華(和名テウジサクラ一名フヂモドキ)一撮ヲ以テ蟯虫ヲ下シ瀕死ノ

に多くのものを羅列して、繁多に苦む理由が判らない』といふのであるが、しかし吾等が信ずるところに據れば、藥劑なるものは、醫家の叡智と學理とを實際に發揮する唯一の資料なのであつて、良醫が當面の病に對する投藥は、極めて簡易なるべきものであると同時に、如何なる場合にも應じ得るの準備は常に豐富潤澤であらねばならぬわけである。故に(一六)芫華の一撮、(一七)半夏の四五粒、效果はそれだけで充分擧げ得るものには相違ないが、翻つてその藥籠中には、(一八)牛溲、馬勃、鼠肝、蟲臂、あらゆるもののすべてが收藏されねばならぬのである。言ふまでもなく、それは準備は豐富にして、適用は簡單なるべき當然の相違なのである。この「本草綱目」の使命目的もまた準備の萬全にあることは言ふまでもない。

『人の(一九)生齒日に煩しく、物の(二〇)化育亦盛なり』であつて、人間の精神的、肉體的生活が擴充され發展さるるに隨つて、生ずるところの疾病もまた自ら多種多樣となるのである。が、天の人を愛すること甚しく、世界に生産し存在する「物」は皆それぞれ人間の利用を待つて居るといつてもよい。その無限に與へられた「物」に對し、何等かの有效が認められた場合には直に取つて有用に充てる。勢ひ範圍が

病者ヲ救ヒタル故事ヲ指ス。

(一七)半夏四五粒、能ク嘔逆ヲ治ス。

(一八)牛溲ハ牛ノ溺。馬勃ハ菌類ノ一種、和名ホコリタケ。鼠肝ハ鼠ノ肝。蟲臂ハ蟲ノ足。

(一九)古制ニ、人生レテ男ハ八月ニシテ齒ヲ生シ、女ハ七月ニシテ齒ヲ生ズルヲ以テ、官皆ソノ數ヲ記シタリトイフ。此ニハ人口ノ增加ヲイフ。

(二〇)萬物ノ發生成育ヲイフ。

(二一)麻黃ノ如キ、莖ハ能ク汗ヲ發シ、根節ハ汗ヲ止ムトノ說アリ。當歸ノ如キ、頭ハ血ヲ止メ、尾ハ血ヲ破リ、身ハ血ヲ和スノ能アリト稱セラル。

(二二)唐ノ楊倞ガ作リ

博きに渉らざるを得ぬわけである。藥性の平なるは毒とはされぬ。氣の溫なるは寒とはされぬ。味の辛きは苦とはされぬ。而もその平、毒、溫、寒、辛、苦の中にも、またそれぞれに、微なるは強なると同一視するわけに行かず、重きもの輕きものの別がなければならず、同一物でも(二一)根と株とではその效力の適用を異にし、同一形態のものでも、補と泄とその作用を殊にする。故に名と實との混淆されるやうなことも屢あり、(二二)荀子の書を誤讀したり、(二三)呂覽に誤註を入れたり、(二四)蹲鴟を誤り稱し、(二五)苦彌誤り索める如き失態が、勝げて數ふべからざることとなるのである。これに對しそれぞれ正鵠を射しめるには、いかで繁詳ならざるわけに行かうか。かやうな次第だから「物」には假令藥としての名にあつても、その實物が實驗の效果を認められぬもの、(二六)蘇藪、蛞蟺の如きものならば錄せざるも可也であるが、その他の草根、樹皮、(二七)跂行、喙息の類より土苴、芻狗の如きに至るまで、そのもの自體は如何に微なるものとはいひながら、苟も事實上の效果が大であり、實驗上充分に根據あるものであるならば、その多きを厭ふべきいはれはない。況や曾ては漆葉、青黏が(二八)樊阿の壽命を延し、柔湯、火齊が(二九)齊國の臣の疾を

---

シ荀子註ニ、石決明ヲ龜脚トセルアリ。

(二三)呂覽ハ呂氏春秋ノ別名ナリ。此ニ誤註アリトナリ。

(二四)蹲鴟誤稱ト云フハ昔時支那江南ノ一權貴ガ、蜀都賦ニアル蹲鴟ハ芋也トアル註ノ芋ノ字ヲ羊ト誤讀シ、人カラ羊肉ヲ饋ラレシ時ノ答書ニ、蹲鴟ヲ惠マレ難有ト書シテ、大ニ笑ハレシコトアルヲ指シタルモノナリ。

(二五)苦彌誤索ト云フハ、苦彌ハ傳書中ニハ枸杞ノ根ノ名トセリ。然ルニ之ヲ枸杞子ト誤ツテ、枸杞子粥ヲ求ムル場合ニ苦彌粥ト記シテ之ヲ乞ヒシコト瑯琊代醉ニ出デタルヲ引キタルモノナリ。

(二六)蘇藪 [illegible]ニア

ル草ナレドモ、何物トモ分ラヌモノ。蛅蟴ハ郭璞ノ註ニ、米穀中ノ蠹小黑蟲是ナリトアリ。
(二七)跂行、喙息ハ獸類、鳥類。土苴ハ糞草糟粕ノ類。芻狗ハ藁ヲ結ビテ作ル狗形祭具ニ用ウルモノ。
(二八)樊阿ハ華佗ノ弟子。漆葉、靑黏散ハ華佗ノ處方。
(二九)齊臣ハ齊ノ淳于司馬ト齊王后ノ弟宋建ヲ指ス。柔湯、火齊ハ倉公ノ處方ナレドモ今詳ナラズ。
(三〇)東陽記ハ唐書藝文志ニ張緒之ノ作トアリ。虎丸詳ナラズ。
(三一)叔微字知可、眞州白砂ノ人。宋ノ建炎ノ初、大疫ス。叔微親ラ里巷ニ行キテ之ガ爲ニ診療ス、治スル所甚衆シ。本事

癒したことさへあつたといふではないか。それも今はただ一片の昔語、現代には已に實在せぬものとなつて居るが、しかし現代に實在するものをまで堙滅に歸せしめて可なりといふ理由は何處にあらう。嘗て(三〇)東陽記に、虎丸で心疾を癒したといふ實驗談を讀んだことがある。また(三一)叔微の書には獺爪が肺蟲を治すといふ事實が書いてあつた。(三二)道元は牧靡と名ける解毒の草のことを述べてゐる。(三三)卲公は石穀と稱する饑を救ふ糧のあることを說いてゐる。吾人はかかる類のものまでも博く知り得ぬことを甚だ遺憾に思ふのである。然るに(三四)米鹽などと一概に之を邈視しやうとするは何事であるか。その藥性の精を得るならば、以て身を保つべく、以て生を全うすべく、以て親を養ふべく、以て世を濟ふべきものであつて、かくてこそ、やがて神農氏の理想と德化とにも合致する。更にまた偉大なる學者にしてこの研究を進められるならば、これに依つて萬物の幽遠なる、造化の靈妙なる、宇宙の一大原理をまで追窮し發見さるるであらうと思ふ。物知りの材料と見るが如きは無論末の末といはねばならぬ。

中丞公は江西を巡撫されること茲に四年、その間常に冗費節約を勵行され、(三五)

義倉一箇所を設け、二萬餘石の穀類を貯藏して、萬一の際の賑恤の準備に供し、城東には二百頃の官田を設置し、郡の會計には三千金の剩餘を特別の基金として備へられてあつたのだが、その他些細なる費途を節したものまでも、共に全部をこの書出版の費用に投ぜられた。蓋し倉廩を充實すれば人民は饑饉で命を墜すことを免れるのであるが、醫藥を完備することもまた人民が不治ならぬ病で死亡するの不幸を免れる。人民の生涯を幸福ならしめる點に於ては、兩者に毫も相違はない。先賢がよく古方の書を集めたといふ眞意もやはり同轍である。

本書再版の事業に就ては中丞公自ら主倡統理され、幕下の各長官はこれを補佐し、江南、新安二縣の知事が直接事務に當り、自分はただ剞劂に關する事務だけにたづさはつたのみである。刻版の事業は今年正月に著手し、六月に竣成した。ここに全部の完成を見る、まことに喜びに滿ちてこの序を書いた次第である。

萬曆(三六)癸卯孟秋朔日　江西按察司按察使　長洲　張鼎思　頓首書

方十卷、傷寒辨疑百證歌ヲ撰ス。

(三二)道元ハ水經註ノ著者酈道元カ、牧靡草ノ事ハ綱目烏頭條下ニ說アリ、日本林羅山ノ說ニ升麻是ナリト。

(三三)所謂邵眞人、經驗方ノ著者也、邵以正。石穀未詳。

(三四)日常些細ノモノノ義。漢書黃覇傳註ニ、米鹽ハ雜ニシテ且ツ細ナルヲイフトアリ。

(三五)義倉ハ隋ノ文帝ノ時、長孫平請フテ民間ヲシテ每秋家ゴトニ粟麥一石ヲ出サシメ、之ヲ閭巷ニ儲ヘ以テ凶年ニ備ソ、名ケテ義倉ト曰フ。後世多ク之ニ因ル。

(三六)癸卯ハ萬曆三十一年ニシテ、西曆千六百〇三年ニ當ル。

重刊本草綱目序

余自辛丑承乏江臬臬署務簡多暇日則取署中舊刻繙閱之庶幾乎進覽之思焉一日謁中丞檇李夏公云本草綱目一書大有裨于生人非特多識資

也而初刻未工行之不廣盍圖廣其傳乎余受而觀之乃楚名醫李時珍所輯蓋嘗經御覽而備上方者也夫本草之名尙巳古聖人愛民深憂民切故羲皇有八卦之畫炎帝爲百草之嘗畫卦以示趨吉避凶嘗草以使續生救死蓋自有易以後即有此書誠謂民行民生均重于世而當務爲急故萬政未遑而窺焉一草一木之是求也不然豈不知自暇自逸而肯一日之間遇毒七十廿以區區臟腑嘗試于剛柔升伏百千萬變之中哉何收弗暇農求未出萬言雖諷于君卿三卷弗登于册府漢末存者三百六十餘種耳陶蘇李韓諸賢相繼增益唐愼微于圖經外旁摭遠引而再益其品蓋至千五百餘種蔚乎富矣然品類旣煩名稱或雜宋人表章尤多僞者李君憂之爲是芟複補遺又益三百七十四種分爲十有六部總據正名附釋別號而次之集解辯疑以正悞詳其生産育貌氣味以明實附以主治諸方以著用命之曰本草綱目蓋集諸家之大成哉或者謂人惟五藏病止七情古之聖儒處齊不過數種而何取紛紛之爲愚則謂藥者醫用也眞醫之用藥也簡而其儲藥也備故芫華一撮半夏數丸已足取效而搜其囊則牛溲馬勃鼠肝蟲臂無不有也何也儲與用異也此書之作固儲道也天之愛人甚矣人之生齒日煩物之化育亦盛人之情識日廣病之變態亦多物之生也若有待人之用也若有期則取之惡得不博乎者不可爲毒溫者不可爲寒辛者不可爲苦而平毒溫寒辛苦之中微者不可爲甚重者不可爲輕也一物而根株異宜一形而補泄殊性而至于名與實淆如荷書之悞讀呂覽之悞誰鷯鳩悞稱苦獨悞案者不可勝數也則辯之又惡得不詳乎故物雖有名用實未著若蘩蔽蛄蠪不錄可也其他草根樹皮跋行喙息以至土苴芻狗之類柔命雖微效用則大旣有明驗可厭其多哉況漆葉青黏曾益樊阿之壽柔湯火齊並愈齊臣之疾昔之名者今已非今之實者可終棄耶嘗讀東陽記有虎丸療心疾之徵叔微書有獺爪治肺蟲之目道元逃解毒之草名曰牧靡邵公著救饑之糧稱爲石穀諸如此類吾猶恨其弗該而惡可以米鹽槩之哉故得其精者可以保身可以全生可以養親可以濟世庶幾神農氏之風乎而達者觀之則可以窮萬物之願可以識造化之妙而見天地之心則多識固其餘矣中丞公撫江右四年于玆嘗節冗食衍鏹置義倉一區貯穀二萬有奇爲賑恤計買田二百于城東儲鏹三千于郡緒爲似續計旣錙銖嗇宅費矣而獨有所用于此蓋食廩足則民不以非歲死醫藥具則民不以非死疾死此其于民生豈有二哉昔人集古方書意亦如此是役也中丞公倡之在事諸寅長佐之南新二縣尹成之不佞思董剞劂之事而已刻始于今歲正月竣于六月旣竣喜而爲之序萬曆癸卯孟秋朔日江西按察司按察使長洲張鼎思頓首書

# 重刻本草綱目序 （萬曆癸卯再版）

夫れ醫の道たるや、君子躬らこれを用ゐて生命を衞り、一般に施して廣く世人を濟つたものだ。故に仁術と稱したのである。ところが後世では單なる技術としてこれを視るやうになり、貴顯上流の識者は、これが研究を甚だ等閑に付する向も多いのであるが、しかし（一）賈子は『古の聖人は朝廷に居らざれば必ず醫卜の間に居る』とさへいつて居るではないか。醫を賤しき末技の如く心得るは甚しい謬見といはねばならぬ。本草の學は元來醫家の耰鋤であり、弓矢である。その大小の動植物に關する研究は、飽くまで複雜繁多を極めたもので、その研究の對象たる藥物は、山野水澤あらゆる場所に散在するが、藥物としての根據は、すべて人間の臟腑に歸するのである。故に名稱が正確でなければ誤れるものを采收し、性質に精審でなければ誤れる藥を與へ、病理、生理との關係が明でなければ誤つた效果を來すは當然である。誤は極めて些細な點にあつても、その結果は人間の殺活に關するのであるから、非常に重大な問題といはねばならぬ。

（一）賈子ハ賈誼ヲ指ス。漢ノ文帝ノ時博士トナリ、累進シテ大中大夫ニ至ル、後貶セラレテ長沙王大傅、梁王大傅ニ任ズ。死スル時年三十三、新書十卷ノ著アリ。

（二）痰暈ハ胃病ニ原因スル眩暈。

余は以前から（二）痰暈で苦んで居るが、近頃それがますます甚しく、折折醫藥の書を檢べて、自ら療養を試みてゐたところ、たまたま楚の名醫李時珍氏所輯の本草綱目を手に入れて、幸ひそれを參考し應用して見るに、大體に於て蘇頌の圖經、唐愼微の證類と表裏相須つものである。しかしその物の名稱、實質、性能及び經驗上の實蹟に就いての研究、考證の豐富なる點に於ては、ただにそれ等の書の内容に倍せるのみならず、新に加へられた藥だけでも三百七十餘種に上り、いづれも近世に習用されて、その效果の極めて明確にされたものである。その研究上の周到な注意と努力とは誠に欽畏すべきものである。醫業に從事さるる人人がこの書を常に座右にせらるるならば、恐らく、誤りなきに幾きを得るであらうと思ふ。たまたま藩廳の諸大夫にその話をして見ると、いづれもその點は同感であつて、且つ現行の刊本では文字の誤が甚だ多く、如何にもこれでは讀みにくい。版を改めて再刊しやうと、議は忽ちに纏つた。是に於て、剩餘の蓄積全部を投出して再刻の費用に充て、諸大夫等も應分の資を不足の補充に醵出して、前後六閲月にして再版の事業は完成した。刷上りを手にして、意のままに讀んで見るに、舊版に比較して遙に鮮明なものにな

（三）脈理ハ血管系統。
（四）元氣ハ精神氣力正氣ニ同ジ。
（五）邪氣ハ正氣ヲ害スルモノ。
（六）標本陰陽ノ解釋

つた。これにつけても余には感慨に勝へないものがある。
萬物を生じた天は、いかなれば此くも人類にのみ惠を厚うされたことであらう。既に百穀があつてその生命を養はせ、また百草があつてその疾病を治せしめられるのだ。人類にして、飽くまで純朴な生活を營み、その身體生命に疾病といふものさへないならば、百穀に依る營養だけで充分である。しかし寒暑、陰陽の爲にその生理狀態を侵されることを免れぬから、それに對しては良藥で之を補ひ、毒藥で之を排擊し、その全きを得て、よく害を爲すところのものを取去り、その天年を全うし得るのである。嗚呼治の道、これぞ天の心のまことに痛切なる現れそのものではあるまいか。生を治むるといふことは、吾が生を害する所以のものを取去るといふことである。民を治むるといふも、他に何等の變つたことはない。その吾が民を害する所以のものを取去るといふこと以外にはないのである。今天下は太平無事なりと稱して居るが、しかし病の（三）脈理の中に在るものが已に數〻現れて居る。國民の生業が窮迫せる上に、旱魃、洪水が時ならず災し、各地に啼號の聲を聞く。これは即ち（四）元氣消耗の徵候ではあるまいか。苛歛誅求の收稅吏は全國各地に派遣されて、津

津浦浦の末まで鴟の如き虎の如き眼を光らして居る。これは(五)邪氣旺盛の徵候ではあるまいか。この時に當り(六)表裏、標本の容體を正確に診察して、的切な治療を加へる明醫もがなと痛感せざるを得ぬのである。この症狀は補を行ふがよいか、かの患部は攻を用うるがよいか。補を行ふにも(七)蔘、朮を用うるがよいか、または(八)苄や文無を用うべきか、攻を用うるにも(九)黄や芒に依るがよいか、または(一〇)堇や烏喙に依るべきか、しかもそれを山野水澤に散在するものの中から採出して、臓腑の樞機を根本的に調治するには、果して如何にせば萬誤りなきことを得るであらうか。しかし更てこの治世を仁壽の健康狀態に回復しやうとには、何としても(一一)兪跗の滌、醫和の視、長桑君の方、太倉公の診の如き、その病理に精徹せる偉大なる國手の出現に須つの外は覺束ないことのやうに思はれる。吾吾などのもとより企及ぶべきところではない。この書再刻の完成に因んで、敬んで國を醫するの人に商りたい。

癸卯秋孟之朔

(一二)巡撫江西都察院右副都御史　(一三)古洏郡　夏良心　撰

ハ序例第一卷下ニアリ。
(七)蔘ハ人參。朮ハ蒼朮又ハ白朮。
(八)苄ハ地黄。文無ハ當歸。
(九)黄ハ大黄。芒ハ芒硝。
(一〇)堇ハ烏頭苗。烏喙ハ烏頭根。
(一一)兪跗ハ黄帝ノ時ノ醫。醫和ハ春秋時代ノ醫。長桑君ハ春秋時代ノ醫、扁鵲ガ師ナリ。太倉公ハ漢ノ文帝ノ時ノ醫。
(一二)巡撫ハ一省ノ行政長官ナリ、都御史、副都御史ハ都察院卽チ一省ノ司法廳長官ナリ。江西省ハ副都御史ガ長官タリ。
(一三)古洏郡ハ明ノ直隷嚴徳州ノ地、夏良心ノ生地古洏ハ今ノ浙江省桐廬縣境桐江ノ附近ナリ。

重刻本草綱目序

夫醫之爲道君子用之以衞生而推之以濟世故稱仁術乃後世以藝視之縉紳先生多所弗講賈子不云乎古之聖人不居朝廷必居醫卜之間醫可以

嗟簡所載本草者固醫家之稜鈎弓矢也洪纖動植最爲煩雜散于山澤而根于臟腑名不覈則悞取性不明則悞施經不辨則悞入悞者在幾微之間而人之死生壽夭係焉可無慎乎余夙爲痰暈作楚近復滋甚時檢軒岐家言以自衞得楚名醫李時珍氏所輯本草綱目翻側弁其閒大抵與蘇頌圖經唐慎微證類相表裏而采摭名實引據徵驗不啻倍之所增藥三百七十餘種皆近世所習用而確乎有明效者其用心亦勤矣醫家者流得此書而存之庶幾可無悞乎閒以質之藩臬諸大夫俱云甚善而頗訝其字畫之漫漶者多也圖更鍥之於是捜積貯之所寄者悉付剞劂氏而諸大夫亦以多寡佐其不足蓋六閱月而工竣既成帙復肆覽焉較前倍覺爽目余因是而有感於天之生物何其獨厚於人也既有百穀以養其生又有百草以治其疾夫使蚩蚩者有生而無疾也則遂以百穀足矣惟其不免於寒暑陰陽之侵也故必良藥補之毒藥攻之而後得以袪其所害而終其天年則天心見矣嗚呼此治道也治生者去其所以害吾生者而已矣治民者亦豈有他術哉去其所以害吾民者而已矣今天下號稱治平無事然而病在腠理者已數形見四民之業窘而重以權滲之不時所在有啼號聲則元氣索采摧之使十道四出而鴟張虎視者且徧墟落則邪氣盛當其時欲如醫者按其表裏標本而治之何者宜補何者宜攻其用以補者將爲蔓朮乎抑苄與文無乎用以攻者將爲黃芒乎抑葦與烏喙乎取其散於山澤者以調吾臟腑必何如而後可以無悞是必有精於其理者若尉之藩和之視長桑君之方太倉公之診而後能挽斯世於仁壽耳余則安能敵因是書之成而以商之醫國者癸卯秋孟之朔巡撫江西都察院右副都御史古汭郡夏良心撰

# 重刻本草綱目小引（崇禎庚辰第三版）

本書は物質の精細と理論の奧妙とを融會互考し、現實の材料と歷史上の事實とを網羅編述したもので、藥方、醫術の實際應用の記載文獻として、微塵ばかりの缺點もなく、藥物の產地、生育に關する本來の狀態を詳述して、異同正否を一目に瞭然たらしめたものである。かやうなる一大成果は、まことに社會救濟の最高級の要具であり、人生幸福の窮極的の妙訣といふべきであつて、それに就ては、すでに天子の叡覽を忝うし、有識諸大家の推稱を博しつつあるに見るも、宛も皎として日星を仰ぐが如きものだから、改めて多くを言ふの必要はない。しかしただ典籍としての保存が久しきに涉つては、やはり（一）積蠹の嗟を深うする。また字句の出入などを匡すほどの人もなかつたところから、空しく（二）出蛇の想を抱くといふ次第、たとひ陶氏の註本のやうな甚しい訛謬はないにしても、爲に牽强の解釋を附會される虞の尠からぬこともまた爭はれない事實であつた。そこで今回の再版では、重ねて校讎を加へて飽迄正確を期し、舛を糾し訛を訂すことに於ては、一點一畫の曲直と雖も忽にせず、遺を拾ひ

（一）積蠹ハ藏書久シキニ亘リ蠹魚ノ殘蝕多シトノ意ナリ。樓鑰ノ詩ニ所在積蠹久頁法浸多壞トアリ。（二）出蛇ノ出典詳ナラズ。太平御覽卷七四二ニ華佗傳曰、瑯邪有女子右股上有瘡癢而不痛已愈復發佗

闕を補ふことに於ては、毫釐の紛しき點をも必ずその正文を索究し、これに兼るに描寫の精妙、彫刻の巧麗な圖繪を添付した。かくて調査校合には幾多の人人の手數を要し、整理製版には八箇月の日子を費して完結し、印刷鮮明なる改版新裝が始めて立派なものとなり、方に一般普及の目的も、充分に達成さるべきものとなつた。(三)瀕湖が半生の苦心は、更に本書に依つて不朽なると同時に、本書もまた新に生面を開いて、庶くは本版と倶に永遠の光輝を垂れるであらう。茲に拙筆を顧みず聊か概感を記して置く次第である。

(四)崇禎庚辰二月一日　六有堂にて、

(五)古臨の鏡石父　錢蔚起　識

日當得稱様色犬繫馬頓走出五十里斷頭養乃從之須臾有蛇在皮中動以鐵横貫引出長三尺許七日便愈トアリ。或ハコレガ出典ニ擬スル者アルモ、然ラズ。宋ノ梅堯臣ノ詩ニモ字搜怪奇懸于抱長蛇トアリ、據ルベシ。

(三)瀕湖ハ本草綱目ノ著者李時珍ノ別號。

(四)崇禎ハ明ノ思宗ノ年號、庚辰ハ十三年、西暦千六百四十年ニ當ル。

(五)古臨ハ古ノ宋代ノ臨安府現在ノ浙江省杭州府ヲイフ。

重刻本草綱目小引

是書參訂玄詳蒐今昔著方治之技不異羨茫詳庵軸之絲衰蕩諸異斯誠弘濟之寶筏久視之眞詮也業已達於天子推重名公技若日星奚煩謌贊第舊版歲久漫漶之嘆對之無人定抱出蛇之思繼誤陶書課註難辟蕪說多疑茲刻重加讐校背極窮研糾舛訂訛凌書毋容粗略拾遺補闕疑似必改源流義之圖繪精誰鑲入巧手摹寫易多人之手庀爲經八月而成斯較諸方新流傳斯廣將瀕湖半生苦心更藉是書不朽而是編重開生面庶偕斯編俱長不揣吾陋聊記其略云爾崇禎庚辰仲春之朔古臨錢蔚起鏡石父書於六有堂

# 進本草綱目疏

湖廣、黄州府ノ(一)儒學増廣生員、李建元。謹デ　明例ノ訪書ヲ遵奉シテ本草ヲ進獻シ、以テ采擇ノ事ニ備ヘント爲ルコトヲ奏ス。臣伏シテ(二)禮部儀制司ノ(三)勘合一款ヲ讀ムニ、恭シク聖明ニ請ヒ、儒臣ニ勅シ、書局ヲ開キ、正史ヲ纂修シテ、中外ニ移文スラク、凡ソ

名家ノ著述ニシテ

國家ノ典章ニ關リ、及君臣ノ事跡ヲ紀シ、他、天文、樂律、醫術、方技ノ諸書ノ如キモ、但ニ一家ノ名言ヲ成シ、以テ方來ニ垂ル可キ者アラバ、卽チ訪ヒ求メテ(四)解送シ、以テ備ニ采ッテ藝文志ニ入レヨ。已ニ刻シ行ハルルモノノ如キハ、卽チ一部ヲ刷印シテ部ニ送レ。或ハ其ノ家自ラ進獻セント欲スルモノハ、此レヲ奉ズルコトヲ聽スト。臣ガ故父李時珍ハ原任(五)楚府奉祠、奉勅進封文林郞、四川蓬溪ノ知縣タリ。生平篤學ニシテ意ヲ纂修ニ刻ム。嘗テ本草一部ヲ著シ、甫メテ刻成ルニ及ビ、忽チ(六)數盡クルニ値フ。撰シテ遺表アリ、臣

(一)儒學ハ國學卽チ國家最高學府ノ下ニアリ。府、州、縣共ニ儒學ヲ設ケ、順次ソノ規模ヲ小ニス。儒學ノ學生ニ廩膳生員増廣生員附學生員ノ三種アリ。廩膳ハ官費特待生ノ定員學生ニシテ、増廣ハ定員外ノ學生、ソノ以下ノ資格ノ者ヲ附學トイフ。儒學生員ノ優等卒業者ハ國學ニ入學ヲ許サル。李建元ハ李時珍ノ長子ナリ。
(二)禮部ハ禮儀、祭祀、宴饗、學校、貢學等ヲ掌ル中央官署ニシテ、儀制司ハ專ラ文教ノ事務ヲ掌ル。
(三)勘合ハ布達ト云フガ如シ。一款ハ一

ヲシテ代ツテ獻ゼシム。切ニ思フニ、父遺命アツテ子遵ハズンバ、何ヲ以テカ先志ヲ承ケン。父遺書アツテ子獻ゼズンバ、何ヲ以テカ朝命ニ應ゼン。矧ヤ今修史ノ時、又取書ノ命ニ値フ。臣譾陋ヲ揣ラズ、斧鉞ヲ避ケズ、謹ンデ故父ノ遺表ヲ述ブ。臣ガ父、時珍、幼ニシテ羸疾多ク、長成シテ鈍椎、典籍ニ耽リ嗜ンデ、蔗飴ヲ啖フガ若シ。古ヲ攷ヘ今ヲ證シテ(七)編摩ノ苦志ヲ奮發シ、疑ヲ辯ジ誤ヲ訂シテ、心ヲ留メテ諸書ヲ纂述ス。伏シテ念フニ、本草ノ一書、關係頗ル重ク、註解ノ群氏、謬誤亦多シ。行年三十ニシテ力メテ校讐ヲ肆ニシ、歲ヲ歷ルコト七旬ニシテ功始メテ成就ス。(八)野人背ヲ炙リ芹ヲ食フスラ、尙ホ之ヲ天子ニ獻ゼント欲ス。微臣珠ヲ採リ玉ヲ聚ム、敢テ之ヲ明君ニ上ラザランヤ。昔、炎皇、百穀ヲ辯ジ百草ヲ嘗メテ、氣味ノ良毒ヲ分別シ、軒轅、岐伯ヲ師トシ伯高ニ遵ツテ、經絡ノ本標ヲ剖析ス。遂ニ神農本草三卷アリ、藝文ニ錄シテ醫家ノ一經トナス。漢末ニ及ンデ李當之始メテ校修ヲ加ヘ、梁末ニ至ツテ陶弘景益スニ註釋ヲ以テス。古ノ藥三百六十五種、以テ重卦ニ應ズ。唐ノ

件文書ナリ。

(四)解送ハ官衙ニテ取調ノ上進達スルコトナリ。

(五)楚府ハ明ノ宗室楚王ノ府、奉祀ハ正副共ニ八品官、王府ノ祭祀ヲ掌ル。文林郎ハ七品ノ散官。

(六)數ハ命數ノ意ナリ。

(七)編纂揣摩ナリ。

(八)獻曝獻芹ノ故事、共ニ列子ニ出ヅ。

高宗、司空李勣ニ命ジテ重修セシメ、長史蘇恭表シテ伏定セント請ヒ、藥ヲ增スコト一百一十四種。宋ノ太祖、醫官劉翰ニ命ジテ詳校セシメ、宋ノ仁宗、再ビ詔シテ補註セシメ、藥ヲ增スコト一百種。蜀醫唐愼微合シテ證類ヲ爲リ、衆本草ヲ修補スルコト五百種。是ヨリ人皆指シテ全書トナシ、醫ハ則チ日シテ奧典トナス。其間ヲ夷考スルニ、玼瑕少カラズ。當ニ析ツベクシテ混ズルモノ、葳蕤、女萎二物ノ如キ、而モ併セテ一條ニ入ルルアリ。當ニ併スベクシテ析ツモノ、南星、虎掌ノ如キ、一物ニシテ分ツテ二種トナスアリ。生薑、薯蕷ハ菜ナリ、而ルニ草品ニ列ス。檳榔、龍眼ハ果ナリ、而ルニ木部ニ列ス。(九)八穀ハ生民ノ天ナルニ、明ニ其ノ種類ヲ辯ズルコト能ハズ。(一〇)三菘ハ日用ノ蔬ナルニ、克ク的シク其ノ名稱ヲ別ツコト罔シ。黑豆、赤菽、大小條ヲ同ウシ、消石、芒消、水火註ヲ混ズ。蘭花ヲ以テ蘭草トナシ、卷丹ヲ百合トナス、此レ寇氏ガ衍義ノ舛謬ナリ。黃精ハ卽チ鉤吻、旋花ハ卽チ山薑ト謂ヘルハ、乃チ陶氏ガ別錄ノ差譌ナリ。酸漿ト苦膽トヲ草、菜ニ重出セルハ、掌氏ガ審ナラザルナリ。天花ト栝樓トヲ兩處ニ形ヲ圖スルハ、蘇氏ガ明ヲ缺ケルナリ。五倍子ハ構蟲窠ナリ、而ルニ認メテ木

(九)八穀ハ稻、黍、大麥、小麥、大豆、小豆、粟、麻。

(一〇)三菘ハ白菘、牛肚菘、紫菘。紫菘ハ卽チ蘆菔ナリ。

實トナシ、大蘋草ハ田字草ナリ、而ルニ指シテ浮萍トナス。茲ニ似タルノ類枚陳ス可カラズ。略一二摘ンデ以テ錯誤ヲ見ス。若シ類分品列セズンバ、何ヲ以テカ群疑ヲ印定センヤ。臣猥愚ヲ揣ラズ、刪述ヲ僭肆シ、重複セルモノハ之ヲ芟リ、遺缺セルモノハ之ヲ補フ。磨刀水、潦水、桑柴火、艾火、瑣陽、山柰、土茯苓、番木鼈、金桔、樟腦、蝎虎、狗蠅、白蠟、水蛇、狗寶、秋石ノ類ノ如キ、竝ニ今ノ方ニ用ウル所ニシテ、古本ニハ則チ無シ。三七、地羅、九仙子、蜘蛛香、猪腰子、勾金皮ノ類ハ、皆方物、土苴ニシテ稗官ニ載セズ。今新藥ヲ増スコト凡ソ三百七十四種、舊本ヲ類析シテ、分ツテ一十六部トナス。集成ニ非ズト雖モ、實亦粗備レリ。數名或ハ各部ニ散見スルアレバ、總テ正名ヲ標シテ綱ト爲シ、餘ハ各附釋シテ目ト爲シ、始ヲ正セリ。次ニ集解、辯疑、正誤ヲ以テ、其ノ出產、形狀ヲ詳ニシ、次ニ氣味、主治、附方ヲ以テ、其ノ體用ヲ著ス。上（一一）墳典ヨリ、下傳奇ニ至ルマデ、凡ソ相關スルアレバ、收采セザル靡シ。醫書ト命クト雖モ、實ハ物理ヲ該ヌ。我ガ

太祖高皇帝、首メ醫院ヲ設ケ、重ネテ醫學ヲ設ケ、仁心、仁術ヲ（一二）九有ノ中ニ沛

（一一）墳典ハ三墳、五典ノ略。三墳ハ伏羲神農黃帝ノ書、五典ハ少昊顓頊高辛唐虞ノ書ヲ云フ。

（一二）九有ハ九州ニ同ジ、昔支那ノ天下ヲ

クス。
世祖肅皇帝、既ニ醫方選要ヲ刻シ、又衛生易簡ヲ刻シ、仁政、仁聲ヲ率土ノ遠キニ
藹クス。伏シテ願クハ
皇帝陛下、道ヲ體シ成ヲ守リ、祖ニ遵ヒ志ヲ繼ギ、(二三)離明ノ正位ニ當リ、考文
ノ大權ヲ司リ、情ヲ民瘼ニ留メテ再ビ司命ノ書ヲ修メ、良臣ニ
特詔シテ
昭代ノ典ヲ著成ス。身ヲ治メテ以テ天下ヲ治ム、書當ニ日月ト光ヲ爭フベシ。國ヲ
壽シテ以テ萬民ヲ壽ス、臣草木ト朽ヲ同ウセザラン。臣冀望(二四)屛營ノ
至ニ勝ヘズ』臣建元、此ノ一得ノ愚ノ爲メニ上
九重ノ覽ヲ干ス。或ハ禮部ニ准行シ、轉發シテ史館ニ采擇セラレ、或ハ醫院ノ重修
ニ行ハセラレナバ、父子
恩ヲ啣ミ、存歿均シク戴カン。臣瞻
天仰
聖ノ至ニ任フルコト無シ。

分ツテ九州トス。猶ホ全國ト云フガ如シ。

(二三)離ノ卦ハ南方ニ位ス。傳長虞ノ詩ニ、二離浩暉ヲ揭グトアリ。日月ノ明ヲイフナリ。

(二四)屛營ハ惶恐ナリ。

萬曆二十四年十一月　日進呈　十八日

聖旨ヲ奉ジテ書ハ留覽ス。禮部知道、此ヲ(一五)欽ス。

(一五)欽ハ皇帝ニ對スル恭謹ノ意ヲ表スル語、勅命ニ依リ之ヲ取扱フトイフガ如シ。

# 本草綱目總目

第四十一巻　蟲の三（化生類三十一種）
第四十二巻　蟲の四（濕生類二十三種、附錄七種）
第四十三巻　鱗部四類　鱗の一（龍類九種）鱗の二（蛇類十七種）
第四十四巻　鱗の三（魚類二十一種）鱗の四（無鱗魚類二十八種、附錄九種）
第四十五巻　介部二類　介の一（龜鼈類十七種）
第四十六巻　介の二（蚌蛤類二十九種）
第四十七巻　禽部四類　禽の一（水禽類一十三種）
第四十八巻　禽の二（原禽類二十三種）
第四十九巻　禽の三（林禽類十七種）禽の四（山禽類十三種、附錄一種）
第五十巻　獸部五類　獸の一（畜類二十八種）
第五十一巻　獸の二（獸類三十八種）獸の三（鼠類十二種）獸の四（寓類怪類共八種）
第五十二巻　人部一類　人の一（凡三十五種、又二）

右通計　十六部、六十二類、一千八百七十一種

上中下三品ノ意義ガ失ハレタル事ヲ云フ。

# 本草綱目凡例

一、神農本草三卷は藥三百六十種を上、中、下三品に分けたのだが、梁の陶弘景は藥一倍を增して品に隨つて附入し、唐、宋の重修にも各〻增附があり、或は併せ或は退けたので、品目だけは存するが舊き體裁は混淆して（二）義、意倶に失はれた。ここには通じて十六部に列ねて綱と爲し、六十類を目と爲し、各類を以て三品に從ひ、書名も倶に各藥の下に註して一見分明にし、尋索の煩を免れるやうにした。

一、舊本では玉、石、水、土が混同され、蟲、鱗、介等の諸種を截然と分たず、蟲を木部に入れ、木を草部に入れるといふ有樣であつたが、今は各〻部分に列ねて、首に水、火、次に土を置いた。それは水、火は萬物の何物より先に在る物であり、土は萬物を産む母であるからである。次に金、石を置いたのは、土から生ずるものだからであり、草、穀、菜、果木とそれに次けたのは、微より巨にと順を追ふたもの、之に服器を次けたのは、その物が草木から成るものだからである。次に蟲、鱗、介、禽、獸とし、終に人を置いたのは、賤より貴に至るの意である。

一、藥には種種の名があつて、今と古とは同じくないから、特に正しい名稱を標出して綱となし、その他は皆釋名の下に附けて始を正した。そして各本草に記された名目を註したのは、起原を正確にせん爲である。

一、唐、宋に增入されてある藥品は、或は一物にして再出、三出し、或は二物、三物が混同して註記されてあるが、今はいづれも正しく整理して、分くべきものは分け、併すべきものは併せ、明にその綱を標してその目を附列した。たとへば龍を標した綱の下には、齒、角、骨、腦、胎、涎をそれぞれ目として列ね、粱を標した綱の下には、赤、黃の粱米をそれぞれ目とした類である。

一、諸目の首に釋名を置いたのは先づ名を正すのである。次に集解でその生產地、形態、采收方法を解說し、次に辯疑、正誤で疑はしきを辨別し誤謬を正し、次に修制は製法を愼重にし、次に氣味で性能を明にし、次に主治で效力を錄し、次に發明で不明の意義を解釋し、次に附方で用法を示した。或は方はなくもがなとの說もあるが、それでは體あつて用なきものとなる。（舊本の附方は二千九百三十五。今增したものは八千百六十一である。）

一、唐、宋では朱書、墨書、（二）圏蓋で古書、今書の記載を別けたが、年所を經るに隨つて訛謬が生じて居る。今は板刻するのだから、ただ諸家本草の名目を藥名、主治の下に直書して閲覽に便にした。

一、諸家の本草の說は、重複せるものは删り去り、疑誤のものは辨正し、重要にして精粹な部分を抄出した、各說者の名を諸項の下に記したのは、先人研究の事實を沒却せぬためである。その是非に就ては自ら正確な根據に照すべきである。

一、諸藥物で、相類するも功用の點で一致點を認め難きもの、或は功用があつても曾て何人も明確にし得なかつたものは、倶に附錄とし、いづれに附錄すべきかの據なきものは、各部の末尾に附錄した。蓋し古に認められずして今認められたものもある。莎根は卽ち香附子で、陶氏はそれを識らなかつたが、今は盛に行はれ、辟虺雷は昔は問題にされなかつたが、今は方物にまで充てられてゐる類の如きがそれである。些細なつまらぬ物と雖も、遺つべきものではないと思ふ。

一、唐、宋の本草には無くて金、元、我が明朝の諸醫に用ゐられるやうになつたもの三十九種を增入し、時珍自ら三百七十四種を續補した。單に醫家の藥品に過ぎ

（二）圏蓋トハ、當時ノ書ニ藥品ノ古今ヲ或ハわくくニテ包ミ、又ハ名稱ノ上ニ印ヲ蓋セテ記載ノ新古ヲ別チタル記載形式ヲイフ。

ずとはいふものの、その性、理の考察研究の點に至つては、實に吾が儒の格物の學であつて、(三)爾雅、詩疏の缺を裨ふものである。

一、舊本草の序例は重繁であるが、今はただ神農本經を中心とし、傍ら別錄や諸家から采つて下に附け、(四)張、李諸家の用藥例を添加した。

一、古の本草は、百病主治藥の一篇が簡略なもので適切でない。(五)王氏の集要、(六)戴氏の證治も約にして純でない。今は病源別にして施用に便にし、繁なれども紊れざらんことを期した。

一、神農の舊目及び宋本草の總目を例の後に附記したのは、古を存せんが爲である。

(三) 爾雅ハ周公、孔子等ノ手稿ニ成リシ古書ニシテ、言語、器具、天地、山川、草木、禽獸等ヲ解釋シタルモノ。詩疏ハ詩經ノ品物ヲ解釋セル書、晉ノ陸機ガ毛詩草木鳥獸蟲魚疏ヲイフ。

(四) 張ハ張從政字ハ子和、儒門事親ヲ著ス。李ハ李杲字ハ明之、東垣先生ト號ス。

(五) 王氏ノ集要ハ明ノ王綸ノ本草集要ヲ指ス。

(六) 戴氏ノ證治ハ戴原禮ノ證治要訣ヲ指ス。

# 本草綱目序例

第一卷　上

# 本草綱目序例目錄第一卷

# 序例　上

# 歴代諸家本草

## 神農本草經

(一)掌禹錫曰く、舊き言傳へに本草經三卷は神農の作といふが、それは經を作ったといふことではない。漢書藝文志を見ても經名は錄されて居らぬ。ただ同漢書の平帝紀に『元始五年に全國から(二)方術、本草に通曉せるものを撰拔し(三)軺傳して京師に詣らしめた』とあり、同じく樓護傳に『護は少時から醫經、本草、方術に就いて數十萬言を暗誦してゐた』とあり、本草なる名稱が典籍の上に現れたのは此の時に始るのである。唐の李世勣等は(四)梁の七錄の『神農本草三卷』とある記載に起原を求めて居るが、經の本文に記されてある郡、縣の名稱に後漢當時のものがあるところから、(五)張機、華佗などが作つたものらしいと疑つて居る。しかしいづれも的確

(一)宋ノ仁宗ノ嘉祐六年林億等ト共ニ命ヲ奉ジテ開寶重定本草ヲ校正シテ二十卷ト爲シ之ニ序ス。
(二)方術、方士ノ術ナリ、神仙ヲ求ムルコト、禁呪祈禳等ノ術ヲ謂フ。
(三)軺ハ小車ナリ。
(四)梁ノ七錄ハ梁ノ阮孝緒撰、王室ノ記錄ニシテ經典錄、記傳錄、子兵錄、文集錄、技術錄、佛錄、道錄ノ七篇ヨリ成ル。

なる事實とは認められない。また(六)淮南子には『神農が百草の滋味を嘗めて、一日にして七十の毒を發見した。醫方なるものはこれから興つたのである』とあるが、いづれ上古の世には文字に書き著すといふことがなかつたのだから、師、弟共に本草なる名稱の下に記憶を傳へて來たが、前後兩漢以來多くの明醫を輩出するに及んで、張、華等の諸氏が古來傳承の學に更に新説を加へて始めて文書に編述を試み、ここに始めて本草が經錄の上に載せられることになつたのであらう。

(七)寇宗奭曰く、漢書に本草の文字は載つて居るが、その起原の時代は斷定出來ない。淮南子に神農が百草を嘗めて藥を和したとはあるが本草なる名稱は用ゐてない。ただ(八)帝王世紀には、『黃帝が岐伯に草木を嘗め味はしめて本草經を定め、醫方を造つて種種の疾病を治療せしめた』とあり、これに據れば、本草なる名稱の起原は黃帝にあるともいへる。蓋し上古の聖賢は生れながらの叡智があつたから、世界のあらゆる物の性、味を識別し、人間のそれぞれの疾病に適應する調劑をしたもので、後世賢智の士もそれに從つて調劑を行ひ、次第に使用する藥品の種類も增加されて來たのである。

(五)張機字仲景後漢代ノ人傷寒論二十二篇ヲ著ス。華陀字元化三國時代魏ノ名醫ナリ曾テ曹操ノ頭風ヲ治ス後曹操ノ爲メニ殺サル。

(六)淮南子姓ハ劉名安厲王長ノ子ナリ文帝ノ十六年ニ淮南王ニ封セラル、武帝ノ元狩元年淮南國ヲ廢ス改メテ九江郡ト爲ス、因テ淮南子ト號ス、淮南子內外篇五十篇ヲ著ス。

(七)宋ノ政和中本草衍義二十卷ヲ著ス。

(八)帝王世紀ハ西晉ノ皇甫謐ガ作ナリ、漢書ヨリ後ノ書ナレバ證トナシ難シ。

(九)韓保昇ハ後蜀代ノ人官翰林學士ニ至ル、孟昶ノ命ヲ受ケテ唐本草ヲ增注シ圖經トナス之ヲ蜀本草ト云フ。

(一〇)此ノ題目當ニ陶弘景本草經集註ニ作ルベシ。

(一一)時珍ノ說非ナリ名醫別錄ハ隋書經籍志ニ三卷トアリ、同志別ニ陶弘景本草經集注七卷ヲ載ス、時珍ノ所謂名醫別錄ハ陶弘景ガ神農本草經ノ三卷本ニ名醫別錄ヨリ藥品三百六十五種ヲ拔萃シテ之ヲ增加シ注解ヲ加ヘタル陶弘景本草經集注ニ適當セリ。

(一二)江蘇省句容縣ノ東南ニアリ。

(一三)道家ニ行ハルル一種ノ健康法ナリ、口ヨリ呼シテ腹中惡

名稱となしたのは、諸種の藥品中草類がその大部分を占めて居るからであらう。

(九)韓保昇曰く、藥品には玉、石、草、木、蟲、獸等がある。しかるに本草を以て

## (一〇)名醫別錄

李時珍曰く、神農本草には藥を三品(品は級に同じ、邦語には品、級、科共にしなと訓ず)に分ち、すべて三百六十五種を擧げて一年の暦日の數に應じてあるが、梁の陶弘景はそれに漢魏以來名醫の用ゐた藥三百六十五種を增加して(一一)名醫別錄と稱する七卷の書を綢述した。首に藥の根本的性能を叙べ、疾病の症狀、診斷を論じ、次に玉石一品、草一品、木一品、菓菜一品、米食一品、名稱のみあつて未だ實驗を經ぬものの三品を擧げ、神農の分を朱書、別錄の分を墨書に書き分けて、梁の武帝に奉呈したのであつた。弘景字は通明、劉宋の末年に諸王の侍讀の官に任ぜられ、後に官を退いて(一二)勾曲山に隱れ華陽隱居と號してゐた。時に武帝から折折勅問があつたのである。年八十五で卒し、貞白先生と諡された。此書には裨補する點も頗る多いが、誤謬の點も可なり多い。弘景の自序に曰く、

隱居先生茅山ノ上ニ在リテ、(一三)吐納ノ餘暇ヲ以テ意ヲ方技ニ遊バシメ、本草

ノ(一五)藥性ヲ覽ル。以爲ラク聖人ノ心ヲ盡セリト。故ニ撰シテ之ヲ論ズ。舊ト神農ノ本經ト稱スルモノ、予以爲ラク信ニ然ラン。昔神農氏ノ天下ニ王タルヤ、八卦ヲ畫シテ以テ鬼神ノ情ヲ通ジ、耕種ヲ造ツテ以テ殺生ノ弊ヲ省キ、藥ヲ宣ベ疾ヲ療シテ以テ夭傷ノ命ヲ拯フ。此ノ三道ハ衆聖ヲ歴テ滋〻彰レ、文王、孔子ハ彖象、繇辭モテ人天ヲ幽贊シ、后稷、伊尹ハ厥ノ百穀ヲ播シテ群生ニ惠被シ、(一六)岐、黃、彭、扁ハ振揚輔導シテ恩含氣ニ流フ。歳三千ヲ踰エ、民今ニ到ルマデ之ニ賴ル。但ダ軒轅已前ハ文字未ダ傳ラズ、藥性ノ主トスル所、當ニ(一七)識識ヲ以テ相因ルベシ。爾ラズンバ何ニ由テカ聞クコトヲ得ン。桐、雷ニ至ツテ乃チ著シテ編簡ニ在リ。此ノ書應ニ(一八)素問ト類ヲ同ウスベシ。但ダ後人多ク更ニ之ヲ修飭セルノミ。秦皇ノ焚ク所醫方、卜術ハ預ラズ、故ニ猶ホ全錄ヲ得タリ。而ルニ漢獻ノ遷徙、晉懷ノ奔迸ニ遭フテ文籍焚糜シ、十ニ一ヲ遺サズ。今ノ存スル所此ノ三卷アリ。其ノ出ル所ノ郡縣、乃チ後漢ノ時ノ制ナルハ、疑フラクハ仲景、元化等ガ記スル所ナラン。又桐君采藥錄アリ、其ノ花葉形色ヲ說ク。藥對四卷ハ其ノ(一九)佐使相須ヲ論ズ。魏晉ヨリ以來、吳普、李當之等更ニ復タ損益ス。

濁ノ氣ヲ出シ、鼻ヨリ吸フテ新鮮ノ氣ヲ入ル近時ノ所謂深呼吸法ノ如キカ。

(一四)漢書藝文志方技ヲ分ツテ醫經、經方、房中、神仙ノ四類トス。

(一五)藥性トハ氣味ヲ謂フ。寒熱温涼平ノ五氣、酸苦辛鹹甘淡ノ六味、其他滑、濇、羶、腐、香、臭、毒、等ヲ謂フ。

(一六)岐伯、黃帝、巫彭、扁鵲。

(一七)師ノ智識ヲ弟子ノ記憶ニ傳フノ義。

(一八)素問ハ黃帝ガ醫道ニ就キテ岐伯等六人ノ臣下ト平素問答セル次第ヲ記錄セル體ヲ具フルモノナレドモ漢代ノ編輯ト稱セラル丶モノナリ。

(一九)佐使ノ解ハ後段神農本經名例ニ出ヅ。

(二)時トハ四時ノ中ニテ藥ヲ採ルニ宜シキ時。用トハ功用ノ事ナリ。

或ハ五百九十五、或ハ四百四十一、或ハ三百二十九、或ハ三品混糅シ、冷熱舛錯シ、草石分タズ、蟲獸辨ズルナシ。且ツ主治スル所互ニ得失アリ。醫家ノ備見スルコト能ハザレバ則チ智識ニ淺深アリ。今輙チ諸經ヲ苞綜シ、煩省ヲ研括シ、神農本經ノ三品合シテ三百六十五ヲ主ト爲シ、又名醫別品ヲ進ムルコト亦三百六十五、合セテ七百三十種、精粗皆取ッテ復遺落ナシ。科條ヲ分別シ、物類ヲ區畛シ、兼テ(二)時用、土地所出、及ビ仙經、道術ノ須ウル所ヲ注諸シ、此ノ序ヲ并セテ略合シテ七卷ト爲ス。未ダ前良ニ追踵スルニ足ラズト雖モ、蓋シ亦一家ノ撰製ナリ。吾世ヲ去ルノ後、諸ヲ知音ニ貽ス可キ爾。

## 桐君采藥錄

○○○時珍曰く、桐君は黄帝の時の臣である。この書凡て二卷、花、葉等の形狀や色などを記述したものであるが今は已に傳つて居らぬ。後人の手に成つた同種の書に四時采藥、太常采藥時月などの書がある。

## 雷公藥對

○○禹錫曰く、北齊の徐之才の著書で、多くの藥物の名稱、品類、君臣の關係、性毒

の相反するもの、及び主治する疾病等を類を分けて記述したもので凡て二卷になつて居る。

時珍曰く、この書は梁の陶弘景以前からあつたもので、吳普の本草に雷公として引用したのがそれである。蓋し黃帝の時の雷公の著書を後に之才が增訂修飾したものと思はれる。之才は(一)丹陽の人で、博識にして醫を善くし、北齊の諸帝に歷仕して寵を得、官は尙書左僕射まで上り年八十で卒したが、死後司徒の官と西陽郡王の封爵を追贈され、文明と諡された。北史に傳記が載つて居る。

### 李氏藥錄

保昇曰く、魏の李當之は(二)華佗の弟子である。神農本草三卷を修めたものであるが世に稀に行はれて居る。

時珍曰く、その書は吳氏、陶氏の本草の中に散見する。頗る研究上得るところのあるものである。

### 吳氏本草

保昇曰く、魏の吳普は廣陵の人で華佗の弟子である。この書は凡て一卷に纏めて

(一)丹陽ハ河南省丹江ノ南ニ在リ。

(二)華陀ハ後漢ノ名醫、譙ノ人、字ハ元化、曹操ノ爲ニ殺サル。凡ソ西暦一〇〇年當時ノ人ナリ。

ある。

時珍曰く、その書は神農、黃帝、岐伯、桐君、雷公、扁鵲、華佗、李氏等が所說の藥の性味を分條記述して甚だ詳細なものであつたがこれも今は傳つて居らない。

## 雷公炮炙論

時珍曰く、(一)劉宋の時の雷斅の著書で、黃帝の時の雷公とは別人である。內究守國安正公と自稱されて居るが或はこれが斅の官名であつたのかも知れぬ。この書は更に胡洽居士が定述を加へたもので、藥凡そ三百種を上、中、下三卷に別け、性味、(二)炮炙、熬煮、修事の法を述べてあるが、その所說には古奥なところが多く、文章もまた古風な質樸なもので、別に一家を成すものである。大體は乾寧晏先生の說に據つたもので、その書の首序に物と理とに就て論述してあるが、これまた甚だ幽玄なものである。後段に錄載することにした。乾寧先生名は晏封といふ人で制伏草石論といふ六卷の著書もあるが、それは神仙家の煉丹研究、卽ち丹石家の書である。

## (一)唐本草

時珍曰く、(二)唐の高宗が司空英國公李勣等に命じて陶隱居が註した神農本草經を

(一)劉宋ハ、西暦四二〇年ヨリ四七八年ニ至ル五十八年間ナリ。

(二)炮、炙、熬、煮ハ後草神農本草名例中ニ解アリ。脩事ハ脩治ニ同ジ、炮炙熬煮等ノ事ヲ指ス。

(一)此ノ題目當ニ新脩本草ニ作ルベシ。

(二)唐ノ高宗ガ英國

整理し增補して七卷の書としたのを世に『英公の唐本草』といふ。頗る增加された點の多いものである。また同じく高宗の顯慶年中に右監門長史蘇恭が右の書に就て重ねて訂註を加へ、更に修定を行はんことを奏請したので、高宗は復大尉趙國公長孫無忌等二十二人に命じ、蘇恭と共に詳細な修訂を加へしめ、藥を增加すること百十四種、玉石、草、木、人、獸、禽、蟲、魚、果、米、穀、菜、有名未用の十一部に分類して凡て二十卷に收め、目錄一卷と別に藥圖二十五卷、圖經七卷、全部合せて五十三卷の書を作つた。世に(三)『唐の新本草』といふのはこれである。蘇恭の解釋は詳明なものではあるが誤謬缺點もまた多いものである。同書にある禮部郎中孔志約の序は左の如くである。

天地ノ大德ヲ生ト曰フ、陰陽ヲ運シテ以テ物ヲ播ス。(四)含靈ノ保ツ所ヲ命ト曰フ、(五)亭育ニ資ツテ以テ年ヲ盡ス。穴ニ蟄シ巢ニ棲ムハ物ニ感ズルノ情蓋シ寡シ。(六)金ヲ範シ木ヲ揉ルハ欲ヲ逐フノ道方ニ滋シ。而シテ(七)五味或ハ爽ヒ、時ニ甘辛ノ節ニ昧ク、(八)六氣斯レ沴レ、寒燠ノ宜ヲ愆リ易シ。中外交侵シ、形神分チ戰ク。飮食釁ヲ伺ツテ腸胃ノ眚ヲ成シ、風濕隙ヲ候ツテ手足ノ災ヲ構フ。機膚腠ヲ纏へ

公李勣ニ命ジテ脩定セシメシ書ハ、新脩本草二十卷ニシテ、我邦ニ其殘缺十一本ヲ保存シ、明カニ李勣奉勅撰ト題セリ。新脩本草ハ陶弘景ガ加註增修セシ神農本草經集註七卷ヲ更ニ增修シテ二十卷トセルモノニシテ、此處ノ解題ニ李勣ガ之ヲ增補シテ七卷ト爲スト云フハ甚シキ時珍ノ妄說ナリ。而シテ證類本草序例ニ引ク所ノ孔志約唐本草序ニ、趙國公長孫無忌等奉勅シテ撰脩セルトイフハ、本邦所傳ノ新脩本草現本ノ署名ニ符合セザレバ予ハ大ニ此序ノ眞僞ヲ疑フモノナリ。

(三)英公ノ唐本草、唐ノ新本草等ノ名ハ時珍ノ命ゼシ妄稱ニ

他ナラズ。
(四)含靈ハ精神アツテ自ラ行動スルモノ。アラユル動物人類ヲ綜括シタル稱ナリ。
(五)亭育ハ生長發育ナリ。
(六)金ヲ鎔シハ金屬ヲ鑄鎔ヘテ器ヲ作ルコト、木ヲ採レハ木ヲ削リ截ツテ家屋ヲ建テ器具ヲ作ルコト、人工ヲ加ヘテ自然物ヲ利用スル生活狀態ノ發達ヲイフ。
(七)五味ハ酸、苦、甘、辛、鹹ナリ。
(八)六氣ハ寒、熱、濕、燥、温、風。
(九)炎暉ハ神農氏ヲ指ス。神農氏ハ火德ヲ以テ官ニ紀ストイフ。
(一〇)雲瑞ハ黄帝ヲ指ス。黄帝ハ土德ノ君ニシテ雲瑞アリ。故ニ官名ハ雲ヲ以テ紀

ドモ救止スルコトヲ知ラズ、漸ク膏肓ヲ固メテ夭折ヲ期ス。(九)炎暉物ニ紀シテ藥石ノ功ヲ識リ、(一〇)雲瑞官ニ名ケテ診候ノ術ヲ窮ムルニ曁ンデ、草木咸ク其ノ性ヲ得、鬼神情ヲ遁ルヽ所無シ。麝ヲ刳リ犀ヲ剸ツテ邪惡ヲ驅洩シ、丹ヲ飛シ石ヲ煉ツテ清和ヲ引納ス。大ニ蒼生ヲ庇ヒ、普ク(一一)黔首ヲ濟フ。功造化ニ侔シク、恩裁成ニ邁ブ。日ニ用キテ知ラズ、今ニ于テ是レ賴ル。(一二)岐和彭緩絶軌ヲ前ニ騰ゲ、(一三)李華張呉英聲ヲ後ニ振フ。昔(一四)秦政ガ煨燔ニモ茲ノ經ハ預ラズ。(一五)永嘉ノ喪亂ニモ斯ノ道ハ尙存ス。梁ノ陶弘景雅ニ攝生ヲ好ミ藥術ヲ研精ス。以爲ラク、本草經ハ神農ノ作ル所、不刊ノ書ナリ。惜ラクハ其ノ年代寖ク遠クシテ簡編殘蠹ス。(一六)桐雷ノ衆記ト頗ル或ハ踳駮スルコトヲ。言ヲ與シ撰緝シテ勒シテ一家ヲ成シ、亦以テ經方ヲ琱琢シ醫業ヲ潤色ス。然レドモ時(一七)鼎峙ニ鍾ツテ聞見殊方ニ闕ケ、事僉議ニ非ザレバ詮釋獨學ニ拘ル。建平ノ防已ヲ重ジ、槐里ノ半夏ヲ棄テ、秋楡仁ヲ採リ、冬雲實ヲ收メ、粱米ノ黄白ヲ謬リ、荊子ノ牡蔓ヲ混ジ、蘩縷ヲ雞腸ニ異ニシ、由跋ヲ鳶尾ニ合セ、防葵狼毒妄ニ同根ト曰ヒ、鈎吻黄精引イテ連類ト爲シ、鉛錫辨ズルコト莫ク、橙柚分タザルガ如キニ至ル。凡ソ此ノ比例蓋

ストイフ。
(一一)黔首ハ黎民、蒼民ナドトイフニ同ジ。
(一二)岐伯、醫和、巫彭、醫緩。
(一三)李當之、華佗、張仲景、吳普。
(一四)秦ノ始皇帝名ハ政、天下ノ書ヲ燔キ儒ヲ坑ニス。
(一五)永嘉ハ西晉懷帝ノ年號、時ニ匈奴ノ劉聰帝都洛陽ヲ陷レ帝ヲ虜ニス。
(一六)桐君、雷公共ニ黃帝ノ時ノ人。藥物ニ通ジ醫術ヲ能クス。
(一七)弘景ノ當時支那ハ南方ニ梁、北方ニ東魏、西魏等アリテ鼎立ノ勢ヲ成シ、攻伐ノ外全ク交通ノ途鎖サレタリシヲイフ。
(一八)鑣ハ馬銜ナリ。
漢書ニ方技ヲ分ツテ四種トナス、曰ク醫經、經方、房中、神

シ亦多シ矣。自時厥後今ニ迄ンデ、方技(一八)鑣ヲ分テ、名醫(一九)軌ヲ繼グト雖モ、更ゝ相祖述シテ能ク釐正スルコト罕ナリ。乃チ復杜衡ヲ及已ニ採リ、忍冬ヲ絡石ニ求メ、陟釐ヲ捨テ莂藤ヲ取リ、飛廉ヲ退ケテ馬薊ヲ用ウ。疑ヲ承ケ妄ヲ行ツテ曾テ覺ルコト有ルコト無シ。疾瘵殆キコト多ク、良ニ深ク嘅嘆ス。既ニシテ(二〇)朝議郎行右監門府長史騎都尉臣蘇恭、陶氏ノ乖違ヲ撫ツテ俗用ノ紕紊ヲ辨ジ、遂ニ表ヲモテ修定センコトヲ請フ。深ク聖懷ニ副フ。乃チ太尉揚州都督監修國史(二一)上柱國趙國公臣無忌、(二二)大中大夫行尚藥奉御臣許孝崇等二十二人ニ詔シ、蘇恭ト與ニ詳撰セシム。竊ニ以ルニ動植ノ形生ハ方ニ因ツテ性ヲ舛ヒ、春秋ノ節變ハ氣ヲ感ジテ功ヲ殊ニス。其ノ本土ヲ離ルレバ則チ質同ウシテ効異リ、采摘ニ乖ケバ乃チ物是ニシテ時非ナリ。名實既ニ爽ヘバ寒温謬ルコト多シ。之ヲ凡庶ニ用ウルモ其欺已ニ甚シ、之ヲ君父ニ施スハ逆焉ヨリ大ナルハ莫シ。是ニ於テ上(二三)神規ヲ稟ケ下衆議ニ詢ヒ、普ク天下ニ頒チテ藥物ヲ營求ス。羽毛鱗介、遠シトシテ臻ラザル無ク、根莖花實、名有ルモノ咸ク萃ル。遂ニ乃チ祕要ヲ詳探シ方術ヲ博綜シ、本經ニ缺クト雖モ驗有ルヲバ必ズ書シ、別錄ニ存スト雖モ稽フル無キヲ

バ必ズ正シ、其ノ同異ヲ考ヘ其ノ去取ヲ擇ブ。(二四)鉛槧昭章、群言ノ得失ヲ定メ、(二五)丹青綺煥、庶物ノ形容ヲ備ヘ、本草幷ニ圖經目錄等ヲ撰シ、凡ソ五十四卷ヲ成ス。庶クハ以テ今古ヲ網羅シ耳目ヲ開滌シ、醫方ノ妙極ヲ盡シテ生靈ノ性命ヲ拯ヒ、(二六)萬祀ニ傳ヘテ味キコトナク百王ニ懸ンデ不朽ナラン。

## 藥總訣

禹錫曰く、梁の陶隱居の著である。凡て二卷、藥品の五味、寒熱の性、主療の疾病及采蓄時月の法を論じたもので、一本には藥象口訣と題して著者名を記してない。

## 藥性本草

禹錫曰く、藥性論凡て四卷、著者の氏名が記されてない。藥品の性味、君臣、佐使、治病の效を分ち說明したものである。一本に陶隱居撰となつて居るが、書中藥性の功を論じた中に本草と矛盾した點のあるところから見ると、疑ふらくは陶隱居の著書ではないと思ふ。

時珍曰く、藥性論卽ち藥性本草で、これは唐の甄權の著書である。權は(一)扶溝の人で、隋朝に仕へて祕省正字の官に就いたことがある。唐の太宗の時、年已に(二)百

仙トアリ。醫藥ノ學ガ獨立セル地歩ヲ進メタリトノ意ナリ。
(一九)軏ハ音月。說文ニ車轅ノ端ニシテ衡ヲ持ツ所以ノ者ナリトアリ。歷代名醫輩出シテ專ラソノ研究ノ蹟ヲ繼ギタルノ意ナリ。
(三〇)朝議郞ハ正六品上階ノ文官散官、蘇恭ハ官ハ朝議郞職ハ右監門府長史。當時事實上ノ職務ヲ表示セル官名ノ上ニ行ノ字ヲ加フルガ例ナリ。
(三一)上柱國ハ官名、勳官ノ最尊ナルモノニシテ職掌ノ事務ナシ。
無忌ノ本官ハ正一品官ノ太尉ニシテ、職ハ揚州都督ニ國史ノ監修ヲ兼ネ、上柱國ノ名譽官號ヲ有チ、王爵ニ亞グノ顯爵タ

二十歳だつたといふが、時に太宗が權の第に幸して藥性に就て御下問があつたので、權は勅問に對してこの書を奉呈した。その爲に朝散大夫の位を授けられたといふことである。この書は詳細に藥の主治を論じたもので、この外脉經、明堂、人形圖各一卷の著書がある。詳細は唐史に載せられてある。

## 千金食治

○時珍曰く、唐の(一)孫思邈が千金備急方三十卷の書を著したとき、素問や扁鵲、華佗、徐之才の所論の中から補養に關する諸説と本草中の食用に關するものを采摭し、米穀、果菜、鳥獸、虫魚に分類し、食治としてその附錄としたもので、また頗る確な詳細なものである。思邈は(二)太白山に隱棲した人で、隋、唐の二朝から官に就かしむべく召命があつたが、遂にそれを受けず、年百餘歳で卒したのであつた。その著書には千金翼方、枕中素書、攝生眞錄、福祿論、三敎論、老子莊子注等がある。

## 食療本草

○禹錫曰く、唐の同州刺史(一)孟詵の著である。張鼎がまたそれに足らざるもの八十九種を補ひ、舊書と合せて二百二十七條凡て三卷となした。

---

ル道國公ヲ授ケラレタルモノナリ。
(二二)太中大夫ハ従四品上階ノ文官散官、尚藥奉御ハ許孝崇ノ現職ナリ。
(二三)神規ハ勅命ヲイフ。
(二四)錯輪昭章ハ文字ノ本文ノ正確明快ナルヲイフ。
(二五)丹青綺煥ハ附圖ノ美麗鮮明ナルヲイフ。
(二六)萬祀ノ祀ハ年ナリ、殷ノ世ニ用ウ。
(一)扶溝ハ今ノ河南省開封道ニ屬ス。
(二)コノ説ニ従ヘバ權ハ凡ソ西暦五〇〇―六二〇年頃ノ人ナリ。
(一)孫思邈ハ甄權ト殆ド時ヲ同ウス。神仙家ノ道士トシテ特ニ著名ナリ。
(二)太白山ハ即チ終

南山ナリ。陝西省鄠縣ノ南ニアリ。或ハ太乙、太壹トモ書ク。

(二) 孟詵ノ年代ハ西曆六二〇—六一〇年ノ頃ニ當ル。

(一) 唐ノ開元ハ西曆七一三—七四一年ニ至ル二十九年間。

(二) 四明ハ浙江省餘姚縣ノ南方ニアル名山ニシテ、ソノ附近ノ地ヲ四明ト稱ス。

○○時珍曰く、詵は梁の人で、武后の時擧進士となり、鳳閣舍人に累遷し、地方官となつて台州の司馬から同州の刺史に轉じ、睿宗の時にまた中央政府に起用の命があつたが固辭して受けず、年九十にして卒したのであつた。この書は周禮の食醫の義に因んで著したもので、相當に學的價値のあるものである。この外必效方十卷、補養方三卷の著もある。傳は唐史に載つて居る。

## 本草拾遺

○○禹錫曰く、唐の(一)玄宗の開元年代に三原縣の尉陳藏器の著である。神農本經に就ては陶、蘇に補集の說もあるのだが、それでも取遺されたものや埋れたものが多いといふので、別に序例一卷、拾遺六卷、解紛三卷の書を作つた。その全部を本草拾遺といふのである。

時珍曰く、藏器は(二)四明の人である。その著述は博く羣書を極め、物類を精覈し、誤謬を訂繩し、幽隱を捜羅したもので、實に本草あつて以來の第一人者である。世の淺薄な人にはその該詳なる著述の精神を知らないで、ただ怪しげなものを擧げてあると誚り、宋代の人人も大分刪り去るといふ有樣であつたが、豈知らんや天地間

の物は無限であり、時の古今に依つて認められることもあれば認められぬこともある。一隅の狹い識見を以てさう輕輕しく博識な人の業績を譏るべきものではあるまい。辟虺雷、海馬、胡豆など、いづれも昔は認められなかつたが今は用ゐられて居るではないか。仰天皮、燈花、敗扇などはいづれも世間一般に用ゐられてゐるのだが、若しこの拾遺に收載されてなかつたら、現在何を據として舊時からの狀態を研究することが出來やうか。この本草の學なるものは詳細に究むべきことは如何程詳細であつても厭はないものなのであることを知らねばならぬ。

## 海藥本草

禹錫曰く、南海藥譜二卷著者不明となつて居るが、(一)南方の藥物、その產地の郡縣名、治病上の功力を雜記したもので、記述は頗る無秩序亂雜である。

時珍曰く、禹錫のいふこの書が卽ち海藥本草である。凡て六卷、唐の人李珣の著書である。珣は蓋し(二)肅宗、代宗の時代の人であらう。(三)海藥だけを集めて極めて詳しいものである。その他に鄭虔著の外國の藥物だけを集めた胡本草といふ七卷の書があつたが今は傳らない。

(一)南方トハ房州交州以南海濱ノ地ヲ指ス。

(二)肅宗卽位ハ西曆七五六年、代宗ノ末年ハ同七七九年ニ當ル。

(三)海藥ハ海外產ノ藥物。

## 四聲本草

禹錫曰く、唐の在野の學者で(一)蘭陵の蕭炳といふ人の著である。本草の藥名の頭字だけを取り、平上去入の四聲に分け音引きにして閲覽に便にしたもので、凡て五卷、學的な價値はない。進士の王收が序を書いて居る。

## 刪繁本草

禹錫曰く、唐の潤州の醫博士兼節度隨軍楊損之の著である。本草中の一般に常用されぬものや有名未用のものなどを刪除して五卷としたものだ、著者は開元以後の人で內容もあまり價値あるものでない。

## 本草音義

時珍曰く、凡て二卷、唐の(二)李含光の著である。この外甄立言、殷子嚴などにも音義の著がある。

## 本草性事類

禹錫曰く、京兆の町醫者杜善方の著であるがその時代は明でない。凡て一卷、本草の藥名を類別に陳ねて解釋を施し、諸藥の制使、畏惡、相反、相宜、解毒の說明

(一)蕭炳年代未詳、或ハ齊、梁間ノ人ナリトイフ。蘭陵ハ山東省嶧縣ノ東ニ在リ。

(二)李含光ハ玄宗時代凡ソ西暦七五〇年前後ノ人ナリ。書ヲ善クス。道士トナツテ茅山ニ居ル。

を附記したものである。

## 食性本草

○○禹錫曰く、(一)南唐の陪戎副尉、(二)劍州の醫學助敎陳士良の著である。神農、陶隱居、蘇恭、孟詵、陳藏器等諸家の擧げた藥の中から通常飮食に供するもののみを擧げてこれを類別し、これに食醫の諸方及(三)五時臟腑を調養するの法を附記したものである。

○○時珍曰く、この書は凡て十卷、舊說を取集めたもので新な硏究は加はつて居らぬ。これより古に溯つても淮南王の食經百二十卷、崔浩の食經九卷、竺暄の食經十卷、膳饈養療二十卷、昝殷の食醫心鑑三卷、婁居中の食治通說一卷、陳直の奉親養老書二卷などいづれも食治の諸方を載せてあつて食醫の目的が中心となつたものである。

## 蜀本草

○○時珍曰く、五代の時の(一)蜀の王孟昶が翰林學士韓保昇等に命じ多くの醫士と唐本草を底本として參校し、增補註釋を加へ、別に圖經を作つて凡て二十卷とし、昶自ら序を書いたもので世にこれを蜀本草といふ。その圖說の藥物形狀に關する說は、

(一)南唐ハ五代十國ノ一西曆九三七―九七四年。
(二)南唐ノ劍州ハ今ノ福建省南平縣ナリ。
(三)五時トハ春、夏、季夏、秋、冬ヲイフ。

(一)蜀ハ五代ノ時孟氏ノ僭稱ナルヲ以テ僞蜀ト稱ス。ソノ治凡ソ四十年、西曆九二五―九六五年。昶ニ至ツテ宋ニ滅サル。

陶、蘇等の書よりも更に頗る詳なものである。

## 開寳本草

時珍曰く、宋の太祖が(一)開寳六年に尚藥奉御劉翰、道士馬志等九人に命じ、唐、蜀の二本草を底本として詳校せしめたもので、陳藏器の拾遺その他の諸書を參考して別名を刋正し、藥を增すこと百三十三種、馬志がこれに註釋を加へ、翰林學士盧多遜が字句の刋正に當つたのであつたが、七年に復馬志等に詔して重定せしめ、學士李昉等に一々檢校せしめ、すべて神農經の分は白字、その他の名醫に依つて傳へられたものは墨字に書いて區別し、目錄共合せて二十一卷の書としたのであつた。序を左に揭げる。

三墳ノ書ハ神農其ノ一ニ預ル。百藥既ニ辨ジ、本草其ノ錄ヲ存ス。舊經三卷世ニ流傳スル所、名醫別錄互ニ編纂ヲ爲ス。梁ニ至リ正白先生陶弘景乃チ別錄ヲ以テ其ノ本經ニ參へ、朱墨雜へ書ス、時ニ明白ナリト謂フ。而シテ又彼ノ功用ヲ攷ヘテ之ガ註釋ヲ爲リ、列ネテ七卷ト爲シ、(二)南國ニ行ハル焉。有唐ニ逮ンデ別ニ參校ヲ加へ、藥ヲ增スコト八百味ニ餘リ、註ヲ添ヘテ二十一卷ト爲ス。本經功ヲ

(一)開寳六年ハ西曆九七三年ニ當ル。

(二)南國ハ揚子江以南ノ地ヲ指ス。

漏スヲバ則チ之ヲ補ヒ、陶氏誤リ說クヲバ則チ之ヲ證ス。然レドモ年紀ヲ載歷スルコト又四百ヲ踰エ、朱字墨字本同ジキヲ得ルコト無シ。舊註新註其文互ニ缺ク。(三)聖主大同ノ運ヲ撫シ無疆ノ休ヲ永ウスルニ非ズンバ、其レ何ヲ以テカ改メテ之ヲ正サン哉。乃チ命ジテ蓋ク傳誤ヲ攷ヘ、刊ツテ定本ト爲シ、類例允ルニ非ザレバ從ツテ焉ヲ革ム。筆頭灰ニ至ツテハ兎毫ナリ、而ルニ草部ニ在リ、今移シテ兎頭骨ノ下ニ附ス。半天河、地漿ハ皆水ナリ、亦草部ニ在リ、今移シテ玉石類ノ間ニ附ス。敗鼓皮ハ移シテ獸皮ニ附シ、胡桃淚ハ改メテ木類ニ從フ。紫鑛モ亦木ナリ、玉石ノ品ヨリ焉ヲ取ル。伏翼ハ實ハ禽ナリ、蟲魚ノ部ヨリ焉ヲ移ス。橘柚ヲバ果實ニ附ケ、食鹽ヲバ光鹽ニ附ク。生薑、乾薑ハ同ジク一說ニ歸ス。雞腸、繁縷、陸英、蒴藋ニ至テハ類相似タルヲ以テ從ツテ之ヲ附ク。仍テ陳藏器ノ拾遺、李含光ノ音義ヲ采リ、或ハ源ヲ別本ニ討ネ、或ハ效ヲ醫家ニ傳フ。參ヘテ之ヲ較ベ、其ノ(四)臧否ヲ辨ズ。突厥白ニ至テハ舊說ニ灰ノ類ナリ、今ハ是レ木根ナリ。天麻根ハ赤箭ニ似タリト解ス、今亦全ク異レリ。非ヲ去リ是ヲ取ツテ特ニ新條ヲ立ツ、自餘ノ刊正悉ク數フベカラズ。下衆議ヲ采リ定メテ印板ト爲ス。乃チ白字

(三)聖主大同ハ趙氏ニ依リテ天下統一サレ大宋國ノ建立サレタルヲイフ。

(四)臧否ハ善惡、正不正ヲイフ。

ヲ以テ神農ノ所說ト爲シ、墨字ヲ名醫ノ所傳ト爲シ、唐附、今附、各〻顯註ヲ加フ。其ノ解釋ヲ詳ニシ、其ノ形性ヲ審ニス。謬誤ヲ證シテ之ヲ辨ズルモノハ署シテ今註トナシ、文記ヲ攷ヘテ之ヲ述ブルモノハ又今按ト爲ス。義既ニ刋定シ理モ亦詳明ナリ。今新舊藥合セテ九百八十三種、幷ニ目錄二十一卷ヲ以テ廣ク天下ニ頒チ傳ヘテ焉ヲ行ハシム。

## 嘉祐補註本草

○○時珍曰く、宋の仁宗の(一)嘉祐二年、光祿卿直秘閣掌禹錫、尙書祠部郞中秘閣校理林億等に詔し、諸〻の醫官と共に本草を重修せしめた。新補八十二種、新定十七種、通計一千八十二條、これを嘉祐補註本草といふのである。共に二十卷、その書は校修を加へたところもあることはあるが、大なる發明は無いものである。その序略を左に揭げる。

神農本草經三卷、藥三百六十五種ニ止ル。陶隱居ニ至リ又名醫別錄ヲ進ム、亦三百六十五種、因テ註釋シテ分チテ七卷ト爲ス。唐ノ蘇恭等又一百一十四種ヲ增シ、廣メテ二十卷ト爲ス、之ヲ唐本草ト謂フ。國朝開寶中、兩タビ醫工劉翰、道

(一)嘉祐二年ハ西曆一〇五七年ニ當ル。

士馬志等ニ詔シ、一百三十三種ヲ修増シテ開寶本草ト爲ス。(二)僞蜀ノ孟昶モ亦嘗テ其ノ學士韓保昇等ニ命ジテ稍增廣スルアリ、之ヲ蜀本草ト謂フ。嘉祐二年八月、臣禹錫、臣億等ニ詔ジテ再ビ校正ヲ加フ。臣等命ヲ被リテ遂ニ更ヽ研覈ス。竊ニ謂フニ、前世ノ醫工ハ診ヲ原ネテ藥ヲ用ヰ效ニ隨ツテ輔記シ、遂ニ增多ニ至ル。諸書ヲ概見スルニ浩博ニシテ究メ難シ。屢ヽ删定ヲ加フト雖モ而モ去取一ナルニ非ズ。或ハ本經已ニ載セテ而モ述ブル所粗略ナリ。或ハ俚俗常ニ用ヰテ而モ大醫未ダ嚮ヲ聞カズ。事ニ因ツテ詳著スルニ非ズンバ則チ遺散多シ矣。乃チ其ノ(三)疏捂ニ因ツテ更ニ補註ヲ爲サンコトヲ請ヒ、諸家ノ醫書藥譜載スル所ノ物品功用ニ因ツテ並ニ從ツテ採掇ス。惟名迂僻ニ近ク怪誕ニ類スルヲバ則チ取ラザル所ナリ。自餘ノ經史百家、方餌ノ急ニ非ズト雖モ、其ノ間或ハ藥驗ヲ參說シテ較然トシ據ル可キ者有ルヲバ亦兼テ收載ス。務メテ該洽ニ從ヒ以テ詔意ニ副フ。凡ソ本草ト名クル者ハ一家ニ非ズ。今開寶ノ重定本ヲ以テ正ト爲ス。其ノ分布ノ卷類、經註雜糅ス。間フルニ朱墨ヲ以テスルハ並ニ舊例ニ從ヒ、復釐改セズ。凡ソ補註ハ並ニ諸書ノ所說ニ據リ、其ノ意義舊文ト相參ル者ヲバ則チ删削ニ從ツテ以テ重

(二)唐末五代ノ時孟知祥蜀ニ據ツテ竊ニ帝號ヲ稱ス、コレヲ僞蜀トイフ。昶ハ知祥ノ第三子知祥ニ繼イテ立ツ。

(三)疏捂ハ粗漏錯誤ヲイフ。

複ヲ避ク。其ノ舊ニ已ニ著見シテ而モ意未ダ完カラズ後書ニ復言フ有ルヲバ亦具ニ之ヲ存シ、詳ニシテ曉シ易カランコトヲ欲ス。仍テ毎條並ニ朱ヲ以テ其端ニ書シテ云ク、臣等謹テ某書ヲ按ズルニ某事ト云フト。其ノ別ニ條ヲ立ツル者ハ、則チ其ノ末ニ解シテ云ク、某書ニ見ユト。凡ソ引ク所ノ書ハ唐、蜀ノ二本草ヲ先ト爲シ、他ノ書ハ則チ著ス所ノ先後ヲ以テ次序ト爲ス。凡ソ書ノ舊ヨリ本草ト名クル者ニシテ今引用スル所ハ但其ノ所作ノ人名ヲ著シテ某ト曰ヒ、惟ダ唐、蜀本ハ則チ唐本ニ云ク蜀本ニ云クト曰フ。凡ソ字ノ朱墨ノ別ハ、所謂神農本經ハ朱字ヲ以テシ、名醫ノ神農ノ舊條ニ因ッテ增補スル有ル者ヲバ墨字ヲ以ッテ朱字ニ間ヘ、餘ノ增ス所ノ者ハ皆別ニ條ヲ立テテ並ニ墨字ヲ以テス。凡ソ陶隱居ガ進ムル所ノ者ハ之ヲ名醫別錄ト謂ヒ、並ニ其ノ註ヲ以テ末ニ附ク。凡ソ顯慶ニ增ス所ノ者モ亦其末ニ註シテ唐本先附ト曰フ。凡ソ開寶ニ增ス所ノ者モ亦其ノ末ニ註シテ今附ト曰フ。凡ソ今ノ增補スル所ニシテ舊經ニ未ダ有ラザルヲバ逐條ノ後ニ于テ開列シテ新補ト云フ。凡ソ藥ニシテ舊ト上中下ノ三品ニ分チ、今ノ新補ニ詳辨スルニ難キヲバ、但ダ類ヲ以テ附見ス。綠礬ヲ礬石ニ次ギ、山薑花ヲ豆蔻ニ次ギ、扶移

ヲ水楊ニ次グノ類ノ如キ是ナリ。凡ソ藥ニシテ功用アリ、本經ニ未ダ見エザルモ舊註ニ已ニ嘗テ引註セル有リ、今ノ增ス所但ダ相類ニ涉ルヲバ、更ニ條ヲ立テズ並ニ本註ノ末ニ附シテ續註ト曰フ。地衣ヲ垣衣ニ附ケ、燕覆ヲ通草ニ附ケ、馬藻ヲ海藻ニ附クルノ類ノ如キ是ナリ。凡ソ舊註ノ陶氏ニ出ル者ヲバ陶隱居云クト曰ヒ、顯慶ニ出ル者ヲバ唐本註ト曰ヒ、開寶ニ出ル者ヲバ今註ト曰ヒ、其ノ開寶ノ傳記ニ攷ヘ據ル者ヲバ別ニ今按、今詳、又按ト曰フ。皆朱字ヲ以テ別ニ其端ニ書ス。凡ソ藥名ニシテ本經ニ已ニ見ユレドモ而モ功用未ダ備ラズ今益ス所有ル者ヲバ亦本註ノ末ニ附ク。凡ソ藥ニシテ今世已ニ嘗テ用キテ而モ諸書ニ未ダ見エズ辨證スル所無キ者胡盧巴、海帶ノ類ノ如キ有リ、則チ請フテ太醫ノ衆論參議ニ從ヒ別ニ立テテ條トナシテ新定ト曰フ。舊藥九百八十三種、新補八十二種、註ニ附クル者ハ焉ニ預ラズ、新定一十七種、總テ新舊一千八十二條、皆類ニ隨ツテ之ヲ附著ス。英公、陶氏、開寶ノ三序皆義例アリ、去ルベカラザル所ナリ。仍テ首卷ニ載スト云フ。

## 圖經本草

○○時珍曰く、宋の仁宗が旣に掌禹錫等に命じて本草を整理編修せしめ、累年にしてそれが完成したので、更にまた全國の地方廳に詔を下し、各管下に生產する藥物を圖寫して差出させ、唐の永徽當時の前例に倣つて太常博士蘇頌に撰述を命じ、この書凡て二十一卷を完成したのであつた。攷證詳明にして頗る發揮するところはあるが、ただ圖と說明との合致せぬものがあつたり、圖があつて說明のないもの、その物があるにも拘らず圖の落ちて居るもの、說明は妥當でも圖の妥當ならざるものなどがある。江州の菝葜が仙遺糧に、滁州の靑木香が兜鈴根となつて倶に圖が混同して列ねてあり、棠毬子卽ち赤木瓜、天花粉卽ち栝樓根であるが、それを重ねて條と出してある如きがそれである。しかしそれは些些たる手落に過ぎぬものである。頌は字を子容といひ、同安の人で進士に擧げられ哲宗の時に丞相の高位に昇り魏國公の爵に封ぜられた人であつた。

## 證類本草

○○時珍曰く、宋の徽宗の（一）大觀二年に蜀の醫士唐愼微が嘉祐補註本草と圖經とを綜合して一書となし、それに唐本草、陳藏器の本草、孟詵の食療本草から舊本に遺落

（一）大觀二年ハ西曆一一〇八年ニ當ル。

されたもの五百餘種を拾收して各部に附入した外更に五種を增加し、また雷公炮炙や唐本、食療、陳藏器の說にして未だ收め盡さなかつたものを各條の後に加へ、又更に古今の單方並に經史百家の書から藥物に關係あるものを採つてこれに附記し、全部三十一卷に纒め、證類本草と名けてこれを上つたので、朝廷では改めて大觀本草と名けたのであつた。愼微は容貌甚だ醜い人であつたが、學殖は極めて該博で、諸家の本草や各藥の(二)單方を千古のまま今日に至つて淪沒せずに存せしめたものは實にその功といはねばならぬ。後(三)政和年代に復醫官の曹孝忠に命じて校正刊行せしめたことがあつて又これを政和本草ともいふのである。

## (一)本草別說

○○時珍曰く、宋の哲宗の(二)元祐年間に(三)閬中縣の醫士陳承が本草と圖經の二書を一書に合し、所々に數語を書込んでこれを別說といつたものである。高宗の(四)紹興の末期に醫官王繼先等に命じて本草を校正させた、その時にもこの書に增附したところもあるが、いづれも淺俚なもので高論と見るべきものがない。

## 日華諸家本草

(二)單方トハ一二ノ藥材ヲ用ウル處方ヲ云フ。

(三)政和元年ハ西暦一一一一年。七年ヲ以テ終ル。

(一)本草別說ハ又重廣補注神農本草幷圖經トモ曰ヒ、又本邦保元年中通智院成賢著穀類抄ニ據レバ、重定本草圖經トモ曰ヒシモノナリ。又略シテ重廣本草圖經トモ曰ヒシハ、證類本草序例ノ林樞即チ長樂林希ノ序文ニ因ツ

テ知ラル。

(二)元祐元年ハ西曆一〇八六年八年ヲ以テ終ル。

(三)閬中縣ハ四川省ノ一縣。

(四)紹興末年ハ西曆一一六二年ニ當ル。

(一)十家姓或ハ千家姓カ。千家姓ハ明ノ初年吳沈ノ著ス所ナリ。收ルトコロ千九百六十八姓。

(二)東萊ハ今ノ山東省掖縣ニアリ。

(一)平陽ノ張魏卿ガ各藥ノ條下ニ附記シタリト云フハ、重修證類本草ニ就テノ說ニシテ、衍義ノ解題トシテハ意義ヲ爲サヌ書キ方ナリ。

禹錫曰く、宋朝の初め開寶年間、明人の撰述となつて居るが、著者の姓名は明でない。ただ日華子大明序すとある。諸家の本草の內近世用ゐらるる所の藥品を集め、各藥を寒温、性味、花、實、虫、獸の類別とし、それぞれの功用を說いて甚だ詳悉である。凡て二十卷と成つて居る。

時珍曰く、(一)十家姓を調べて見ると、大姓は(二)東萊より出づとあるから、日華子なる人は姓を大、名を明といつたのかも知れぬ。或はその人の姓は田氏であつたともいふが、果してそのいづれであつたか未だ判然せぬ。

## 本草衍義

時珍曰く、宋の政和年間に醫官通直郎寇宗奭の著である。補註本草と圖經の二書に就いてその事實を參攷し、情、理を究め、根據と理論とを援いて研究したもので、發明するところが良に多い。東垣先生、丹溪先生などの諸大家も大いに重要視し敬意を拂つたものである。ただ蘭花を蘭草とし、卷丹を百合としてあるなどは誤である。本文と序例とで凡て三卷であるが、(一)平陽の張魏卿この學說をそれぞれの藥の條下に附記し合せて一書となしてある。

## 潔古珍珠嚢

○○時珍曰く、凡て一卷の書で、(一)金の易州の明醫張元素の著述である。元素は字を潔古といひ、進士に擧げられたが及第しなかつたので仕官の望を棄てゝ醫を學び、軒轅、岐伯以降の醫藥の學の秘奧を窮明し、自然界と人體との幽徴なる關係を究知し、古來の醫方が往往新しい疾病に適應せざることを唱へて自ら一家の法を成し、藥性の氣味、陰陽、厚薄、升降、浮沈、補瀉、六氣、十二經及び疾病の徴證に隨つて藥を用うるの法を力説主唱し、主治秘訣、心法要旨を著して大綱とした。これを珍珠嚢といふのである。大に醫の學理を顯揚したもので、(二)靈素以下の第一人者といふべきである。後人がこれを韻文に書替へ記憶暗誦に便にし、これを東垣の珍珠嚢としてあるが、東垣としたのは謬である。惜らくはこの書論ずるところただ百品に止り、その詳説が遍く凡ての藥品に及ばなかつたことである。この外に病機氣宜保命集四卷、一名活法機要の著があつて、後人はこれを河間の劉元素の著書と誤り、僞作の序文を卷首に加へて事實らしく附會して居るが、その他にも潔古の著と稱する後人依托の僞書が多く、隨つてそれ等の書は極めて駁雜なものである。

(一)金ハ朝代ノ名ナリ。姓ハ完顔氏、宋ノ徽宗ノ時帝號ヲ稱シ、遂ニ今ノ東三省、黄河流域各省、江蘇、安徽、湖北ノ地ヲ有ス。九主、百二十年。西暦一一一五―一二三四年。易州ハ今ノ直隷省易縣ノ地ナリ。張元素ハ凡ソ西暦一一七〇年前後ノ人、劉完素、張従正ト殆ド時ヲ同ウス。金史ニ傳アリ。

(二)靈素ハ素問、靈樞ヲ指ス。

## 用藥法象

時珍曰く、凡て一巻、(一)元の眞定の明醫(二)李杲の著書である。杲は字を明之、號を東垣といひ、春秋、書、易の學に通曉し、忠信にして守操の堅い人格者であつた。家豊にして慈善を好み。その德望を以て當時の制度に依り濟源の監税官に任ぜられた。醫學は潔古老人に學んで盡くその學を窮め、更に進んで新なる研究の境域を開いたのであつた。當時世人は神醫と尊稱した。この書は潔古の珍珠囊を基礎とし、用藥の凡例、諸經の嚮導、綱要、活法を增附して一書としたものである。杲は當時一般に内傷と外感とに關する正確な智識を缺き、爲に混同せる基礎の上に治療を施すもの多きことを慨し、脉證、元氣、陰火、飲食、勞倦、有餘、不足に就き明確なる說明を下して辨惑論三巻、脾胃論三巻を著し、素問難經、本草、脉訣及び雜病方論を推窮闡明して、醫學發明九巻、蘭室祕藏五巻を著し、(三)經絡、脉法を批判剖析し(四)傷寒六經の法則と比較對照して此事難知二巻を著した。別に癰疽眼目などの諸書及び試效方の著書もあるが、それ等は皆門人が杲の說を集輯記述したものである。

## 湯液本草

(一)眞定路ハ今ノ直隸省元氏縣デアル。
(二)李杲ハ元ノ定宗、憲宗、世祖時代ノ人、凡ソ西暦一二二〇―一二八〇年。
(三)經絡ハ神經系血管系ヲ云フ。
(四)六經トハ三陽三陰ヲ云フ。

時珍曰く、凡て二巻、元の醫學教授（一）古趙の（二）王好古の著書である。好古は字を進之、號を海藏といひ、東垣の高弟で醫家としての學者側に屬する人であつた。本草及び張仲景、成無已、張潔古、李東垣の諸説を取り、それに所所自己の意見を加へて編輯したのがこの書であつた。この外湯液大法四巻、醫壘元戎十巻、陰證略例、癍論萃英、錢氏補遺各一巻の著書がある。

### 日用本草

時珍曰く、凡て八巻、元の（一）海寧の醫士吳瑞が本草の藥の内食料品として實用されるもののみを取り、これを八部門に分つてそれに數品を新に加へただけのものである。瑞は字を瑞卿といひ（二）元の文宗の時の人である。

### 本草謌括

時珍曰く、元の（一）瑞州路の醫學教授（二）胡仕可が本草の藥の性能と圖形とを材料として歌に作り童蒙初學者の便にしたものであつて、我が明朝の劉純、熊宗立、傅滋の輩にも謌括や藥性賦などの作がある。いづれも初學者の記憶暗誦に便にしたものに過ぎない。

（一）古趙即チ元ノ趙州ハ今ノ雲南省鳳儀縣ナリ。
（二）好古ノ年代ハ元ノ世祖末ヨリ文宗當時、凡ソ西暦一二八〇—一三三〇年前後ノ如シ。

（一）元ノ海寧州ハ今ノ浙江省海寧縣ナリ。
（二）元ノ文宗ハ在位五年、西暦一三二八—一三三二年。

（一）瑞州路ハ今ノ江西省高安縣ナリ。
（二）胡仕可ノ年代ハ吳瑞ト同時若クハ稍後ルルモノノ如シ。

## 本草衍義補遺

時珍曰く、(一)元朝末期の朱震亨の著である。震亨は(二)義烏の人で字を彦修といひ、道士許白雲に従つて道教を學んだ人で、世間から丹溪先生と呼ばれてゐた。嘗て羅太無に従つて醫を學び、遂に劉元素、張潔古、李東垣三家の學を修得し、その説を主唱し發揚して醫の學術に於ける正統派を標榜したのであつた。この書は蓋し寇宗奭の本草衍義の學説を推し普及せしめんとしたもので、増補した藥品が二百種に近く、發明する所も多いものであるが、蘭草が蘭花になり、胡粉が錫粉になつて居るなどはやはり舊説に囚はれた觀を免れない。諸藥を強て(三)五行説に配當した如きも牽強附會に過ぐるものである。丹溪の著書にはなほ格致餘論、局方發揮、傷寒辨疑、外科精要新論、風木問答の諸書がある。

## 本草發揮

時珍曰く、凡て三卷、明の(一)洪武年代に丹溪の弟子山陰の徐彦純、字は用誠の編集したもので、張潔古、李東垣、王海藏、朱丹溪、成無已數家の説を取集めて一書としたのであるが別に増益なし。

(一)元朝ハ西暦一三六七年ヲ以テ終ル。
(二)義烏ハ浙江省金華道義烏縣。
(三)五行ハ木火土金水ニシテ、コノ五者ガ四時ニ分行シ一切ノ現象ヲ生ズトスル説ナリ。
(一)洪武ノ改元ハ西暦一三六八年ニ當リ、三十一年ヲ以ツテ終ル。

## (一)救荒本草

時珍曰く、明の洪武の初年、(二)宗室の周憲王が旱魃、洪水の饑饉に人民が飢餓するのを患ひ、地方農民古老の言傳へや經驗を訪ひ調べて饑饉の際米穀に代へて食料となし得る草木の根、苗、花、實等四百四十種を採り、一々形狀を圖に依つて示し、産地、苗、葉、花、實、性味、食法の說明を加へ、凡て四卷の書としたもので、頗る詳明にして信賴するに足るものである。近代に及んでこの書を翻刻した者が、大半を削去して了つたのは極めて不用意にしたことではあらうが、書籍に取つて痛むべき一厄といはねばならぬ。王は誠齋と號し、性質聰敏な人であつた。普濟方百六十八卷、袖珍方四卷、その他詩文、樂府等の著書がある。その後嘉靖年代に高郵の王磐も野菜譜一卷を著し、形狀を圖示し解說を附して救荒の爲に資せんとしたが、甚だ簡略に過ぎて詳ならぬものがある。

## 庚辛玉册

時珍曰く、明朝の(一)宣德年間に宗室の(二)寧獻王が崔昉の外丹本草、土宿眞君の造化指南、獨孤滔の丹房鑑源、軒轅述寶藏論、靑霞子丹臺錄等の諸書に載せた金石、

(一)欽定四庫全書簡明目錄ニ、救荒本草二卷明周定王朱橚撰、或題周憲王者誤也、云云トアリ。著述ノ年代モ奉議大夫周府左長史卞同ノ文ニヨレバ、永樂四年秋八月拜手謹序トアリ。焦木史獻徵錄、張廷玉ガ明史ニ救荒本草ノ著者ヲ周定王ト記セリ。周定王ハ周憲王ノ父ニシテ洪熙元年薨ゼリ。時珍ガ憲王ノ作トスルハ誤傳ナルコト明カナリ。

(一)宣德改元ハ西暦一四二六年。十年ヲ以テ終ル。
(二)寧王權ハ明ノ太祖ノ十七子、獻ハ諡號ナリ。

草木の煉丹仙術の材料に使用する者を集めて此書を著したのである。部門を金石、靈苗、靈植、羽毛、鱗甲、飲饌、鼎器の各部に分ち、通計二卷、凡て五百四十一品、その生產地、形狀、陰陽の區別に關する說は相當信憑すべきものである。王は號を臞仙といひ、百家の學に該ね通じ、醫卜、農圃、琴棋、仙學、詩家に關する著書凡て數百卷の多きに及んでゐる。前揭の造化指南なる書は三十三篇に分れ靈草五十三種を記載してあるもので、土宿昆元眞君の所說に(三)抱朴子が註解を加へたものだと言傳へられて居るが、いづれ宋、元時代の方士神仙家の者がそれ等古人の名に假托して作つたものに相違ない。古書として太淸草木方、太淸服食經、太淸丹藥錄、黃白祕法、三十六水法、伏制草石論などがあるが皆同樣な性質のものである。

## 本草集要

時珍曰く、(一)弘治年間に禮部郞中(二)慈谿の王綸が本草中の普通常用さるゝ藥品及び潔古、東垣、丹溪の論述した序例を取材とし、更に簡略にして八卷に纏めたものであつて、別に增益するところなく、ただただ古說に囚はれたものである。綸は字を汝言、號を節齋といひ、進士に擧げられ仕官して都御史まで昇進した人である。

(三)抱朴子トハ晉ノ葛洪ノ號ナリ。ソノ著書抱朴子內外篇八卷最モ有名ナリ。

(一)弘治改元ハ西曆一四八八年。十八年ヲ以テ終ル。

(二)慈谿ハ浙江省內ノ縣名ナリ。

### 食物本草

時珍曰く、(一)正德年間、九江の知府江陵の汪穎の著書である。嘗て東陽の盧和字は廉夫といふ人が本草中の食料に關するもののみを集めて編次してあつたのを、穎がその草稿に筆を入れて二卷に纏めたもので、水、穀、菜、果、禽、獸、魚、味の八類に分けてある。

### 食鑑本草

時珍曰く、(二)嘉靖年間、(三)京口の甯原の編輯したもので、食料とすべきもののみを集め、僅に數語の説明を加へたもので、研究上の價値はない。

### 本草會編

時珍曰く、嘉靖年間、(一)祁門の醫士汪機字は省之の編纂したものである。王綸の本草集要に草木の形狀が收められてないのを駁擊する意味で書いたもので、本草の上、中、下三品の區別を削去り、凡てを類別とし、菜、穀は草部に、果類は木部に改め、諸家の序例を幷せて全二十卷に編成したものであるが、要領だけを切詰めて簡便になつたやうにも見えるが、その實却て混同が多い爲に、閲覽に不便なもので

(一)正德改元ハ西曆一五〇六年。十六年ヲ以テ終ル。

(二)嘉靖改元ハ西曆一五二二年、四十五年ヲ以テ終ル。

(三)京口ハ今ノ江蘇省丹徒縣ナリ。

(一)祁門ハ今ノ安徽省蕪湖道ノ祁門縣ナリ。

(一)讖ノ文當ニ薺苨人參ニ亂入スノ語アリ。或ハソノ語意ヲ取リ苨ノ字ヲ略シテ書名ニ冠シタルカ。

嘉靖壬子ハ西曆千五百五十二年ニ當ル。萬曆戊寅ハ西曆千六百七十八年ニ當ル。

ある。書名に冠して(一)薺識などとしてあるが、その陋知るべしである。從來諸家の長所を掩ひ去つて支離滅裂なものとし、肆に臆測を以て取扱つたものであつて、實際に於て何等の見識も權威もあるものではない。たゞ數箇所に僅に取るに足るものがあるに過ぎぬ。

## 本草蒙筌

○○時珍曰く、凡て十二卷、祁門の醫士陳嘉謨字は廷采が嘉靖の末年に著したものである。王氏の集要の部次に依つて集成したもので、各藥品毎に氣味、產地、治病上の用法を語路に從ひ對語に書別けて記憶暗誦に便ならしめ、自己の意見を所々各條の後に附記してある。それには相當研究的なところもあるが、要するに初學の便に過ぎず、蒙筌なる書名は誠にその實質にふさはしい。

## 本草綱目

明の楚府奉祠勅封文林郎蓬溪の知縣蘄州の李時珍號は東璧の著である。古今諸家の學說を蒐羅し、全國各地を跋涉訪采し、嘉靖壬子(三十一年)の年に着手し、萬曆戊寅(六年)の年に完成した。稿を改むること凡そ三回、分ちて五十二卷、列して十

六部となし、部各〻類を分ち、數凡そ六十、名を標して綱となし、事を列ねて目となし、藥を増すこと三百七十四種、處方八千百六十を收めてある。

# 引據古今醫家書目

○○時珍曰く、梁の陶弘景以下唐、宋の本草に引用された醫書は八十四種で、そのうち唐愼微のものが大部分を占めて居る。それ以外のもので今時珍の引用した醫書類は凡そ二百七十六種である。

黄帝素問（王氷註）　唐玄宗開元廣濟方　天寶單方圖
唐德宗貞元廣利方　太倉公方　宋太宗太平聖惠方
扁鵲方（三卷）　張仲景金匱玉函方　華佗方（十卷）
張仲景傷寒論（成無己註）　支太醫方　張文仲の隨身備急方
徐文伯方　初虞世の古今錄驗方　秦承祖方
王燾の外臺祕要方　華佗中藏經　姚和衆の延齡至寶方
范東陽方　孫眞人千金備急方　孫眞人食忌
孫眞人千金翼方　孫眞人枕中記　席延賞方

孫眞人千金髓方
許孝宗の篋中方
王紹顏の續傳信方
李絳兵部手集方
劉涓子鬼遺方
葛洪肘後百一方
胡洽居士百病方
崔元亮の海上集驗方
孫氏集驗方
斗門方
勝金方
塞上方
救急方
近效方

葉天師の枕中記
錢氏篋中方
延年祕錄
御藥院方
乘閒集效方
服氣精義方
孫兆口訣
深師の脚氣論（即ち梅師）
孟詵の必效方
韋宙の獨行方
文潞公の藥準
王袞の博濟方
張路の大效方
陳抃の經驗方

篋中祕寶方
劉禹錫の傳信方
柳州救三死方
崔行功の纂要方
陳延之の小品方
謝士泰の刪繁方
梅師集驗方
姚僧垣の集驗方
平堯卿の傷寒類要
王珉の傷寒自驗方
周應の簡要濟衆方
沈存中の靈苑方
崔知悌の勞瘵方
陳氏經驗後方

蘇沈の良方（東坡中に存す）　十全博救方　咎殷の食醫心鏡
必用方　張傑の子母祕錄　楊氏産乳集驗方
咎殷の産寶　譚氏小兒方　小兒宮氣方
萬全方　太淸草木方　李翶の何首烏傳
普救方　神仙服食方　嵩陽子の威靈仙傳
寒食散方　賈相公の牛經　賈誠の馬經

以上八十四家の著書はいづれも舊來の各本草に引用されたものである。

靈樞經　王冰の玄密　張杲の醫說
黃帝書　褚氏遺書　李濂の醫史
秦越人難經　聖濟總錄　劉氏病機賦
皇甫謐の甲乙經　宋徽宗聖濟經　劉克用の藥性賦
王叔和の脈經　張仲景金匱要略　彭祖の服食經
巢元方の病原論　神農食忌　神仙服食經
宋俠經心錄　魏武帝食制　李氏食經

王執中の資生經
劉河間の原病式
劉河間の宣明方
許洪の本草指南
土宿眞君造化指南
胡演升の鍊丹藥祕訣
張子和の儒門事親
醫鑑(龔信)
潔古家珍
東垣脾胃論
王海藏の醫家大法
海藏の陰證發明
丹溪の局方發揮
楊珣の丹溪心法

婁居中の食治通說
太清靈寶方
戴起宗の脈訣刊誤
黄氏本草權度
醫餘錄
名醫錄
張潔古の醫學啓源
活法機要
李東垣の醫學發明
東垣の蘭室祕藏
海藏の醫壘元戎
羅天益の衞生寶鑑
盧和の丹溪纂要
方廣丹溪心法附錄

飲膳正要
玄明粉方
呉猛の服椒訣
陸氏證治本草
月池の人參傳(李言聞)
月池の艾葉傳
菖蒲傳
楊天惠の附子傳
東垣の辨惑論
東垣試效方
海藏の此事難知
丹溪の格致餘論
丹溪醫案
丹溪活套

程充の丹溪心法
陳言の三因方
王氏易簡方（王碩）
是齋の指迷方（王貺）
黎居士易簡方
胡濙の衛生易簡方
雞峯の備急方（張銳）
眞西山の衛生謌
嶺南衛生方
虞摶の醫學正傳
傅滋の醫學集成
葉氏醫學統旨
醫學綱目
醫學指南

滑伯仁の攖寧心要
孫眞人千金月令方
楊子建の萬全護命方
楊士瀛の仁齋直指方
楊氏家藏方（楊倓）
朱端章の衛生家寶方
孫用和の傳家祕寶方
趙士衍の九籥衛生方
初虞世の養生必用方
李仲南の永類鈐方
薩謙齋の瑞竹堂經驗方
萬表の積善堂經驗方
孫氏仁存堂經驗方
楊氏頤眞堂經驗方

惠民和劑局方
嚴用和の濟生方
繼洪の澹寮方
余居士選奇方
濟生拔萃方（杜思敬）
許學士本事方（許叔微）
王隱君の養生主論
王方慶の嶺南方
周憲王の普濟方（一百十卷）
周憲王の袖珍方
王履の溯洄集
戴原禮の證治要訣
戴原禮の金匱鉤玄
劉純の玉機微義

醫學切問
王璽の醫林集要
饒氏醫林正宗
周良采の醫方選要
楊拱の醫方摘要
醫方大成
方賢の奇效良方
閻孝忠の集效方
孫天仁の集效方
試效錄驗方
經驗濟世方
孫一松の試效方
董炳の集驗方
朱端章の集驗方

陸氏積德堂經驗方
德生堂經驗方
法生堂經驗方
劉松石の保壽堂經驗方
陳日華の經驗方
王仲勉の經驗方
劉長春の經驗方
禹講師の經驗方
戴古渝の經驗方
龔氏經驗方
藺氏經驗方
阮氏經驗方
趙氏經驗方
楊氏經驗方

劉純の醫經小學
臞仙の乾坤祕韞
臞仙の乾坤生意
竅玄子の法天生意
梁氏總要
吳球の活人心統
吳球の諸證辨疑
趙氏儒醫集要
瀕湖醫案
瀕湖集簡方
楊起の簡便方
坦仙の皆效方
危氏得效方(危亦林)
居家必用方

經驗良方
救急易方
急救良方
白飛霞の方外奇方
溫隱居の海上方
海上仙方
海上名方
十便良方
李樓の怪證奇方
夏子益の奇疾方
纂要奇方
奚囊備急方
臞仙の壽域神方
吳旻の扶壽精方

唐瑤の經驗方
張氏經驗方
龔氏經驗方
徐氏家傳方
鄭氏家傳方
談野翁の試驗方
包會の應驗方
孟氏詵詵方
生生論
摘玄方
端效方
史堪の指南方
陳直の奉親養老書
李廷飛の三元延壽書

鄧筆峯の衞生雜興
王英の杏林摘要
白飛霞の韓氏醫通
張三丰の仙傳方
王氏奇方
丘瓊山の群書日抄
何子元の群書續抄
張氏灊江切要
邵眞人の青囊雜纂
趙宜眞の濟急仙方
王永輔の惠濟方
王璆の百一選方
世醫通變要法
何大英の發明證治

王氏醫方捷徑
神醫普救方
傳信適用方
攝生妙用方
王氏手集
唐仲擧方
嚴月軒方
通妙眞人方
蘇遊の玄感傳尸論
韓祗和の傷寒書
趙嗣眞の傷寒論
陶華の傷寒六書
郭稽中の婦人方
婦人明理論

保慶集
楊炎の南行方
王氏究源方
艾元英の如宜方
蕭靜觀方
楊堯輔方
鄭師甫方
三十六黃方
上清紫庭追勞方
龐安時の傷寒總病論
成無己の傷寒明理論
李知先の活人書括
熊氏婦人良方補遺
婦人千金家藏方

保生餘錄
彭用光の體仁彙編
王節齋の明醫雜著
濟生祕覽
錦嚢祕覽
金匱名方
芝隱方
葛可久の十藥神書
朱肱の南陽活人書
吳綬の傷寒蘊要
劉河間の傷寒直格
陳自明の婦人良方
胡氏濟陰方
便產須知

二難寶鑑
劉昉の幼幼新書
曾世榮の活幼心書
寇衡の全幼心鑑
魯伯嗣の幼童百問
湯衡の嬰孩寶鑑
湯衡の嬰孩妙訣
王日新の小兒方
高武の痘疹管見（又正宗と名く）
李實の痘疹淵源
陳自明の外科精要
齊德之の外科精義
楊清叟の外科祕傳
眼科龍木論

婦人經驗方
幼科類萃
徐用宣の袖珍小兒書
演山の活幼口議
活幼全書
衛生總微論（卽ち保幼大全）
姚和衆の童子祕訣
小兒宮氣集
李言聞の痘疹證治
聞人規痘珍（八十一論）
薛己の外科心法
薛己の外科發揮
李迅の癰疽方論
飛鴻集

錢乙の小兒直訣
陳文中の小兒方
張渙の小兒方
阮氏小兒方
鄭氏小兒方
鮑氏小兒方
全嬰方
魏直の博愛心鑑
痘疹要訣
張清川の痘疹便覽
外科通玄論
薛己の外科經驗方
周良采の外科集驗方
倪惟德の原機啓微集

明目經驗方　宣明眼科　眼科針鉤方
咽喉口齒方

以上二百七十六大家の著書は時珍の引用したものである。

# 引據古今經史百家書目

○○時珍曰く、梁の陶弘景や唐、宋以下の本草に引用せるものは凡そ一百五十一種で、時珍の引用せるものはそれ等の引用書の外凡そ四百四十種である。

| | | |
|---|---|---|
| 易經註疏（王弼） | 詩經註疏（孔穎達、毛萇） | 爾雅註疏（李巡、邢昺、郭璞） |
| 尙書註疏（孔安國） | 春秋左傳註疏（杜預） | 孔子家語 |
| 禮記註疏（鄭玄） | 周禮註疏 | 張湛註列子 |
| 郭象註莊子 | 楊倞註荀子 | 淮南子鴻烈解 |
| 呂氏春秋 | 葛洪抱朴子 | 戰國策 |
| 司馬遷の史記 | 班固の漢書 | 范曄の後漢書 |
| 陳壽の三國志 | 王隱の晉書 | 沈約の宋書 |
| 蕭顯明の梁史 | 李延壽の北史 | 魏徵の隋書 |
| 歐陽修の唐書 | 王瓘の軒轅本紀 | 穆天子傳 |

秦穆公傳　蜀王本紀　魯定公傳
漢武故事　漢武內傳　壺居士傳
崔魏公傳　李寶臣傳　何君謨傳
李孝伯傳　李司封傳　柳宗元傳
梁四公子記　唐武后別傳　南岳魏夫人傳
葛洪の神仙傳　干寶の搜神記　紫靈元君傳
劉向の列仙傳　徐鉉の稽神錄　玄中記
洞微志　郭憲の洞冥記　樂史の廣異記
劉敬叔の異苑　王子年の拾遺記　太平廣記
吳均の續齊諧記　段成式の酉陽雜俎　異術
王建平の典術　杜祐の通典　異類
何承天の纂文　張華の博物志　魏略
東方朔の神異經　盛弘之の荊州記　郭璞注山海經
何晏の九州記　宗懍の荊楚歲時記　華山記

顧微の廣州記
裴淵の廣州記
楊孚の異物志
劉恂の嶺表錄
朱應の扶南記
五溪記
軒轅述寶藏論
獨孤滔の丹房鑑源
太清草木記
太清石壁記
魏王の花木志
賈思勰(音叶)の齊民要術
氾勝之の種植書
丁謂の天香傳

徐表の南州記
萬震の南州異物志
房千里の南方異物志
孟琯の嶺南異物志
張氏燕吳行記
王氏番禺記
青霞子の丹臺錄
東華眞人の煮石法
神仙芝草經
靈芝瑞草經
夏禹神仙經
三洞要錄
八帝聖化經
八帝玄變經

嵩山記
南蠻記
太原地志
永嘉記
南城志
白澤圖
斗門經
房室圖
異魚圖
狐剛子鍊粉圖
四時纂要
郭義恭の廣志
崔豹の古今注
陸機の詩義疏

陸羽の茶經　神仙感應篇　李畋の該聞錄
張鷟の朝野僉載　神仙祕旨　楊億の談苑
開元天寶遺事　修眞祕旨　宣政錄
鄭氏明皇雜錄　潁陽子の修眞祕訣　五行書
孫光憲の北夢瑣言　左慈の祕訣　廣五行記
歐陽公の歸田錄　陶隱居の登眞隱訣　遁甲書
沈括の夢溪筆談　耳珠先生訣　龍魚河圖
景煥の野人閑話　韓終の采藥詩　王充の論衡
黄休復の茆亭客話　金光明經　顏氏家訓
范子計然　宋齊丘の化書　楚辭
李善注文選　張協賦　本事詩
江淹集　宋王微讚　庾肩吾集
陳子昂集　陸龜蒙詩　梁簡文帝の勸醫文

以上一百五十一種の書はいづれも從來の本草に引用されたものである。

許愼の說文解字
周弼の說文字原
顧野王の玉篇
倉頡解詁
洪武正韻
急就章
孔鮒の小爾雅
楊雄の方言
劉熙の釋名
師曠の禽經
黄省曾の獸經
龜經
馬經
韓彥直の橘譜

呂忱の字林
王安石の字說
孫愐の唐韻
丁度の集韻
陰氏韻府群玉
張揖の廣雅
曹憲の博雅
陸佃の埤雅
司馬光の名苑
袁達の禽蟲述
王元之の蜂記
張世南の質龜論
傅肱の蟹譜
毛文錫の茶譜

周弼の六書正譌
趙古則の六書本義
魏子才の六書精蘊
黄公武の古今韻會
包氏續韻府群玉
孫炎の爾雅正義
羅願の爾雅翼
埤雅廣義
陸璣の鳥獸草木蟲魚疏
淮南八公相鶴經
朱仲相の貝經
鍾毓の果然賦
李石の續博物志
唐蒙の博物志

蔡襄の荔枝譜
歐陽修の牡丹譜
范成大の梅譜
劉蒙泉の菊譜
陳翥の桐譜
陳仁玉の菌譜
戴凱之の竹譜
僧贊寧の竹譜
蘇易の簡紙譜
蘇氏硯譜
杜李陽の雲林石譜
李德裕の黃治論
大明一統志
太平寰宇記

蔡宗顏の茶對
劉貢父の芍藥譜
范成大の菊譜
史正志の菊譜
沈立の海棠譜
王西樓の野菜譜
葉庭珪の香譜
洪駒父の香譜
蘇氏筆譜
蘇氏墨譜
九鼎神丹祕訣
昇玄子の伏汞圖
韋述の兩京記
祝穆の方輿要覽

張華の感應類從志
贊寧の物類相感志
楊泉の物理論
王佐の格古論
天玄主物簿
穆修靖の靈芝記
李德裕の平泉草木記
周叙の洛陽花木記
洛陽名園記
張杲の丹砂祕訣
張杲の玉洞要訣
桓譚の鹽鐵論
寶貨辨疑
嵇含の南方草木狀

大明會典
太平御覽
冊府元龜
集事淵海
馬端臨の文獻通攷
白孔六帖
古今事類合璧
祝穆の事文類聚
歐陽詢の藝文類聚
鄭樵の通志
陶九成の說郛
虞世南の北堂書鈔
賈似道の悅生隨鈔
徐堅の初學記

朱輔山の溪蠻叢笑
陳彭年の江南別錄
江南異聞錄
李肇の國史補
楚國先賢傳
葛洪の西京雜記
周密の齊東野語
周密の癸辛雜志
周密の浩然齋日抄
周密の志雅堂雜抄
羅大經の鶴林玉露
陶九成の輟耕錄
葉盛の水東日記
徐氏總龜對類

袁滋の雲南記
永昌志
蜀地志
華陽國志
茅山記
太和山志
西涼記
荊南記
永州記
南裔記
竺法眞の羅浮山疏
田汝成の西湖志
南郡記
伏深の齊地記

文苑英華
錦繡萬花谷
洪邁の夷堅志
淮南萬畢術
高氏事物紀原
伏候の中華古今注
應劭の風俗通
班固の白虎通
服虔の通俗文
顔師古の刋謬正俗
杜臺卿の玉燭寶典
河圖玉版
河圖括地象
春秋題辭

邵桂子の甕天語
毛直方の詩學大成
蘇子仇池筆記
鮮于樞の鈎玄
松窓雜記
杜寶の大業拾遺錄
蘇鶚の杜陽編
方勺の泊宅編
方鎭の編年錄
楊愼の丹鉛錄
劉績の霏雪錄
葉夢得の水雲錄
孫柔之の瑞應圖記
許善心の符瑞記

郡國志
鄴中記
廉州記
辛氏三秦記
金門記
周處の風土記
嵩高記
襄沔記
鄧顯明の南康記
方國志
荀伯子の臨川記
洪邁の松漠紀聞
河湖紀聞
王安貧の武陵記

春秋運斗樞
春秋元命包
春秋考異郵
禮斗威儀
孝經援神契
周易通卦驗
京房易占
劉向の洪範五行傳
遁甲開山圖
南宮從の岣嶁神書
皇極經世書
性理大全
五經大全
通鑑綱目

夏小正
崔寔の四時月令
月令通纂
王禎の農書
王旻の山居錄
山居四要
居家必用
便民圖纂
劉伯溫の多能鄙事
臞仙の神隱書
務本新書
兪宗本の種樹書
起居雜記
洞天保生錄

趙蔡の行營雜記
張匡業の行程記
金幼孜の北征錄
張師正の倦游錄
段公路の北戶錄
胡嶠の陷虜記
隋煬帝開河記
玉策記
述征記
任昉の述異記
祖沖之の述異記
薛用弱の集異記
陳翺の卓異記
神異記

葉世傑の草木子
梁元帝の金樓子
蔡邕の獨斷
王浚川の雅述
章俊卿の山堂考索
洪邁の容齋隨筆
百川學海
翰墨全書
文系
朱子の離騷辨證
何孟春の餘冬錄
黃震の慈溪日鈔
類說
吳淑の事類賦

韋航の細談
孫升の談圃
龐元英の談藪
愛竹談藪
彭乘の墨客揮犀
蔡絛の鐵圍山叢話
侯延賞の退齋閑覽
遯齋閑覽
顧文薦の負暄錄
陸文量の菽園雜記
王性之の揮麈錄
趙與時の賓退錄
葉石林の避暑錄
劉禹錫の嘉話錄

列星圖
演禽書
吐納經
謝道人の天空經
魏伯陽の參同契
蕭了眞の金丹大成
許眞君書
陶弘景の眞誥
朱眞人の靈驗篇
太上玄變經
李筌の太白經註
八草靈變篇
鶴頂新書
造化指南

左思の三都賦
葛洪の遐觀賦
魯褒の錢神論
綦毋の錢神論
嵇康の養生論
王之綱の通微集
儲詠の袪疑説
文字指歸
造化權輿
潘塤の楮記室
仇遠の稗史
魏武帝集
魏文帝集
曹子建集

姚亮の西溪叢話
俞琰の席上腐談
胡仔の漁隱叢話
熊太古の冀越集
王濟の日詢手記
李氏仕學類鈔
周必大の陰德錄
翰苑叢記
解頤新語
趙溍の養痾漫筆
江隣幾の雜志
張來の明道雜志
唐小說
林氏小說

修眞指南
周顛仙碑
劉根別傳
法華經
涅槃經
圓覺經
楞嚴經
變化論
自然論
劉義慶の幽明錄
百感錄
海錄細事
瑣碎錄
治聞說

韓文公集
柳子厚文集
歐陽公文集
三蘇文集
宛委錄
高氏蓼花洲閑錄
畢氏幕府燕閑錄
吳澄の草廬集
吳萊の淵穎集
楊維禎の鐵厓集
宋景濂の潛溪集
方孝孺の遜志齋集
吳玉の崑山小稿
陳白沙集
晁以道の客話
劉跂の暇日記
康譽之の昨夢錄
邢坦齋の筆衡
蘇黃手簡
山谷刀筆
李太白集
杜子美集
王維詩集
岑參詩集
錢起詩集
白樂天長慶集
元稹長慶集
劉禹錫集
龍江錄
靈仙錄
白獺髓
異說
張世南の游宦紀聞
何遠の春渚紀聞
東坡詩集
黃山谷集
宋徽宗詩
王元之詩集
梅堯臣詩集
王荊公の臨川集
邵堯夫集
周必大集

何仲默集　張籍詩集　楊萬里の誠齋集
張東海集　李紳文集　范成大の石湖集
楊升菴集　李義山集　陸放翁集
唐荊川集　左貴嬪集　陳止齋集
焦希程集　王梅溪集　張宛丘集
方虛谷集　葛氏韻語陽秋　蔡氏詩話
古今詩話　錦嚢詩對

以上四百四十種の書はすべて時珍の引用したものである。

# 采集諸家本草藥品總數

**神農本草經より三百四十七種**　併入されたもの十八種を除いた外、草部一百六十四種、穀部七種、菜部十三種、果部十一種、木部四十四種、土部二種、金石部四十一種、蟲部二十九種、介部八種、鱗部七種、禽部五種、獸部十五種、人部一種。

**陶弘景の名醫別錄より三百六種**　併入されたもの五十九種を除いた外、草部一百三十種、穀部十九種、菜部十七種、果部十七種、木部二十三種、服器部三種、水部二種、土部三種、金石部三十二種、蟲部十七種、介部五種、鱗部十種、禽部十一種、獸部十二種、人部五種。

**李當之藥錄より一種**　草部

**吳普本草より一種**　草部

**雷斅炮炙論より一種**　獸部

**蘇恭の唐本草より一百十一種**　草部三十四種、穀部二種、菜部七種、果部十一種、

木部二十二種、服器部三種、土部三種、金石部十四種、蟲部一種、介部二種、鱗部一種、禽部二種、獸部八種、人部一種。

**甄權の藥性本草より四種**　草部一種、穀部一種、服器部一種、金石部一種。

**孫思邈の千金食治より二種**　菜部

**孟詵の食療本草より十七種**　草部二種、穀部三種、菜部三種、果部一種、鱗部六種、禽部二種。

**陳藏器の本草拾遺より三百六十九種**　草部六十八種、穀部十一種、菜部十三種、果部二十種、木部三十九種、服器部三十五種、火部一種、水部二十六種、土部二十八種、金石部十七種、蟲部十四種、介部十種、鱗部二十八種、禽部二十六種、獸部十五種、人部八種。

**李珣の海藥本草より十四種**　草部四種、穀部一種、果部一種、木部五種、蟲部一種、介部二種。

**蕭炳の四聲本草より二種**　草部一種、服器部一種。

**陳士良の食性本草より二種**　菜部一種、果部一種。

**韓保昇の蜀本草より五種**　菜部二種、木部一種、介部一種、獸部一種。

**馬志の開寶本草より一百十一種**　草部三十七種、穀部二種、菜部六種、果部十九種、木部十五種、服器部一種、土部一種、金石部九種、蟲部二種、介部二種、鱗部十一種、禽部一種、獸部四種、人部一種。

**掌禹錫の嘉祐本草より七十八種**　草部十七種、穀部三種、菜部十種、果部二種、木部六種、服器部一種、水部四種、金石部八種、介部八種、禽部十三種、獸部一種、人部四種。

**蘇頌の圖經本草より七十四種**　草部五十四種、穀部二種、菜部四種、果部五種、木部一種、金石部三種、蟲部二種、介部一種、禽部一種、獸部一種。

**大明の日華本草より二十五種**　草部七種、菜部二種、果部二種、木部一種、金石部八種、蟲部一種、鱗部一種、禽部一種、人部一種。

**唐愼微の證類本草より八種**　菜部一種、木部一種、土部一種、金石部一種、蟲部二種、獸部一種、人部一種。

**寇宗奭の本草衍義より一種**　獸部

**李杲の用藥法象より一種**　草部

**朱震亨の本草補遺より三種**　草部一種、穀部一種、木部一種。

**吳瑞の日用本草より七種**　穀部一種、菜部三種、果部二種、獸部一種。

**周憲王の救荒本草より二種**　穀部一種、菜部一種。

**汪頴の食物本草より十七種**　穀部三種、菜部二種、果部一種、禽部十種、獸部一種。

**寗原の食鑑本草より四種**　穀部一種、菜部一種、鱗部一種、獸部一種。

**汪機の本草會編より三種**　草部一種、果部一種、蟲部一種。

**陳嘉謨の本草蒙筌より二種**　介部一種、人部一種。

**李時珍の本草綱目**（本書）**に於いて新に增加せるもの三百七十四種**　草部八十六種、穀部十五種、菜部十七種、果部三十四種、木部二十一種、服器部三十五種、火部十種、水部十一種、金石部二十六種、蟲部二十六種、介部五種、鱗部二十八種、禽部五種、獸部二十三種、人部十一種、

# 神農本經名例

上藥一百二十種は君である。(一)命を養ふを主とする、以て天に應ずるのである。毒無し。多く服し久しく服するも人を傷らず。身を輕くし氣を益し不老延年を欲するものは上經に本くのである。

中藥一百二十種は臣である。(二)性を養ふを主とする、以て人に應ずるのである。無毒と有毒とあり、その宜きを斟酌せねばならぬ。(三)病を遏め虚羸を補はんと欲するものは中經に本くのである。

下藥一百二十五種は佐使である。病を治することを主とする、以て地に應ずるのである。毒が多いから久しく服することはよくない。寒、熱、邪氣を除き、(四)積聚を破り、(五)疾を癒さんと欲するものは下經に本くのである。三品合せて三百六十五種は三百六十五度に法る。一度は一日に應じ以て一歲を成すのである。その數を倍し合せて七百三十名である。

(一)命ハ生命ナリ。

(二)性ハ生ノ質、性善性惡ノ如シ。

(三)病ハ釋名ニ、病ハ並ナリ、並テ正氣ト膚體ノ中ニアリトアル。慢性病ヲ云フ。

(四)積聚ハ腹内諸臟ニ血液、精液、胆液等ノ充塞セル諸病ノ通稱。ハラノシコリ。

(五)疾ハ釋名ニ、疾ハ客氣人ニ中ルコト、急疾ナリトアリ。急劇ノ病ヲ云フ。

陶弘景曰く、今按ずるに上品の藥の性能も亦能く疾を去る效力はあるのだが、ただその勢力が和厚にして速效を爲さぬのである。歲月に亘つて常に服すれば必ず健康增進上大なる效果があり、病も癒ゆると同時に壽命も亦十分に延長される。天道の德は仁育するにある、故に天に應ずといふのであつて、一百二十種は(六)寅、卯、辰、巳の月に割當て、その萬物生榮の時に法る意味であらう、中品の藥の性能に就ては、病を療ずる意味の方がより深く、身を輕くする方の說がやや弱い、疾患を除く方が速で、齡を延べるといふ方には緩だといふのである。人間は性情を懷き性情に依つて動くものなるが故に人に應ずといふのであつて、一百二十種は(七)午、未、申、酉の月に割當て、その萬物成熟の時に法る意味であらう。下品の藥の性能は病を排除する働きが主であつて、作用の激烈な力が中和を毀損するから常用的に服することは宜しくない。その疾病が癒えたならば直に止めねばならぬ。地の體たるや收殺にある、故に地に應ずといふのである。一百二十五種は(八)戌、亥、子、丑の月に割當て、その萬物枯藏の時に法る意味であらう。それに五といふ閏の盈數を加へてあるのは、單にその藥

(六)寅卯辰巳ハ、一、二、三、四ノ四月。

(七)午未申酉ハ、五、六、七、八ノ四月。

(八)戌、亥、子、丑ハ、九、十、十一、十二ノ四月。

一種のみを服すべき場合もあり、他の藥と配合して效力を現す場合もあり、自らその人の病狀に隨つて適宜これを用うべきものであつて、必ずしもその用途に偏執があつてはならぬといふのである。

掌禹錫曰く、陶氏の本草の體裁は、神農の本文を朱書に、別錄の文を墨書にしてあるのだが、神農本經の藥はただ三百六十五種に止るに拘らず、今此にその數を倍し合せて七百三十名であるといふ、これは別錄の副品と併せてといふことになるのだから、この一節だけは別錄の文であつて、久しい間手寫に依つて傳るうちに、何時とはなく本文に紛れ錯つて此うなつたもので、後世かやうな紛錯の跡を摘發して、本草は神農の書に非ずと信じられるやうになつたのだが、その否認說の根據は率ねかかる紛入の事實を捉へたものである。

時珍曰く、神農の本草は藥を三品に分ち、陶氏の別錄で藥品を倍に增加して始めて部類分けとし、唐、宋諸家が更に大に增補を加へると同時に種種なる出入が行はれたので、朱書、墨書の區別や三品の名目を存したとはいひながら、實際はその間に於て早くも紊亂されてゐたのである。或は一藥にして數條に分

(九)淄澠ハ共ニ山東ニ在ル二河流ナリ。ソノ水味ヲ異ニシ、合スレバソノイヅレノ水ナルヤヲ辨ジ難ケレドモ、齊ノ易牙ヨク之ヲ辨ジタリトイフ。

(一〇)玉珷ハ序ノ註參照。

け記されたもの、或は二物が一處に混同されたもの、或は木を草部に置き、或は蟲を木部に入れ、水と土と同所に扱ひ、蟲と魚を混雜し、(九)淄澠辨すること罔く(一〇)玉珷分たずといふ有樣、名目さへ已に尋ねやうがないのだから、事實の根據に至つては殆と求むべき處がないのである。今この綱目に於ては古今諸家の擧げた藥全部を總括し整理して十六部に別け、分つべきものは分ち、併すべきものは併せ、移すべきものは移し、増すべきものは増し、三品の區分に拘泥せず、ただ各部を逐ふて物は類に從ひ、目は綱に隨つて擧げ、藥毎にその總名の一を標出してそれを大綱卽ち正題とし、氣味、主治を大書して小綱卽ち小見出しとし、釋名、集解、發明をそれぞれ分註してその目卽ち要領を詳にした。辨疑、正誤、附錄を加へたのは學としての體を備へんが爲であり、單方をその條の末尾に附加へたのは、その藥の用途を詳にしたものである。また大綱の下に本草及び三品の別を明記したのは本草學の原始に遡り得る爲め、小綱の下に各家の名を明記したのはその事蹟を明にせん爲である。分註に各〻その人名を書したのは、一には古來の學說の出處を存せんが爲め、一には各家それぞれの學說

(一)宣ハ通ナリ、攝ハ摠持ナリトアリ。相通ジテ之ヲ摠ブルナリ。
(二)合和ハ藥ヲ混用スルナリ。
(三)仙經ハ所謂神仙家ノ經籍ヲイフ。

是非の據あらしめん爲である。また舊來の文章に繼ぎ剰ぎしたやうなところもあるが、それは一層文の支脈を明にしたのである。敢て僭越の心を以てしたのではなく、實に研究、閱覽に便にせんとする意味に外ならぬ。

藥には君、臣、佐使があつて、以て相(一)宣攝するのである。(二)合和するには一君、二臣、三佐、五使とするが宜しく、又一君、三臣、九佐使とすべきである。

弘景曰く、藥を用ゐるのは宛も人間の社會に制度を立てるやうなもので、若し君多くして臣少く、臣多くして佐少い場合にはその氣力が完全に周らないものである。しかし(三)仙經や世俗の多くの處方の中には必ずしも皆法則通りでないものもあるが、大抵は命を養ふの藥は君を多くし、性を養ふの藥は臣を多くし、病を療ずるの藥は佐が多い。やはり藥の本來の性質の主たるところを基礎として適宜斟酌するのである。同一上品の藥であつても、その中にまた貴賤がある。臣、佐にも同樣であつて、門冬、遠志にはまた別に君臣があり、甘草を國老、大黃を將軍といふ如きはそれぞれその優劣を示したもので、隨つてまたその知行が異る如く差別がある。

岐伯曰く、處方の法則にいふ君臣とは、その病に對し主たる效力を有するものが君、君を佐けるのが臣、臣の力に應じて働くものが使といふのであつて、上、中、下三品の等差の意味ではない、效果に現れる善惡の殊を示す意味なのである。

（一四）張元素曰く、君たるものを最多くし、臣たるものは之に次ぎ、佐たるものは之に次ぐのであつて、對症上效力の同じきものは各等分にする。或は力の大なるものを君と爲すともいふ。

（一五）李杲曰く、凡そ藥の所用の效力は氣と味とが主である。（一六）補瀉は味にあり時に隨つて氣を換ふるのであつて、その病に對し主たる效力を有するものが君である。假令ば風を治するには防風が君であり、寒を治するには附子が君であり、濕を治するには防已が君であり、（一七）上焦の熱を治するには黄芩が君であり、（一八）中焦の熱には黄連が君である。それに何等かの症狀反應があればまたそれぞれに隨つて佐使藥を用ゐ相當の效力を發揮させることが（一九）制方の要といふものである。本草に上品を君と爲すとの說は各〻その宜しきに從ふまでのことであ

（一四）張元素、字潔古。歴代諸家本草、潔古珍珠囊ノ條ヲ參照スベシ。
（一五）李杲字ハ明之、東垣ト號ス。歴代諸家本草、用藥法象ノ條ヲ參照スベシ。
（一六）補ハ不足ヲ補フコト、瀉ハ有餘ヲ除去スルコト。
（一七）上焦ハ胸隔以上。
（一八）中焦ハ胸隔以下臍部以上ノ上腹部。
（一九）制方トハ調合ノ方。

る。

藥に陰陽の配合、子母、兄弟がある。

(二〇)韓保昇曰く、凡そ天地萬物には皆陰陽があり、大小いづれも色と類とがあつてそれぞれ法り象るところのあるものである。故に羽毛の類は皆陽に生じて陰に屬し、鱗介の類は皆陰に生じて陽に屬する。空青は木に法るが故に色は青で肝臟を主り、丹砂は火に法るが故に色は赤で心臟を主り、雲母は金に法るが故に色は白で肺臟を主り、雌黃は土に法るが故に色は黃で脾臟を主り、磁石は水に法るが故に色は黑で腎臟を主る所以であつて、その外皆此の例を以て推すべきである。子母、兄弟といふのは、楡皮は(二一)母、厚朴は子といふ類の如きものがそれである。

根、莖、花、實、苗、皮、骨、肉、

元素曰く、凡そ藥物の根の土中に在るものは中半以上は(二二)氣脉が上行するものであつて、それから苗を生ずるから根といふのである。中半以下は氣脉が下行するもので、それが土に入るから梢といふのである。病の中焦と上焦とに

(二〇)韓保昇、後蜀時代ノ人。官翰林學士ニ至ル、博洽窺ハザル所ナシ、尤モ名物ノ學ニ詳ナリ。孟昶、保昇ニ命ジテ唐本草ヲ取リ、參校增注圖經ヲナサシム、之ヲ蜀本草ト謂フ。

(二一)母子兄弟ノ義詳ナラズ。

(二二)氣脈ハ成長力。

在るものには根を用ゐ、(二三)下焦に在るものには梢を用ゐる。根は昇り梢は降るので、人の半身以上は天の陽であるから頭を用ゐ、中焦には身を用ゐ、半身以下は地の陰であるから梢を用ゐる。乃ち類に從ひ形に象るのである。

時珍曰く、草木には單にその物の一部分を使ふものがある。羌活の根、木通の莖、款冬の花、葶藶の實、敗醬の苗、大青の葉、大腹の皮、郁李の核、蘖木の皮、沈香の節、蘇木の肌、胡桐の淚、龍腦の膏の如きがそれである。また他の部分を兼用するものがある。(二四)遠志―小草、蜀漆―常山の類がそれである。またその植物全部を用ゐるものがある。枸杞、甘菊の類がそれである。また一物で兩樣の效能を現すものがある。當歸の頭と尾、麻黃の根と節、赤と白との茯苓、牛膝は春夏は苗を用ゐ、秋冬は根を用ゐるの類がそれである。羽毛、鱗介、玉石、水火の屬も往往皆然りで一樣には論ぜられない。

(二五)單行するものあり、(二六)相須つものあり、(二七)相使ふものあり、(二八)相畏るるものあり、(二九)相惡むものあり、(三〇)相反するものあり、(三一)相殺すものあり、凡そこの七情の合和の適否に深き注意を拂はねばならぬ。相須ち相使ふべきものを用ゐて良き

(二三)下焦ハ人身中小腹以下ヲ云フ。

(二四)遠志ハ苗ヲ小草ト名ク、遠志ハ根名。常山ハ葉ヲ蜀漆ト名ク、常山ハ根名。

(二五)單行、獨行ナリ。

(二六)相須ハ同類離ル可ラザルモノ。

(二七)相使ハ我ガ能ヲ佐クルモノ。

(二八)相畏ハ彼ノ制ヲ受クルモノ。

(二九)相惡ハ我ガ能ヲ奪フモノ。

(三〇)相反ハ兩ツ相合ハザルモノ。

(三一)相殺ハ彼ノ毒ヲ制スルモノ。

場合に相惡み相反するものを用ゐてはならない。若し毒あるものを用ゐる場合にはそれを抑へる爲に相畏れ相殺すものを用ゐねばならぬ。かやうなる配合の適當を得ない場合には藥を合せ用ゐてはならぬのである。

保昇曰く、本經の藥三百六十五種のうち、單行するもの七十一種、相須つもの十二種、相使ふもの九十種、相畏るるもの七十八種、相惡むもの六十種、相反するもの十八種、相殺すもの三十六種ある。凡そこの七情の合和の適否は深く注意を要することである。

弘景曰く、凡そ舊時の方を檢するに、藥に相惡み相反するものを用ゐたものもある。仙方の甘草丸に防已と細辛とあるが如き、俗方の玉石散に栝樓と乾薑を用ゐてあるの類であつて、これを服するも害を爲さないのは、或はこれを制持するものがあつて、譬へば(三二)寇賈が漢を輔け、(三三)程周が吳を佐けたやうに、大體が既に正しければ私情を以て害を爲すことを得ないやうなものであらう。けれども危險なものは用ゐぬに越したことはないやうである。半夏には毒があるから生薑を用ゐるよといふのも、その相畏れて相制する意味を取つたことであ

(三二)寇、賈ハ後漢ノ功臣寇恂ト賈復ヲイフ。後漢書ニ傳アリ。
(三三)程周ハ吳ノ功臣周瑜ト程普ヲイフ。三國志ニ傳アリ。

(三四)天ノ命ヲ受ケテ天下ニ君臨スルヲ帝トイフ。帝道ハ卽チ

る。

○○宗奭曰く、相反するものの害となることは相惡むものよりも深いものである。つまり彼我を惡んでも我に忿る心がなければ、宛も牛黄は龍骨を惡むものであるが、龍骨は牛黄を得て更にその效果の良いやうなもので、これはそこに制服の力があるからである。然るに相反するものは彼我交に讐として絶對に和合しない。現今の畫家が雌黄と胡粉とを用ゐて相近ければ自ら黯に妬むのもその證である。

○○時珍曰く、藥に七情がある。獨行するものは單方で輔を用ゐないが、相須つものは同類離るべからざるもので、人參、甘草、黃蘗、知母の類の如くである。相使ふ者は我の佐使であり、相惡むものは我の能を奪ふものであり、相畏るるものは彼の制を受くるものであり、相反するものは兩ながら相合はず、相殺するものは彼の毒を制するものである。古方には多く相惡み相反するものを用ゐたものもあるが、蓋し相須、相使を同用するのは(三四)帝道であり、相畏、相殺を同用するのは(三五)王道であり、相惡、相反を同用するのは(三六)霸道である。(三七)經

あり(三八)權あり、それは用ゐるものの見識の徹底如何に在るわけである。

藥に酸、鹹、甘、苦、辛の五味あり。又寒、熱、溫、凉の四氣あり。

○○宗奭曰く、凡そ氣と稱するものは香臭の氣であつて、寒、熱、溫、凉は藥の性である。且つ鵞白脂の如きは性は冷であつて氣が冷だとはいはれない。四氣といふときには香、臭、腥、臊でなければならぬ。蒜、阿魏、鮑魚、汗襪などはその氣臭く、雞、魚、鴨、蛇などはその氣腥く、狐、狸、白馬莖、人中白などはその氣臊く、沈、檀、龍、麝などはその氣香しい如きそれである。ここでは氣の字を性の字に改める方がその意義に妥當する。

○○時珍曰く、寇氏の言に依れば寒、熱、溫、凉は性で香、臭、腥、臊が氣だといふのであつて、その說は禮記の文に合致して居る。しかし古の素問以來ただ氣、味と言慣しになつてゐて卒に改め難いから、しばらく舊に從ふ外はない。

(三九)○○好古曰く、味に五あり、氣に四あり。五味のうちにもまた各四氣があるので、辛の味のうちにも石膏は寒、桂、附は熱、半夏は溫、薄荷は凉であるやうなものである。氣は天、味は地で、溫、熱は天の陽であり、寒、凉は天の陰である。

天ニ順フノ道ナリ。

(三五)天下ノ歸往スルヲ王トイフ。王道ハ天下ノ正シトスル道ナリ。

(三六)武力權力ヲ以テ天下ヲ支配スルヲ霸トイフ。霸道ハ權道ナリ。

(三七)經ハ常ナリ、易フ可カラザルモノ、正シキモノノ謂ナリ。

(三八)權ハ經ニ對スルモノ、變ニ應ズルノ謂ナリ。

(三九)歷代諸家本草、湯液本草ノ條ヲ參照スベシ。

(四〇)岐伯ハ黃帝ノ時ノ人、岐山下ニ居ル。故ニ岐伯ト號ス。善ク草木ノ藥性味ヲ說イテ大醫トナル。帝之ヲ師トス。

(四一)偏勝偏絕ハ過度ナル場合ヲ云フ。

辛、甘は地の陽であり、鹹、苦は地の陰である。本草に五味に淡を言はず、四氣に凉を言はず、只だ溫、大溫、熱、大熱、寒、大寒、微寒、平、小毒、大毒、有毒、無毒といふのは如何なる次第であるかといふに、それは淡は甘に附き、微寒は卽ち凉だからである。

及、有毒、無毒がある。

(四〇)岐伯曰く、病に久と新とあり、方に大と小とある。有毒、無毒に就ては一定の法則に依らねばならぬ。大毒で病を治すれば十にその六を去り、常毒で病を治すれば十にその七を去り、小毒で病を治すれば十にその八を去り、無毒で病を治すれば十にその九を去り、穀、肉、果、菜の食養にてはその全部を盡す。この程度を過りその適正を傷ふてはならぬのである。又曰く、毒に耐ふる者には厚藥を以てし、毒に勝へざる者には薄藥を以てする。王冰曰く、藥氣に(四一)偏勝あれば臟氣に偏絕が生ずる。故に十分にしてその六、七、八、九を去るのである。

陰乾、暴乾、採取と製造の時季、生と熟と、

(註二)六甲ハ日ノ干支ナリ。甲子、甲戌、甲申、甲午、甲辰、甲寅ノ日ヲイフ。一甲ヨリ次ノ甲ヘ移ル日即甲子ヨリ甲戌ヘ移ル日ハ癸酉ナリ。此日ヲ陰中ト云フ。甲戌ノ陰中ハ癸未ニ當ル。他ハ類推スベシ。

(註三)遁甲ハ術數ノ一

弘景曰く、凡そ藥を採取する時季と月が皆寅の月を正月として數へてあるのは、漢の太初の年號以後に書かれたものだからである。その根を藥物とするものは多くは二月と八月に採るとなつて居るのは、春の初には津潤の始めて萌す時で、まだ全く枝葉に充盈らず勢力が淳濃であり、秋に至れば枝葉が乾枯して津潤が下に歸流するからいふのである。どちらかといへば一般に春のものは早い方が良く、秋のものは晩い方が良い。それは花、實、莖、葉のそれぞれにその成熟した時を擇ぶのである。歳月も季節に對して早い歳と遲い歳とあるのだから、必ずしもすべてを本文のままに依らねばならぬといふことはない。陰乾に就ては(註二)六甲の陰中に就て之を乾すとか、又は(註三)遁甲の法に依つて甲子の旬の陰中は癸酉に在るから藥を酉の地に置いて乾すのだとも謂ふのであるが、實際に於ては必ずしもさうばかりではない。ただ陰影の處に暴して乾せばよいので、右の兩方法を合せ用ゐるならば、それは更に善いわけであらう。

(註四)孫思邈曰く、古の醫者は自身よく採取や陰乾、暴乾の法を知つてゐて皆適法に藥を用ゐ、產地に就ても正確なるその產地の物を用ゐたから十中の八九は必ず

ナリ。六甲ノ陰ヲ推シテ隱遁スルナリトイフ。方角又時日ヲ撰ブニ遁甲ノ法ヲ用ウ。

(四四)歴代諸家本草、千金食治ノ條ヲ參照スベシ。

(四五)歴代諸家本草、開寶本草ノ條ヲ參照スベシ。

(四六)歴代諸家本草、唐本草ノ條ヲ見ヨ。

その病を治したのであるが、今の醫者は採取の時節から生産の土地や新しいか陳いかも虚か實かも心得ずに用ゐるから、病に用ゐて十中の五も治癒し得ないといふ次第なのである。

(四五)馬志曰く、今乾燥法を研究して見るのに、陰乾といふのは多くの場合成功しない。鹿茸の如き陰乾にすると悉く爛れて了ふが火で乾せば良く行くのである。草木の根と苗で九月以前に採るものはいづれも日光で乾すがよく、十月以後に採るものは陰乾でよく行くのである。

時珍曰く、生産地の南北に依つて差があり、節氣の早遲に依つても差があり、根と苗とではまたそれぞれ收採の方法に差異があり、取製方、製法もそれぞれ法則を異にせねばならぬ。坊間に賣つて居るものは、地黄は鍋で煮熟し、大黄は火で焙つて乾し、松黄を蒲黄に交ぜてあり、樟腦を龍腦に交ぜてあり、皆法則に反いた贋物ばかりである。

(四六)孔志約曰く、動植物の形生するものはそれぞれ產地に因つて性能が違ひ、春秋節の變移に依つて氣を感ずる爲に功力に相違がある。卽ち本場の產地以外の

（四七）歴代諸家本草、本草蒙筌ノ條ヲ參照スベシ。

ものは質が同じくとも實效に異りがあり、採取の季節が違へば物はその物でもその時に依つて適合せぬ。名、實既に違へば寒、溫多く謬に陷る。これを君、父に施す如きは惡逆これより大なるはない。

（四七）嘉謨曰く、醫藥の供給販賣は商人任せになつて居るが、諺に、藥を賣る者は兩眼、藥を用うるものは一眼、藥を服むものは無眼といふ、誠にその通りだ。古壙灰を死龍骨だといひ、苜蓿根を土黃耆だといひ、荔枝を搗き藿香を搔交ぜて麝香だといひ、茄葉に半夏を雜ぜて煮たものを玄胡索だといひ、鹽松稍を肉蓯蓉だといひ、草仁を草豆蔻の代りにし、西呆を南木香に代へ、廣膠を熬つたのへ蕎麪を入れて阿膠だといひ、鷄子と魚枕を煮たものを琥珀だといひ、枇杷蕋を款冬の代りにし、驢脚脛を虎骨だといひ、麒麟竭に松脂を混ぜたり、龍腦香へ番硝を入れたりして、あらゆる不正なことをして賣つて居る。平氣でその侮瞞を受けて居るばかりではなく、甚しきはその爲に人を殺すに至るのである。誤を知らずして咎を藥に歸して居るといふ有樣、これは非常な重大問題であつて、世間並視すべきものではない、大に愼まねばならぬことである。

(四八)漢時代ヨリ長江以南ノ地及ビ江蘇、安徽地方ヲ江西ニ對シテ江東ト稱ス。

(四九)三建ハ附子、烏頭、天雄ヲ云フ。

產出する土地とその物の眞僞、陳きと新しきと、いづれもそれぞれの法がある。
弘景曰く、諸藥の生產する地域はそれぞれ正確な範圍の限られて居るものである。秦、漢以前であれば當時の列國の地名を擧げる筈だが、今本草に現在の郡、縣名を擧げてあるのは後世の者が增記したものだからである。(四八)國が東晉、劉宋以來揚子江以南所謂江東の地に徙つてからは、極めて僅ばかりの雜藥は手近な地方からも出るのであるが、氣力、性理に於て到底舊の中國の本場の物には及ばない。例へば荊州、益州方面への交通が塞がつた爲に、全く歷陽の當歸や錢塘の(四九)三建を用ゐる外はないのであるが、これでは到底所期の效果を擧げ得べき道理はない。療病の成績に於て既往の人に及ばないのも斯る原因によるわけである。それのみならず、醫者に藥の智識がなく、すべて藥種商のいふままになり、藥種商はまた藥の實質を見別ける智識がないから、產地の地方民が採蒐して送つて來るのをそのままに仕入れ、轉轉する間に眞僞も好惡も全然見別けがつかぬことになるのである。かやうな次第だから、鍾乳は醋で煮て白くしたり、細辛は水に漬けて直くしたり、黃耆は蜜で蒸して甜くしたり、當歸は酒

で洒して潤を取つたり、蜈蚣は足を朱で染めて赤くしたりして良品の如く見せ、螵蛸を膠で桑の枝に附着させたり、蛇牀を蘼蕪の身代りにしたり、薺苨を人參の贋物に使つたりすることが行はれるのだが、それ等の大贋物であることはいふまでもない。合藥の場合にも剗除の分量の適度を知らずにただ遠志、牡丹は纔に半分をも取らず、地黃、門冬は三分してその一を棄てるといふやうな、凡そ皮を去り心を除く等の取扱に就て適量にも合はず適當な量を取ることを知らぬといふ有樣であり、それが王公貴人の爲に合藥するやうな時になると、臣下の者が竊に素人好みの藥と取換へたのをそのまま知らずに終るやうなこともあるので、斯の如くして病を治療しやうとしても固より效驗を期待することは至難なことである。

(五〇)宗奭曰く、凡そ藥を用ゐるには必ず本場の產地から出たものか否かを擇んで用ゐれば誤りはない。それには據がある、(五一)上黨の人參、(五二)川西の當歸、(五三)齊州の半夏、(五四)華州の細辛などがそれだ。東壁土、冬月灰、半天河の水、熱湯、漿水の類の如きは、その物は至つて微なるものであるが、その用に至つては甚

(五〇)歷代諸家本草、本草衍義ノ條ヲ參照スベシ。

(五一)上黨ハ戰國時代ノ韓ノ地、今ノ山西省冀寧道南部ノ地方ナリ。

(五二)川西ハ四川省ノ西部ヲイフ。
(五三)齊州ハ今ノ山東省歷城ノ地ナリ。
(五四)華州ハ陝西省關中道ノ華縣ナリ。

(五五)至元ハ元ノ世祖忽必烈ノ年號、庚辰ハ十七年ニ當ル。
(五六)傷寒ハ熱病。
(五七)逆冷ハ熱ヲ失フコト。
(五八)吃噫ハシヤクリ。
(五九)結脉ハ結滯アル脉。

だ廣いのである。蓋しそれには相當の根據があるので、若しその根據を推究せずに治病の效力を擧げやうとしても、それはただ徒勞に過ぎないのである。

○杲曰く、陶隱居の本草には、狼毒、枳實、橘皮、半夏、麻黄、呉茱萸は皆陳く久しく保存したものが良く、その他のものは精新なものを用ゐるがよいといつて居るが、しかし、大黄、木賊、荊芥、芫花、槐花の類も陳久なものが良いのだから、ただ右の六陳だけが良いといふわけでもない。要は專精なるを用うるにあるのだ。(五五)至元、庚辰六月に許伯威が年五十四で中氣に罹つた時のことであるが、伯威は元來弱質で、(五六)傷寒を病んで八九日目に發熱甚しく、醫師はその手當として涼藥でその熱を下げたのであつたが、梨を食つた爲にまた脾胃を冷し傷め、四肢が(五七)逆冷して屢昏睡狀態に陷り、心臟の動悸が高く、(五八)吃噫が止まず、顏色が青黄になり目は開く氣力がなく、その脉搏は折折停止してはまた復活する、卽ち(五九)結脉になつたのである。そこで仲景の復脉湯を用ゐ、人參、肉桂を加へて急に正氣を扶け、生地黄をばその半量を減じて見た。それは陽氣を傷ることを恐れたからであつた。二劑までそれを服させて見

たが病勢は一向退かぬので、改めて再び診察して見ると脈證はやはり相對して居る。そこで藥品が精新なものでなく、恐らく陳腐なものであつたのだといふことに氣が付いたので、再び藥品の新しいものを買つてそれを服ませて見ると、その脈證は半に減じ、更につづけて服ませて見ると、追追平安に赴いた。であるから凡そ諸の草木、昆蟲は産地に依つて良否があり、根、葉、花、實はその採取に時季がある。産地を誤れば性味が不充分であるとか異る場合があり、その時季を誤れば氣味が完全でない。それと同じく新と陳とでは效力が同一でなく、精と粗とではそれだけの差異がなければならぬ。もしそれ等の撰擇を正確にせずして病に用うるならば固より效驗はないわけで、随つてそれは醫者そのものの過といはねばならぬ。唐の耿湋の詩に『老醫舊疾に迷ひ、朽藥新方を誤る』とはこのことだ。○歳物專精に就ては後に述べる。

藥の性能には丸藥にして宜きものと散藥にして宜きもの、水で煮て宜きもの、酒に漬けて宜きもの、膏に煎じて宜きものとがあり、また一藥物でいづれにして用ゐても宜きものあり、湯や酒に入れてはならぬものがある、それはいづれもその藥の

(六〇)結胸ハ胃弱、消化不良ヲ云フ。又肋膜炎、肺炎ノ場合ヲモ云フ。

性能に隨はねばならぬことで、それに違越してはならぬのである。

○○弘景曰く、又按ずるに、病にもそれぞれ丸を服し、散を服し、湯を服し、酒を服し、膏煎を服して宜きものがあり、また兼參へ用ゐて適當の效を奏するものがあるのである。

○○華佗曰く、病に湯の宜きもの、丸の宜きもの、散の宜きもの、下通せしむるの宜きもの、吐瀉せしむるの宜きもの、發汗せしむるの宜きものとある。湯は臟腑を蕩滌し、經絡を開通し、陰陽を調品せしむべく、丸は風冷を逐ひ、堅積を破り、飲食を進むべく、散は風寒、暑濕の邪を去り、五臟の結伏を散じ、腸を開き、胃を利する。下通さすべきものを下通させざれば心、腹が脹滿して煩亂せしめ、發汗さすべきものを發汗させねば毛孔が閉塞し悶絶して死亡し、吐かすべきを吐かせねば(六〇)結胸、上喘して流動物も固形物も口に入らずして死亡するものである。

○杲曰く、湯は蕩きよめるのであつて大病を去るにこれを用ゐ、散は散ずるのであつて急病を去るにこれを用ゐ、丸は緩ゆるやかであつて、徐に緩やかに病

を治するのである。咀吹といふのは古の方法で、古は鐵刃等の物を研り砕く器具がなかつたから、藥品を口で細かに咬み砕きその汁を煎じて飲ませたもので、かくすれば升り易く散じ易くして經絡をめぐるのである。凡そ(六一)至高の病を治するには酒を加へて煎じ、濕を去るには生薑を以てし、元氣を補ふには大棗を以てし、風寒を發散するには葱白を以てし、(六二)膈上の痰を去るには蜜を以てするのである。細末にしたものは經絡には循り及ばず、ただ胃中及び臟腑の積を去るだけのものである。氣味の厚きものは白湯で調へて用ゐ、氣味の薄いものは煎じて滓と共に服させる。下部の痰を去るにはその丸藥を極めて大くし光り且つ圓からしめる。中焦を治するには大さこれに次ぎ、上焦を治するには極めて小くする、丸藥に用うる(六三)稠麪糊は直に溶けずにそのまま腹に落付くものに使用するによく、酒や醋で服ませるのはその丸藥を腹中で溶せる意味なのである。半夏、南星を強ひて用ゐて濕を去らうとするときは、丸にするのに薑汁と(六四)稀糊を以てする。それは化し易くする爲である。一夜水に浸した餅を炊ぎ用ゐるのも化し易くする爲である。水滴を入れて丸にするのも化し易い。煉蜜で

(六一)至高ノ病トハ頭部耳鼻眼目等ノ病ノコトナラン。

(六二)膈上ハ胸膈以上ヲ云フ。

(六三)稠麪糊ハウドンコノリ。

(六四)稀糊ウスノリ。

(六五)煆ハ火ガ全體ニ通ルホド燒クコト。炮ハツツミヤキト譯ス、紙ニ包ミ上ヲ濡シテ熱灰ニ埋ムルコト。炙ハ串ニサシテ火ニアブルコト。炒ハ焙烙鍋ナドニテイルコト。

(六六)漬ハ水ニ久シク漬ルコト。

丸にするのは、直ぐ溶けずしてそのまゝ腹に入り、その氣が經絡を循るやうにする爲である。蠟で丸にするのはなかなか化し難く、長時間その效力を作用させ、或は毒藥などの場合脾胃を傷めないやうにする爲である。

元素曰く、病の頭や顏や皮膚にある者には藥を酒で炒つて用ゐ、咽から下、臍から上にあるものには酒で洗つて用ゐ、下にあるものには生で用ゐる。寒藥は酒に浸してから曝乾して用ゐる、それは胃を傷める恐れがあるからで、當歸を酒に浸すのは發散の作用を助ける爲である。

嘉謨曰く、製藥の目的は病に適中することにあるので、及ばなければ藥功の效驗が現れず、太だ過ぎれば却つて氣味の作用を失ふものである。凡そ製法に火を用ゐるものが(六五)煆、炮、炙、炒の四種あり、水を用ゐるものが(六六)漬、泡、洗の三種あり、水と火とを共に用ゐるものが蒸、煮の二種ある。製法に多くの方法はあるが大體これ以外に出でない。製劑に酒を以てすれば升提し、薑を以てすれば發散し、鹽を入るれば腎に走つて堅を軟にし、醋を用ゐれば肝に注いで痛を住め、小兒の尿を用ゐれば(六七)劣性を除いて下に排泄し、米泔を用ゐれ

ば燥性を去り中を和し、乳を用ゐれば枯を潤して血を生じ、蜜を用ゐれば甘く緩で元氣を益し、陳壁土を用ゐれば眞氣を竊んで驟に中焦を補ひ、麥麩皮を用ゐれば酷性を抑へて上膈を傷めることなく、烏豆湯、甘草湯に漬けて曝したものは共に毒を解して平和ならしめ、羊酥油、猪脂油を塗つて燒けば骨に滲みて容易に脆く斷てる。穰を去つたものは脹を除き、心を抽いたものは煩亂を除く、大體以上述べた通りだから初學の者はよく意を用ゐて研究するがよい。

病を治療せんとせば、先づその病源を察し、先づ病機を視ねばならぬ、五臟が未だ虛せず、六腑が未だ竭きず、血脈が未だ亂れず、精神が未だ散ぜぬものは、藥を服すれば必ず活きる。若し病が已に十分に成つた時であれば、半までは癒ゆることを得るであらう。病勢の已に過ぎたものは、その命は全うし難いであらう。

○弘景曰く、明醫が聲を聽き色を察し脈を診るのでなければ、いかで未だ外に現れない病を知得やうか。知得ない以上は、未だ病の外に現れぬ人は自ら治療を受ける氣にはならない道理である。故に(六八)齊侯は皮膚に顯れた微な病を輕んじ怠つた爲に、骨髓に徹る痼疾にして了つたのである。それはただ診斷鑒識

泡ハ水ニ暫時漬ケテフヤカスコト。
洗ハ水ニテ洗フコト。
(六七)劣性ハ有害ノ性質。

(六八)齊侯ハ齊ノ桓公ガ扁鵲ノ診斷チ輕ジタルチ指ス。

(六九)倉公ハ太倉公ノ略。姓ハ淳于、名ハ意、臨菑ノ人也。齊ノ太倉長トナル、故ニ太倉公ト稱ス。史記ニ傳アリ。

(七〇)巫ハ人ノ爲ニ吉凶ヲ言ヒ、マタ祈禱ヲ爲スモノナリ。

(七一)鑱石ハ石鍼ナリ。

(七二)草蘇荄枝、何物タルカ考フ可ラズ。

が困難なるが爲ではなく、醫の言を信じ受容れることが一般人には容易でないからである。(六九)倉公も(七〇)巫を信じて醫を信ぜざるは死す。治せず。といつて居る。

時珍曰く、素問に、上古には湯液の藥を作つても、作つただけでそれを服するに及ばなかつた。中古には道德が稍衰へて邪氣が時折り至つたが、これを服して萬全であつた、今の世では必ず有毒の藥を用ゐて身體の內部を攻め、(七一)鑱石や針や艾で外部から治を加へるやうになつたといつてある。又、中古には病を治するのに、病が起つてこれに治を加へ、湯液の藥も十日用ゐて病狀が去らねば(七二)草蘇、荄枝で病の本末を治療し、標病と本病とを區別して健康を回復せしめたのである。然るに末世の現在ではその病氣が四時の季節に依る關係にも拘らず、日月の關係も知らず、逆か從かも審にせず、病狀が外部に十分に現れてから手當を加へて癒さうとする。それであるから病の中途で更に新な病を惹起すといふ狀態になるのである。

淳于意曰く、病の治癒せぬ理由に六種ある。驕恣にして理を論ぜぬのが一、

（七三）病氣ノ陰陽五藏ノ氣力ガ屡變スルモノ。

身を輕じ財を重ずるのが二、衣食の適度を守れぬのが三、（七三）陰陽臓氣の定らぬのが四、衰弱甚しくして藥を服せないのが五、巫を信じて醫を信せぬのが六であつて、その內の一があつても治癒し難い。

宗奭曰く、病に六失がある。審にせざるに失し、信ぜざるに失し、時を過ぐるに失し、醫を擇ばざるに失し、病を識らざるに失し、藥を知らざるに失するのである。この六失のうちの一失があつても病は治し難い。又八要がある。一には虛、二には實、三には冷、四には熱、五には邪、六には正、七には內、八には外である。素問に、凡そ病を治するに、その形氣、色澤を察し、人の勇怯と骨肉皮膚を觀れば能くその情を知得るから、それを以て診法とするといつてあるが、若し脉と病とが相應せぬ患者があつた場合、その病狀を十分に見ることが出來ず、醫者はただ脉だけを根據として藥を與へたとしたならば、いかで完全なり得やう道理があらうか。現今の富豪の家の婦人などになれば、常に奧深く帷幔を垂籠めた中に生活し、その身は手や臂まで薄絹を纏ふて居るのだから、容體を見るにも聲を聽くにも、神樣でもなければ六ケ敷い。脉を見るさ

へ十分に行かぬ以上、勢ひ患者に就いて詳細な點を詢ねる外はないのであるが、ところが患者はまた、あまり細かしく詢かれることをうるさがり、醫者に實力が無いから煩しく詢ねるかの如くに誤解し侮つて、往往にして藥を與へられても服せぬといふやうなことになる。これでは(七四)四種の診察の術の一をだも完全に用うるわけに行かぬのである。誠に困つたものといふ外はない。

若し毒藥を用ゐて病を療する場合には、最初には黍粟一粒程の少量から用ゐ始め、病が去れば直に止める。去らぬ場合にはそれを倍にし、なほ去らぬ場合には十倍までにして病が去るを程度とする。

◯◯弘景曰く、今の藥の中で單行するものの一兩種は毒がある。巴豆、甘遂、將軍の如きものだけは極量まで用ゐてはならない。右の本經のいふ所のやうにするには、毒なもの一物のみの場合は一丸を服し、大さは(七五)細麻程にする。二物のうち一物が毒の場合には二丸を服し、大さは(七六)大麻程にする。三物のうち一物が毒の場合には三丸を服し、大さ(七七)胡豆程にする。四物のうち一物が毒の場合には四丸を服し、大さ(七八)小豆程にする。五物のうち一物が毒の場合

(七四)四診ハ望、聞、問、切ノ四ツナリ。
(七五)細麻ハ胡麻粒。
(七六)大麻ハアサノ實。
(七七)胡豆ハ豌豆。
(七八)小豆ハアヅキ。

には五丸を服し、大さ(七九)大豆程にする。六物のうち一物が毒の場合には六丸を服し、大さ(八〇)梧子程にする。それ以上十九までこの比で用ゐ得るが、大さは皆梧子大を程度として數を增すのである。又藥の毒そのものにも輕重があつて、狼毒、鉤吻の如きものは附子や芫花などと同樣に見るわけに行くものでない。この類はそれぞれ適當な量を須ゐることにせねばならぬ。

○○宗奭曰く、かやうな標準はなければならぬわけであるが、更に患者の老、少、虛、實、病の新しきと久しきに亘ると、藥の多毒と少毒とをも考量せねばならぬので、必ずしも一定不動の定法として固執すべきものではない。

寒を療するには熱藥を以てし、熱を療するには寒藥を以てし、飲食の不消には吐下藥を以てし、(八一)鬼疰、蠱毒には毒藥を以てし、癰腫瘡瘤には瘡藥を以てし、(八二)風濕には風濕の藥を以てし、各その宜しき所に隨ふのである。

○○弘景曰く、藥性の一物にして十餘病に共通の效力を有するものは、就中より多く的確に利くものを基本とするのである。また患者の虛實を觀、それに應じて補瀉を行ふ、男女、老少、苦樂の別、生活狀態に於ける贅澤なものと貧乏な

(七九)大豆ハシロマメ。
(八〇)梧子ハアヲギリ。即チ梧桐ノ種子。
(八一)鬼疰ハ心腹痙攣、瓦斯中毒等ノ急病。蠱毒ハ毒虫ヨリ作リタル毒藥。
(八二)風濕ハ僂麻質斯ノコトナレドモ、此處ニテハ風寒濕熱等ヲ汎稱スルモノト解シテ可ナラン。

もの、居住地の地質、風土、風俗の如何の圜境等により、それぞれ同一に扱ふてはならぬ。(六三)褚澄が、寡婦や尼僧を治療するのは人の妻や妾に對するとは異なるものだといつたのは、その心的、性的境遇の差異に達觀せる意見である。

時珍曰く、氣味に厚薄あり、性用に躁靜あり、治體に多少あり、力化に淺深があるのであつて、正者は正治し、反者は反治する。熱を用ゐて熱を遠け、寒を用ゐて寒を遠け、涼を用ゐて涼を遠け、溫を用ゐて溫を遠けるのだ。表を發するに熱を遠けず、裏を攻むるに寒を遠けぬとすると、熱を遠けなければ熱病を惹起し、寒を遠けなければ寒病を惹起するものである。熱を治するに寒を以てするときには溫にして之を行ひ、寒を治するに熱を以てするときには涼にして之を行ひ、溫を治するに淸を以てするときには冷にして之を行ひ、淸を治するに溫を以てするときには熱してこれを行ふ。(六四)木欝は之を達し、火欝は之を發し、土欝は之を奪ひ、金欝は之を泄し、水欝は之を折く、これはいづれも氣の勝るものだからである。微なるものは之に隨ひ、甚しきものは之を制する、これは氣を復するのである。和なるものは平にし、暴なるものは奪ひ、

(六三)褚澄字ハ彥通、宋ノ武帝ノ甥。婦人良方、集事淵海ヲ著ス。

(六四)肝木、心火、脾土、肺金、腎水。

高きものは抑へ、下きものは擧げ、餘有るをば折き、足らざるをば補ひ、堅きものは削り、客するものは除き、勞するものは溫め、結するものは散し、留るものは行らしめ、燥けるものは濡し、急なるものは緩にし、散ずるものは收め、損するものは益し、逸なるものは行かしめ、驚くものは平ならしめ、吐かせ、發汗させ、下し、補し、瀉する、かやうにすることは病氣の久しいと新しいとに拘らず同一な手當の法である。又、逆なるものは正治し、從なるものは反治する。反治とは熱因は寒用し、寒因は熱用し、塞因は塞用し、通因は通用するので、それは必ずその主たる所を伏する爲にその因するところを先にするのであつて、その始には同じいがその終には異なることになる。鬱積したものは勢ひ破れしめねばならず、堅結したものは勢ひ潰えしめねばならず、そして氣をして和せしめて必ず已ましめ、病勢發展の餘地なからしめねばならぬともいつてある。又、多くの場合寒にして而して熱するのは之を陰に取るのであり、熱にして而して寒にするのは之を陽に取るのであつて、所謂その屬を求めてこれを衰へしめるのであるともいふ。これは皆(八五)素問の中の最も精要な

(八五)素問ノ六元正氣大論ヲ見ヨ。

點を約取したことである。
病の胸膈より上に在るものは食事を先にして藥は後に服む。病の心腹より下に在るものは先に藥を服んで後に食事を攝る。病の四肢、血脈に在るものは空腹になつた朝がよく、病の骨髓に在るものは食物を十分攝つた夜がよい。
○○弘景曰く、今の方家が先食、後食をいふのはこの意味である。又、酒で服むべきものと、飲で服むものと、冷して服むものと、熱して服むものとあり、煎藥を服むには、時間を長く隔てて服む場合と、度度續けて服む場合とあり、煎藥にも、生を煮て服む場合と、熟を煮て服む場合とあり、それぞれ服用に就ての法則があるのだから、よくそれを審にする必要がある。
○杲曰く、古人の服藥の活法として、病の上部に在るものは少しづつ幾度服んでもよく、病の下部に在るものは多量を頓服するがよい。少しづつ服めば上部に效力が滋榮し、多量を服めば下部に效力が峻補するといつてある。凡そ再服、三服に分服するといふことは勢力を續けて及ぼさしめる意味なのである。患者の體質の強弱と病の輕重とを計つて進退、增減すべきものであつて、必ず

しも法に拘泥すべきではない。

夫れ大病の主なるものには、(八六)中風、傷寒、寒熱、温瘧、中惡、霍亂、大腹水腫、(八七)腸澼下痢、大小便不通、(八八)奔豚、上氣(八九)欬逆、嘔吐、黄疸、(九〇)消渇、留飲、(九一)癖食堅積、(九二)癥瘕、癲邪、(九三)驚癇、鬼疰、喉痺、歯痛、耳聾、目盲、金瘡、(九四)踒折、癰腫、惡瘡、痔瘻、癭瘤、男子の五勞、七傷、虚乏、羸痩、女子の(九五)帶下、崩中、血閉、陰蝕や蟲蛇、蠱毒の患である。これは大略の(九六)宗兆で、その間に變動があり枝葉が起るのである。いづれも病の起る所以の源を訪ねてその變調を平常に回し収めねばならぬ。

○○弘景曰く、藥が主として何病に利くといふのは總括した一病名に對していふのであるが、假令ば中風にしても數十種類があり、傷寒の證候にも二十幾通りもあるのである。けれども更にそれを類例に依つて通觀すれば大體に於てその歸を一にするのだから、その基本的なものを總括的な基礎とするのである。藥の配合もその基準に依りその徴候に隨つてせねばならぬといふわけである。病状の變化に就いても一概にいふわけには行かない。醫方千卷といへども猶ほ未だ

(八六)中風ハ感冒、傷寒ハ熱病、中惡ハ瓦斯中毒。

(八七)腸澼ハ痢病。

(八八)奔豚ハ腹部内臓ノ痙攣。

(八九)欬逆ハシヤクリ。嘔吐、ヘドチハクコト。

(九〇)消渇ハ糖尿病及小便頻數ノ病。

(九一)癖食、クヒスギノ病。

(九二)癥瘕ハ腸部ニ血液、粘液、膽汁等ノ集積シテ起ル病。

(九三)驚癇、小兒ノヒキツケル病。

(九四)踒折ハ痿躄ノコトナラン、足力ナクシテ行クコト能ハザルモノ。

(九五)帶下ハ婦人ノ白血、長血等、崩中ハ子宮出血、血閉ハ經閉

ト同ジ、陰蝕ハ男子陰部ノ瘡腫。
(九六)宗兆ハ派別ノ本源、俗ニ本家トイフガ如シ。
(九七)南宋ノ時ノ人醫

其の理を盡さずといふのはその故である。春秋時代より以前や當時の秦の名醫和、緩の書は傳らぬから判らないが、道敎の經籍中に扁鵲が用ゐたといふ若干の方法が略載せられてある。その藥の用ゐ方を見るにやはり本草家の主張の通りである。漢の淳于意や華佗などの用ゐた藥方で今に存して居るものもあるが、それ等も皆やはり藥性を調べ條したものである。最も著しいのは張仲景の遺したもので、あらゆる藥方の祖となつて居るが、これも又悉く本草に依據したものであつて、特長としてはただ仲景が脉を診ることが正確であり、氣に現れる徵候の見方が明で、それに犀利な推理力を應用したところにある。腸を刳り、臆を剖き、骨を刮り、筋を繼ぐ法などに至つては、それは特別な術に依つて爲し得ることで、神農系統の者の爲すべき範圍のことではないのである。晉朝以來は張苗、宮泰、劉德、史脫、靳邵、趙泉、李子豫などの一代の良醫があり、身分の高いものでは阮德如、張茂先など、逸民には皇甫士安や江左の葛洪、蔡謨、殷仲堪の諸名士いづれも醫藥の術に精しく、劉宋の時代には羊欣、元徽、胡洽、秦承祖、南齊には尚書の褚澄や(九七)徐文伯、嗣伯の群從兄弟があり、いづれも

病氣の治療に當つて十中の八九までを治癒して居る。凡そこれ等の人人には各々その用ゐた藥方の著書があるが、その指趣を觀れば本草でないものはないのである。或は時に特別の藥を用ゐても、やはりその性情や度量の法則に準し、決して度外視したものはない。范汪の百餘卷の藥方や葛洪の肘後方などの中には些細な單行のもの、通常あり來りのもの、田舍で試みて效驗のあつたもの、外國の畑違ひの治術などもあり、藕皮で血を散するのは料理人が始めたこと、牽牛で水を逐ふのは近頃農夫共が始めたことであり、麪店の蒜虀は蛇を下す藥になり、路傍の(九八)地菘は金瘡に對する一種の祕方のやうにされて居るが、これは蓋し天地間の物は何でも天地間の用を爲さぬものはないのであつて、適應するものがそれに觸れそれに遇へばそこに始めて效用が成立する。必ずしも本來この物はこれでなければならぬといふものではないのである。(九九)顏光祿も亦云つて居る、道教の經籍の仙方に(一〇〇)服食、斷穀、延年、却老といふことや(一〇一)飛丹、錬石の奇法、雲騰、羽化の妙術も藥道を先とせぬものはなく、藥を用ゐるのは理論は全く本草と一致する。ただ實行上の用意、實行の仕方が一般實世

---

術ニ尤精シ。

徐濈字ハ秋夫─┬─道度─文伯
　　　　　　　└─叔嚮─嗣伯

群従兄弟トハ伯叔ノ子ヲ群従ト曰フニ因ル。

(九八)地菘ハ天名精ノ一名、和名ヤブタバコ。

(九九)顏光祿名ハ延之字ハ延年。琅邪ノ人、少ヨリ讀書ヲ好ミ覽ザル所ナシ。文章之美當時ニ絕ス。官光祿大夫ニ至ル、宋ノ武帝、少帝、孝武帝ノ

間と少し異つて居るだけのことである。用ゐる藥も多くはない。多くて二十餘種位のもので、僅に數種のものを單行するのもある。それを長い年月の間實行を積めば大なる效力が現れるといふのであつて、卽ち本草の所謂久しく之を服すれば效ありといふことなのである。一般世間が微に效力がありさうに覺えると、それで止めて了ふやうなものではないと。ところが、當今の藪醫者のやり方を見ると、本草などを看ることを耻のやうに思ひ、ただ舊い處方などを引出して間に合せ、或は怪しい聞きかぢりを勿體らしく書留めては愚にも付かぬこじ付けをやり、それを大發見でもしたかのやうに鼻を高くして居る。その藥に畏、惡、相反の性質の異のあることなどには、元來が智識を有たぬのだから判りやうがない。藥の種類が途方もなく間違つて居らうと、分量が取り違つて居らうと一向お構ひなく、それが偶〻まぐれ當りに癒りでもすれば忽ち匙加減に己惚を起し、十日、一月と經つても病氣が瘳えぬときは、これは病源が深く結れて了つたからだなどと遁辭を吐く。深く自ら省みて古來の多くの研究の蹟を調べて見やうとはせず、徒に虛名だけを逐ふに專なる態度である。自ら恐るべ

時ノ人ナリ。

(二〇〇)服食云云ハイヅレモ道家神仙家ノ術デ、服食ハ藥餌ト食物ニ依ルノ法、斷穀ハ穀食ヲ斷ツノ法、コノ二法ニ依ッテ壽命ヲ延ベ老衰ヲ除クヲイフ。

(二〇一)飛丹、錬石、共ニ神仙家ノ藥品デアル、コレヲ服スレバ雲ニ駕シ羽ヲ生ジ白日昇天ストイフ。

き罪を作つて居るものといふの外はない。(一〇二)五經、(一〇三)四部の書籍軍國の事務、禮服の儀禮なれば、少しの過失があつても、ただその事の上の不都合に止るが、醫藥の問題は一物に謬があつても直に人間の生命に關する大事である。高貴なる(一〇四)千乘の君侯、富裕なる百金の長者と雖も免れ得ないのだから、非常に愼重な態度でなければならないと思ふのである。

宗奭曰く、人には貴賤、少長の差異があるのだから、その病はそれぞれ觀察を異にせねばならぬ。病には新久、虛實の別があるのだから、その狀態に隨つて藥を別にせねばならぬ。蓋し人心に顏の如く各〻同一でない。心が同じくないと同樣臟腑にもそれぞれ異がある。同一の藥で衆多の人の病を一樣に治癒するといふことは爲し得べきことであるまい。

張仲景曰く、土地に高下の不同があり、物の性には剛柔があり、食物や居住もそれぞれ異つて居る。黃帝が(一〇五)四方の問を輿し、岐伯が四治の能を擧げたといふもこの故である。且つ貴顯富豪の家庭の人は外見は怡樂さうで內心は苦惱して居るものである。衣食が豐であれば外形は樂しいから外が實ち、思案考

(一〇二)五經ハ易、書、詩、春秋、禮ヲイフ。

(一〇三)四部ハ晉ノ荀勗ガ作リシ四部總括群書トイフ書ノ分類ノ目甲、乙、景、丁ノ四部ヲイフ。精シキコトハ吉田意安、本草序例鈔四ノ十一丁ヲ見ヨ。

(一〇四)千乘ノ君トハ諸侯ヲイフ。

(一〇五)黃帝四方ノ問トハ、素問異法方宜論ヲ指スニ似タリ。問答共ニ五方五治ヲ論ジタルモノナレド

モ、此文ハ中央ノ一方ヲ略シテ四方ノ間トセシナルベシ。

（一〇六）心火ヲ母トシ、

慮が多ければ内心が苦勞するから內が虛する。故に病は脉に生ずる。下賤な貧しいものと異るところである。かく病を治するにはその患者の境遇に注意せねばならぬのだが、後世の醫者はこれを顧みず、注意を拂はぬから失敗することが多いのである。又すべて人は少、長、老に依つてその血氣に盛、壯、衰の三等がある。故に岐伯は、少の火の氣は壯に、壯の火の氣は衰ふといつて居る。蓋し少の火は氣を生じ、壯の火は氣を散ずるのである。況や衰の火に於ては更に衰ふることはいふ迄もない。故に治療の法も亦當然之等に分けねばならぬ。少年時代に服用してゐた藥でも、壯年、老年時代になれば皆その處方を變へねばならぬので、これは決して忽にしてはならぬことである。

〇又曰く、人間は氣と血とが生命の根本である。世間の少年少女が戀想を心に置いて過度の苦慮をすれば多くは勞損の容體になり、男は顏色の光澤を散失し、女は月經が先づ閉塞する。それは憂愁思慮で心臟を傷めるからで、心臟を傷めれば血は逆し竭きる。故に顏色が先づ光澤を散じ月經が先づ閉塞するのである。火が既に病を受けてその（一〇六）子を營養し能はぬから、食慾がなくなり、

其子トハ脾土ヲ指スモノノ如シ。肺ハ金氣ヲ司リ、腎ハ水氣ヲ司リ、肝ハ木氣ヲ司ル。

脾が虚すれば金氣が虧けるから嗽が出て、嗽が出るやうになれば水氣が絶するから四肢が乾き、木氣が充たなくなるからイライラと怒りッぽくなり、鬢髪が生氣なく亂れ、筋肉が痿ゆる。かく五臓順順にその影響を傳へて全部に遍くなれば直には死なぬまでも結局は死するのである。これは多くの勞症の内でも最も難治なもので、或は全く心の思ふことを轉換し藥を用ゐて扶接すれば殊に依ると九死に一生を得ることもある。

〇ある患者は久しく嗽を病んで肺が虚し寒熱を生じたときに、款冬花三兩芽を煙に焚き、筆の管でその煙を吸込み、口に滿て、嚥み込ませ、倦めば止めて一日に五回乃至七回づつそれを行はせたので遂に癒えた。

〇ある患者は瘧を病み一ケ月餘に亘つたので、藥を用ゐて吐き下させると、氣が遂に弱くなり脉に變調を見て、夏は暑に傷み、秋は風に傷む。因て柴胡湯一劑を與へると、患者は苦が止んだのだが、飲食の節制が保てぬ爲に又復寒熱が作り、吐逆して食物を攝れず、脇下が急痛する。これは痰瘧になつたのであつた。そこで十棗湯を一服與へると痰水が數升下り、理中散を服させると遂に

癒えた。

○ある婦人患者は吐逆を病み、大小便が通ぜずして煩亂し、四肢が冷えて漸次に脉が無くなり一日半を經過した。そこで大承氣湯二劑を與へると、夜半に大便が漸く通じ脉も漸く生じて翌日は安らかになつた。これは關格の病であつて、極めて難治なものだ。經に、關は則ち吐逆し、格は則ち小便するを得ず、また大便するを得ぬものもあるといつてある。

○ある患者は風痰に苦み、頭痛、顫掉、吐逆で飲食が減退した。醫者は冷物に傷んだものとして、これを溫めたが癒えない。又丸藥で下すと遂に(一〇七)厥冷する。また金液丹を與へると、後には譫言をいひ、吐逆し顫掉して人事不省になり、幽鬼でも見るやうに狂ひ出し、衣物を押遣つて床を摸るやうな動作をし、手足が冷え脉が伏するのであつた。これは胃中に結熱がある爲に(一〇八)昏瞀して意識不明になるので、陽氣が外に布く能はず、陰氣が內に持たぬ爲に顫掉して厥するのである。大承氣湯を與へ一劑全部を服するとそれで癒えた。

○ある婦人患者は(一〇九)溫を病んで已に十二日を經過してゐた。その脉を診る

(一〇七)厥冷、溫體ガ下ルコト。

(一〇八)昏瞀ハ目ガクラム。

(一〇九)溫ハ熱病。

と六七至で澁り、(二一〇)寸は稍大く、尺は稍小い。寒熱を發して頬は赤く、口は乾き、舌はよく廻らず、耳も聞えない。經過を訊ねて見ると、發病後數日で月經があつたといふ。これは少陽の熱が血室に入つたもので、治療が病に適應せねば必ず死亡するものである。因て小柴胡湯を二日間與へ、桂枝乾薑湯を加へると一日で寒熱は止つたが、ただ俄に臍下が急痛するといふ、抵當丸を與へると微し通じがあつて痛は止んだが、身體に涼を感じて舌はやはりよく廻らなかつた。また小柴胡湯を與へて見ると、次の日患者は胸中が熱燥して口鼻が乾くといひ出したので、また少し調胃承氣湯を與へたが通じがない。大陷胸丸を半服與へて見ると三回に通じはあつたが、次の日は虛煩して落付かず、妄に物が見えるやうで意味のないことを口走る。これは燥屎が滯つて居るのだといふことが判つたが、患者が極度に衰弱して居るのでそれを攻めることをせず、竹葉湯を與へてその煩熱を去つて見ると、大便が自ら通じて中に數箇の燥屎が交つてゐたのであつた。それで狂煩は盡く解したが、ただ欬嗽に唾沫が出る。これは肺虛であつて、これを治せねば虛に乘じて肺痿を作す恐れがあるから、小柴胡湯

(二一〇)寸尺ハ掌後臂頭ニ於ケル診脈ノ局部ノ名。關骨前ヲ寸ト名ケ、關後ヲ尺ト名ク。

(一一)浮泡小瘡、和名水ガサ、卽水泡疹。

(一二)左上ノ二部トハ寸口、關上ヲ云フ。右下ノ二部トハ關上、尺中ヲ云フ。

から人參、薑、棗を去り、乾薑、五味子を加へた湯藥を用ゐると、一日で咳が減じ二日にして悉く癒えた。

○ある患者は年六十で脚が腫れ瘡が生じたのに、迂濶と猪肉を食つた爲に悶え苦んだ。醫者が藥で下したので一時はそれで癒えたのだが、適〻外出して風に中り、汗が出て頭、顏が暴に紫黑色に腫れ上り、睡氣が多く、耳朶の上に(一一)浮泡、小瘡が有つて黃色の汁が出る。因て小續命湯を與へ羗活を倍に加へて服させると遂に癒えた。

○ある患者は年五十四で、元來羸弱で屢〻寒に中り、少年の頃は土硫黃數斤を持藥に服したが、近來は菟絲を服んで效果があるといつてゐた。脈は(一二)左上の二部、右下の二部が弦緊して力がある。五七年來右の手足の筋が急し拘攣して言語が稍遲くなるといふ。そこで仲景小續命湯を與へ薏苡仁一兩を加へて筋急を治し、黃芩、人參、芍藥各〻半を減じて中寒を避け、杏仁をただ百五箇を用ゐて見ると、後にまだ大いに冷感を覺えるといふ。因て人參、芩、芍を全部去つて當歸一兩半を加へて見ると安になつた。小續命湯は今の人も多く用ゐ

るが、徴候に随つて加減することを知らねば危險な場合があるから、特に例としてここに揭げたのである。

# 陶隱居名醫別錄合藥分劑法則

古の秤（ハカリ）にはただ銖、兩だけあつて分の名目はないが、今は十黍を以て一銖となし、六銖を一分となし、四分を一兩となし、十六兩を一斤となすのである。子穀、秬黍の制などもあつたけれども、從來久しく調劑に慣用したものであるから此れを襲用する。

○蘇恭曰く、古の秤は皆（一）複であつた、今の南秤がそれだ。後漢以來一斤を分けて二斤となし、一兩を二兩としたが、（二）古方のうちで張仲景だけは今秤を採用してある。古秤を用ゐて見ると水の場合に殊に少くなるのである。

○杲曰く、六銖を一分となすのは卽ち二錢半で、二十四銖が一兩となる。古代の三兩が今の一兩で、二兩が今の六錢半に當るのである。

○時珍曰く、蠶が初めて吐いた絲を忽といふ。十忽を絲といひ、十絲を氂といひ、四氂を絫といふ。絫は壘と發音する。十氂を分といひ、四絫を字といふ。

（一）複トハ重トイフコト。今ハ五錢ヲ一兩トスレドモ、古ハ十錢ヲ一兩トシタモノナレバ、古ノ一兩ハ今ノ二兩ノ重サニ當ルナリ。古秤トハ劉宋ノ秤、今秤ハ唐朝ノ秤ヲ云フ。

（二）漢ノ張仲景何ゾ唐代ノ秤ヲ用キルノ理アラン事實相違ノ誤ト云フベシ張仲景

ノ藥方ハ古代ノ藥秤ヲ用ヰシコト狩谷掖齋本朝度量考ニ詳ナリ。

字は二分半である。十黍を銖といふ、四分である。四字を錢といふ、十分である。六銖を一分といふ。分を去聲（ブ）に發音する、二銖半である。四分を兩といふ、兩は二十四銖である。八兩を錙といひ、二錙を斤といひ、二十四兩を鎰といふ、鎰は一斤半であつて官秤（明朝の制）の十二兩に相當する。三十斤を鈞といひ、四鈞を石といふ、石は百二十斤である。方の中に少許といふ用語があるが、それは『スコシバカリ』極めて少量といふことである。現在と古代とでは秤の制が異つて居るので、古代に一兩といふのは現在の一錢を用ゐればよいのである。

今の方家の等分といふ用語は分、兩の分をいふのではなく、諸藥の斤量を各〻同量にするをいふので、多くは丸藥、散藥に用ゐられるのである。

丸、散藥に刀圭といふのは方寸の匕の十分一で梧桐の子の大さに相當する。方寸匕とは正しく一寸四方に作つた匕で、散藥を抄つて散のこぼれおちない程度をいふのであつて、五匕の量は卽ち今の五銖錢の邊の五字なるもので抄つて散の落ちない程度である。一撮とは四刀圭である（匕は卽ち匙である）。

藥を升、合で分つのは藥に虚實、輕重があつて斤、兩で量り得ぬものがある。その場合は升を用ゐて均平にする。十撮を一勺とし、十勺を一合とし、十合を一升とする。升の寸方は上徑一寸、下徑六分、深さ八分である。散藥を入れて量るには、內れてから上から抑へ均してはならぬ。正しく置き微動させて平にするのである。

○○時珍曰く、古代の一升は今の二合半である。量の起算は圭であつて、四圭を撮とし、十撮を勺とし、十勺を合とし、十合を升とし、十升を斗とし、五斗を斛といひ、二斛を石といふ。

凡そ湯、酒、膏藥に㕮咀といふことがある。それは分量を秤り畢り、之を擣いて大豆の大さとし、吹いて細末を去るのであつて、藥には碎け易いものと碎け難いもの、末の多いものと末の少いものとあるが、それを細切すること㕮咀（一口で咬み碎く）のやうにするのである。

恭曰く、㕮咀とは商量斟酌することである。

宗奭曰く、㕮咀には含味の意味がある。人の口齒を以て物を咀嚼するやうに、

物を碎き破つても塵にせずに保つのであつて、古方に多く㕮咀とあるはこの意味である。

○杲曰く、㕮咀は古制であつて、古代には鐵刃がなかつたから口で咬細し、麻豆の大さにしてこれを煎じたのである。現今の人の刀を以て剉細すると同樣である。

凡そ丸藥の場合の標準に、細麻の如しといふのは胡麻のことで、胡麻の如く扁くなくても宜しいが餘り大小があつてはならぬ。黍粟も同樣である。大麻子の如しといふのは細麻三箇に相當し、胡豆の如しは今の(三)青斑豆のことで二大麻に相當し、小豆の如しは今の赤小豆で三大麻に相當し、大豆の如しは小豆二箇に相當し、梧子の如しは大豆二箇に相當し、(四)彈丸及び雞子黃の如しといふのは梧子四十に相當する。

○宗奭曰く、現今の人が古方を用ゐて一向效果が見えぬのは何故かといふに、古人の用意を知らぬからである。仲景の如きは、胸痺の心中痞堅や逆氣で心を搶くものを治するに用ゐた治中湯は、人參、朮、乾薑、甘草の四物共に十二兩を水八升で煮て三升を取り、一升づつ一日三回に服させ反應のあるを以て度と

(三)青斑豆ハ豌豆ノコト。

(四)彈丸ハ彈子弓ニ用ユル土製又ハ金屬製ノ圓丸。雞子黃ハ卵黃。

(五)楊梅ハヤマモモ。

(六)廣韻ニ穰ハ禾莖也トアリ。

なしたので、或は丸藥にし雞子黄大にして用ゐてもいづれも奇效がある。今の人は一丸(五)楊梅ほどのものを服ませて、それで病が去らなければ、これは藥に效力がなかつたのだといふ。しかしそれは藥の罪ではなくて藥を用ゐるものの罪なのである。

凡そ方に巴豆若干箇とあるのは、粒に大小はあるが、心皮を去つて秤り一分が十六箇に當る。附子、烏頭若干箇とあるは、皮を去つたもの半兩が一箇に當る。枳實若干箇は(六)穰を去つたもの一分が二箇に當る。橘皮一分は三枚に相當し、棗には大小あるが三箇が一兩に相當し、乾薑一累とは一兩を以て正確とするのである。

凡そ方に半夏一升といふは、洗ひ去つたものを秤つて五兩あるのが正確である。蜀椒一升は三兩あるが正確、呉茱萸一升は五兩が正しく、兎絲子一升は九兩が正しく、菴藺子一升は四兩が正しく、蛇牀子一升は三兩半が正しく、地膚子一升は四兩が正しく、その子に各〻虚實、輕重があつて正確には秤れぬものは升で平に量つたのを正確とする。

凡そ方に桂一尺を用うとあるは皮を削り去つて重さ半兩のものが正しく、甘草一

尺は二兩が正しく、茉草一束といふ場合には三兩を正しとし、一把といへば二兩を正しとする。

凡そ方に蜜一斤といへば七合あり、猪膏一斤といへば一升二合あるものである。

凡そ丸、散藥には先づ切細したものを暴燥してからこれを擣く。各藥物毎に別に擣くものもあり、合せて擣くものもあり、それぞれ方の示す處に隨ふ。潤濕の藥、天門冬、地黃などの如きものは皆先づ分兩を增して切り暴し、單に一物のみを擣き碎いて更に暴す、その間雨天に逢つた場合には微火で烘り十分乾燥してから冷し、これを擣くのである。

○○時珍曰く、凡そ草木の諸藥や滋補の藥はいづれも鐵器を忌む。それは金の性は木の生發の氣に尅し、肝、腎に傷みを受けるからである。銅刀、竹刀を用ゐて修治すればよい。また銅器を忌むものもあるからそれはやはり適當に銅を避けねばならぬ。丸、散共に靑石(七)碾、石の挽碓、石の搗臼等を用うるがよい。

砂石質の碎け易いものは良くない。

凡そ丸、散を篩ふには重密絹を用ゐる。各〻篩ひ畢らば更に臼の中で合せて數百

(七) 碾ハ藥研。

（八）徐之才、南北朝齊國ノ人、字士茂、十三ニシテ召サレテ大學士トナリ、禮易ニ通ジ醫術ヲ善クス。

回擣き、色と理と全く和同すればそれでよい。巴豆、杏仁、胡麻などの膏膩のある諸藥はいづれも黄になるまで熬つて膏のやうになるまで擣合せ、指で撚（發音は莫結の反）いて見てこまかになつたとき、ソロソロと散中に入れ合せて研り擣く。散が完全に混合するやうに輕い疎い絹で篩つて見て、再び合せてむらなく擣くのである。

凡そ藥湯を煮るには微火で少に沸る程度にせねばならぬ。使用する水は方の示す處に隨ひ、大略二十兩の藥に對して水一斗を用ゐ煮て四升までにすることが標準である。しかし利湯は生なることを要するから、水を少く用ゐて藥汁を多量に取り、補湯は熟せるものを要するから水を多く用ゐて藥汁を少量に取る。水のみで多少を計つてはならない。汁を取るには新布を用ゐ、兩人で尺木を以てこれを絞り、澄してかすの濁を去り、紙を以て密蔽して置く。藥湯を溫むるに鐵器を用ゐてはならぬ。湯を服する場合には少し沸す位がよい。熱ければ下り易く、冷ければ嘔き出し易い。

（八）之才曰く、湯中に酒を用ゐるには、熟した時を見計つて飲下すがよい。

時珍曰く、陶氏がここにいふのは古方なのである。現今少量の湯劑には、一兩毎に水一甌を用ゐるのが標準である。多ければ加へ少ければ減ずる。もし劑多

官尙書令、西陽郡王、司徒公錄尙書事ヲ贈ラル。諡シテ文明ト曰フ。藥對ヲ撰ス。

くして水少ければ藥味が出ず、剤少くして水多ければ藥力が煎耗するからである。凡そ藥を煎するにはいづれも銅鐵器を忌む。銀器、瓦鑵を用ゐねばならぬので、これが取扱には、よく洗ひ淨め封を固くし、小心な者に取扱はすやうに注意せねばならぬ。また火加減を計ることも重要なことで、强過ぎ弱過ぎてはならぬ。火は木炭か蘆、葦を用ゐるが最よい。使用する水は汲みたての甘味のある位のものでなければならず、流水、井水、沸湯等それぞれ方に依るので、詳しくは水部に述べてある。また發汗藥の場合には必ず强い火を用ゐて熱いまま服み、攻下藥も强火で煎熟したのを服下し、大黃芒硝ある藥は再煎して溫なのを服み、補中藥はトロ火で溫めて服むがよく、陰寒、急病はまた强火で急に煎じて服むがよく、又陰寒や煩燥や暑中の伏陰が內に在るものには水中に沈めて冷にして服むがよい。

凡そ藥を酒に漬けるには皆細かに切つて生絹の袋に盛り、酒に入れて密封して置き、日數は寒暑に隨ひ漉して滓を出すのである。滓はまた暴燥し微し搗いて更に漬けてもよし、散にして服んでもよいのである。

(九)建中、腎瀝ハ處方名ナリ。

時珍曰く、別に酒に釀すものもあり、或は藥を以て汁を煮て飯に和し、或は藥袋に入れて酒の中に置き、或は藥物を煮て飯に和して同じく釀すものもあり、それぞれ方の法則に隨ふのである。又酒で煮るものもあるが、それは藥を生絹の袋に入れ壜に入れて密封し、それを大鍋の中に入れて水で一日間煮沸した後、七日の間土中に埋めて火毒を出して飲む。

凡そ(九)建中、腎瀝の諸補湯は滓を二貼分を一つに合せ、水を加へて煮竭して之を飲む。これも亦一劑に匹敵するものである。いづれも先に暴燥するのである。

陳藏器曰く、凡そ湯中に麝香、牛黃、犀角、羚羊角、蒲黃、丹砂、芒消、阿膠などを用ゐるには、粉の如く細末にし、用うるに方り湯中に入れ攪き和ぜて服むのである。

凡そ膏を合すには初め苦酒(醋也)に漬けて浸み徹らせる。汁の多くを用ゐない。密覆して洩れないやうにする。晬時といふのは時の一週卽ち一晝夜をいふので、今日の朝から明日の朝迄をいふのである。また一夜だけに止むるものもある。膏を煮る場合には三度火にかけ三度休め、折々熱勢を洩して藥味を存分に出させるやうに

せねばならぬ。火にかけたときはよく掻廻しながら沸騰させ、最後にこれを下して沸が静になるまで掻廻して止める。中に薤白を入れてあるときはその両端が黄色に焦る位を頃合とし、白芷、附子があるときは少し黄色になつたときを程度とする。それを新布で絞つて滓を去るのであるが、滓も酒で煮て飲んでよく、膏の滓を病所に塗擦してもよい。膏中に雄黄、朱砂、麝香などを入れるときは皆別に擣いて麪の如くし、絞つた膏の中に投入して下に沈んで凝聚せぬやうに手速く攪拌する。水銀、胡粉を膏中に入れるときは研つて消散させるのである。

時珍曰く、凡そ膏を熬つて癰疽、風濕の諸病に貼けるには、先づ薬を油中に三日間浸してから煎じ、薬の枯れるまで煎じたとき絹濾にして雑物を除き、熱煎して黄丹、或は胡粉、或は密陀僧を入れ、三度火にかけ三度休め、水の上に落すとその滴が球になつて散らぬまでに煎じてから別の器に移し、三日間水に浸して火毒を去つてから用ゐるのである。また松脂を用ゐる場合には、延けば絲のやうになるまで煎じてから水に入れて数百回まで抜離し引離しする。いづれも特に火加減に深く注意して強過ぎたり弱過ぎたりせぬやうにせねばならぬ。

また朱砂、雄黄、龍腦、麝香、血竭、乳香、沒藥等の材料を含ませる場合には、いづれも膏が仕上る頃を待つてこれを投入し、黄丹、胡粉、密陀僧はいづれも水飛して瓦で炒つて用ゐ、松脂は數回錬つて用ゐるがよい。

凡そ丸藥中に蠟を用ゐるには、皆熔して少量の蜜の中に投じ攪き調へて藥と和するのである。

○杲曰く、丸藥に蠟を用ゐるのは、その藥の氣味、勢力をそのままに(一〇)關膈を通過して病に直接作用せしめる爲である。しかるに若し蜜を投じたならば咽を下ると直に散化し易いわけで、完全に臟中へ到達する筈はあるまい。もし毒藥でも含んで居たとすれば、爲に却つて害がある。蠟を用ゐる本意ではない。

凡そ蜜を用ゐるには皆先づ大に煎じてその沫を掠め去り色を微黄色ならしめる。かくすれば丸藥は久しきを經ても壞れない。

(一一)雷斅曰く、凡そ蜜を錬るには一斤毎に十二兩半までにするのが適度である。火には度度かけるやうにし火を少くせねばならぬ。火力が過ぎれば用を爲さなくなるのである。丸藥を調合するにも蜜を用うべきものには蜜のみを用ゐ、飴

(一〇)關膈ハ横隔膜ノ部位ヲ云フ。

(一一)雷斅、南宋人、內究守國安正公ト稱ス。世ニ之ヲ雷公ト謂フ。炮炙論三卷及乾寧記ヲ著ス、又本草集撰

ノ著アリ。



を用うべきものには飴のみを用ゐ、糖を用うべきものには糖のみを用ゐるのである。交ぜ用ゐてはならぬ。交ぜ用ゐれば下痢することがあるからである。

(一)素問至眞要大論ノ說。

# 采藥分六氣歳物

(一)岐伯曰く、厥陰の司天は風化を爲し、在泉は酸化を爲し、淸毒を生ぜぬ。少陰の司天は熱化を爲し、在泉は苦化を爲し、寒毒を生ぜぬ。大陰の司天は濕化を爲し、在泉は甘化を爲し、燥毒を生ぜぬ。少陽の司天は火化を爲し、在泉は苦化を爲し、寒毒を生ぜぬ。陽明の司天は燥化を爲し、在泉は辛化を爲し、濕毒を生ぜぬ。太陽の司天は寒化を爲し、在泉は鹹化を爲し、熱毒を生ぜぬ。病を治するには必ず以上の天地の氣の相關に因る六化の理を明にして、五味の生ずる所以と、それが五臟に對する關係の如何に依つて、それぞれ治法を分たねばならぬ。乃ち五臟の盈虛がそもそも病發生の端緒といふべきものであつて、その病が主として天に本く系統のものならば天の氣の盈虛、地に本く系統のものならば地の氣の盈虛が原因となつて居る。故によく愼重にして、その氣の關係と、適否に對する注意を正確ならしむれば、病機を視誤る失敗はなく、司歳がその用ゐんとする藥物に完備してさへ居れば、藥效が病に的中せぬといふことはないのである。歳物は天地の氣の專精なるもので

あるが、司歳に非ざるものは氣が散ずるから、その質は同じくとも内容たる力の差等を異にする。氣味には厚あり薄あり、性用には燥あり靜あり、隨つて治保に多少があり、力化に淺深がある。上が下に淫するには勝ちたる方を平にし、外が内に淫するには勝ちたる方を治するのである。

(一)王冰曰く、天に因つて化するものを天氣となし、地に因つて化するものを地氣となすのであつて、五毒は皆五行の氣の爲す所なるが、故に勝つ所のものが生ぜない。ただ司天、在泉の生ずる所のものはその味正しいのである。故に藥を取扱ふものは、司歳の氣の收まるところの藥物だけを專ら用ゐるやうにして病の主たるものに的中せしむるやうにし、遺漏なきやうに心懸けねばならぬ。五運が十分餘あればその專精の氣が藥物を肥濃にし、使用の結果が正しい氣味に當る。不足なれば專精ならず、氣が散じて物が純でなく、形質は同じくとも效力、作用は異るのである。故に天氣下に淫し地氣內に淫するものは、皆その勝つ所を以てこれを平治するのであつて、風は濕に勝ち、酸は甘に勝つの類の如きがそれである。

(一)王冰ハ啓玄子ト號ス、唐ノ寶應中太僕令トナリ、篤ク醫方ヲ好ミ精ク素難ニ通ズ。素問八十一篇ヲ次注ス。

# 七方

岐伯曰く、氣に多少あり、形に盛衰あり、治に緩急あり、方に大小がある。又曰く、病に遠近あり、證に中外あり、治に輕重があつて、近きものには奇にし遠きものには偶にする、發汗させるには奇を用ゐず、下通させるには偶を用ゐない。上を補ひ上を治するには緩を原則とし、下を補ひ下を治するには急を原則とする。近きには偶から奇にして服藥は小量を原則とし、遠きには奇から偶にして服藥は大量を原則とする。大量のものは數を少くし、小量のものは數を多くし、多きは九にし少きは一にする。奇にして去らなければ偶にし、偶にしても去らぬときは反佐の方法を用ゐる、所謂寒、熱、溫、凉をその病に逆用するのである。

○○王冰曰く、臟の位置に高下があり、腑の氣に遠近があり、病證に表裏があり、藥用に輕重がある。單方が奇であり、複方は偶である　心、肺は近にあり、肝、腎は遠にあり、脾、胃は中にある。腸、腫、胞、膽にもまた遠近がある。これ

に對する醫者の識見さへ高遠であれば自由に事に當つて妥當を得るのである。方が奇にして分兩の偶なるあり、方が偶にして分兩の奇なるあり。近にして偶を用うべき場合は數を多くして服し、遠にして奇を用うべき場合は數を少くして服する。肺には九を服し、心には七を服し、脾には五を服し、肝には三を服し、腎には一を服するのが常制となつて居る。方はその重きものよりも寧ろ輕きものを、毒あるものよりは寧ろ毒なき穩なものを、量の大きいものよりは小いものを取る。かくて奇方で去らぬときは偶方を主とし、偶方で去らぬときは則ち反佐に依つて病の氣と同じものの應用を試る。一體微小の熱はこれを折くに寒を以てし、微小の冷はこれを消するに熱を以てするのであるが、しかし寒、熱の極端に甚しい場合には反對の氣とは相扞格するもので、聲が同じくなければ調子が合はぬと同樣に、氣も同じくなければ相合はぬのだから、この場合はその佐を逆にし、その氣を同じくして、寒に對しては寒、熱に對しては熱を用ゐ、力を参合して引出すやうにする。乃ちその始は同じくしてその結果を異ならしめるのである。

(一)劉完素字守眞、河間ノ人、因テ河間居士ト號ス。金代ノ名醫ナリ。素問原機原病式、運氣要旨論、素問藥證等ノ著アリ。

○○時珍曰く、逆なるものは正治し、從なるものは反治するので、反佐は卽ち從の治である。所謂熱が下に在つて上に寒邪がある爲に拒格する場合は、寒藥の中へ佐として熱藥を入れる。藥が膈を通過してから後、熱氣が既に散じ寒性が隨つて發するやうにし、寒が下に在つて上に浮火がある爲に拒格する場合は、熱藥の中へ寒藥を入れる。藥が膈を通過してから後、寒氣が既に消し熱性が隨つて發するのである。これが寒因熱用、熱因寒用の妙であつて、溫、涼にもこれに倣ふのである。

(一)完素曰く、流變は病に在り、病を主るは方に在り、方を制するは人に在る。方には大、小、緩、急、奇、偶、複の七通りあるが、方を調制するの基礎たるものは氣と味とであつて、寒、熱、溫、冷の四氣は天に生じ、酸、苦、辛、鹹、甘、淡の六味は地より成立し、有形が味となり、無形が氣となつたもので、氣は陽であり味は陰である。また味のうちでも辛、甘は發散するから陽であり、酸、苦は涌泄するから陰である、鹹味は涌泄するから陰であり、淡味は滲泄するから陽である。或は收、或は散、或は緩、或は急、或は燥、或は潤、或は輭、

或は堅、それぞれ臟腑の證徵に隨つて藥の品味を施さねばならぬ。是に於て始めて七方の制なるものが分れて來るのである。かかる次第で奇、偶、複といふは三種の方の形式であり、大、小、緩、急は方調製の四箇の法則である。故に治に緩急あり、方に大小ありといふのである。

**大方**　岐伯曰く、君一、臣二、佐九は制の大なるものであり、君一、臣三、佐五は制の中なるものであり、君一、臣二は制の小なるものである。又曰く、遠なれば奇、偶の制共にその服を大にし、近なれば奇、偶の制共にその服を小にし、大なるときは數を少くし、小なるときは數を多くし、多くするときは九に、少きときは二にするのである。

完素曰く、身の表は遠であり裏は近である。大、小は奇、偶を制するの法である。例へば小承氣湯、調胃承氣湯は奇の小方、大承氣湯、抵當湯は奇の大方である如き、所謂その裏を攻るに用ゐるのである。桂枝、麻黃は偶の小方、葛根、青龍は偶の大方である如き、所謂その表を發するに用ゐるのである。故に汗には奇を以てせず、下には偶を以てせずといふのである。

張從正曰く、大方に二ある。君一、臣三、佐九の大方がある。これは病の證徵が幾種かを兼ねて居て系統が一でなく、一二味の藥品では治すべくもないものにこの方がよい。また分兩を大にして頓服する大方がある。これは肝、腎や下部の遠き箇所にある病によいのである。王太僕は心、肺を以て近となし、腎、肝を遠となし、脾、胃を中となした。劉河間はまた身の表を遠となし、身の裏を近となしたのである。しかし予を以て之を觀れば、身の半より以上はその氣三にして天の分、身の半より以下はその氣三にして地の分、胃を中心とした部分中脘が人の分であると思ふのである。

**小方**　從正曰く、小方に二ある。君一、臣二の小方があつて、これは病に他の證徵なく系統が單一で、一二味の藥品で治し得るものによい。また分量を少くして度度服する小方がある、これは心、肺や上部の病によい。徐徐に少しづつ呷つて服ませるものがこれである。

完素曰く、肝、腎は位置が遠いから數多くすればその氣が緩にして速く下に達し得ない。必ず大劑にして數を少くし、下走を迅速ならしむるやうにする。心、

肺は位置が近いから數多くすればその氣が急に下走して上に升發し得ない。必ず小劑にして數を多くし、散じて上行し易からしむるやうにするのである。王氏の所謂肺は九を服し、心は七を服し、脾は五を服し、肝は三を服し、腎は一を服すといふのは乃ち五臟の生成の數なのである。

**緩方**　岐伯曰く、上を補ひ上を治するの制は緩を以てし、下を補ひ下を治するの制は急を以てする。急なるには氣味を厚くし、緩なるには氣味を薄くする。その病所に行くまで遠いものに對し中道の氣味のものを以てすれば、途中で效力が吸收されて行つて了ふのである。その制の適度を越え誤らぬやうにせねばならぬ。

王冰曰く、假令ば病が腎に在つて心氣が不足せる場合の服藥は、急に通過して病所に達するやうにせねばならぬ。その氣味を心に吸收させてはならぬ。腎の藥が心を凌げば心はまたますます衰へるものである。その他の上下、遠近に對する例も同樣である。

完素曰く、聖人は上を治するには下を犯さず、下を治するには上を犯さず、

中を治するには上下倶に犯さない。故に過無きを誅伐するを命けて大惑といふといふのである。

○○好古曰く、上を治すれば必ず下を妨げ、表を治すれば必ず裏に達ふ。黄芩を用ゐて肺を治すれば必ず脾を妨げ、蓯蓉を用ゐて腎を治すれば必ず心を妨げ、乾薑を服して中を治すれば必ず上に僭し、附子を服して火を補へば必ず水を涸すものである。

○○從正曰く、緩方に五ある。甘を以て緩めるの方、これに甘草、糖、蜜の類を用ゐるので、病が胸膈に在るものに對してその留戀を取るのである。丸藥にして緩めるの方、これは湯、散に比すれば效力の發生が遲緩なのである。品數を多く用ゐて緩めるの方、これは藥品の數が多ければその力が互に牽制して各藥性を肆に働かせぬのである。無毒の藥を用ゐて病を治するの方、これは毒の無い藥物は藥性が純にして功力が遲漫だからである。氣、味倶に薄くして緩めるの方、これは氣、味が薄ければ上を補ひ上を治するに長があつて、下に行く頃は藥力が已に衰へるものだからである。

**急方**　完素曰く、味厚きものは陰であり、味薄きものは陰中の陽である。故に味厚ければ下泄し、味薄ければ氣を通ずる。氣厚きものは陽であり、氣薄きものは陽中の陰である。故に氣厚ければ發熱し、氣薄ければ發汗するものである。

好古曰く、主を治するには緩なるがよい。緩なればその本を治するのである。客を治するには急なるがよい。急なればその標を治するのである。表、裏、汗、下いづれも緩にすべきものと急にすべきものとがある。

從正曰く、急方に四ある。急病、急攻の急方、これは中風、關格の病に用ふる方である。湯、散、蕩滌の急方、これは咽を下つて散じ易く反應の速なる方である。毒藥の急方、これは毒性の能く上涌、下泄を以て病勢を奪ふの方である。氣、味俱に厚きの急方、これは氣、味俱に厚きは直に下に趣いて力が衰へぬ方である。

**奇方**　王冰曰く、單方である。

從正曰く、奇方に二ある。單獨に一物を用うる奇方、これは病が上に在つて近いものに宜いのである。藥を陽の數一、三、五、七、九に合す奇方、これは

下すに宜しい、汗に用ゐてはならない。
完素曰く、假令は小承氣は奇の小方、大承氣、抵當湯は奇の大方である如き、所謂その攻下の效力を用うるのである。桂枝、麻黄は偶の小方、葛根、青龍は偶の大方で、所謂その發散の效力を用うるのである。

**偶方** 從正曰く、偶方に三ある。兩味相配するの偶方と、古の異なる二方を合せ用うるの偶方、これは古は複方といつたもので、この二方は病の下に在つて遠きものに宜い。藥を陰の數二、四、六、八、十に合す偶方、これは汗に宜く、下には宜くない。王太僕は、汗藥は偶を以てしなければ氣が外に發するに足らず、下藥は奇を以てしなければ藥毒が攻めて過ぎる場合があるといつて居るが、その意味は、下すことはもと行ひ易いものだから、單行で力を孤にし、效果も微にする。汗は出難いものであるから、併せ用ゐて力を齊うし、效果を大にするといふことであらう。然るに仲景が方を制するに、桂枝は汗藥なり、反つて五味を以て奇となす、大承氣は下藥なり、反つて四味を以て偶となすといふのは何故であらうか。事に臨んで宜きを制するには、また增減が必要だといふ

意味でもあらうか。

**複方**　岐伯曰く、奇方を用ゐて病の去らぬときは偶方を試みる。これを重方といふのである。

好古曰く、奇方で病の去らぬときは同時に偶方を用ゐ、偶方で病の去らぬときは同時に奇方を用ゐる。これを複方といふのであつて、複は再であり重である。所謂十たび補つて一たび泄し、數度泄して一たび補ふの意味である。又、傷寒の患者に風の脉があつたり、傷風の患者に寒の脉を認めたり、複雑にして病氣と脉證が一致せぬやうの場合には、この複方を用ゐて病氣の實體を治するを宜しとするのである。

從正曰く、複方に三ある。異れる二方、三方、及び數方を合せて同一患者に行ふの複方、これは桂枝二、越婢一の湯や五積散などの類をいふのである。ある病に對し基本的な方の外に別種の藥を加へるの複方、これは調胃承氣に連翹、薄荷、黄芩、巵子を加へて涼膈散を作るの類をいふのである。各藥の分兩を均齊にするの複方、これは胃風湯の如く各藥を等分にするものの類をいふのであ

る。王太僕は偶を以て複方となして居るが、今現に七方の中に偶もあれば複もあるのだから、それは偶は乃ち二方相合したもの、複は乃ち數方相合したものといふ意味をいふのではあるまいか。

本草綱目第一卷上終

# 本草綱目序例

第一卷　下

# 序例 上

## 十劑

徐之才曰く、藥に宣、通、補、洩、輕、重、澀、滑、燥、濕の十種がある。これは藥の大體であるが、本經にも論ぜられてなく後人にも未だ述べられてない。しかし凡そ藥を用ゐるものは十分に之を研究し、精確なる智識を以て臨むならば遺憾なる過失は生ぜぬであらう。

**宣劑**　之才曰く、宣は壅を去るものである、生薑、橘皮の屬をいふ。

○杲曰く。外部から(一)六淫の氣を感じて內部へ傳へ入らんとするに對し(二)三陰が充實して居てこれを受け入れぬ、爲に胸中に逆し、天分、氣分が窒塞して通じなくなり、或は(三)噦し、或は嘔する。それが所謂壅である。三陰は脾の關係に因るものだから、必ず薑、橘、藿香、半夏の類の破氣藥を以て壅塞を瀉する

(一)六淫ハ六氣ノ不和ヲ云フ。六氣ハ熱、濕、火、燥、寒、風ヲ云フ。
(二)三陰ハ太陰、小陰、厥陰ヲ云フ。
(三)噦ハ吐シテ聲ナ

キヲ云フ、嘔ハ吐シテ聲アルヲ云フ。

(四)風癇ハ癲癇ニ類スル精神病。

(五)痰飲ハ留飲。

(六)寒厥ハ四肢厥冷シ惡寒シテ攣急スルモノ。

のである。

從正曰く、一般人は宣を瀉又は通と心得て居るが、それは十劑の中に別に瀉と通とのあることを知らぬからのことである。

仲景曰く、春病は頭に在る、吐かせるのが大體の通則である。この宣劑といふのは卽ち涌劑のことであつて、經に、高き者は因て之を越す、木鬱なればこれを達すとある。宣とは升らしめ上らしめることであつて、これは君が臣を召すのを宣といふと同樣の意味である。凡そ(四)風癇、中風、胸中の諸實、(五)痰飲、(六)寒結、胸中の熱鬱が上つて下らず、それが久しければ嗽喘、滿脹、水腫の病が生ずる。宣劑でなければ癒し得ないのである。吐の中にも汗があり、涎を引き、涙を追ひ、鼻嚔を出す如き、すべて上行するものは皆吐法に屬するものである。

完素曰く、鬱して散ぜず壅を爲すときは必ず宣してこれを散ずる。痞滿不通の類がこれである。裏を攻むる場合には宣は上であり泄は下である。涌劑といふのは瓜蔕、巵子の屬である。發汗、解表するにも亦同じい。

(七)制ハ臣下ヨリノ奏請ニ對スル皇帝勅許ノ詞ナリ、詔ハ皇帝ヨリ臣民ニ對スル公式ノ詞ナリ。

○○好古曰く、經に五鬱といふことを言つてある。木鬱は之を達し、火鬱は之を發し、土鬱は之を奪ひ、金鬱は之を泄し、水鬱は之を折く、これは皆宣である。主君からの敎旨を傳へることを宣揚といひ、(七)制詔を傳へることを宣朗といひ、君が臣を召すのを宣喚といひ、臣が君命を奉じて上意を宣布するといふなど同じ宣の意味である。

○○時珍曰く、壅は塞であり、宣は布であり、散である。鬱塞の病は升らず降らず傳化して常を失し、或は鬱久しうして病を生じ、或は病久しうして鬱を生ずる。これに對して藥がこれを宣布し敷散するのであつて、流を承け化を宣するといふやうな意味である。獨り涌越だけが宣であるといふのではない。故に氣鬱で有餘の場合には香附、撫芎の屬でこれを開き、不足なる場合には中を補ひ氣を益してこれを運らし、火鬱の微なる場合には山梔、青黛でこれを散じ、甚しき場合には陽を升せ肌を解してこれを發し、濕鬱の微なる場合には蒼朮、白芷の屬でこれを燥し、甚しき場合には風藥でこれに勝ち、痰鬱の微なる場合には南星、橘皮の屬でこれを化し、甚しき場合には瓜蒂、黎蘆の屬でこれを涌し、血

欝の微なる場合には桃仁、紅花でこれを行り、甚しき場合には或は吐かせ或は下してこれを逐ひ、食欝の微なる場合には山査、神麹でこれを消し、甚しき場合には上涌、下痢させてこれを去る、皆宣劑である。

**通劑**　之才曰く、通は滯を去るものである、通草、防已の屬をいふ。

完素曰く、留つて行かざるときは通じてこれを行る。木病で（八）痰澼を起すやうな場合、木通、防已の屬でその内を攻めれば留るものが行くものである。滑石、茯苓、芫花、甘遂、大戟、牽牛の類が通劑である。

從正曰く、通は流通である。前後大小便の通じが無い場合に木通、海金沙、琥珀、大黄の屬を用ふれば通じが付く。（九）痺痛、欝滯、（一〇）經隧の利せぬものもこれを通ぜしむべきである。

時珍曰く、滯は留滯である。濕熱の邪が氣分に留つて痺痛、（一一）癃閉を起すものは、淡味の藥で上は肺氣を助け下は小便を降通させて氣中の滯を洩さねばならぬ。それは木通、猪苓の類を用ゐるのである。濕熱の邪が血分に留つて痺痛、（一二）腫注を起し二便の通ぜぬものは、苦寒の藥で下はその大小便を導き

（八）痰澼ハ留飲ノ別名。
（九）痺ハ痛風ヲ云フ。
（一〇）經隧不利ハ經閉。
（一一）癃ハ淋ニ同シ、癃閉ハ小便不通ヲ云フ。
（一二）腫注ハ腫ノ久シ

ク退カザルモノヲ云フ。

(一三)五穀ハ黍、稷、菽、麥、稻。五菜ハ韮、薤、葵、葱、藿。五果ハ李、杏、棗、桃、栗。五肉ハ雞、羊、牛、馬、豕。
(一四)母ハ木火土金水

通じて血中の滯を洩さねばならぬ。それには防己の類を用ゐるのである。經に、味薄きものは通ずといつてある。故に淡味の藥を通劑といふのである。

**補劑**　○○之才曰く、補とは弱を去ることである。人參、羊肉の屬をいふ。

○杲曰く、人參は甘、溫で能く氣虛を補ひ、羊肉は甘、熱で能く血虛を補ふ。羊肉は形を補ひ人參は氣を補ふもので、凡そ氣味のこの二藥と同じきものは皆補劑である。

○○從正曰く、五臟に對しては各〻補、瀉といふことがある。五味は各〻その臟を補ふものであつて、表虛、裏虛、上虛、下虛、陰虛、陽虛、氣虛、血虛を補ふのである。經に、精不足なるものは之を補ふに味を以てし、形不足なるものは之を補ふに氣を以てすとあり、(一三)五穀、五菜、五果、五肉はいづれも補養の物である。

○○時珍曰く、經に、不足なるものは之を補すとあり、又、虛するときはその(一四)母を補ふとある。生薑の辛は肝を補ひ、炒鹽の鹹は心を補ひ、甘草の甘は脾を補ひ、五味子の酸は肺を補ひ、黃蘗の苦は腎を補ふ。又茯神が心氣を補ひ、生

相生ノ理ニ由リ、木ハ肝ニシテ心火ノ母、心火ハ脾土ノ母ニ當ルトスル類ヲ云フ。

(一五)積トハ氣ノ鬱積シテ痛ヲ起スヲ云フ。

地黄が心血を補ひ、人參が脾氣を補ひ、白芍藥が脾血を補ひ、黄芪が肺氣を補ひ、阿膠が肺血を補ひ、杜仲が腎氣を補ひ、熟地黄が腎血を補ひ、芎藭が肝氣を補ひ、當歸が肝血を補ふ如き類はいづれも補劑である。特に人參、羊肉のみが補劑といふのではない。

**泄劑**　之才曰く、泄とは閉を去ることである、葶藶、大黄の屬をいふ。

杲曰く、葶藶は苦、寒で、氣味倶に厚きこと大黄に劣らず、能く肺中の閉を泄し又大腸を泄す。大黄は走つて守らざるもので、能く血閉、腸、胃の渣穢の物を泄す。一は氣閉を泄して小便の通じをよくし、一は血閉を泄して大便の通じをよくする。凡そこの二藥と同じ效力のものは皆泄劑である。

從正曰く、實するものは之を瀉する。多くの痛は實するが爲であつて、痛は利通するに隨つて減ずるものである。芒消、大黄、牽牛、甘遂、巴豆の屬は皆瀉劑であつて、分娩を促進し、乳の出を催し、(一五)積を磨し、水を逐ひ、經血を破り、氣を泄す、すべて下す作用のものをいふのである。

時珍曰く、閉を去るとあるは實を去るとするが妥當である。經に、實するも

(一六)母子ノ關係ハ(一四)ヲ見ヨ。

(一七)癰瘡ハ稍大ナル腫モノ。
疥瘙ハ皮膚ニ生ズル細カキ皰疹。

(一八)薰ハ藥煙ニ曝スコト。
洗ハ温湯デ洗滌スルコト。
蒸ハ濕布ヲ以テ罨包スルコト。
灸ハ艾灸ヲ用ヰルコ

のは之を瀉す。實するときはその(一六)子を瀉すとあるがこれである。五臟と五味との關係に於てそれぞれ瀉があるのであつて、獨り葶藶、大黄のみとはいはない。肝が實すれば芍藥の酸を以て瀉し、心が實すれば甘草の甘を以て瀉し、脾が實すれば黄連の苦を以て瀉し、肺が實すれば石膏の辛を以て瀉し、腎が實すれば澤瀉の鹹を以て瀉するのがその例である。

**輕劑**　之才曰く、輕は實を去るものである、麻黄、葛根の屬をいふ。

從正曰く、風寒の邪が始めて皮膚に客として現れると頭痛し熱が出る。これは表を解せねばならぬもので、内經に所謂輕にして之を揚ぐといふことである。(一七)癰瘡、疥瘙はいづれも表を解せねばならぬ。それには發汗してこれを泄し、毒を以てこれを薰ずる。これ等は皆輕劑である。凡そ(一八)薰、洗、蒸、灸、熨、烙、刺砭、導引、按摩は皆汗法に屬するものである。

時珍曰く、輕は閉を去るものだとするが妥當である。閉には表閉、裏閉、上閉、下閉があつて、表閉とは風寒が營養狀態を傷めて腠理が密閉するから陽氣が怫鬱して外に出るを得ず、爲に發熱、惡寒、頭痛、脊強等を起すものである。こ

ト。
熨烙ハ温石ノ如キモノヲ用ヰル事。
剌砭ハ鍼治。
導引ハ體操。
按摩ハ摩擦療方。
(一九)昏瞀ハ言ガ擾亂シテ不明ナルヲ云フ。
(二〇)竅ハ食道ヲ指ス。

れには輕揚の劑を用ゐてその汗を發せしめれば表は自ら解する。裏閉とは火熱が鬱抑して津液が行らず、皮膚が乾閉して爲に肌熱、煩熱、頭痛、目腫(一九)昏瞀、瘡瘍の諸病を起すものである。これには輕揚の劑でその肌を解すれば火が自ら散ずる。上閉には二種あつて、一は外寒で內熱が上焦の氣閉を發し、爲に咽喉閉痛の症狀を呈する。これには辛凉の劑で揚散すれば閉が自ら開ける。一は飲食の寒冷で陽氣を抑遏して下に發し、爲に胸膈の痞滿、閉塞の症狀を呈する。これにはその淸を揚げてその濁を抑へれば痞が自ら泰となる。下閉にも二種ある。一は陽氣が陷下し、發して裏急、後重を起し、數〻厠へ行つても通じの無い症狀であつて、これはただその陽を升せれば大便が自ら順調になる。所謂下れるものはこれを擧げるの通則である。一は燥熱が肺を傷め、金氣が憤鬱して(二〇)竅が上に閉ぢ膀胱が下に閉ぢ、小便の利通せぬ症狀を呈する。これには升麻の類で探つて吐かせれば上竅が通じ小便は自ら利通する。所謂病下に在れば之を上に取るの通則である。

**重劑**　之才曰く、重は怯を去るものであつて磁石、鐵粉の屬をいふのである。

（二二）漸トハ緩漫ナル作用ヲ云フ。

（二三）驚癇ハ小兒ノ搐搦。

從正曰く、重とは鎭め墜すの意味である。怯とは氣浮き精神の落付を喪つたやうになり、驚悸して氣が上るものである。これには硃砂、水銀、沈香、黃丹、寒水石の類は皆體の重いものであるから、久病咳嗽で涎が上に流れ出で、體力が極端に衰弱して直接治療に堪へぬものにはこれを用ゐて墜す。經に、重きものは因てこれを減ずとある意味で、その（二二）漸を貴ぶのである。

時珍曰く、重劑に凡そ四ある。驚くときは氣亂れて魂氣が飛揚し精神の落付を喪つたやうになるものと、怒るときは氣逆し肝氣が激烈となつて狂怒するものとある、これにはいづれも鐵粉、雄黃の類でその肝を平調ならしめる。精神が身に付かず些細なことに驚き易く、健忘になり、心が惑亂して少しも落付かぬものがある、これには硃砂、紫石英の類でその心を鎭める。恐怖心が起きて氣が下り、精神、意志が度を失ひ、襲はれたやうに、他人に捕縛されでもするやうな不安を感ずるものがある、これには磁石、沈香の類でその腎を安定させるのである。大抵重劑は浮火を壓して痰涎を墜付けるもので、獨り怯を治するだけのものではない。故に諸風、掉眩及び（二三）驚癇、痰喘の病、吐逆止まざる

もの及び（二三）反胃の病は皆浮火、痰涎が害をなすのである。いづれも重劑でこれを墜さねばならぬ。

**滑劑**　之才曰く、滑は著を去るものであつて、冬葵子、楡白皮の屬をいふのである。

完素曰く、澀するときは氣が著する。これには必ず滑劑でこれを利する。滑は能く竅を養ふて潤利するものである。

從正曰く、大便が燥結するには麻仁、郁李の類がよく、小便が淋瀝するには葵子、滑石の類がよい。兩便が通ぜず兩陰の倶に閉づるものを三焦約と名ける。約は束である。先づ滑劑でその燥を潤養してから治療を加へるのである。

時珍曰く、著とは有形の邪が經絡、臟腑の間に留著することをいふので、大小便の濁滯、痰涎、（二四）胞胎、癰腫の類がそれである。これ等は皆滑藥を用ゐてその留著の物を引去らねばならぬ。此の點では木通、猪苓とが通じを付けて滯を去ることに於て似通つて居るが、事實は同一でない。木通、猪苓は淡味滲瀉する藥物であり濕熱の無形の邪を去るのであるが、葵子、楡皮は甘味にして滑する種類の藥であり濕熱の有形の邪を去るのである。故に前者を滯といひ、後

（二三）反胃ハ慢性嘔吐。

（二四）胞胎ハ妊娠。

者を著といふのである。大便の澀るものには波稜、牽牛の屬、小便の澀るものには車前、楡皮の屬、(二五)精竅の澀るものには黄蘗、葵花の屬、胞胎の澀るものには黄葵子、王不留行の屬、痰涎を引いて小便から排出するには半夏、茯苓の屬、瘡毒を引いて小便から排出するには五葉藤、萱草根の屬、いづれも皆滑劑である。半夏、南星はいづれも辛く涎滑にして濕氣を洩し大便を通ずる。蓋し辛は能く潤し能く氣を走らせて化液するのである。これを燥く物の如く考へるのは謬つて居る。濕が去るから土は燥くやうなもので、この二藥の性そのものは燥ではないのである。

**澀劑**　之才曰く、澀は脫を去るものであつて、牡蠣、龍骨の屬をいふのである。完素曰く、滑するときは氣が脫する。腸が開いて排泄が停らぬものや、屎尿を遺失する類で、これには必ず澀劑を用ゐて收斂するのである。(二六)從正曰く、寢汗の止まぬには麻黄根、防風を以て澀し、滑泄して已まぬには豆蔻、枯礬、木賊、罌粟殼を以て澀し、喘嗽の上奔するものは烏梅、訶子を以て澀する。凡そ酸味は澀に同じく、澀卽ち收斂の意味である。しかし、この種の

(二五)精竅ハ精液ノ通路。

(二六)張從正字子和、戴人ト號ス。金ノ大定、明昌ノ間醫ヲ以テ世ニ聞ユ、尤モ汗吐下ノ法ニ精通ス。著書儒門事親アリ。

（二七）崩中ハ子宮出血。

（二八）帥ハ支配スルモノ。

（二九）鬼ハ死人幽靈ヲ云フ。

（三〇）淫勝トハ不和ニ

ものは皆先づその本を攻めて而る後に收斂の作用を施すやうにせねばならぬ。

時珍曰く、脫とは氣脫、血脫、精脫、神脫などで、脫すれば散じて收らなくなる、故に酸、澀、溫、平の藥を用ゐてその耗散を斂めるのである。汗が出て陽を亡ふもの、精が滑して禁ぜぬもの、泄痢の止まぬもの、大便の固らぬもの、小便の自ら遺失するもの、久しく嗽して津を亡ふもの等は氣脫であり、下血已まざるもの（二七）崩中の劇く下るもの、その他多くの血を亡ふものは皆血脫であつて、これ等に對する澀藥は牡蠣、龍骨、海螵蛸、五倍子、五味子、烏梅、榴皮、訶黎勒、罌粟殼、蓮房、椶灰、赤石脂、麻黃根の類である。氣脫にはこれ等の澀藥に兼るに氣藥を以てし、血脫には兼るに血藥と氣藥とを以てする。氣は血の（二八）帥だからである。脫陽の者は（二九）鬼を見、脫陰の者は目が盲る。この二者は神脫であつて、これは澀藥の力で收斂するわけには行かぬものである。

**燥劑**　之才曰く、燥は濕を去るものであつて、桑白皮、赤小豆の屬をいふのである。

完素曰く、濕氣が（三〇）淫勝して腫滿し脾濕するものは、必ず燥劑でその濕を

シテ適度ナルヲ云フ。

（三二）經ハ經絡ヲ云フ。神經系統、血管系統ヲ云フ。

除く、それには桑皮の屬を用ゐるものである。濕上に勝てば苦を以てこれを吐かしめ、淡を以てこれを滲ましむといふのはこのことである。

從正曰く、積寒、久冷の爲に腥穢のものを吐き、透徹つて冷い水のやうなものを吐下すのは大寒の病である。これは薑、附、胡椒などで燥せねばならぬ。若し又濕氣を病むときは白朮、陳皮、木香、蒼朮などでその濕氣を除く、これも燥劑である。黃連、黃蘗、梔子、大黃はその味が皆苦い。苦きものは火に屬しいづれも能く濕を燥す。これは內經の示す原則である。薑、附のやうなものだけが燥劑なりといふわけではない。

好古曰く、濕は上に在ることも、中にあることも、下にあることも、（三二）經にあることも、皮にあることも、裏にあることもある。

時珍曰く、濕には外に感ずるものと內に傷めるものとあつて、外感の濕とは雨露、嵐霧、地氣、水濕が皮肉、筋骨、經絡の間を襲ふもの、內傷の濕とは水の飲過ぎ、酒や食物の爲め、或は脾の弱き爲め、腎の強き爲めなどに原因するものがあり、固より一樣に言ふわけには行かない。此の種の患者には風藥で濕に

勝たせる場合と、燥藥で濕を除く場合と、淡藥で濕を滲ましむる場合と、小便の通じをよくして濕を導き出す場合と、大便の通じをよくして濕を逐ふ場合と、痰涎を吐かせて濕を切去る場合とあり、濕に熱の伴ふ場合には苦寒の劑でこれを燥し、濕に寒の伴ふ場合には辛熱の劑でこれを燥す。ただ桑皮や小豆のみを燥劑といふのではない。濕が去れば燥く、故に燥といふのである。

**潤劑**　之才曰く、濕は枯を去るものであつて白石英、紫石英の屬をいふのである。

從正曰く、濕は潤濕である。滑に似た點もあるがやや同じくない。經に、辛は以て之を潤すとある。辛は能く氣を走らしめ能く化液するものであつて(三二)鹽消は味は鹹いけれども眞陰の水に屬するので誠に枯を濡すの上藥である。人間には枯涸、(三三)皴揭の病があるが、それはただ金化するばかりでなく、蓋し火がこれに乘ずるのであるから、濕劑でなければ治癒することを得ないのである。

完素曰く、津が耗して枯の狀態になるので、五臟が痿弱して營衛が涸流する。これに對しては必ず濕劑を以て潤すのである。

好古曰く、氣を減じて枯るものもあり、血を減じて枯るものもある。

(三二)鹽消ハ朴消ヲ曰フ。

(三三)皴ハ皮坼、アカギレノコトナレドモ、皴揭ト熟スレバ皮ノタルム事ナルベシ。

(三四)揭ハ皮ノタルムコト。
(三五)消トハ水分ヲ多量ニ消費スルコト。
(三六)體トハ主義ノコト。

○○時珍曰く、濕劑と書くのは潤劑と書く方が妥當である。枯とは燥のことである。陽明、燥金の自然界の作用は秋の本來の發現である。風熱が激甚なれば血液が枯涸して燥病となる。上が燥けば渇し、下が燥けば結し、筋が燥けば强ばり、皮が燥けば(三四)揭し、肉が燥けば裂け、骨が燥けば枯れ、肺が燥けば痿し、腎が燥けば(三五)消する。潤劑としては麻仁、阿膠等膏潤の屬である。血を養ふには當歸、地黃の屬があり、津を生ずるには麥門冬、栝樓根の屬があり、精を益すには蓯蓉、枸杞の屬がある。若しただ石英が潤藥などいふならばそれは偏した意見である。古代の人は石を服するのを滋補の爲としたから、かかる意見が傳へられたものであらう。

劉完素曰く、制方の(三六)體たるや、七方、十劑の效力作用を完全に現さうとするには、必ず氣、味に原則を置かねばならぬ。寒、熱、溫、涼の四氣は天に依つて發生し、酸、苦、辛、鹹、甘、淡の六味は地に依つて成立するものである。それ故に有形を味と爲し、無形を氣と爲す。氣は陽であり、味は陰であつて、陽氣は上竅から出で、陰味は下竅から出る。氣が化すれば精力が生じ、味が化すれば形體を維持す

るのである。故に地に產するものは形を養ふのであるが、その形の不足なる場合は之を溫むるに氣を以てし、天に產するものは精を養ふのであるが、その精の不足なる場合は之を補ふに味を以てする。辛、甘の發散は陽である。酸、苦の涌泄は陰である。鹹味の涌泄は陰であり、淡味の滲泄は陽である。辛の散じ、酸の收し、甘の緩うし、苦の堅うし、鹹の(三七)耎うする。これを各五臟の病に對應せしめて藥性の品味を調節せねばならぬ。故に方に七あり、劑に十あるわけで、方七ならざれば以て方の變を盡すに足らず、劑十ならざれば以て劑の用を盡すに足らぬ。方にして病證に對應せぬものは、それは方ではない。劑にして病患を除き去らぬものは、それは劑ではないのである。この故に太古の先覺者が繩墨を設けて曲直を正し、後世斯道の達人が規矩を出して方圓を整へられたのである。夫れ物には各〻働きを爲すべき素質があるのだから、その最適の特長を見定めてこれを用ゐ、これを變に應じて適當に應用しその作用を發揮せしめて藥品藥劑を用うるならば、その效力とその應用の範圍は無限でなければならぬ筈だ。さればその性に因つて用を爲す者もあり、その勝つ所に因つて制を爲すものもあり、氣同うして相求むるものもあり、氣(三八)相

(三七)耎ハ字書ニ柔ナリ、弱ナリトアリ。

(三八)相剋スルハ相衝

突スルヲ曰フ。
(三九)竄ハ氣味ノ透達スルコト。
(四〇)瞖ハ目ノカスミ。
(四一)弩牙ハオホユミノツルカケ。
(四二)機ハ仕懸。
(四三)恍惚トハ知覺眞切ナラザルヲ云フ。

剋して相制するものあり、氣餘有つて足らざるを補ふものあり、氣相感ずるものをば意を以て使ふものあり、質同うして性異るものあり、名異にして實同じきものもある。故に蛇の性は(三九)上竄するもので藥を導き、蟬の性は外殼を脫するもので(四〇)瞖を退ける。虻は血を飲む動物で、これを藥として用うれば血を治する。鼠は善く穿つ動物で、これを藥として用うれば漏を治する。所謂その性に因つて用を爲すものであるまいか。(四一)弩牙は分娩を速にするといふは、(四二)機が發しては引留らぬものだからであり、杵の糠が咽のつかへを下げるといふは、杵は築き下すものだからである。所謂その用に因つて使を爲すものであるまいか。浮萍は水に沈まぬもので、これを用うれば酒に勝つ。獨活は風に搖かぬもので、これを用うれば風を治する。所謂その勝つ所に因つて制を爲すものではないか。麻は木穀で風を治し、豆は水穀で水を治す。所謂氣相同じきは相求むるものではないか。牛は土畜である、その乳で渇疾が止む。豕は水畜である、その心で(四三)恍惚の病が鎭る。所謂その氣相剋して相制するものではないか。熊の肉は衰弱者を元氣付け、兎の肝は視力を明ならしめる。所謂その氣餘有れば足らざるを補ふものではないか。鯽が水を治し、鶩

が水を通利するも所謂その氣相感ずるは意を以て使ふものではないか。蜜は蜂から成るものだが、蜜は溫にする作用があり、蜂は寒にする作用がある。油は麻から取つても、麻は溫にし油は寒にする。これは質同うして性異るものだ。(四四)蘼蕪は芎藭に生じ、(四五)蓬虆は覆盆に生ずる。これは名が異つて實の同じきものだ。かかる關係に屬するものは擧げて數ふべからざるものである。又天地間に形を與へられて存するものはすべて陰陽から離れたものはなく、その形と色とは自ら(四六)法り象るところがある。毛羽の類は陽に生じて陰に屬し、鱗甲の類は陰に生じて陽に屬し、空靑は木に法り色靑くして肝を主り、丹砂は火に法り色赤くして心を主り、雲母は金に法り色白くして肺を主り、磁石は水に法り色黑くして腎を主り、黃石脂は土に法り色黃にして脾を主る。故に各〻の物の本質に觸れて十分にそれを發揮し發顯せしめるならばそこに自らなる必然の無いといふことはないのである。醫たらんと欲する者は上は天文を知り、下は地理を知り、中は人事を知り、三者倶に明にして、然る後に以て人の疾病を語る可きである。然らざれば目無くして夜遊し、足無くして登渉するも同様である。迂かと動けば大怪我をする。それで病の治療を試みやう

(四四)別錄ニ曰ク、蘼蕪ハ芎藭ノ苗ナリ。

(四五)弘景曰、蓬虆ハ是根名、覆盆ハ是實名ナリト。

(四六)法ハ、易ニ、崇キハ天ニ效ヒ、卑キハ地ニ法ルトアリ。意義條理ニ遵フヲ法ルトイフ。象ハ外ニ表ル、形ニ法ルコト。

(四七)鹽草ハ苦蘚ノ別名ナリトノ說アリ。

(四八)石灰ハ石炭ノ誤寫。

(四九)聖石ハ光明鹽、一名石鹽。俗ニオランダシホト云フ。

(五〇)蕤ハ蕤核仁。

(五一)交加枝ハ枳椇ノ

とは大それたことといふの外はない。

雷斅炮炙論の序に曰く、世人の藥を使ふ樣子を見ると、一向藥に君あり臣あることを知らぬらしく、君、臣は知つてゐたにしても、藥の性能に相制するところのあるものだといふことをば知らぬらしい。しかし䘓毛(今の(四七)鹽草である)を尿で霑して塗れば立どころに斑腫の毒を銷し、象の膽は黏を離すのを見ても、藥にはそれぞれ情異のあるものだといふことが判るであらう。鮭を樹に挿めば立所に乾枯するが、狗の膽を塗れば却つてそれが繁茂する。(犬膽を鮭の爲に枯れた箇處へ灌げば立ろに故の通りになるのである)無名(無名異は形が玉に似て仰面するものである。又(四八)石灰のやうでもあるが味が別である)は痛を止めるもので、これを用ゐれば指を截つても痛まないこと爪か毛を切つたやうである。(四九)聖石は盲を開いて目を明ならしむること雲の日を離るるが如くである。當歸は血を止めたり血を噴出させたり、頭と尾とで效力が同じくない。(頭は血を止め、尾は血を吹出させる)(五〇)蕤子は熟したのと生とでは熟睡させたり眠らせなかつたり立所に異なる效果を現し、弊箄は鹵を淡くすること(常に用ゐて居る甑の中の草は鹽味を淡くする)酒が交を霑すが如くである。(今の蜜枳、繳枝を又(五一)交加枝ともいふ)鐵は神砂に遇へば

一名。即ケンポナシ。

(五二)紫背天葵。和名ヒメウヅ。

(五三)本書濕草類、龍常草、一名粽心草アリ。

(五四)大觀本草ニ櫻心ノ二字ナシ。

(五五)庾、字書ニ據レバ露積ヲ庾ト曰フトアリ。

(五六)本書濕草類、燈心草一名虎鬚草トアリ。

泥か粉のやうになり、石に鶴糞が付くと化して塵となつて飛ぶ。杦は橘花をつけると髓のやうになり、絃の斷れや劍の折れは鸞の血で繼ぐと故の通りになる。(鸞血を煉つて膠とし折れた箇所を粘着すれば鐵の物はそのまま永く折れない)海竭き江枯れたとき游波が來れば立に水は波波となる。(燕子のことである)鉛を火にかけても熔けぬやうにするには修天(今補天石といふものである)を用ゐ、もしまた形を堅くするには(五二)紫背(背の紫色な天葵がある、常に食ふ葵菜のやうだが、ただ背が紫色で面が青色だ。能く鉛の形を堅くするものである)を忘れられぬ。砒を留めて鼎に停らしむるは全く(五三)宗心に賴る。(これとは別なもので宗心草といふ草がある、今は石竹と呼ぶ。これは食し得る者でない(五四)『櫻心』は恐らくは誤であらう。その草は欽州から出るもので、この草の生ずる處には虫や獸の多いものである)雌は芹花(その草は立起と名け、その形は芍藥のやうで花の色は青く、長さ三尺ばかり、葉の上に黃斑色があつて、味は澁く、これを用ゐて雌黃を煑れば火を呼んで黏くやうなことがない)を得れば立に(五五)庾となる。硇は赤鬚(赤鬚とは草の名で、今の(五六)虎鬚草と呼ぶものがそれである。これを入れて硇砂を煑れば火が生ずる)に遇へば火が金鼎に留る。水中に火を生ずるは猾髓でなければ能はぬ。(海中に猾といふ獸がある。その髓を油の中へ蓄へて水中に入るれば水中に火が燃えて消しやうがない、しかし酒を噴きかければ直に消える。家屋の

（五七）雎ノ字字書ニ無シ。雎ノ誤ナラント云フ、雎ハスガメ、眼瞼攣筋麻痺。

（五八）肉杙ハ肉刺ノ誤ナラント云フ。俗ニウチノメ。

（五九）竹木ハ草薢ノ一名。

（六〇）鸕鷀、燒テ性ヲ存シ末シテ之ヲ飲ムナリ。

（六一）癮風、和名カザホロシ。天雄、生側ハ劇毒アリ、分量ニ注意スベシ。

中に貯へることの危險なものだ）齒を長じ齒を生ずるには雄鼠の骨の末に賴る。（齒がかけて生えぬものには雄鼠の脊骨を末にし缺けた處へ傅ければ齒が立ろに生えて故の通りになる）髮、眉の脫けたとき半夏を塗れば立に生える（眉や髮の脫け落ちたときは生半夏の葉を杵きその涎を取つて毛の脫けたところへ塗れば立ろに毛が生える）目が辟み眼が（五七）雎なるには五花を用うれば、自ら正しくなる。（五加皮には雄、雌があつて三葉のものが雄、五葉のものが雌である。五葉のものを末となし酒に浸して飲めば目瞼の緩んだのが正しくなる）脚に（五八）肉杙が生じたときは裩に若根を繫ぎ（脚に肉杙のあるものは黃若根を取つて犢鼻褌に繫いで置けば感應して永く痛まない）囊皺み漩多きは夜（五九）竹木を煎じて用ゐる。（小便多き者は夜草薢一物だけを煎じて服めば永く夜起きなくなる）體寒え腹大なるには全く（六〇）鸕鷀に賴る。（若し腹が大鼓のやうに大きくなつた場合には米飲で鸕鷀の末を調へて服めば立ろに細つて故のやうになる）血が泛れて月經の過多なるものには瓜子を調して飲す。（甜瓜子の内の仁を搗いて末となし、油を去つて飲で調へて、之を服すれば立ろに止まる）咳逆が數あるには酒で熟雄を服す。（天雄を炮きて一錢だけを酒で服せれば立ろに定る）全身に（六一）癮風の起つたときは生側を冷調して服す。（附子の傍に生ずるものを側子といふ。これを末にして冷酒で服せれば立ろに瘥える）陽虛して瀉痢するには草零の力を假らねばならぬ（五倍子

（六二）癥ハ胃腸病デ腹部ノ痞滿スルモノ。
（六三）逆水ハ逆流水。水部ニ解アリ。
（六四）鱓魚ハ、タウナギ。
（六五）神錦何物タルヲ知ラズ、或云フ朱砂ナリト。
（六六）甘皮何物トモ知レズ。一説ニ柑皮ノ訛ナリトス。
（六七）根黄ハ黄蘗ノ根皮粉、蘇ハ酥字ノ誤。

を搗いて末となし熱水で飲下すれば立ろに止む）久しく渇して心煩しきには竹瀝を投ずべく、（六二）癥を除き塊を去るには全く消、硇に仗る。（消硇とは硇砂と消石をいふのであつて、この二味を乳鉢へ入れて研り、粉として共に服いで酒で服むと神效がある）食を益し膈を加ふるには蘆、朴を煎じたのがよし。（食の進まぬもの酒を多く飲めぬものは蘆根と厚朴の二味を（六三）逆水で煎じた湯を服するがよい）筋を強くし骨を健にするには蓯、鱓を用ゐる（蓯蓉と（六四）鱓魚の二味を末にし黄精汁で丸薬にして服むと力が平常の倍になるといふことが乾寧記の中に出て居る）色を駐め年を延ぶるには精にて（六五）神錦を蒸す。（黄精の自然汁で細研にした神錦を拌ぜ、甑の中で、日間蒸したものを木蜜で丸薬にして服めば容貌が幼女の容色のやうになる）瘡が何所にあるかの見當を付けるには口へ陰膠を黠ける。（陰膠とは甑の中に付く氣垢のことである。これを少しばかり口中に黠けると臟腑に瘡が起つたものが痛みを覺えるから直にその痛む臟腑に治療を加へるのである）産後に肌の浮腫するには（六六）甘皮を酒で服せる。（産後に肌の浮腫するには酒で甘皮を服すれば立ろに癒える）口瘡で舌の拆けるのを立に癒すものは黄、蘇である。（口瘡、舌拆には（六七）根黄に蘇を塗つて炙りそれを末にして含めば立ろに瘥える）腦痛で死ぬ程痛むときは鼻から消末を投ずる。（頭痛にには消石を末にして鼻の中へ入るれば立ろに止む）心痛で死ぬ程苦むには速に延胡を覓めて用ゐる。

（延胡索を散にして酒で服めば立ろに癒える）かくの如き多くの現象はいづれも藥の力である。

某忝くも聖明の世に遇ひ、兎も角も醫學の研究に從事し、聖法の推究を進めたのである。玄微を窮め著すといふことは大なる難事であるが、略藥餌たるものゝ功能を書列ねた。これは仙人の要術に溺れたやうな妄誕なものではなく、一一藥の調制に就て實驗を經たものであつて、炮、熬、煮、炙の實驗の年月をまで記すことが不可能ではないのである。實驗成績を確實に知りたいとならば海集を一覽して貰ひたい。某短見を量らず炮、熬、煮、炙の製法を直錄し、藥を列し方を制し、上、中、下三卷と爲し、三百件の名を擧げた。具に後に陳べる。

# 氣味陰陽

陰陽應象論に曰く、積陽は天となり積陰は地となる。陰は靜に陽は躁しい。陽は生じ陰は長ず。陽は殺し陰は藏す。陽は氣を化し陰は形を成す。陽は氣となり陰は味となる。味は形に歸し形は氣に歸し、氣は精に歸し精は化に歸する。精は氣を食し形は味を食する。化は精を生じ氣は形を生じ、味は形を傷り氣は精を傷る。精は化して氣となり、氣は味に傷られる。陰の味は下竅より出で、陽の氣は上竅より出で、淸陽は腠理に發し、濁陰は五臟に走り、淸陽は四肢を實し、濁陰は六腑に歸する。味の厚きものは陰であり、薄きものは陰中の陽である。氣の厚きものは陽であり、薄きものは陽中の陰である。味は厚ければ泄し、薄ければ通ずる。氣は薄ければ發泄し、厚ければ發熱する。辛甘は發散するから陽であり、酸苦は涌泄するから陰であり、鹹味は涌泄するから陰であり、淡味は滲泄するから陽である。この六味は或は收し、或は散じ、或は緩に、或は急に、或は潤し、或は燥し、或は耎にし、或

は堅うする。その作用の有效な點を取つてその力を發揮させ、その氣を調へて生理狀態の平衡を得せしめるのである。

○○元素曰く、淸の淸なるものが腠理に發し、淸の濁なるものが四肢に實ち、濁の濁なるものが六腑に歸し、濁の淸なるものが五臟に走るのであつて、附子は氣が厚いから陽中の陽であり、大黃は味が厚いから陰中の陰である。茯苓は氣が薄い、陽中の陰である。ゆゑに小便を通利せしめ、手の太陽へ入るものは陽の體を離れない。麻黃は味が薄い、陰中の陽である。ゆゑに汗を出し、手の太陰に入るものは陰の體を離れないのである。凡そ氣を同うする物にも必ずそれぞれの氣があり、氣と味とにも各〻厚、薄があるから性用が相等しくないのである。

○杲曰く、味の薄いものは通ずる、酸苦、鹹平がそれである。味が厚いものは泄する、鹹苦、酸寒がそれである。氣の厚いものは發熱する、辛甘、溫熱がそれである。氣の薄いものは滲泄する、甘淡、平凉がそれである。滲とは小汗のことであり、泄とは小便を利することである。

〇〇宗奭曰く、天と地との分が現れてあらゆる物を發生したのは五氣なのである。五氣がそれぞれ形質化されたときに五味となつて現れる。故に物を生ずるものは氣なり、之を成すものは味なりといふのである。奇を基本として物が生ずれば、そこに耦が成立し、耦を基本として物が生ずれば、そこに奇が成立する道理だ。寒氣は堅なるが故にその味は耎に用うべく、熱氣は耎なるが故にその味は堅に用うべく、風氣は散なるが故にその味は收に用うべく、燥氣は收なるが故にその味は散に用うべく、土は沖氣に因つて成立したものであつて、氣の集り凝るところ和せざるものはない、故にその味は緩に用うべきである。氣堅ければ壯である。故に苦は以て氣脈を養ふべく、耎なれば和する、故に鹹は以て脈骨を養ふべく、收すれば强くなる、故に酸は以て骨筋を養ふべく、散すれば攣せぬ、故に辛は以て筋肉を養ふべく、緩なれば壅せぬ、故に甘は以て肉を養ふべきものである。之を堅にして而る後に耎にすべく、之を收して而る後に散ずべく、緩ならしむるの要を認める場合には甘を用ゐ、その要を認めぬ場合には用ゐてはならぬ。これを用ゐても甚だ度を過すことはよろしくない。度を過

せばそれが爲に更に病を起すものである。古の生を養ひ病を治する者は、必ずまづこの理を詳に識得したのである。然らずして能く人の病を治するといふことは蓋し六ヶ敷いことといはねばならぬ。

李杲曰く、夫れ藥には溫、涼、寒、熱の氣と辛、甘、淡、酸、苦、鹹の味とがある。升降、浮沈が相互に關係あり、厚薄、陰陽が同一でない。一箇の藥物の中に氣と味とを兼ね理と性とを具へて居る。或は氣が同一でも味の殊なるものあり、味は同一でも氣の異なるものもある。氣は天に象るもので、溫熱は天の陽、涼寒は天の陰であつて天に陰陽があるのである。風、寒、暑、濕、燥、火の三陰三陽は上天に受け天に仕へる作用を有つ。味は地に象るもので、辛、甘、淡は地の陽、酸、苦、鹹は地の陰であつて地にも陰陽があるのである。金、木、水、火、土の各〻の力が生、長、化、收、藏と働き、下地に應ずるの作用を有つ。氣味薄きものは輕淸なものとして現れ、天に本くものだから上に親む。氣味厚きものは重濁なものとして現れ、地に本くものだから下に親む。

好古曰く、本草では味に五あり氣に四あり、然も一味の中にも四氣があつて、

同じ辛味だけでも石膏は寒、桂と附は熱、半夏は溫、薄荷は涼であるやうなものである。夫れ氣は天であり、溫、熱は天の陽、寒、涼は天の陰で、陽なれば升り陰なれば降る。味は地であり、辛、甘、淡は地の陽、酸、苦、鹹は地の陰で、陽なれば浮き陰なれば沈む。氣を使ふあり、味を使ふあり、氣、味倶に使ふあり、先づ氣を使ふてから味を使ふあり、先づ味を使ふてから氣を使ふものもある。一物で一味のものあり、一物三味のものあり、一物一氣のものあり、一物二氣のものもある。或は生と熟とで氣味の異るものあり、或は根と苗とで氣味の異るものもある。或は溫多くして熱となることあり、或は涼多くして寒となることあり、或は寒と熱とが相半して溫となることあり、熱なるものが多く寒なるものが少い場合寒は沒却されて現れぬことあり、寒なるものが多く熱なるものが少い場合熱は沒却されて現れぬこともあるのだから一樣にして可なりと思はば誤りである。或は寒、熱各半して、晝服めば熱の方の力に從つて升り、夜服めば寒の方の力に從つて降るものもある。晴天のときは熱に從ひ、曇、雨のときは寒に從ふ。かやうにその變化は一ならぬものである。況や

(一)四時、春、夏、秋、冬。六位、東、西、南、北、上、下。
(二)五運、木、火、土、金、水。六氣、風、寒、燥、濕、暑、火。

(一)四時、六位同じからず、(二)五運、六氣各〻異るのであるから輕輕しく用うべきものではない。

六節臟象論に曰く、天は人を養ふに五氣を以てし、地は人を養ふに五味を以てする。五氣は鼻から入つて心、肺に藏り、上に五色を明に見せしめ、音聲を彰にする。五味は口から入つて腸、胃に藏り。それぞれの臟に藏つて五氣を養ひ、それに氣が和して津液が發生し、精神が自ら生ずるのである。又曰く、形の不足のものはこれを溫にするに氣を以てし、精の不足のものは之を補ふに味を以てする。

王冰曰く、五氣の臊氣は肝に湊り、焦氣は心に湊り、香氣は脾に湊り、腥氣は肺に湊り、腐氣は腎に湊る。心は色を榮えしめ、肺は音を主るものであるから氣が肺に藏つて色を明にし聲を彰にし、氣は水の母であるから味が腸、胃に藏つて五氣を養ふのである。

遜思邈曰く、精は氣を食とする。氣が精を養ふから色が榮えるのである。形は味を食とする。味が形を養ふから力が生ずるのである。精は五氣に順ずるから靈妙であり、形は五味を受けるから成立するのである。若し氣を食とするこ

とが適順でなければ精を傷り、味を食とすることが調和を缺けば形を損ずる。このゆゑに聖人は先づ食禁の法を用ゐて純粹な生を保持し、後に藥物を調制して命を防ぎ護り、氣味の溫補によつて精と形とを保持するのである。

# 五味宜忌

岐伯曰く、木は酸を生じ、火は苦を生じ、土は甘を生じ、金は辛を生じ、水は鹹を生ずる、辛は散であり、酸は收であり、甘は緩であり、苦は堅であり、鹹は耎である　毒藥は健康を傷ふ邪惡を攻め治し、五穀は常の榮養となり、五果は榮養の力を助け、五畜は養分を增益し、五菜は養分を補充する。氣、味を適合させて服すれば精を補ひ氣を益す。この五者は各〻利するところの特長があるのだから、四時五臟の病に對して、適當なところに隨つて用ふべきものである。又曰く、陰の生ずる根本は五味にあり、陰の五宮の障害も五味に原因する。骨正しく筋柔に血氣がよく流れ腠理がよく密なれば、骨氣がそれで淸かに長く天命が保てるのである。又曰く、聖人は春と夏には陽を養ひ、秋と冬は陰を養ふ。それでその根本に從ふから二氣が恒久に存するのである。

春は凉を食ひ、夏は寒を食ふて陽を養ひ、秋は溫を食ひ、冬は熱を食ふて陰

を養ふのである。

**五欲**　肝は酸を欲し、心は苦を欲し、脾は甘を欲し、肺は辛を欲し、腎は鹹を欲する。この五味は五臟の氣に合致するのである。

**五宜**　青色は酸に適合する、肝病には麻、犬、李、韮を食ふがよい。赤色は苦に適合する、心病には麥、羊、杏、薤を食ふがよい。黄色は甘に適合する、脾病には粳、牛、棗、葵を食ふがよい。白色は辛に適合する、肺病には(一)黄、黍、雞、桃、葱を食ふがよい。黒色は鹹に適合する、腎病には大豆黄卷、猪、栗、藿を食ふがよい。

**五禁**　肝病には辛を禁じて甘を食はねばならぬ。粳、牛、棗、葵などである。心病には鹹を禁じて酸を食はねばならぬ。麻、犬、李、韮などである。脾病には酸を禁じて鹹を食はねばならぬ。大豆、豕、栗、藿などである。肺病には苦を禁じて麥、羊、杏、薤を食ふがよい。腎病には甘を禁じて辛を食ふがよい。黄、黍、雞、桃、葱などである。

思邈曰く、春は酸を省き甘を増して脾を養ふがよく、夏は苦を省き辛を増し

(一)黄、金陵本ニモ黄トアレドモ蓋ノ誤字ト考フ。

(一) 癃ハ淋病。

(三) 悗心、詳ナラズ。悗ハ字書ニ癡忘ナリトアリ、心忘然タルヲ云フ歟。

(四) 洞心、詳ナラズ。心動ガ刺戟セラルル意歟。

て肺を養ふがよく、秋は辛を省き酸を增して肝を養ふがよく、冬は鹹を省き苦を增して心を養ふがよく、四季を通じて甘を省き鹹を增して腎を養ふがよい。

時珍曰く、五欲とは五味が胃に入つて喜んで本臟に歸することであつて、有餘の病にはそれぞれの適味でこれを加減すべきである。五禁とは五臟の不足の病の場合、その勝つところを畏れてその勝たざる所を宜しとすることである。

**五走** 酸は筋に走る。筋病には酸を多く食つてはならぬ。多く食へば(一)癃を起す。酸氣は澀收するもので、胞が酸の爲に縮卷し、それで水道が通じなくなるのである。苦は骨に走る。骨病には苦を多く食つてはならぬ。多く食へば變嘔する。苦は下脘に入り三焦が皆閉ぢるから變嘔するのである。甘は肉に走る。肉病には甘を多く食つてはならぬ。多く食へば(三)悗心する。甘は氣柔で胃を潤すもので。柔ければ緩になり緩なれば蟲が動くから悗心するのである。辛は氣に走る。氣病には辛を多く食つてはならぬ。多く食へば洞心する。辛は上焦に走つて氣と倶に行き、久しく心下に留るから(四)洞心するのである。鹹は血に走る。血病には鹹を多く食つてはならぬ。多く食へば渇を起す。血と鹹と

が合ふと凝り胃汁がそれに注ぐから咽喉が焦けて舌の本が乾くのである。○九鍼論には、鹹は骨に走る。骨病には鹹を多く食ふてはならぬ。苦は血に走る。血病には苦を多く食ふてはならぬとなつて居る。

**五傷**　酸は筋を傷り、辛は酸に勝つ。苦は氣を傷り、鹹は苦に勝つ。甘は肉を傷り、酸は甘に勝つ。辛は皮毛を傷り、苦は辛に勝つ。鹹は血を傷り、甘は鹹に勝つ。

**五過**　味が酸に過ぐれば肝氣が津して脾氣が絶し、(五)肉胝が傷み皺みて唇が掲する。味が苦に過ぐれば脾氣が濡はず胃氣が厚くなり、皮が槁れて毛が抜ける。味が甘に過ぐれば心氣喘滿して色黑く腎氣が衡ならず、骨が痛んで髮が脫落する。味が辛に過ぐれば筋脈が沮弛し精神が盡き、筋が縮んで爪が枯れる。味が鹹に過ぐれば大骨が氣勞し心氣が短絕し脈が抑し澁滯して色が變る。

○時珍曰く、五走、五傷は各〻本臟の味が自ら傷るのであつて、卽ち陰の(六)五宮の傷るるは五味に在りである。五過は各〻本臟の味がその勝つ所を伐つわけで卽ち臟氣の偏勝である。

(五)肉胝ハ硬化ノ肉。俗ニ日フタコ。

(六)五宮ハ五臟。

## 五味偏勝

岐伯曰く、五味は胃に入つて各〻その喜び相求むるところに歸する。酸は先づ肝に入り、苦は先づ心に入り、甘は先づ脾に入り、辛は先づ肺に入り、鹹は先づ腎に入る。それが久しきに亘れば氣を增す。これは物の働きの自然であつて、氣を增すことが更に久しきに亘れば夭死の原因となるものである。

王冰曰く、肝に入つては溫となり、心に入つては熱となり、肺に入つては淸となり、腎に入つては寒となり、脾に入つては至陰となり、四氣を兼ねていづれもその味を增すに從つてその氣を益すことになる。各〻その本臟の氣に從ふ味を久しきに亘つて攝取すればますます本臟の氣に從つて化し働くのである。故に久しく黃蓮、苦參を服すれば反つて熱が出る。それは苦化の勢に從ふからであつて、苦以外の四味もこれと同樣である。氣が增して已まなければ臟氣が偏勝して必ず偏絕することがある。臟に偏絕することがあれば必ず突然急死することがある。このゆゑに藥の五味を具へず四氣を備へない一味、一氣に偏した

ものを久しく服すれば一時は勝を獲て效果を現すけれども久しきに及んで必ず死亡するものである。故に(七)粒を絶ちて(八)餌を服するものの急死せぬのは五味の資助がないからである。

○杲曰く、一陰一陽之を道と謂ふ。偏陰偏陽之を疾と謂ふ。陽劑は剛の勝つものであるからこれが積れば草原を燒くが如く(九)消狂、癰疽などの病となる。それは天癸が渇きて氣血が涸れるのである。陰劑は柔の勝つものであつてこれが積れば凝る水の如く洞泄、寒中などの病となる。それは眞火が微にして靜脉が散ずるからである。故に大寒、大熱の藥はよくその場合と程度とを計つて用ゐ、氣が平衡を得たならば止めねばならぬ。資助の力を一方にのみ偏すれば臟氣の平衡を得られなくするから、それが遂に死亡の原因となるのである。

(七)粒ハ穀物。
(八)餌ハ藥餌。
(九)消狂、詳ナラズ。

# 標本陰陽

李杲曰く、夫れ治病には標と本とに注意せねばならぬ。身體に就いていへば、外部が標であり内部が本である。陽を標とし陰を本とするので、六腑は陽に屬して標であり、五臟は陰に屬して本である。內にある臟腑を本とし、外にある十二經絡を標とする。更に臟腑、陰陽、氣血、經絡にもまたそれぞれ標と本とがあるのである。疾病に就いていへば、先づ主たる病を感受したところのものが本で、第二次、第三次と現れる症狀が標である。故にすべての病は必ず先づその本を治して後にその標を治する。然らざれば邪氣がますます甚しく、その病はますます深く重くなるものだから、たとひ先づ輕病を生じて後に重病を生じても、やはり先づその輕きものから治して後に重きものを治する。それで邪氣は伏するものである。ただ（一）中滿と大小便の利通せぬ病の場合だけは、その前後や標たると本たるとに拘らず、必ず先づ滿なり大小便の不通利なりを治することが應急の所置である。それは所謂

（一）中滿ハ素問、陰陽應象大論ニ出ヅ。

緩なればその本を治し、急なればその標を治するのである。又、初から生じた病は實邪であり、後に起つて來るものは虚邪であつて、實の場合にはその子を瀉し、虚の場合にはその母を補ふ。たとへば肝が心火を受けたことが實邪となつたものであれば、その場合には先づ肝經に對して(二)滎穴に針治を施して心火を瀉することが必要だ。これはその本を治するのである。然して心經に對して滎穴を針治して心火を瀉する。これは後にその標を治するのである。この場合藥を用ゐるには、肝に入る藥が効果を導く作用をなすものであり、心を瀉する藥が君、卽ち主たるものである。經に所謂本にして標たるものは先づその本を治して後にその標を治すといふことである。又、肝が腎水を受けて虚邪となつた如き場合は、先づ腎經に對して(三)井穴を刺戟して肝木を補ふことが必要である。これはその標を治するのである。然る後に肝經に對して(四)合穴を刺戟して腎水を瀉せねばならぬ。これはその本を治するのである。この場合藥を用ゐるには、腎に入る藥が導く作用をなし、肝を補ふ藥が君となる。經に所謂標にして本たるものは先づその標を治して後にその本を治すといふことである。

(二)滎穴ハ動脈部。

(三)井穴ハ足心涌泉ノ穴又大敦ニモ井穴ノ名アリ。

(四)合穴ハ曲泉トモ云フ膝膕節ノ上部ニアリ陰谷トモ云フ。

# 升降浮沈

李杲曰く、藥には升、降、浮、沈、化、生、長、收、藏、成があつて、それが天の四時に配するやうになつて居る。春は升り、夏は浮き、秋は收め、冬は藏し、土は中に居て化する、このゆゑに味薄きものは升つて生じ、氣薄きものは降つて收し、氣厚きものは浮きて長じ、味厚きものは沈んで藏し、氣味平なるものは化して成するのである。所謂之を補ふに辛、甘、溫、熱及び氣味の薄きものを以てすといふは、春、夏の升、浮を助けるもの、卽ち秋、冬の收、藏を瀉する藥をいふので、人の身體では肝、心に當るのである。所謂之を補ふに酸、苦、鹹、寒及び氣味の厚きものを以てすといふは、秋、冬の降、沈を助けるもの、卽ち春、夏の生、長を瀉する藥をいふので、人の身體では肺、腎に當るのである。淡味の藥は滲しては升となり泄しては降となり、諸藥を佐使するものである。藥を用うる場合、この法則に循へば生であるが、これに逆へば死である。たとへ死なぬまでも危險に陷れ治療を困難にする。〇王好古曰

く、升せて之れを降らせるは抑へる意味であり、沈ませて之れを浮すは載せる意味である。辛は散であつてその力は横に行き、甘は發であつてその力は上に行く、苦は泄であつてその力は下に行く、酸は收であつてその性は縮り、鹹は耎であつてその性は舒ぶ。それぞれかやうなる差異を有つて居るのである。掌を鼓てば聲が發り、火に水を注げば沸立つやうに、二物が相合すれば特殊の現象がその間に現れる。五味相制し四氣相和するの變化を用うるに方つては、決して輕輕しく爲し得べきものではない。本草に淡味、涼氣に言及してないのは文の缺けたものであらう。

味薄き者は升る――甘平、辛平、辛微、溫微、苦平の藥である。
氣薄き者は降る――甘寒、甘涼、甘淡、寒涼、酸溫、酸平、鹹平の藥である。
氣厚き者は浮く――甘熱、辛熱の藥である。
味厚き者は沈む――苦寒、鹹寒の藥である。
氣味平なる者は四氣、四味を兼ぬ――甘平、甘溫、甘涼、甘辛、平甘、微苦平の藥である。

李時珍曰く、酸、鹹は升ることなく、甘、辛は降ることなく、寒は浮くことなく、

熱は沈むことがない。その性の然らしむるところである。而して升るものはこれを導くに鹹寒を以てすれば反對に沈んで直に下焦にまで達し、沈むものはこれを導くに酒を以てすれば反對に上顚頂に至るものである。かかることは天地の奥を窺ひ造化の權に達するに非ざれば能はぬことである。一物のうちにも根は升り梢は降るものや、生のものは升り熟したものは降るものがあつて、この升降は物そのものの性質にもあり、人の體質や境遇にもあるのである。

# 四時用藥例

李時珍曰く、(一)經に、必ず歲氣に先じて天和を伐つこと毋れといひ、又、升降、浮沈は則ち之に順ひ、寒熱、溫涼は則ち之に逆ふといつてある。故に春は辛溫の藥、薄荷、荊芥の類を加へて春升の氣に順ふがよく、夏は辛熱の藥、香薷、生薑の類を加へて夏浮の氣に順ふがよく、盛夏には甘苦、辛溫の藥、人參、白朮、蒼朮、黃蘗の類を加へて化成の氣に順ふがよく、秋は酸溫の藥、芍藥、烏梅の類を加へて秋降の氣に順ふがよく、冬は苦寒の藥、黃芩、知母の類を加へて冬沈の氣に順ふがよい。所謂時氣に順じて天和を養ふのである。經に又、春は酸を省き甘を增して脾氣を養ひ、夏は苦を省き辛を增して肺氣を養ひ、盛夏には甘を省き鹹を增して腎氣を養ひ、秋は辛を省き酸を增して肺氣を養ひ、冬は鹹を省き苦を增して腎氣を養ふとあるが、これは天和を伐たず而も更に大過を防ぐことであつて、天地の大德を體する所以である。無知なものは本を捨てて標に從ひ、春は辛涼を用ゐて木を伐ち、夏は鹹寒を用ゐて火を

(一)經トハ素問ヲ指ス。

抑へ、秋は苦温を用ゐて金を泄し、冬は辛熱を用ゐて水を涸し、それを時薬だと思ふて居るが、何ぞ知らん、それは素問の逆順の理に背くものであることを。夏月陰を伏し冬月陽を伏するを以て推せば判ることである。けれども月にも四時があり、日にも四時があり、春に秋の病を起すこともあり、夏に冬の病を起すこともあり、神の如き明徹な智力でこれを詳にし、至妙なる機微に應じて手を下さねばならぬ。變通は權宜に依るべきものであるから、一面の理にのみ拘泥すべきものではない。〇王好古曰く、四時すべて、芍薬を以て脾劑となし、蒼朮を胃劑となし、柴胡を(二)時劑となす。(三)十一臓は皆決を少陽に取つて發生の始と爲るものだからであつて、凡そ純寒、純熱の薬や寒、熱相雜るものを用うるには、いづれも甘草を用ゐてそれを調和すべきものである。ただ中滿の者だけは甘を用うることを禁ずる。

(二)時劑ハ四時ノ劑。

(三)十一臓ハ五臓、六腑。

# 五運六淫用藥式

厥陰の司天（巳、亥の年）――風淫の勝つ所である。平にするに辛涼を以てし、佐するに苦、甘を以てし、甘を以て之を緩うし、酸を以て之を瀉す。（王注に、厥陰の氣未だ盛熱とならざるが故に涼藥を以て之を平にするとある）○淸が反つて之に勝つときは、治するに酸溫を以てし、佐するに甘苦を以てする。

少陰の司天（子、午の年）――熱淫の勝つ所である。平にするに鹹寒を以てし、佐するに苦、甘を以てし、酸を以て之を收む。○寒が反つて之に勝つときは、治するに甘溫を以てし、佐するに苦、酸、辛を以てする。

太陰の司天（丑、未の年）――濕淫の勝つ所である。平にするに苦熱を以てし、佐するに酸、辛を以てし、苦を以て之を燥し、淡を以て之を泄す。○濕が上に甚しくして熱するときは、治するに苦溫を以てし、佐するに甘、辛を以てする。それは發汗さする爲である。（身體の半以上に濕氣が餘有り、火氣がまた欝するときは表を解し汗を流さしめてこれを取去る）

○熱が反つて之に勝つときは治するに苦寒を以てし、佐するに苦、酸を以てする。

少陽の司天(寅、申の年)——火淫の勝つ所である。平にするに酸冷を以てし、佐するに苦、甘を以てし、酸を以て之を收め、苦を以て之を發し、酸を以て之を復する。(熱氣の已に退く時に發動するものは心虛であつて、氣が散じて收らぬから、酸を以て之を收め、寒を兼て助くればそれでよく根を除ける。熱の現ること甚しきときは苦を以て之を發し、發汗してそれで涼になればそれは邪氣が盡きるのであるが、發汗しても猶は熱のあるのは邪が盡きぬのだから、酸を以て之を收める。已に發汗してもまた熱が出、また發汗してもまた熱の出るのは臟が虛したのであるから、その場合はその心を補へばよろしい)○寒が反つて之に勝つときは、治するに甘熱を以てし、佐するに苦、辛を以てする。

陽明の司天(卯、酉の年)——燥淫の勝つ所である。平にするに苦溫を以てし、佐するに酸、辛を以てし、苦を以て之を下す。(燥を制するの法は苦溫を以てする。下すには必ず苦を以てするがよく、補ふには必ず酸を以てするがよく、瀉するには必ず辛を以てするがよし)○熱が反つて之に勝つときは、治するに辛寒を以てし、佐するに苦、甘を以てする。

太陽の司天(辰、戌の年)——寒淫の勝つ所である。平にするに辛熱を以てし、佐するに甘、苦を以てし、鹹を以て之を瀉する。○熱が反つて之に勝つときは、治するに

鹹冷を以てし、佐するに苦、辛を以てする。

厥陰の在泉（寅、申の年）――風が内に淫する。治するに辛凉を以てし、佐するに苦を以てし、甘を以て之を緩うし、辛を以て之を散ずる。（風は溫を喜んで清を惡むものであるから、辛凉を以て之に勝ち、苦を以て利とする所に隨ふのである。木が急を苦むには、甘を以て之を緩うし、木が抑を苦むには、辛を以て之を散ずる）○清が反つて之に勝つときは、治するに酸溫を以てし、佐するに苦、甘を以てし、辛を以て之を平にする。

少陰の在泉（卯、酉の年）――熱が内に淫する。治するに鹹寒を以てし、佐するに甘、苦を以てし、酸を以て之を收め、苦を以て之を發する。（熱性は寒を惡む、故に鹹寒を以てするので、熱が裏に甚しければ苦を以て之を發し、盡きなければまた寒を以て之を制し、寒で制して盡きなければまた苦を以て之を發し、酸を以て之を收める。甚しきものには再方、微なるものには一方を用ゐて必ずそれは已ましめねばならぬ。間歇的に來るものも酸を以て之を收める）○寒が反つて之に勝つときは、治するに甘熱を以てし、佐するに苦、辛を以てし、鹹を以て之を平にする。

太陰の在泉（辰、戌の年）――濕が内に淫する。治するに苦熱を以てし、佐するに酸、淡を以てし、苦を以て之を燥し、淡を以て之を泄す（濕と燥とは反するものだから苦熱を以て

○素問至眞要大論ニ治以ニ苦温一佐以ニ甘辛一以レ苦下レ之トアルヲ正トス。

し佐するに酸淡を以てして濕を利するのである）〇熱が反つて之に勝つときは、治するに苦冷を以てし、佐するに鹹、甘を以てし、苦を以て之を平にする。

少陽の在泉（己、亥の年）――火が内に淫する。治するに鹹冷を以てし、佐するに苦、辛を以てし、酸を以て之を收め、苦を以て之を發する。（火氣が火に心、腹に行るときは鹹性の柔爽で之を制し、酸を以てその散氣を收める。火體が發汗せしむべきものであるならば辛を以て之に佐とする）〇寒が反つて之に勝つときは、治するに甘熱を以てし、佐するに辛、苦を以てし、鹹を以て之を平にする。

陽明の在泉（子、午の年）――燥が内に淫する。治するに〇「甘、辛を以てし、苦を以て之を下す。」（溫は涼性を利するものだから苦を以て之を下すのである）〇熱が反つて之に勝つときは、治するに辛寒を以てし、佐するに苦、甘を以てし、酸を以て之を平にし、和を以て利と爲すのである。

太陽の在泉（丑、未の年）――寒が内に淫する。治するに甘熱を以てし、佐するに苦、辛を以てし、鹹を以て之を瀉し、辛を以て之を潤し、苦を以て之を堅うする。（熱を以て寒を治するのは勝を摧いてその氣を折くのである）〇熱が反つて之に勝つときは、治するに

鹹冷を以てし、佐するに甘、辛を以てし、苦を以て之を平にする。

李時珍曰く、司天は上半年を主るので、それは天氣が之を主るのだから、六淫が『これに勝つ所』といふのであり、それは上が下を淫することだから『之を平にす』といふのである。在泉は下半年を主るので、それは地氣が之を司るのだから、六淫が『內に淫する』といふのであり、それは外が內に淫することだから『之を治する』といふのである。その時に當つて反つて己に勝つの氣を得ることがあるを『反つて勝つ』といふ。六氣が勝つといふことは何を以てその徵證とするかといへば、燥甚しきときは地が乾き、暑が勝つときは地が熱し、風が勝つときは地が動き、濕が勝つときは地が泥となり、寒が勝つときは地が裂け、火が勝つときは地が涸るのがそれである。これ等の六氣勝復、主客證治の病機に就ては素問の至眞要大論に甚だ詳しく論ぜられてあるが、長文になるから玆には載せない。

# 六腑五臟用藥氣味補瀉

肝、膽　溫は補し、涼は瀉す。辛は補し、酸は瀉す。

心、小腸　熱は補し、寒は瀉す。鹹は補し、甘は瀉す。

肺、大腸　涼は補し、濕は瀉す。酸は補し、辛は瀉す。

腎、膀胱　寒は補し、熱は瀉す。苦は補し、鹹は瀉す。

脾、胃　濕、熱は補し、寒、涼は瀉す。各その宜きに從ふ。甘は補し、苦は瀉す。

三焦、命門　心に同じ。

張元素曰く、五臟は互に相平衡を得て居るものであつて、一臟平ならざるときはその勝つところのものを平にするのである。故に『穀を安ずるときは昌へ、穀を絕するときは亡ぶ。水去るときは(一)營散じ、穀消するときは衞亡ぶ。神居る所無し』といふのであつて、血は養はざるべからず、衞は溫めざるべからず、血溫に氣和して營、衞乃ち行り常に天命を有つのである。

(一)營、衞ハ對句トセシマデニテ、水穀缺乏スレバ氣血ノ衰亡スルヲ意味ス。營ハ脈中ヲ行キ、衞ハ脈外ニ行クモノトノ說アリ。

# 五臟五味補瀉

**肝**　○急を苦むには、急に甘を食して以て之を緩にす。(甘草)酸を以て之を(一)瀉す。(赤芍藥)實するときは(二)子を瀉す。(甘草)○散を欲するには、急に辛を食して以て之を散ず。(川芎)辛を以て之を補ふ。(細辛)虛するときは(三)母を補ふ。(地黃、黃蘗)

**心**　緩を苦むには、急に酸を食して以て之を收む。(五味子)甘を以て之を瀉す。(甘草、參、茋)實するときは(四)子を瀉す。(甘草)○耎を欲するには、急に鹹を食して以て之を耎にす。(芒消)鹹を以て之を補ふ(澤瀉)虛するときは(五)母を補ふ。(生薑)

**脾**　○濕を苦むには、急に苦を食して以て之を燥す。(白朮)苦を以て之を瀉す。(黃連)實するときは(六)子を瀉す。(桑白皮)○緩を欲するには、急に甘を食して以て之を緩うす。(炙甘草)甘を以て之を補ふ。(人參)虛するときは(七)母を補ふ。(炒鹽)

**肺**　○氣逆を苦むには、急に苦を食して以て之を泄す。(訶子)辛を以て之を瀉す。(桑白皮)實するときは子を瀉す。(澤瀉)○收を欲するには、急に酸を食して以て之

(一)瀉ハ排泄ノ意。
(二)子ハ心臟ヲ指ス。
(三)母ハ腎臟ヲ指ス。
(四)子ハ脾ヲ指ス。
(五)母ハ肝臟ヲ指ス
(六)子ハ肺ヲ指ス。
(七)母ハ心臟ヲ指ス。
以下類推スベシ。

を收む。(白芍藥)酸を以て之を補ふ。(五味子)虚するときは母を補ふ。(五味子)

**腎** ○燥を苦むには、急に辛を食して以て之を潤す。(黄蘗、知母)鹹を以て之を瀉す。(澤瀉)○實するときは之を瀉す。(芍藥)○堅を欲するには、急に苦を食ふて以て之を堅くす。(知母)苦を以て之を補ふ。(黄蘗)虚するときは母を補ふ。(五味子)

張元素曰く、凡そ藥の五味は入る所の五臟のそれぞれに隨つて補瀉を爲すものであつて、その性に因つてその目的に調和するに過ぎない。酸は肝に入り、苦は心に入り、甘は脾に入り、辛は肺に入り、鹹は腎に入る。辛は散を主り、酸は收を主り、甘は緩を主り、苦は堅を主り、鹹は耎を主る。辛は能く結を散じ、燥を潤し、津液を致し、氣を通ずる、酸は能く緩を收め、散を斂める。甘は能く急を緩にし、中を調へる。苦は能く濕を燥し耎を堅くする。鹹は能く堅を耎くし、淡は能く竅を利する。

李時珍曰く、甘は緩であり、酸は收であり、苦は燥であり、辛は散であり、鹹は耎であり、淡は滲する。これは五味本來の性質として一定不變のもので、これが或は補し或は瀉するのは、五臟と四時とに對し互に相應ずるところに因つて效果を擧げるのである。溫、凉、寒、熱は四氣の本來の性質であつて、これが五臟の補瀉と

なるのも、やはり互に相應ずるところに因つて效果を擧げるのである。これは特に張潔古が素問の飮食補瀉の理論を基礎とし、數種の藥を列擧して例を示しただけのものであるが、研究に志す人人は說の眞意を了解して充分に活用すべきであると思ふ。

# 臓腑虚實標本用藥式

肝―は血を藏する。木に屬し、膽の火がこの中に舍り、血を主り、目を主り、筋を主り、怒を主る。

本病は、諸風、眩運、僵仆、强直、(一)驚癇、兩脇の腫痛、胸肋の滿痛、嘔血、小腹の疝痛、(二)痃瘕、婦人の經病。

標病は、寒熱、瘧、頭痛、涎を吐いて目赤く面靑く、些細の事に怒り易く、耳が遠くなり、頰腫れ筋攣まり、睪丸縮み男子は(三)癩疝、婦人は少腹腫痛、陰病。

## 有餘は之を瀉す

子を瀉するには　甘草。

氣を行らすには　香附、芎藭、瞿麥、牽牛、靑橘皮。

血を行らすには　紅花、鼈甲、桃仁、莪蒁、京三稜、穿山甲、大黃、水蛭、虻虫、蘇木、牡丹皮。

驚を鎭むるには　雄黃、金箔、鐵落、眞珠、代赭石、夜明砂、胡粉、銀箔、鉛丹、龍骨、石決明。

風を搜るには　羗活、荊芥、薄荷、槐子、蔓荊子、白花蛇、防風、烏頭、蟬蛻。

(一)驚癇ハ小兒ノヒキツケル病。

(二)痃瘕ハ痃癖ノ別名歟。痃癖ハ胸下ノシコリサシコミ。

(三)癩疝ハ睪丸炎及陰囊中ニ腸ノ脫出スル病ヲ云フ。

### 不足は之を補ふ

母を補ふには　枸杞、杜仲、狗脊、熟地黃、苦參、萆薢、阿膠、兎絲子。
血を補ふには　當歸、牛膝、續斷、白芍藥、血竭、沒藥、芎藭。
氣を補ふには　天麻、柏子仁、白朮、菊花、細辛、密蒙花、決明、穀精草、生薑。

### 本熱は之を寒す

木を瀉するには　芍藥、烏梅、澤瀉。
火を瀉するには　黃連、龍胆草、黃芩、苦茶、猪膽。
裏を攻むるには　大黃。

### 標熱は之を發す

和解には　柴胡、半夏。
肌を解するには　桂枝、麻黃。

（

心—精神を藏するところ、體溫の本源たる君火を生ずる。包絡は相火の本源となつて君に代つて令を行ふのである。血を主り、言を主り、汗を主り、笑を主る。

本病は、諸熱、(四)瞀瘛、驚惑、譫妄、煩亂、泣いたり笑つたり、罵詈したり、(五)怔忡、健忘、自汗、諸痛痒、瘡瘍。

標病は、肌熱で畏寒し戰慄し、舌が言へなくなり、面赤く目黄に、掌の中心が煩熱し、胸脇が滿痛し、腰、背、肩胛、肘臂に痛が及ぶ。

### 火實は之を瀉す

(六)子を瀉するには　黃連、大黃。

氣には　甘草、人參、赤茯苓、木通、黃蘗。

血には　丹參、牡丹、生地黃、玄參。

驚を鎭むるには　硃砂、牛黃、紫石英。

### 神虛は之を補ふ

(七)母を補ふには　細辛、烏梅、酸棗仁、生薑、陳皮。

氣には　桂心、澤瀉、白茯苓、伏神、遠志、石菖蒲。

血には　當歸、乳香、熟地黃、沒藥。

### 本熱は之を寒す

(四)瞀ハ目明ナラザル貌。瘛ハ筋脈拘急ヲ云フ。

(五)怔忡ハ心悸。即ムナサワギヲ云フ。

(六)子トハ脾臓ヲ指ス。

(七)母トハ肝臓ヲ指ス。

火を瀉するには　黃芩、竹葉、麥門冬、芒消、炒鹽。
血を涼するには　地黃、巵子、天竺黃。

標熱は之を發す

火を散するには　甘草、獨活、麻黃、柴胡、龍腦。

脾―智を藏し土に屬する。土の萬物の母なるが如く、營、衞を主り、味を主り、肌、肉を主り、四肢を主る。
本病は、諸濕、腫脹、痞滿、噫氣、大、小便不通、黃疸（八）痰飲、吐瀉、霍亂、心腹痛、消化不良。
標病は、身體の胕腫、重苦く、臥して居ることを好み、四肢擧らず、舌の本が强つて痛み、足の大趾が踏めず、九竅通ぜず、（九）諸痙、項が强る。

土實は之を瀉す

子を瀉するには　訶子、防風、桑白皮、葶藶。
吐するには　豆豉、巵子、蘿蔔子、常山、瓜蒂、鬱金、虀汁、藜蘆、苦參、赤小豆、鹽湯、苦茶。

（八）痰飲ハ慢性胃加答兒。
（九）諸痙ハ痙攣ノ病。

(一〇)中宮ハ脾臟ノ本體ヲ指ス。

(一一)淨府ハ脾臟ノ淨房。

(一二)鬼門ハ邪氣。

(一三)膹字書ニナシ憤

下すには　大黃、芒消、青礞石、大戟、甘遂、續隨子、芫花。

### 土虛は之を補ふ

母を補ふには　茯苓、桂心。

氣には　人參、黃芪、升麻、葛根、甘草、陳皮、藿香、葳蕤、縮砂、木香、扁豆。

血には　白朮、蒼朮、白芍、膠飴、大棗、乾薑、木瓜、烏梅、蜂蜜。

### 本濕は之を除く

(一〇)中宮を燥するには　白朮、蒼朮、橘皮、半夏、吳茱萸、南星、草豆蔻、白芥子。

(一一)淨府を潔するには　木通、赤茯苓、猪苓、藿香。

### 標濕は之を滲す

(一二)鬼門を開くには　葛根、蒼朮、麻黃、獨活。

肺—魄を藏する。金に屬して一身の元氣を總攝するのである。聞を主り、哭を主り、皮毛を主る。

本病は、諸氣、(一三)膹鬱、諸痿、喘嘔、氣短く、欬嗽、上逆、膿血を欬唾し、臥

ノ誤ナランヽ膹鬱ハ憤懣ニ同ジ。（二曰）臑ハ字書ニ上臂ナリトアリ。臁ハ字書ニ側隅ナリトアリ。

すことを得ず、小便數にして欠し、遺失して止らない。

標病は、洒淅、寒熱、傷風、自汗、肩背が冷え痛み、（二曰）臑臂の前臁が痛む。

### 氣實は之を瀉す

子を瀉するには　澤瀉、葶藶、桑白皮、地骨皮。

濕を除くには　半夏、白礬、白茯苓、薏苡仁、木瓜、橘皮。

火を瀉するには　粳米、石膏、寒水石、知母、訶子。

滯を通ずるには　枳殼、薄荷、乾生薑、木香、厚朴、杏仁、皂莢、桔梗、紫蘇梗。

### 氣虛は之を補ふ

母を補ふには　甘草、人參、升麻、黃芪、山藥。

燥を潤すには　蛤蚧、阿膠、麥門冬、貝母、百合、天花粉、天門冬。

肺を斂むるには　烏梅、粟殼、五味子、芍藥、五倍子。

### 本熱は之を淸す

金を淸するには　黃芩、知母、麥門冬、梔子、沙參、紫苑、天門冬。

### 本寒は之を溫む

肺を温むるには　丁香、藿香、款冬花、檀香、白豆蔻、益智、縮砂、糯米、百部。

## 標寒は之を散ず

表を解するには　麻黄、葱白、紫蘇。

腎―志を藏し水に屬する。(一五)天一の源となすのである。聽を主り、骨を主り、二陰を主る。

本病は、諸寒、(一六)厥逆、骨痿、腰痛、腰が氷の如く冷え、足胻が腫れて寒じ、少腹が滿急し、疝瘕し、大便閉泄し、腥穢なるものを吐瀉し、すき透る淸冷な小便が無時に出る、消渇で飲物を好む。

標病は、發熱すれども惡熱せず、頭眩、頭痛、咽痛、舌燥き、脊と股の後廉が痛む。

## 水强は之を瀉す

子を瀉するには　大戟、牽牛。

腑を瀉するには　澤瀉、猪苓、車前子、防已、茯苓。

(一五)天一ハ北極ノ神名。此處ニテハ靈魂ヲ指スカ。

(一六)厥逆ハ冷却甚敷ヲ云フ。

(一七)命門ハ兩腎ノ中

水弱は之を補ふ

母を補ふには　人參、山藥。

氣には　知母、玄參、補骨脂、砂仁、苦參。

血には　黃蘗、枸杞、熟地黃、鎖陽、肉蓯蓉、阿膠、山茱萸、五味子。

本熱は之を攻む

下するは　傷寒少陰の病證があり口燥き咽乾くには大承氣湯。

本寒は之を溫む

裏を溫むるには　附子、乾薑、官桂、蜀椒、白朮。

標寒は之を解す

表を解するには　麻黃、細辛、獨活、桂枝。

標熱は之を涼す

熱を淸するには　玄參、連翹、甘草、猪膚。

(一七)命門——相火の原、天地の始である。精を藏し、血を生ずる、降れば漏となり、

間ヲ云フ。相火ハ君火ニ對スルノ名、三焦ノ熱ヲ云フ。
(一八)癃閉ハ尿閉。
(一九)奔豚ハ胸隔以下ノ内臓ガ拘急痙攣スルヲ云フ。
(二〇)膏淋ハ糖尿病。
(二一)崩中ハ子宮出血。

升れば鉛となる。三焦の元氣を主る。

本病は、前後(一八)癃閉、氣逆、裏急、疝痛、(一九)奔豚、消渇、(二〇)膏淋、精漏、精寒、赤白濁、尿に血が交り、(二一)崩中帶漏する。

### 火强は之を瀉す

相火を瀉するには　黃蘗、知母、牡丹皮、地骨皮、生地黃、茯苓、玄參、寒水石。

### 火弱は之を補ふ

陽を益するには　附子、肉桂、益智子、破故紙、沈香、川烏頭、硫黃、天雄、烏藥、陽起石、茴香、胡桃、巴戟天、丹砂、當歸、蛤蚧、覆盆。

### 精脫は之を固くす

滑を澀するには　牡蠣、芡實、金櫻子、五味子、遠志、山茱萸、蛤粉。

三焦―相火の用となつて命門の元氣を分布し、升降、出入して天地の間に游行することを主る。五臟、六腑、營衞、經絡、内外、上下、左右の氣を總領するもので、中清の府と號ける。上は納ることを主り、中は化することを主り、下は出すこと

(二二)瘖ハ口言フコト能ハザルヲ云フ。
(二三)尺脉緩濇之ヲ解㑊ト謂フ。
(二四)關格ハ閉塞。
(二五)暴注ハ劇シキ下痢。
(二六)嗌ハ咽喉ナリ。

を主る。
本病は、諸熱、瞀瘛、暴病、暴死、(二二)暴瘖、躁擾、狂越、譫妄、驚駭、諸血溢、血泄、諸氣逆、衝上、諸瘡瘍、痘疹、瘤核。
上が熱するときは、喘滿し、酸を嘔吐し、胸痞、脇痛、消化不良、頭に汗を出す。
中が熱するときは、善く腹をすかして瘦る。(二三)解㑊、中滿、種種の腹部脹大の諸病、聲があつて、これを鼓いて見ると鼓のやうな音がする。上下(二四)關格して通ぜず、霍亂、吐き下し。
下が熱するときは、(二五)暴注、下迫、水液渾濁、下部の腫滿、小便の痳瀝或は不通、大便の秘結や下痢。
上が寒するときは、飲食したものや痰水を吐き、胸痺し、前後引痛し、物を食し已つてからまた出る。
中が寒するときは、消化不良、寒脹、反胃、吐水、濕瀉して渴せぬ。
下が寒するときは、兩便禁ぜず、臍腹が冷えて疝痛する。
標病は、惡寒、戰慄し、精神の居所を喪つたやうになり、耳鳴、耳聾、(二六)嗌腫、喉

（二七）附ハ足ナリ。

痺の諸病。（二七）附腫、疼酸、驚駭、手の小指と次の指が利かなくなる。

### 實火は之を瀉す

發汗には　麻黄、柴胡、葛根、荊芥、升麻、薄荷、羌活、石膏。

吐するには　瓜蒂、滄鹽、薑汁。

下するには　芒消。

### 虚火は之を補ふ

上には　人參、天雄、桂心。

中には　人參、黄芪、丁香、木香、草果。

下には　附子、桂心、硫黄、人參、沈香、烏藥、破故紙。

### 本熱は之を寒す

上には　黄芩、連翹、梔子、知母、玄參、石膏、生地黄。

中には　黄連、連翹、生芐、石膏。

下には　黄蘗、知母、生芐、石膏、牡丹、地骨皮。

### 標熱は之を散ず

表を解するには　柴胡、細辛、荊芥、羌活、葛根、石膏。

膽―木に屬し少陽の相火であつて、萬物を發生し、決斷の宮、十一臟の主である。

（主るものは肝と同じ）

本病は、口苦く、苦汁を吐き、太息をしたがり、澹澹として人の將に捕へられんとする狀の如く、目昏し、不眠になる。

標病は、寒熱往來し、（二八）痁瘧、胸脇痛、頭額痛、耳痛んで鳴り聾し、瘰癧、結核、（二九）馬刀、足の小指と次の指が利かなくなる。

實火は之を瀉す

膽を瀉するには　龍膽、牛膽、猪膽、生蕤仁、生酸棗仁、黃連、苦茶。

虛火は之を補ふ

膽を溫むるには　人參、細辛、半夏、炒蕤仁、炒酸棗仁、當歸、地黃。

本熱は之を平にす

火を降すには　黃芩、黃連、芍藥、連翹、甘草。

（二八）瘧疾、一名痁病。

（二九）馬刀貝狀ノ隆腫。瘰癧ノ一種。

驚を鎮むるには　黒鉛、水銀。

和解するには　柴胡、芍薬、黄芩、半夏、甘草。

## 標熱は之を和す

胃――土に屬し受け容れることを主る。水穀を容るるの海である。（主るところは脾に同じ）

本病は、噎膈、反胃、中滿、腫脹、嘔吐、瀉痢、霍亂、腹痛、(三〇)消中、よく食ひたがるが消化せぬ。飲食の爲に傷み、胃管が心に當つて痛み兩脇を支へる。

標病は、發熱が蒸すやうに發つて身體の前部が熱し後部が寒する。物狂しく、譫語し、咽痺し、上齒が痛む。口眼喎斜、鼻痛、(三一)鼽衄、(三二)赤皶。

## 胃實は之を瀉す

濕熱には　大黄、芒消。

飲食には　巴豆、神麴、山査、阿魏、硇砂、鬱金、三稜、輕粉。

## 胃虛は之を補ふ

(三〇)消中ハ俗ニ云フカワキノ病。

(三一)鼽衄ハ鼻出血。

(三二)赤皶ハ酒皶鼻ヲ指スモノノ如シ。和名ザクロバナ。

濕熱には　蒼朮、白朮、半夏、茯苓、橘皮、生薑。
寒濕には　乾薑、附子、草果、官桂、丁香、肉豆蔲、人參、黄芪。

本熱は之を寒す

火を降すには　石膏、地黄、犀角、黄連。

本熱は之を解す

肌を解するには　升麻、葛根、豆豉。

大腸―金に屬し、變化を主る。傳送の官である。
本病は、大便の閉結、泄痢、下血、(三三)裏急後重、(三四)疽痔、脫肛、腸鳴りて痛む。
標病は、齒痛、喉痺、頸腫、口乾き、咽中が核の如く、鼽衄、目黄になり、手の大指次の指が痛む、宿食、發熱、寒慄。

腸實は之を瀉す

熱には　大黄、芒消、桃花、牽牛、巴豆、郁李仁、石膏。
氣には　枳殼、木香、橘皮、檳榔、

(三三)裏急後重ハ便前ニ腹中シボルガ如ク便後ニ肛門張ルヲ謂フ。
(三四)疽痔ハ痔漏ノ別名歟。

## 腸虚は之を補ふ

氣には　皂莢。
燥には　桃仁、麻仁、杏仁、地黄、乳香、松子、當歸、肉蓯蓉。
濕には　白朮、蒼朮、半夏、硫黄。
陷には　升麻、葛根。
脫には　龍骨、白堊、訶子、粟殼、烏梅、白礬、赤石脂、禹餘糧、石榴皮。

### 本熱は之を寒す

熱を淸するには　秦艽、槐角、地黄、黄芩。

### 本寒は之を温す

裏を温むるには　乾薑、附子、肉豆蔲。

### 標熱は之を散ず

肌を解するには　石膏、白芷、升麻、葛根。

小腸——水穀を分泌することを主る。受盛の官である。

本病は、大便に水穀が下り、小便短く、小便閉ぢ、小便に血が下り、小便が自ら通じ、大便後に出血し、小腸が氣痛し、宿食、夜熱が出て曉方に止む。

標病は　身熱して惡寒し、嗌痛、頷腫、口糜れ、耳聾する。

## 實熱は之を瀉す

氣には　木通、猪苓、滑石、瞿麥、澤瀉、燈草。

血には　地黄、蒲黄、赤茯苓、牡丹皮、巵子。

## 虛寒は之を補ふ

氣には　白朮、楝實、茴香、砂仁、神麯、扁豆。

血には　桂心、玄胡索。

## 本熱は之を寒す

火を降すには　黄蘗、黄芩、黄連、連翹、巵子。

## 標熱は之を散す

肌を解するには　藁本、羌活、防風、蔓荊。

膀胱—津液を主る。胞の府である。氣が化して此處から出るのである。州都の官と號ける。あらゆる病はこの膀胱に影響するものである。

本病は、小便が淋瀝し、或は短くて數〻出る。尿の色が黄赤或は白くなり、或は遺失し、或は氣痛する。

標病は、發熱、惡寒、頭痛、腰脊が強り、鼻が窒り、足の小指が利かなくなる。

### 實熱は之を瀉す

火を泄するには　滑石、猪苓、澤瀉、茯苓。

### 下虛は之を補ふ

熱には　黄蘗、知母。

寒には　桔梗、升麻、益智、烏藥、山茱萸。

### 本熱は之を利す

火を降すには　地黄、梔子、茵蔯、黄蘗、牡丹皮、地骨皮。

### 標寒は之を發す

表を發するには　麻黄、桂枝、羌活、蒼朮、防已、黄芪、木賊。

（一）經絡ト內臓ト藥物トノ關係。

# （一）引經報使

潔古珍珠囊

手の少陰は心　黃連、細辛。
手の太陽は小腸　藁本、黃蘗。
足の少陰は腎　獨活、桂、知母、細辛。
足の太陽は膀胱　羗活。
手の太陰は肺　桔梗、升麻、葱白、白芷。
手の陽明は大腸　白芷、升麻、石膏。
足の大陰は脾　升麻、蒼朮、葛根、白芍。
足の陽明は胃　白芷、升麻、石膏、葛根。
手の厥陰は心主　柴胡、牡丹皮。
足の少陽は膽　柴胡、靑皮。
足の厥陰は肝　靑皮、吳茱萸。
手の少陽は三焦　連翹、柴胡、上には地骨皮、中には靑皮、下には附子。

# 本草綱目序例

第二卷

# 本草綱目序例目錄第二卷

## 序例下

# 本草綱目序例第二卷

## 序例　下

### 藥名同異

五物同名　獨搖草　羌活、鬼臼、鬼督郵、天麻、薇銜。

四物同名　菫　菫菜、蒴藋、烏頭、石龍芮。

苦菜　貝母、龍葵、苦苣、敗醬。

鬼目　白英、羊蹄、紫葳、麂目。

紅豆　赤小豆、紅豆蔻、相思子、海紅豆。

白藥　桔梗、白藥子、栝樓、會州白藥。

豚耳　猪耳、菘菜、馬齒莧、車前。

## 三物同名

美草　甘草、旋花、山薑。
蜜香　木香、多木香、沈香。
鬼督郵　徐長卿、赤箭、獨搖草。
百枝　萆薢、防風、狗脊。
虎鬚　款冬花、沙參、燈心草。
解毒子　苦藥子、鬼臼、山豆根。
豕首　猪頭、蠡實、天門冬。
狗脊　犬骨、鬼箭、猫兒刺。
仙人杖　枸杞、仙人草、立死竹。
白幕　天雄、白英、白微。
守田　半夏、菵草、狼尾草。
芑　地黃、薏苡、白黍。
石花　瓊枝菜、烏韭、鐘乳石汁。
牛舌　牛之舌、車前、羊蹄。

山薑　美草、蒼朮、杜若。
女萎　萎蕤、蔓楚、紫葳。
王孫　黃芪、猢猻、牡蒙。
接骨草　山蒴藋、續斷、攀倒甑。
鹿腸　敗醬、玄參、斑龍腸。
羊乳　羜、羊乳、沙參、枸杞。
山石榴　金罌子、小蘖、杜鵑花。
苦蘵　敗醬、苦參、酸漿草。
木蓮　木饅頭、木蘭、木芙蓉。
立制石　理石、礜石、石膽。
水玉　半夏、玻瓈、水精石。
黃牙　金、硫黃、金牙石。
淡竹葉　水竹葉、碎骨子、鴨跖草。
虎膏　虎脂、豨薟、天南星。

酸漿　米漿水、燈籠草、三葉酸草。

木蜜　大棗、蜜香、枳椇。

## 二物同名

淫羊藿　仙靈脾、天門冬。

黑三稜　京三稜、烏芋。

地精　人參、何首烏。

金釵股　釵子股、忍冬藤。

神草　人參、赤箭。

長生草　羌活、紅茂草。

水香　蘭草、澤蘭。

千兩金　淫羊藿、續隨子。

香草　蘭草、零陵草。

百兩金　牡丹、百兩金草。

香菜　香薷、羅勒。

都梁香　蘭草、澤蘭。

石龍　蜥蜴、葒草、絡石。

石蜜　乳糖、櫻桃、蜂蜜。

黃芝　芝草、黃精。

知母　蝭母、沙參。

龍銜　蛇含、黃精。

薺苨　桔梗、杏葉沙參。

芰草　黃芪、菱。

仙茅　長松、婆羅門參。

兒草　知母、芫花。

墻蘼　蛇床、營實。

逐馬　玄參、丹參。

牡蒙　紫參、王孫。

地筋　白茅根。菅茅根。

杜衡　杜若、馬蹄香。

香蘇　爵牀、水蘇。
孩兒菊　蘭草、澤蘭。
蘭根　蘭草、白茅。
木芍藥　牡丹、赤芍藥。
蕳根　蘭草、防風。
夏枯草　乃東草、茺蔚。
夜合　合歡、何首烏。
甘露子　地蠶、甘蕉子。
馬薊　朮、大薊。
不死草　卷柏、麥門冬。
烏韮　石髪、麥門冬。
紫河車　蚤休、人胞衣。
草蒿　青蒿、青葙子。
馬肝石　何首烏、烏鬚石。

鼠姑　牡丹、鼠婦蟲。
漏蘆　飛廉、鬼油麻。
地血　紫草、茜草。
白及　連及、黄精。
藥實　貝母、黄藥子。
黄昏　合歡、王孫。
戴椹　黄芪、旋覆花。
雷丸　竹苓、兎葵。
龍珠　赤珠、石龍芻。
苦薏　野菊、蓮子心。
地葵　蒼耳、地膚子。
伏兎　飛廉、茯苓。
黄蒿　鼠麴、黄花蒿。
火杴　茺蔚、豨薟。

露葵　葵菜、蓴。
千金藤　解毒之草、陳思岌。
香茅　鼠麹草、菁茅。
仙人掌　草射干。
石髪　烏韭、陟釐。
羊婆奶　沙参、蘿摩子。
石衣　烏韭、陟釐。
血見愁　茜草、地錦。
地椒　野小椒、水楊梅。
鷄腸草　蘩蔞之類、鵞不食草。
地節　葳蕤、枸杞。
鳳尾草　金星草、貫衆。
莞草　白芷、茵芋。
紫金牛　草根が巴戟に似て居る。射干。

益明　茺蔚、地膚。
忍冬　金銀藤、麥門冬。
麗春　罌粟、仙女蒿。
旱蓮　鱧腸、連翹。
蘭華　蘭草、連翹。
大蓼　葒草、馬蓼。
鬼鍼　鬼釵草、馬歯爛竹。
山葱　茖葱、藜蘆。
斑杖　虎杖、攀倒甑。
鹿葱　萱草、藜蘆。
芒草　芭茅、莽草。
扁竹　扁蓄、射干。
妓女　萱草、地膚苗。
通草　木通、通脱木。

天豆　雲實、石龍芮。
臙脂菜　藜、落葵。
白草　白斂、白英。
燕尾草　蘭草、慈姑。
臭草　雲實、茺蔚。
紅內消　紫荊皮、何首烏。
水萍　浮萍、慈姑。
承露仙　人肝藤、伏雞子根。
水葵　水荇、蓴。
冬葵子　葵菜、姑活。
水芝　芡實、冬瓜。
三白草　侯農之草、牽牛。
天葵　兔葵、落葵。
猢猻頭　鱧腸、地錦。

重臺　蚤休、玄參。
羊腸　羊之腸、羊桃。
更生　菊、雀翹。
白昌　商陸、水菖蒲。
地莔　草、赤地利。
龍鬚　席草、海菜。
林蘭　石斛、木蘭。
象膽　象の膽、蘆薈。
杜蘭　石斛、木蘭。
馬尾　馬の尾、商陸。
屏風　防風、水莕。
鴉臼　烏桕木、鵋鵩鳥。
赤葛　何首烏、烏斂母。
鹿藿　野綠豆、葛苗。

水花　浮萍、浮石。
菩提子　薏苡、無患子。
山芋　山藥、旱芋。
相思子　木紅豆、郎君子蟲。
石南　風藥、南藤。
雞骨香　沈香、降眞香。
胡菜　胡荽、芸薹。
白馬骨　獸之骨、又木名。
胡豆　蠶豆、豌豆。
金盞銀臺　水仙花、王不留行。
水栗　菱實、萍蓬草根。
胡王使者　羌活、白頭翁。
獨搖　白楊、扶移。
桑上寄生　桑耳、

酸母　酸模、酢漿草。
景天　愼火草、螢火蟲。
鬼蓋　人參、地菌。
王瓜　土瓜、菝葜。
羅摩　雀瓢、百合。
黃瓜　胡瓜、栝樓。
甜藤　甘藤、忍冬。
金罌　金櫻子、安石榴。
杭子　山査、楊梅。
木綿　古貝、杜仲。
陽桃　獼猴桃、五斂子。
獐頭　獐首、土菌。
菥蓂　大薺、白棘。
鼠矢　鼠糞、山茱萸。

苦心　知母、沙參。
芰　蓳、烏頭。
梫木　桂、又木名。
茆　蓴、女菀。
樺木　樺皮、木芙蓉。
榛　榛子、厚朴。
風藥　石南、澤蘭。
椑　鼠李、漆柿。
冬青　凍青、女貞。
櫬　梧桐、木槿。
處石　慈石、玄石。
寒水石　石膏、凝水石。
石英　紫石英、水晶。
蜃　車螯、蜃蛟。

日及　木槿、扶桑。
烏犀　犀角、皂莢。
大青　大青草、扁青石。
文蛤　海蛤、五倍子。
絡石　草、石。
果蓏　蝸蠃、栝樓。
將軍　大黄、硫黄。
石鯪　絡石藤、穿山甲。
石芝　芝草、石腦。
鉛華　胡粉、黃丹。
石腦　石芝、太一餘糧。
石綠　綠青、綠鹽。
石鹽　礜石、光明鹽。
石蠶　沙虱、甘露子。

古斯　樟寄生、雀甕蟲。
地蠶　蠐螬、甘露子。
沙虱　水蟲、石蠶。
青蚨　蚨蟬、銅錢。
鼯鼠　螻蛄、鼯鼠。
蝸蠃　蝸牛、螺螄。
負盤　蜚蠊、行夜。
土龍　蚯蚓、鼉龍。
魚師　有毒の魚、魚狗鳥。
人魚　鮧魚、鯢魚。
天狗　獾、魚狗鳥。
山雞　鸐雉、鷩雉。
鬼鳥　姑獲鳥、鬼車鳥。
無心　薇銜、鼠麴草。

鴷　田間小鳥、魚狗鳥。
地雞　土菌、鼠婦。
鶡　伯勞、杜鵑。
蟪蛄　蟬、螻蛄。
飛生　飛生蟲、鼯鼠。
負蠜　鼠負、阜螽。
黄頬魚　鱤魚、黄顙魚。
白魚　鰟魚、衣魚。
魚虎　土奴魚、魚狗鳥。
鯊魚　吹沙魚、鮫魚。
水狗　獺、魚狗鳥。
扶老　禿鶖、靈壽木。
醴泉　瑞水の名、人口中の津。
朝開暮落花　木槿、狗溺臺。

## 比類隱名

土青木香　馬兜鈴
鬼油麻　漏蘆
山牛蒡　大薊
杜牛膝　天名精
甜葶藶　菥蓂
天蔓青　天名精
黃芫花　蕘花
野雞冠　青葙子
黃大戟　芫花
龍腦薄荷　水蘇
野紅花　大戟
野園荽　鵝不食草
草鵝頭　貫衆
野甜瓜　土瓜

野天麻　茺蔚
甜桔梗　薺苨
草續斷　石龍芻
野脂麻　玄參
木羊乳　丹參
草甘遂　蚤休
杏葉沙參　薺苨
山莧菜　牛膝
胡薄荷　積雪草
青蛤粉　靑黛
竹園荽　海金沙
野胡蘿蔔
野茴香　馬芹
野萱花　射干

野天門冬　百部
草血竭　地錦
土細辛　杜衡
草鳶頭　鳶尾
草附子　香附
木藜蘆　鹿驪
金蕎麥　羊蹄
山大黄　酸模
土萆薢　土茯苓
白菝葜　萆薢
龍鱗薜荔　長春藤
便牽牛　牛蒡
水甘草
草雲母　雲實

黒狗脊　貫衆
水巴戟　香附
獐耳細辛　及已
草天雄　蘭のやうな狀をした草である
土附子　草烏頭
山蕎麥　赤地利
鬼蒟蒻　天南星
牛舌大黄　羊蹄
刺猪苓　土茯苓
赤薜荔　赤地利
夜牽牛　紫菀
山甘草　紫金藤
木甘草
草硫黄　芡實

草鍾乳　韮菜

山地栗　土茯苓

羞天花　鬼臼

茅質汗

木天蓼

木蓮蓬　木饅頭

野槐　苦參

石菴䕡　骨碎補

白靈砂　粉霜

木半夏

草鼈甲　乾茄

羞天草　海芋

土質汗　茺蔚

野蘭　漏蘆

木芙蓉　拒霜

胡韮子　補骨脂

草麝香　鬱金香

硬石膏　長石

野茄　草耳

野生薑　黃精

# 相須相使相畏相惡諸藥

徐之才の藥對所載のものに今更にその後諸家の本草に增益されたものを加へたものである。

**甘草** 朮、苦參、乾漆が使となる。遠志を惡む。猪肉を忌む。

**黃耆** 茯苓が使となる。白蘚、龜甲を惡む。

**人參** 茯苓、馬藺が使となる。鹵鹹、溲疏を惡む。五靈脂を畏る。

**沙參** 防已を惡む。

**桔梗** 節皮が使となる。白及、龍膽、龍眼を惡む。猪肉を忌む。砒を伏す。

**黃精** 梅實を忌む。

**葳蕤** 鹵鹹を畏る。

**知母** 黃蘗及酒を得て良し。蓬砂、鹽を伏す。

**朮** 防風、地楡が使となる。桃李、雀肉、菘菜、青魚を忌む。

狗脊　萆薢が使となる。莎草、敗醬を惡む。

貫衆　雚菌、赤小豆が使となる。石鍾乳を伏す。

巴戟天　覆盆子が使となる。雷丸、丹參、朝生を惡む。

遠志　茯苓、龍骨、冬葵子を得て良し。眞珠、飛廉、藜蘆、齊蛤を畏る。

淫羊藿　薯蕷、紫芝が使となる。酒を得て良し。

玄参　黄芪　乾薑、大棗、山茱萸を惡む。

地楡　髮を得て良し。麥門冬を惡む。丹砂、雄黄、硫黄を伏す。

丹参　鹹水を畏る。

紫参　辛夷を畏る。

白頭翁　蠡實が使となる。酒を得て良し。

白及　紫石英が使となる。理石を惡む。杏仁、李核仁を畏る。

右草の一

黄連　黄芩、龍骨、理石が使となる。猪肉を忌む。牛膝、款冬を畏る。冷水、菊花、玄參、白殭蠶、白鮮、芫花を惡む。

胡黄連　猪肉を忌む。菊花、玄參、白鮮を惡む。

黄芩　龍骨、山茱萸が使となる。葱實を惡む。丹砂、牡丹、藜蘆を畏る。

秦艽　菖蒲が使となる。牛乳を畏る。

柴胡　半夏が使となる。皂莢を惡む。女菀、藜蘆を畏る。

前胡　半夏が使となる。皂莢を惡む。藜蘆を畏る。

防風　萆薢を畏る。乾薑、藜蘆、白斂、芫花を惡む。

羌獨活　蠡實が使となる。

苦參　玄參が使となる。貝母、漏蘆、兎絲子を惡む。汞、雌黄、焰消を伏す。

白鮮　桔梗、茯苓、萆薢、螵蛸を惡む。

貝母　厚朴、白薇が使となる。桃花を惡む。秦艽、莽草、礜石を惡む。

龍膽　貫衆、赤小豆が使となる。地黄、防葵を惡む。

細辛　曾青、棗根が使となる　生菜、狸肉を忌む。黄芪、狼毒、山茱萸を惡む。滑石、消石を畏る。

白薇　黄芪、乾薑、大棗、山茱萸、大黄、大戟、乾漆を惡む。

## 右草の二

當歸　藺茹、濕麪を惡む。雄黄を制す。菖蒲、生薑、海藻、牡蒙を畏る。

芎藭　白芷が使となる。黄連を畏る。雌黄を伏す。

蛇牀　牡丹、貝母、巴豆を惡む。

藁本　藺茹を惡む。青葙子を畏る。

白芷　當歸が使となる。旋覆花を惡む。雄黄、硫黄を制す。

牡丹　蒜、胡荽を忌む。砒を伏す。兎絲子、貝母、大黄を畏る。

芍藥　須丸、烏藥、没藥が使となる。石斛、芒消を惡む。消石、鼈甲、小薊を畏る。

杜若　辛夷、細辛を得て良し。柴胡、前胡を惡む。

補骨脂　胡桃、胡麻を得て良し。甘草を惡む。諸血、芸薹を忌む。

縮砂蜜　白檀香、豆蔻、人參、益智、黄蘗、茯苓、赤白石脂が使となる。訶子、鼈甲、白蕪荑を得て良し。

蓬莪茂　酒、醋を得て良し。

香附子　芎藭、蒼朮、醋、小兒の尿を得て良し。

零陵香　三黄、硃砂を伏す。

澤蘭　防已が使となる。

積雪草　硫黄を伏す。

香薷　山白桃を忌む。

## 右草の三

菊花　朮、枸杞根、桑根白皮、青葙葉が使となる。

菴蕳　荊子、薏苡が使となる。

艾葉　苦酒、香附が使となる。

茺蔚　三黄、砒石を制す。

薇銜　秦皮を得て良し。

夏枯草　土瓜が使となる。汞砂を伏す。

紅藍花　酒を得てよし。

續斷　地黄が使となる。雷丸を惡む。

漏蘆　連翹が使となる。

飛廉　烏頭を得て良し、麻黃を忌む。

葈耳　猪肉、馬肉、米泔を忌む。

天名精　垣衣、地黃が使となる。

蘆笋　巴豆を忌む。

麻黃　厚朴、白薇が使となる。辛夷、石韋を惡む。

右草の四

地黃　酒、麥門冬、薑汁、縮砂を得て良し。貝母を惡む。蕪荑を畏る。葱、蒜、蘿蔔、諸血を忌む。

牛膝　螢火、龜甲、陸英を惡む。白前を畏る。牛肉を忌む。

紫菀　欵冬が使となる。天雄、藁本、雷丸、遠志、瞿麥を惡む。茵蔯を畏る。

女菀　鹵鹹を畏る。

冬葵子　黃芩が使となる。

麥門冬　地黃、車前が使となる。欵冬、苦芺、苦瓠を惡む。苦參、靑葙、木耳を畏る。石鍾乳を伏す。

**款冬花**　杏仁が使となる、紫菀を得て良く。玄参、皂莢、消石を悪む。貝母、麻黄、辛夷、黄芩、黄芪、連翹、青葙を畏る。

**佛耳草**　款冬が使となる。

**決明子**　蓍實が使となる。大麻子を悪む。

**瞿麥**　牡丹、蘘草が使となる、螵蛸を悪む。丹砂を伏す。

**葶藶**　楡皮が使となる。酒、大棗を得て良し。白殭蠶、石龍芮を悪む。

**車前子**　常山が使となる。

**女青**　蛇銜が使となる。

**藎草**　鼠負を畏る。

**蒺藜**　烏頭が使となる。

右草の五

**大黄**　黄芩が使となる。乾漆を悪む。冷水を忌む。

**商陸**　大蒜を得て良し。犬肉を忌む。硇砂、砒石、雌黄を伏す。

**狼毒**　大豆が使となる。麥句薑を悪む。醋、占斯、密陀僧を畏る。

狼牙　蕪荑が使となる。地楡、棗肌を惡む。

藺茹　甘草が使となる。麥門冬を惡む。

大戟　小豆が使となる　棗を得て良し。薯蕷を惡む。菖蒲、蘆葦、鼠屎を畏る。

澤漆　小豆が使となる。薯蕷を惡む。

甘遂　瓜蒂が使となる。遠志を惡む。

莨菪　蟹、犀角、甘草、升麻、綠豆を畏る。

蓖麻　炒豆を忌む。丹砂、粉霜を伏す。

常山　玉乳を畏る。葱、菘菜を忌む。砒石を伏す。

藜蘆　黃連が使となる。大黃を惡む。葱白を畏る。

附子　地膽が使となる。蜀椒、食鹽を得て下命門に達す。蜈蚣、豉汁を惡む。防風、甘草、人參　黃芪、綠豆、烏韭、小兒の尿、犀角を畏る。

天雄　遠志が使となる。腐婢、豉汁を惡む。

白附子　火を得て良し。

烏頭　遠志、莽草が使となる。藜蘆、豉汁を惡む。飴、糖、黑豆、冷水を畏る。丹

砂、砒石を伏す。

天南星　蜀漆が使となる。火、牛膽を得て良し。莽草を惡む。附子、乾薑、防風、生薑を畏る。雄黃、丹砂、焰消を伏す。

半夏　附子、射干、柴胡が使となる。皂莢、海藻、飴、糖、羊血を惡む。生薑、乾薑、秦皮、龜甲、雄黃を畏る。

鬼臼　垣衣を畏る。

羊躑躅　巵子を畏る。諸石及麪を惡む。丹砂、硇砂、雌黃を伏す。

芫花　決明が使となる。醋を得て良し。

莽草　黑豆、紫河車を畏る。

石龍芮　巴戟が使となる。蛇脫皮、吳茱萸を畏る。

蕁麻　人尿を畏る。

鉤吻　半夏が使となる。黃芩を惡む。

右草の六

菟絲子　薯蕷、松脂が使となる。酒を得て良し。雚菌を惡む。

**五味子**　蓯蓉が使となる。萎蕤を惡む。烏頭に勝つ。

**牽牛子**　乾薑、青木香を得て良し。

**紫葳**　鹵鹹を畏る。

**栝樓根**　枸杞が使となる。乾薑を惡む。牛膝、乾漆を畏る。

**黄環**　鳶尾が使となる。茯苓、防已、乾薑を惡む。

**天門冬**　地黄、貝母、垣衣が使となる。鯉魚を忌む。曾生、浮萍を畏る。雄黄、硇砂を制す。

**何首烏**　茯苓が使となる。葱、蒜、蘿蔔、諸血、無鱗魚を忌む。

**萆薢**　薏苡が使となる。前胡、柴胡、牡蠣、大黄、葵根を畏る。

**土茯苓**　茶を忌む。

**白斂**　代赭が使となる。

**威靈仙**　茶、麪湯を忌む。

**茜根**　鼠姑を畏る。雄黄を制す。

**防已**　殷孽が使となる。細辛を惡む。萆薢、女菀、鹵鹹を畏る。雄黄、消石の毒を

殺す。

**絡石**　杜仲、牡丹が使となる。鐵落を惡む。貝母、菖蒲を畏る。蘗毒を殺す。

**澤瀉**　海蛤、文蛤を畏る。

右草の七

**石菖蒲**　秦皮、秦艽が使となる。麻黃、地膽を惡む。飴、糖、羊肉、鐵器を忌む。

**石斛**　陸英が使となる。凝水石、巴豆を惡む。雷丸、殭蠶を畏る。

**石韋**　滑石、杏仁、射干が使となる。菖蒲を得て良し。丹砂、礬石を制す。

**烏韭**　垣衣が使となる。

右草の八

**栢葉栢實**　瓜子、桂心、牡蠣が使となる。菊花、羊蹄、諸石及麪、麹を畏る。

**桂**　人參、甘草、麥門冬、大黃、黃芩を得て中を調へ氣を益す。柴胡、紫石英、乾地黃を得て吐逆を療す。生葱、石脂を畏る。

**辛夷**　芎藭が使となる。五石脂を惡む。菖蒲、黃連、蒲黃、石膏、黃環を畏る。

**沈香、檀香**　火を見ることを畏る。

麒麟竭　密陀僧を得て良し。

丁香　鬱金を畏る。火を忌む。

## 右木の一

黄蘗木　乾漆を惡む。硫黄を伏す。

厚朴　乾薑が使となる。澤瀉、消石、寒水石を惡む。豆を忌む。

杜仲　玄參、蛇脫皮を惡む。

乾漆　半夏が使となる。雞子、紫蘇、杉木、漆姑、草蟹を畏る。猪脂を忌む。

桐油　酒を畏る。烟を忌む。

楝實　茴香が使となる。

槐實　景天が使となる。

秦皮　苦瓠、防葵、大戟が使となる。呉茱萸を惡む。

皂莢　栢實が使となる。麥門冬を惡む。人參、苦參、空靑を畏る。丹砂、粉霜、硫黄、硇砂を伏す。

巴豆　芫花が使となる。火を得て良し、蓑草、牽牛を惡む。大黄、藜蘆、黄連、蘆

筍、醬豉、豆汁、冷水を畏る。

**蘗花**　決明が使となる。

右木の二

**桑根白皮**　桂心、續斷、麻子が使となる。

**酸棗**　防已を惡む。

**山茱萸**　蓼實が使となる。桔梗、防風、防已を惡む。

**五加皮**　遠志が使となる。玄參、蛇皮を畏る。

**溲疏**　漏蘆が使となる。

**牡荊實**　防已が使となる。石膏を惡む。

**蔓荊子**　烏頭、石膏を惡む。

**欒荊子**　決明が使となる。石膏を惡む。

**石南**　五加皮が使となる。小薊を惡む。

右木の三

**茯苓、茯神**　馬藺が使となる。甘草、防風、芍藥、麥門冬、紫石英を得て五臟を療

す。白歛、米酢、酸物を惡む。地楡、秦艽、牡蒙、龜甲、雄黃を畏る。

**雷丸**　黃朴、芫花、蓄根、茘實が使となる。葛根を惡む。

**桑寄生**　火を忌む。

**竹瀝**　薑汁が使となる。

**占斯**　茱萸が使となる。

### 右木の四

**杏仁**　火を得て良し。黃芩、黃芪、葛根を惡む。蓑草を畏る。

**桃仁**　香附が使となる。

**榧實殼**　綠豆と反して人を殺す。

**秦椒**　栝樓、防葵を惡む。雌黃を畏る。

**蜀椒**　杏仁が使となる。鹽を得て良し。款冬花、防風、附子、雄黃、槖吾、冷水、麻仁、漿を畏る。

**吳茱萸**　蓼實が使となる。丹參、消石、白堊を惡む。紫石英を畏る。

**食茱萸**　紫石英を畏る。

**石蓮子**　茯苓、山藥、白朮、枸杞子を得て良し。
**蓮蘂鬚**　地黃、葱、蒜を忌む。
**荷葉**　桐油を畏る。

右　果　部

**麻花**　䗪蟲が使となる。
**麻仁**　茯苓、牡蠣、白微を畏る。
**小麥麪**　漢椒、蘿蔔を畏る。
**大麥**　石蜜が使となる。
**罌粟殼**　醋、烏梅、橘皮を得て良し。
**大豆**　前胡、杏仁、牡蠣、烏喙、諸膽汁を得て良し。五參、龍膽、猪肉を惡む。
**大豆黃卷**　前胡、杏子、牡蠣、天雄、烏喙、鼠屎、石蜜を得て良し。海藻、龍膽を惡む。
**諸豆粉**　杏仁を畏る。

右　穀　部

**生薑** 秦椒が使となる。黄芩、黄連、天鼠糞を惡む。半夏、南星、莨菪の毒を殺す。

**乾薑** 同上。

**蘹香** 酒を得て良し。

**菥蓂子** 荊實、細辛を得て良し。乾薑、苦參を惡む。

**薯蕷** 紫芝が使となる。甘遂を惡む。

**雚菌** 酒を得て良し。雞子を畏る。

**六芝** いづれも薯蕷が使となる。髮を得て良し。麻子仁、牡桂、白瓜子を得て人に益あり。扁靑、茵蔯蒿を畏る。

## 右 菜 部

**金** 錫を惡む。水銀、翡翠石、餘甘子、驢馬脂を畏る。

**朱砂銀** 石亭脂、慈石、鐵を畏る。諸血を忌む。

**生銀** 錫を惡む。石亭脂、慈石、荷葉、蕈灰、羚羊肉、烏賊骨、黄連、甘草、飛廉、鼠尾、龜甲、生薑、地黄、羊脂、蘇子油を畏る。羊血、馬目毒公を惡む。

**赤銅** 蒼朮、巴豆、乳香、胡桃、慈姑、牛脂を畏る。

**黒鉛**　紫背天葵を畏る。

**胡粉**　雌黄を惡む。

**錫**　五靈脂、伏龍肝、羖羊角、馬鞭草、地黄、巴豆、蓖麻、薑汁、砒石、硇砂を畏る。

**諸鐵**　石亭脂を制す。慈石、皂莢、乳香、灰、炭、朴消、硇砂、鹽、滷、猪犬脂、茘枝を畏る。

右金石の一

**玉屑**　鹿角を惡む。蟾肪を畏る。

**玉泉**　款冬花、青竹を畏る。

**青琅玕**　水銀を得て良し。錫の毒を殺す。雞骨を畏る。

**白石英**　馬目毒公を惡む。

**紫石英**　長石が使となる。茯苓、人參、芍藥を得て心中の結氣を主る。天雄、菖蒲を得て霍亂を主る。鮀甲、黄連、麥句薑を惡む。扁靑、附子及び酒を畏る。

**雲母**　澤瀉が使となる。徐長卿、羊血を惡む。鮀甲、礬石、東流水、百草上の露、

茅屋の漏水を畏る。汞を制し丹砂を伏す。

**丹砂** 磁石を惡む。鹹水、車前、石韋、皂莢、決明、瞿麥、南星、烏頭、地楡、桑椹、紫河車、地丁、馬鞭草、地骨皮、陰地決、白附子を畏る。諸血を忌む。

**水銀** 磁石、砒石、黑鉛、硫黃、大棗、蜀椒、紫河車、松脂、松葉、荷葉、穀精草、金星草、萱草、夏枯草、莨菪子、雁來紅、馬蹄香、獨脚蓮、水慈姑、瓦松、忍冬を畏る。

**汞粉** 磁石、石黃、黑鉛、鐵漿、陳醬、黃連、土茯苓を畏る。一切の血を忌む。

**粉霜** 硫黃、蕎麥稈灰を畏る。

## 石の二

**雄黃** 南星、地黃、萵苣、地楡、黃芩、白芷、當歸、地錦、苦參、五加皮、紫河車、五葉藤、鵞腸草、雞腸草、鵞不食草、圓桑葉、蝟脂を畏る。

**雌黃** 黑鉛、胡粉、芎藭、地黃、獨帚、益母、羊不食草、地楡、瓦松、五加皮、冬瓜汁を畏る。

**石膏** 雞子が使となる。鐵を畏る。莽草、巴豆、馬目毒公を惡む。

理石　滑石が使となる。麻黄を惡む。
方解石　巴豆を惡む。
滑石　石韋が使となる。曾青を惡む。雄黄を制す。
不灰木　三黄、水銀を制す。
五色石脂　黄芩、大黄、官桂を畏る。
赤石脂　大黄、松脂を惡む。芫花、豉汁を畏る。
白石脂　燕屎が使となる。松脂を惡む。黄芩、黄連、甘草、飛廉、毒公を畏る。
黄石脂　曾青が使となる。細辛を惡む。蜚蠊、黄連、甘草を畏る。卯末を忌む。
孔公孽　木蘭が使となる。朮、細辛を惡む。羊血を忌む。
石鍾乳　蛇牀が使となる。牡丹、玄石、牡蒙、人參、朮を惡む。羊血を忌む。紫石英、蘘草、韮實、獨蒜、胡葱、胡荽、麥門冬、猫兒眼草を畏る。
殷孽　防已を惡む。朮を畏る。

右石の三

陽起石　桑螵蛸が使となる。澤瀉、雷丸、菌桂、石葵、蛇脫皮を惡む。兎絲子を畏

る。羊血を忌む。

**慈石**　柴胡が使となる。牡丹、莽草を惡む。黄石脂を畏る。鐵毒を殺す。金を消す。
丹砂を伏す。水銀を養ふ。

**玄石**　松脂、栢實、菌桂を畏る。

**代赭石**　乾薑が使となる。天雄、附子を畏る。

**禹餘糧**　牡丹が使となる。五金、三黄を制す。

**太一餘糧**　杜仲が使となる。貝母、菖蒲、鐵落を畏る。

**空靑、曾靑**　兎絲子を畏る。

**石膽**　水英が使となる。牡桂、菌桂、辛夷、白微、芫花を畏る。

**礜石**　火を得て良し。鉛丹、棘鍼が使となる。水を畏る。馬目毒公、虎掌、細辛、
鶩屎を惡む。羊血を忌む。

**砒石**　冷水、綠豆、醋、靑鹽、蒜、消石、水蓼、常山、益母、獨帚、菖蒲、朮、律、
波稜、萵苣、鶴頂草、三角酸、鵞不食草を畏る。

**礞石**　焰消を得て良し。

## 右石の四

**大鹽**　漏蘆が使となる。

**朴消**　石韋が使となる。麥句薑、京三稜を畏る。

**凝水石**　地楡を畏る。

**消石**　火が使となる。曾青、苦參、苦菜を惡む。女菀、杏仁、竹葉粥を畏る。

**硇砂**　五金、八石を制す。羊血を忌む。一切の酸、漿水、醋、烏梅、牡蠣、卷栢、蘿蔔、獨帚、羊蹄、商陸、冬瓜、蒼耳、蠶沙、海螵蛸、羊䯒骨、羊躑躅、魚腥草、河豚魚、膠を畏る。

**蓬砂**　知母、芸薹、紫蘇、甑帶、何首烏、鵞不食草を畏る。

**石硫黃**　曾青、石亭脂が使となる。細辛、朴消、鐵、醋、黑錫、猪肉、鴨汁、餘甘子、桑灰、益母、天鹽、車前、黃蘗、石韋、蕎麥、獨帚、地骨皮、地楡、蛇牀、蓖麻、兎絲、蠶沙、紫荷、波薐、桑白皮、馬鞭草を畏る。

**礬石**　甘草が使となる。牡蠣を惡む。麻黃、紅心灰、藋を畏る。

**綠礬**　醋を畏る。

## 右石の五

**蜜臘** 芫花、齊蛤を惡む。

**蜂子** 黄芩、芍藥、白前、牡蠣、紫蘇、生薑、冬瓜、苦蕒を畏る。

**露蜂房** 乾薑、丹參、黄芩、芍藥、牡蠣を惡む。

**桑螵蛸** 龍骨を得て精を止む。旋覆花、戴椹を畏る。

**白殭蠶** 桔梗、茯苓、茯神、萆薢、桑螵蛸を惡む。

**晩蠶沙** 硇砂、焔消、粉霜を制す。

**斑蝥** 馬刀が使となる。糯米、小麻子を得て良し、膚青、豆花、甘草を惡む。巴豆、丹參、空青、黄連、黒豆、蘸汁、葱、茶、醋を畏る。

**芫青、地膽、葛上亭長** いづれも斑蝥に同じ。

**蜘蛛** 蔓青、雄黄を畏る。

**水蛭** 石灰、食鹽を畏る。

**蠐螬** 蜚蠊が使となる。附子を惡む。

**蜣蜋** 石膏、羊角、羊肉を畏る。

**衣魚**　芸草、莽草、萵苣を畏る。

**䗪蟲**　皂莢、菖蒲、屋遊を畏る。

**蜚䖟**　麻黄を惡む。

**蜈蚣**　蛞蝓、蜘蛛、白鹽、雞屎、桑白皮を畏る。

**蚯蚓**　葱、鹽を畏る。

**蝸牛、蛞蝓**　鹽を畏る。

右蟲部

**龍骨、龍齒**　人參、牛黄、黒豆を得て良し。石膏、鐵器を畏る。魚を忌む。

**龍角**　蜀椒、理石、乾漆を畏る。

**鼉甲**　蜀漆が使となる。芫花、甘遂、狗膽を畏る。

**蜥蜴**　硫黄、斑蝥、蕪荑を惡む。

**蛇蛻**　火を得て良く、慈石及び酒を畏る。

**白花蛇、烏蛇**　酒を得て良し。

**鯉魚膽**　蜀漆が使となる。

烏賊魚骨　白及、白歛、附子を惡む。

河豚魚　橄欖、甘蔗、蘆根、糞汁、魚茗木、烏蓲草根を畏る。

### 右鱗部

龜甲　沙參、蜚蠊を惡む。狗膽を畏る。

鼈甲　礬石、理石を惡む。

牡蠣　貝母が使となる。甘草、牛膝、遠志、蛇牀子を得て良し。麻黄、呉茱萸、辛夷を惡む。硇砂を伏す。

蚌粉　石亭脂、硫黄を制す。

馬刀　火を得て良し。

海蛤　蜀漆が使となる。狗膽、甘遂、芫花を畏る。

### 右介部

伏翼　莧實、雲實が使となる。

夜明沙　白歛、白微を惡む。

五靈脂　人參を惡む。

右禽部

**羖羊角**　兎絲子が使となる。
**羊脛骨**　硇砂を伏す。
**羖羊屎**　粉霜を制す。
**牛乳**　秦艽、不灰木を制す。
**馬脂、駝脂**　五金を柔ぐ。
**阿膠**　火を得て良し。薯蕷が使となる。大黄を畏る。
**牛黄**　人參が使となる。牡丹、菖蒲を得て耳目を利す。龍骨、龍膽、地黃、常山、蜚蠊を惡む。牛膝、乾漆を畏る。
**犀角**　松脂、升麻が使となる。雷丸、雚菌、烏頭、烏喙を惡む。
**熊膽**　防巳、地黃を惡む。
**鹿茸**　麻勃が使となる。
**鹿角**　杜仲が使となる。
**鹿角膠**　火を得て良し。大黄を畏る。

**麋脂** 桃李を忌む。大黄を畏る。

**麝香** 大蒜を忌む。

**猬皮** 酒を得て良し。桔梗、麥門冬を畏る。

**猬脂** 五金、八石を制す。雄黄を伏す。

右 獸 部

# 相反諸藥

藥凡て三十六種

甘草　大戟、芫花、甘遂、海藻に反す。

大戟　芫花、海藻に反す。

烏頭　貝母、栝樓、半夏、白歛、白及に反す。

藜蘆　人參、沙參、丹參、玄參、苦參、細辛、芍藥、狸肉に反す。

河豚　煤炲、荊芥、防風、菊花、桔梗、甘草、烏頭、附子に反す。

蜜　生葱に反す。

柿　蟹に反す。

# 服薬食忌

**甘草**　猪肉、菘菜、海菜を忌む。

**黃連、胡黃連**　猪肉、冷水を忌む。

**蒼耳**　猪肉、馬肉、米泔を忌む。

**桔梗、烏梅**　猪肉を忌む。

**仙茅**　牛肉、牛乳を忌む。

**半夏、菖蒲**　羊肉、羊血、飴、糖を忌む。

**牛膝**　牛肉を忌む。

**陽起石、雲母、鍾乳、硇砂、礜石**　いづれも羊血を忌む。

**商陸**　犬肉を忌む。

**丹砂、空青、輕粉**　いづれも一切の血を忌む。

**吳茱萸**　猪心、猪肉を忌む。

**地黃、何首烏**　一切の血、葱、蒜、蘿蔔を忌む。

**補骨脂**　猪血、芸薹を忌む。

**細辛、藜蘆**　狸肉、生菜を忌む。

**荊芥**　驢肉を忌む。河豚、一切の無鱗魚、蟹を忌む。

**紫蘇、天門冬、丹砂、龍骨**　鯉魚を忌む。

**巴豆**　野猪肉、菰笋、蘆笋、醬、豉、冷水を忌む。

**蒼朮、白朮**　雀肉、靑魚、菘菜、桃李を忌む。

**薄荷**　鼈肉を忌む。

**麥門冬**　鯽魚を忌む。

**常山**　生葱、生菜を忌む。

**附子、烏頭、天雄**　豉汁、稷米を忌む。

**牡丹**　蒜、胡荽を忌む。

**厚朴、蓖麻**　炒豆を忌む。

**鼈甲**　莧菜を忌む。

**威靈仙、土茯苓**　麪、湯、茶を忌む。

**當歸**　濕麪を忌む。

**丹参、茯苓、茯神**　醋及一切の酸を忌む。

凡そ藥を服する場合は肥猪、犬肉、油膩、羹、鱠、腥臊のもの、古い臭い種種のものを雜食してはならぬ。

凡そ藥を服する場合には生蒜、胡荽、生葱、種種の果物、種種の滑滯の物を多く食つてはならぬ。

凡そ藥を服する場合には死骸、產婦、見苦く穢いやうなものを見てはならぬ。

# 妊娠禁忌

烏頭、附子、天雄、烏喙、側子、野葛、羊躑躅、桂、南星、半夏、巴豆、大戟、芫花、藜蘆、薏苡仁、薇蘅、牛膝、皂莢、牽牛、厚朴、槐子、桃仁、牡丹皮、欓根、茜根、茅根、乾漆、瞿麥、蕳茹、赤箭、草三稜、茵草、鬼箭、通草、紅花、蘇木、麥蘖、葵子、代赭石、常山、水銀、錫粉、硇砂、砒石、芒消、硫黃、石蠶、雄黃、水蛭、虻蟲、芫青、斑蝥、地膽、蜘蛛、螻蛄、葛上亭長、蜈蚣、衣魚、蛇蛻、蜥蜴、飛生、䗪蟲、樗雞、蚱蟬、蠐螬、猬皮、牛黃、麝香、雌黃、兎肉、蟹爪甲、犬肉、馬肉、驢肉、羊肝、鯉魚、蝦蟇、鰍鱓、龜鼈、蟹、生薑、小蒜、雀肉、馬刀。

# 飲食禁忌

**猪肉**　生薑、蕎麥、葵菜、胡荽、梅子、炒豆、牛肉、馬肉、羊肝、麋鹿、龜鼈、鵪鶉、驢肉を忌む。

**猪肝**　魚鱠、鵪鶉、鯉魚の腸と子を忌む。

**猪心肺**　飴、白花菜、呉茱萸を忌む

**羊肉**　梅子、小豆、豆醤、蕎麥、魚鱠、猪肉、醋、酪、鮓を忌む。

**羊心肝**　梅、小豆、生椒、苦筍を忌む。

**白狗血**　羊、雞を忌む。

**犬肉**　菱角、蒜、牛腸、鯉魚、鱓魚を忌む。

**驢肉**　鳧茈、荊芥、茶、猪肉を忌む。

**牛肉**　黍米、韮薤、生薑、猪肉、犬肉、栗子を忌む。

**牛肝**　鮎魚を忌む。

**牛乳**　生魚、酸物を忌む。

馬肉　倉米、生薑、蒼耳、粳米、猪肉、鹿肉を忌む。

兎肉　生薑、橘皮、芥末、雞肉、鹿肉、獺肉を忌む。

麞肉　梅、李、生菜、鴿、蝦を忌む。

麋鹿　生菜、菰蒲、雞、鮠魚、雉、蝦を忌む。

雞肉　胡蒜、芥末、生葱、糯米、李子、魚汁、犬肉、鯉魚、兎肉、獺肉、鼈肉、野雞を忌む。

雞子　雞に同じ。

雉肉　蕎麥、木耳、蘑菰、胡桃、鯽魚、猪肝、鮎魚、鹿肉を忌む。

野鴨　胡桃、木耳を忌む。

鴨子　李子、鼈肉を忌む。

鵪鶉　菌子、木耳を忌む。

雀肉　李子、醬、生肝を忌む。

鯉魚　猪肝、葵菜、犬肉、雞肉を忌む。

鯽魚　芥末、蒜、糖、猪肝、雞、雉、鹿肉、猴を忌む。

靑魚　豆藿を忌む。

魚鮓　豆藿、麥醬、蒜、綠豆を忌む。

黃魚　蕎麥を忌む。

鱸魚　乳酪を忌む。

鱧魚　乾笋を忌む。

鮰魚　野猪、野雉を忌む。

**鮎魚**　牛肝、鹿肉、野猪を忌む。

**鼈肉**　莧菜、薄荷、芥菜、桃子、雞子、鴨肉、猪肉、兎肉を忌む。

**螃蟹**　荊芥、柿子、橘子、軟棗を忌む。

**蝦子**　猪肉、雞肉を忌む。

**橙橘**　檳榔、獺肉を忌む。

**棗子**　葱、魚を忌む。

**楊梅**　生葱を忌む。

**慈姑**　茱萸を忌む。

**沙糖**　鯽魚、筍、葵菜を忌む。

**黍米**　葵菜、蜜、牛肉を忌む。

**炒豆**　猪肉を忌む。

**韮薤**　蜜、牛肉を忌む。

**胡蒜**　魚鱠、魚鮓、鯽魚、犬肉、雞を忌む。

**莧菜**　蕨、鼈を忌む。

**鰍鱓**　犬肉、桑柴で煮ることを忌む。

**李子**　蜜、漿水、鴨、雀肉、雞、獐を忌む。

**桃子**　鼈肉を忌む。

**枇杷**　熱麪を忌む。

**銀杏**　鰻鱺を忌む。

**諸瓜**　油餅を忌む。

**蕎麦**　猪肉、羊肉、雉肉、黄魚を忌む。

**綠豆**　榧子、鯉魚鮓を忌む。

**生葱**　蜜、雞、棗、犬肉、楊梅を忌む。

**胡荽**　猪肉を忌む。

**白花菜**　猪心肺を忌む。

**梅子**　猪肉、羊肉、獐肉を忌む。　**皂莢**　驢肉を忌む。

**生薑**　猪肉、牛肉、馬肉、兎肉を忌む。

**芥末**　鯽魚、兎肉、雞肉、鼈を忌む。

**乾筍**　砂餹、鱘魚、羊心肝を忌む。　**木耳**　雉肉、野鴨、鵪鶉を忌む。

**胡桃**　野鴨、酒、雉を忌む。　**栗子**　牛肉を忌む。

## 李東垣隨證用藥凡例

**風が六腑に中つて**　手足が不遂になれるには、先づその表を發する爲に羌活、防風を君となし、病證に隨つて藥を加へ、然る後に經を行し血を養ふには當歸、秦艽、獨活の類を經に隨つて用ゐる。

**風が五臟に中つて**　耳が聾し、視力が鈍くなれるには、先づ裏を疏する爲に三化湯を用ゐ。然る後に經を行すには獨活、防風、柴胡、白芷、川芎を經に隨つて用ゐる。

**破傷中風には**　脈が浮して表に在れば發汗させ、脈が沈して裏に在れば下させ、背が吊つて痛むには羌活、防風を、前が吊つて痛むには升麻、白芷を、兩脇の吊つて痛むには柴胡、防風を用ゐ。右が吊つて痛むには白芷をそれに加へる。

**傷風惡風には**　防風を君となし、麻黃、甘草を佐とする。

**傷寒惡寒には**　麻黃を君となし、防風、甘草を佐とする。

**六經の頭痛には**　川芎を用ゐて引經の藥を用ゐるがよい。太陽には蔓荊。陽明に

は白芷。太陰には半夏、少陰には細辛。厥陰には呉茱萸。巓頂には藁本。

眉稜骨痛には　羗活、白芷、黄芩。

風濕身痛には　羗活。

嗌痛頷腫には　黄芩、鼠粘子、甘草、桔梗。

肢節の腫痛には　羗活。

眼が暴かに赤く腫れたるには　防風、芩、連で火を瀉し、當歸を佐とし酒で煎じて服する。

眼が久しく昏暗するには　熟苄、當歸を君となし、羗、防を臣となし、甘草、甘菊の類を佐とする。

風熱で牙の疼くには　冷を喜び熱を惡むには、生苄、當歸、升麻、黄連、牡丹皮、防風。

腎虚で牙の疼くには　桔梗、升麻、細辛、呉茱萸。

風濕の諸病には　羗活、白朮を用うるがよい。

風冷の諸病には　川烏を用うるがよい。

**一切の痰飮には**　半夏を用うるがよい。風には南星を加へ、熱には黄芩を加へ、濕には白朮、陳皮を加へ、寒には乾薑を加へる。

**風熱の諸病には**　荊芥、薄荷を用うるがよい。

**諸欬嗽の病には**　五味を君となし、痰には半夏を用ゐ、喘には阿膠を加へて佐とする。熱の有無に拘らず少し黄芩を加へ、春は川芎、芍藥を加へ、夏は梔子、知母を加へ、秋は防風を加へ、冬は麻黄、桂枝の類を加へる。

**諸嗽の痰あるには**　半夏、白朮、五味、防風、枳殼、甘草。

**諸嗽の痰なきには**　五味、杏仁、貝母、生薑、防風。

**聲があり痰があるには**　半夏、白朮、五味、防風。

**寒喘の痰急なるには**　麻黄、杏仁。

**熱喘の咳嗽には**　桑白皮、黄芩、訶子。

**水飮濕喘には**　白礬、皂莢、葶藶。

**熱喘燥喘には**　阿膠、五味、麥門冬。

**氣短虚喘には**　人參、黄芪、五味。

諸瘧の寒熱には　柴胡を君となす。
脾胃の困倦には　參、芪、蒼朮。
食思の進まぬには　木香、藿香。
脾胃の濕あるには　臥してゐたがり痰があらば白朮、蒼朮、茯苓、猪苓、半夏、防風。
上焦の濕熱には　黃芩で肺火を瀉す。
中焦の濕熱には　黃蓮で火心を瀉す。
下焦の濕熱には　酒洗の黃蘗、知母、防已。
下焦の濕腫には　酒洗の漢防已、龍膽草を君となし、甘草、黃蘗を佐とする。
腹中の脹滿には　薑制の厚朴、木香を用ゐるがよし。
腹中の窄狹には　蒼朮を用ゐるがよし。
腹中の實熱には　大黃、芒消。
飮食の熱物に過傷せるには　大黃を君となし、冷物の過傷には巴豆を丸、散として用ゐる。

宿食の不消化には　黃連、枳實を用ゐるがよし。

胸中の煩熱には　梔子仁、茯苓を用ゐるがよし。

胸中の痞塞には　實の場合は厚朴、枳實を用ゐ、虛の場合は芍藥、陳皮を用ゐ、痰熱には黃連、半夏を用ゐ、寒には附子、乾薑を用う。

六鬱の痞滿には　香附、撫芎、濕には蒼朮を加へ、痰には陳皮を加へ、熱には梔子を加へ、食には神麯を加へ、血には桃仁を加へる。

諸氣の刺痛には　枳殼、香附に引經の藥を加へる。

諸血の刺痛には　當歸を加へるがよく、その上なるか下なるかを確めて根なり梢なりを適當に用ゐる。

脇痛寒熱には　柴胡を用うるがよし。

胃脘の寒痛には　草豆蔻、吳茱萸を加へるがよし。

少腹の疝痛には　靑皮、川楝子を加へるがよし。

臍腹の疼痛には　熟芐、烏藥を加へる。

諸痢、腹痛には　下して後には白芍、甘草を君となし、當歸、白朮を佐とする。

○先に下し後に便するには黄蘗を君となし地楡を佐とする。○先づ便し後に痢するには黄芩を君となし當歸を佐とする。○裏急には消、黄にて之を下し、後重には木香、藿香、檳榔を加へて之を和する。○腹痛には芍藥を用ゐ、惡寒には桂を加へ、惡熱には黄芩を加へ、痛まなければ芍藥を半量減ずる。

**水瀉止まざるには**　白朮、茯苓を君となし、芍藥、甘草を佐として用ゐるがよく、穀の不消化には防風を加へる。

**小便の黄澀には**　黄蘗、澤瀉。

**小便の不利には**　黄蘗、知母を君となし、茯苓、澤瀉を使とする。

**心煩口渇には**　乾薑、茯苓、天花粉、烏梅を用ゐる。半夏、葛根は禁物である。

**小便の餘瀝には**　黄蘗、杜仲。

**莖中の刺痛には**　生甘草の梢。

**肌熱く痰あるには**　黄芩を用ゐるがよし。

**虚熱に汗あるには**　黄芪、地骨皮、知母を用ゐるがよし。

**虚熱の汗無きには**　牡丹皮、地骨皮を用ゐる。

**時を切つて潮熱するには**　黃芩。午の刻には黃連を加へ、未の刻には石膏を加へ、申の刻には柴胡を加へ、酉の刻には升麻を加へ、辰、戌の刻には羌活を加へ、夜は當歸を加へる。

**自汗、盗汗には**　黃芪、麻黃根を用ゐるがよし。

**驚悸恍惚には**　茯神を用ゐるがよし。

**一切の氣痛には**　胃を調へるには香附、木香　滯氣を破るには青皮、枳殼。氣を泄すには、牽牛、蘿蔔子、氣を助くるには木香、藿香。氣を補ふには人參、黃芪　冷氣には草蔻、丁香。

**一切の血痛には**　血を活し血を補ふには當歸、阿膠、川芎、甘草　血を涼するには生地黃、血を破るには桃仁、紅花、蘇木、茜根、玄胡索、郁李仁　血を止むるには髮灰、棕灰。

**上部血を見るには**　防風、牡丹皮、剪草、天、麥門冬を使として用ゐるがよし。

**中部血を見るには**　黃連、芍藥を使として用ゐるがよし。

**下部血を見るには**　地楡を使として用ゐるがよし。

新血紅色には　生地黄、炒梔子。
陳血瘀色には　熟地黄。
諸瘡の痛み甚しきには　苦寒の藥を君とする。黄芩、黄連に甘草を使とし、病の上なるか下なるかを確めて、その根なり梢なり及び引經の藥を用ゐる。○十二經いづれも連翹を用ゐる。○知母、生地黄を酒洗にしても用ゐる。○參、芪、甘草、當歸で心火を瀉し元氣を助け痛みを止める。○結を解するには連翹、當歸、藁本を用ゐる。○血を活し血を去るには蘇木、紅花、牡丹皮を用ゐる。○脉が沈して病が裏にあるには大黄を加へて利するがよし。○脉が浮して表の場合には經を行すがよく、芩、連、當歸、人參、木香、檳榔、黄蘗、澤瀉を用ゐる。○腰から上、頭に至るものには枳殼を加へ、引いて瘡所に至る。○鼠粘子を加へれば毒を出し腫を消する。○肉桂を加へれば心に入り血を引いて膿を化する。○堅くして潰せぬには王瓜根、黄藥子、三稜、莪蒁、昆布を加へる。
上身瘡あるには　黄芩、防風、羌活、桔梗、上截黄連を用ゐ、下身には黄蘗、知母、防風を酒と水等分にして煎じて用ゐるがよし。藥を引いて瘡に入れるには皂角

針を用ゐる。

**下部の痔漏には**　蒼朮、防風を君となし、甘草、芍藥を佐となし、病證をよく確めた上で加減する。

**婦人胎前には**　病あるには、黄芩、白朮を以てし胎を安じて然る後に病を治する藥を用ゐる。發熱及肌熱する者には芩、連、參、芪。腹痛するものには白芍、甘草。

**産後諸病には**　柴胡、黄連、芍藥を忌む。渴には半夏を去りて白茯苓を加へ、喘嗽には人參を去り、腹脹には甘草を去り、血痛には當歸、桃仁を加へる。

**小兒の驚搐には**　破傷風と同じ。

**心熱には**　頭を搖し、牙を咬み、額の黄色ならば黄連、甘草、導赤散。

**肝熱には**　目眩せば柴胡、防風、甘草、瀉青丸。

**脾熱には**　鼻上が紅ければ瀉黄散。

**肺熱には**　右腮が紅ければ瀉白散。

**腎熱には**　額上が紅ければ知母、黄蘗、甘草。

# 陳藏器諸虛用藥凡例

多くの病の積聚はいづれも虛に原因するもので、虛はあらゆる病を誘發するものである。積と云ふ病は五臟に於て現れるものであり、聚と云ふ病は六腑に於て現れるものであつて、積聚の疾は多くは舊方そのまま增減を施すまでもない。しかし虛して勞するものはそれに因つて種種萬端の惡傾向、惡結果を將來するものであつて、それにはその病に隨つて適當の增減を加へる必要がある。古の善く醫術を行ふ者は皆自ら藥の採收を行ひ、病の種種なる現象に對し藥物の本質なり性能なりが如何なる作用を作すかを審に研究して、その採收の時、季節の早、晩を擇んだものである。もし採收が適當の時季より早ければ藥の勢力がまだ完全に充實せず、晩ければ勢力が最も盛な時を過ぎて已に退敗の期に入つて了ふのである。然るに現今の醫術を行ふ人人は自身採藥に從事しないから、勢ひその藥の節、氣の早晚も判らず、又冷、熱に現れる病勢の消息や、それに適應すべき藥の分量の多少に就ての智識もない。その行ふことはたゞ病を治療するといふ名ばかりで、到底必ず治癒するといふ確信の

下に効を擧げるといふことはないのである。それでは實にあやふやな仕業といふの外はない。ここに復聊病の冷熱に對する藥の増減を詳記して置く。

虚勞の爲に頭痛しまた熱するには　枸杞、葳蕤を加へる。

虚して吐せんと欲するには　人參を加へる。

虚して不安なるにも　また人參を加へる。

虚して夢を多く見意識の混亂するには　龍骨を加へる。

虚して多く熱するには　地黄、牡蠣、地膚子、甘草を加へる。

虚して冷るには　當歸、芎藭、乾薑を加へる。

虚して損するには　鍾乳、棘刺、蓯蓉、巴戟天を加へる。

虚して甚だ熱するには　黄芩、天門冬を加へる。

虚して屢物を忘れるには　茯神、遠志を加へる。

虚して口の乾くには　麥門冬、知母を加へる。

虚して(一)吸吸するには　胡麻、覆盆子、柏子仁を加へる。

虚して氣息が多く微欬を兼るものには　五味子、大棗を加へる。

(一)吸吸ハ動ク貌。

**虚して驚悸し不安なるには**　龍齒、沙參、紫石英、小草を加へ、若し冷えるときは紫石英、小草を用ゐ、若し客熱せば沙參、龍齒を用ゐ、冷えず熱せぬにも、いづれも用ゐる。

**虚して身體が強り腰中利せざるには**　磁石、杜仲を加へる。

**虚して多く冷えるには**　桂心、吳茱萸、附子、烏頭を加へる。

**虚して勞し小便赤きには**　黃芩を加へる。

**虚して客熱するには**　地骨皮、白水の黃芪を加へる。白水とは地名である。

**虚して冷えるには**　隴西の黃芪を加へる。

**虚して痰ありまた氣息が劇しいには**　生薑、半夏、枳實を加へる。

**虚して小腸の利するには**　桑螵蛸、龍骨、雞肶胵を加へる。

**虚して小腸利せざるには**　茯苓、澤瀉を加へる。

**虚して損し尿白きには**　厚朴を加へる。

**髓竭きて不足なるには**　生地黃、當歸を加へる。

**肺氣不足には**　天門冬、麥門冬、五味子を加へる。

**心氣不足には** 上黨の參、茯神、菖蒲を加へる。

**肝氣不足には** 天麻、川芎藭を加へる。

**脾氣不足には** 白朮、白芍藥、益智を加へる。

**腎氣不足には** 熟地黃、遠志、牡丹皮を加へる。

**膽氣不足には** 細辛、酸棗仁、地楡を加へる。

**神昏不足には** 硃砂、預知子、茯神を加へる。

# 張子和汗吐下三法

人間の體軀は表と裏との外に出ない。氣と血との有様は虚と實との外に出ないのであつて、良醫は先づその實を治して後にその虚を治するのであるが、醫術の麁なるものは定見なく、或は實を治し、或は虚を治する。術の謬れるものは實を却つて實せしめ、虚を却つて虚せしめる。凡庸の醫師になれば虚を補ふことにのみ熱中してその實を治することを敢てしない。それを世間の一般人は誤れるものだといふことに氣が付かぬ。余がここに特に三法を記述する所以である。

一體疾病なるものは決して人間に先天的に固有なるものではないのであつて、或は外界から受入れ、或は内部から發生する、すべて邪氣に原因するところのものである。故に邪氣が人に中つて禍した場合、これを取去るべきは當然のことであつて、これを取集めて留めて置くといふことは可なる所以を認められない。若し留めるにしても輕微なものであれば久しい間には自ら盡きて了ふであらうが、それが甚

だ重大なものであれば、久しきに亘つても決して自滅せざるのみならず、更に重大なものであるならば、その人は俄ち死亡することを免れない。若しその邪を除去せずして先づ補劑を施すものあらば、これは恰も盜賊がまだ門の内に居るにも拘らず、平氣で室内の物の整頓を試みて居るやうなものである。純眞な正氣がまだ凡てに堪へるに至らぬうちに、邪氣がますますその發展を擅にすることになるのである。補の手當はただ脈が脱し下が虚して居るといふだけで、邪もなく積もないといふ人でこそ始めて講ぜらるべきものである。右の容體以外の病には、必ず先づ三つの方法を用ゐてその邪氣を驅除し、それで元氣が自ら回復するのである。

素問經の一書に、辛、甘が發散し、淡が滲泄するは陽であり、酸、苦、鹹の涌泄するは陰であるとある。發散は汗に包攝し、涌は吐に包攝し、泄は下に包攝する。滲は表を解するのだから汗と同様、洩は小便を利するのだから下と同様である。殊更に補といふことに就ては言及されてないが、所謂補とは、辛は肝を補ひ、鹹は心を補ひ、甘は腎を補ひ、酸は脾を補ひ、苦は肺を補ふのそれであつて、更に互に君、臣、佐使となり、いづれも腠理を發するなり、津液を順調にするなり、氣血を通ず

るなりする。それが補そのものに當るのである。現今の人人の濫用する溫、燥の怪し氣な補の法などとは全然趣を異にする。蓋し草木はそれぞれ治病の效を擧げるものであつて、病が除去されたならば五穀なり果物なり野菜なり肉なりの食物がいづれも皆補としての資料なのである。故にそれに對しそれぞれ五臟に適當するやう按配し、均衡を失はぬやう偏らぬやうにすればよいのである。然らずして強ひて藥品を以て補を試むるならば、たとへば甘草、苦參のやうなものでも、久しく服すれば必ず偏勝の現象を生じ、氣のみ增大して夭死するの大なる危險を招ぐのである。況や大毒、有毒の藥品をやである。この故にたとへば汗、吐、下の三法は刑罰の如く、善き穀物や肉などは德敎の如きものであつて、亂賊を治めるには刑を用ゐ、太平無事の世を治めるには德を用ゐるやうなものである。

余は常に主としてこの三法を用ゐ、他の種種の方法をこれに併用して居る。それには(一)按あり、蹻あり、揃あり、導あり、增減あり續止あること勿論である。而るに余の法に對し着實なる理解のない醫家達は、却つて反對し誹謗するのであるが、誠に遺憾千萬なことである。そもそも涎を引き、涎を流り、嚔を取り、涙を追ふ等凡

(一)按蹻揃導ハ徒手體操ノ如キ運動療法。

て上の方へ出すものは皆吐法に屬し、薰蒸、渫洗、熨烙、針刺、砭射、導引、按摩等凡て表を解するものは皆汗法に屬し、分娩を催し、乳を促し、食物の滯を滅じ、水を逐ひ、經水を破り、氣を洩す等凡て下に行ふものは皆下法に屬するものであつて、天の六氣卽ち風、寒、暑、濕、燥、火が病を發するのは多くは上の部分に於てし、地の六氣卽ち霧、露、雨、雪、水、泥が病を發するのは多くは下の部分に於てし、人の六味卽ち酸、苦、甘、辛、鹹、淡が病を發するのは多くは中の部分に於てする。病の原因たるものも三ッであり、病を驅除する方法もまた三ッなのである。風寒の邪が結んで皮膚の間を搏ち、經絡の內に滯り、留つて去らず、或は(二)痛注、麻痺、腫痒、拘攣を發するのは皆發汗によつてこれを驅除することが出來る。痰飮、宿食が胷膈に在つて種種の病となるのは皆涌して驅除することが出來る。寒濕、固冷、火熱が下焦に客とし留つて、それが種種の病の原因となつたものは泄してこれを驅除することが出來る。同じ吐のうちにも汗の作用があり、下のうちにも補の作用がある。經に、その要を知る者は一言にして終るといふのもこの機微をいふのである。

(二)痛注ハ痛ノツヅクコト。

吐法　凡て病の胸膈、中脘已上に在るものは皆吐かすがよい。本草の薬品を割當つれば吐薬の苦寒なるものは瓜蒂、巵子、茶末、豆豉、黄蓮、苦參、大黄、黄芩。辛苦にして寒なるものは常山、藜蘆、鬱金。甘にして寒なるものは桐油。甘にして溫なるものは牛肉、甘苦にして寒なるものは地黄、人參、蘆。苦にして溫なるものは靑木香、桔梗、蘆、遠志、厚朴。辛苦にして溫なるものは薄荷、芫花、松蘿。辛にして溫なるものは蘿蔔子、穀精草、葱根鬚、杜衡、皂莢。辛にして寒なるものは膽礬、石綠、石靑。辛にして溫なるものは蝎稍、烏梅、烏頭、附子尖、輕粉。酸にして寒なるものは晉礬、綠礬、虀汁。酸にして平なるものは銅綠。甘酸にして平なるものは赤小豆。酸にして溫なるものは飯漿。鹹にして寒なるものは靑鹽、滄鹽、白米飲。甘にして寒なるものは牙消。辛にして熱なるものは砒石である。これ等諸薬のうちただ常山、膽礬、瓜蒂のみに小毒があり、藜蘆、芫花、烏、附、砒石のみに大毒があるだけで他は皆吐薬として毒のないものである。凡そ用法としては先づ少しく服ませて見るがよい。それで涌せぬ場合は次第に量を增し、雞の羽で咽を擦る。それでも出ないときは(三)

(三)蘆ハ字書ニ鹽茶トアリ。

（一）溺血、金陵本崩血ニ作ル、然レドモ溺血ノ誤ナルベシ。

虀を服ませる、なほ吐かぬときは再び投じ且つ探つて見れば吐かぬといふことはないものである。いよいよ吐き初めると瞑眩するまで吐くこともあるが決してそれに驚き惑ふことはない。そこで氷水か新な水を飲ませるとそれですつかり解するものであつて、強壮なものならば一回吐いて平安になるが、弱いものは三回位に吐かせるがよい。吐いた翌日は頓に快くなるものもあり、ますます悪くなるものもある。悪くなるのは引き方がまだ徹底せぬのだから數日の後に再び吐かせる。吐いた後は別に禁ずるものはないが、ただ酸いもの、鹹いもの、硬いもの、乾いたもの、油強いものを飽食することを忌む。概して吐いた後には、心火が既に降つて陰道が必ず強大になるが、その場合房室や悲嘆憂愁をさすことは禁物である。さうした場合、患者は自制自責が出來なくて、多くは吐法が悪いといふやうなことをいふものである。しかし吐かすべからざるものも八種ある　非常に強情で亂暴で好んで怒り喜んで淫する者、已に病勢が危篤に瀕し老弱で氣の衰へた者、自ら吐いて止まざるもの、陽が破れて血虚したもの、吐血、咯血、衄血、嗽血、崩血・（一）溺血するもの、患者自身が生嚙りに醫書な

どを見て實は確實な智識のない者、患者が意識不明瞭且つ不定な者、患者に附添ふ周圍の者が兎角雜多な言論を吐き騷騷しき場合、これ等は吐かせてはならぬ。吐かせれば更にそれ以外な病を發生して反て誹謗の端緒となることがある。たとひ强ひて懇に求められても必ずそれに從はぬがよい。

**汗法**　風寒、暑、濕の邪が皮膚の間に入つて未だ深からず、これを速に驅除しようとするには發汗が最も善き方法である。それは(五)玄府を開いて邪氣を逐ふことなのである。然してそれには數種の法がある。溫熱發汗、寒涼發汗、薫積發汗、導引發汗などの方法で、やはりいづれも玄府を開いて邪氣を逐ふ方法である。これを本草の藥に割當つれば、荊芥、薄荷、白芷、陳皮、半夏、細辛、蒼朮、天麻、生薑、葱白は皆辛にして溫なるもの、蜀椒、胡椒、茱萸、大蒜は皆辛にして熱なるもの、靑皮、防已、秦艽などは辛にして平なるものであらう。麻黄、人參、大棗は甘にして溫なるものであらう。葛根、赤茯苓は甘にして平なるものであらう。桑白皮は甘にして寒なるものであらう。防風、當歸は甘辛にして溫なるものであらう。官桂桂枝は甘辛にして大熱なるものであらう。厚朴、桔梗

(五) 素問ニ、所謂玄府者汗空也トアリ。注ニ汗液色玄、從空而出、以汗聚於裏故謂之玄府、府者聚也、トアリ。

は苦にして温なるものであらう。黄芩、知母、枳實、苦參、地骨皮、柴胡、前胡は苦にして寒なるものであらう。羌活、獨活は苦辛にして微温なるものであらう、升麻は苦甘にして且つ平なるものであらう。芍藥は酸にして微寒なるものであらう。浮萍は辛酸にして寒なるものであらう。凡そこれ等は皆發散の作用を有する屬であつて、これを適當に擇び用うれば熱すべきには完全に熱の目的を達し寒すべきには完全に寒の目的を達するが、その撰擇が適當を得ないときはこれに反して却つて病に變を生ずることがある。發汗が病に的中した場合はそれで止る。必ずしも多くの藥劑を試むるの必要はない。凡そ破傷風、小兒の驚風、(六)飧泄して止まぬもの、酒病、火病には皆發汗がよい。所謂火欝するときはこれを發するといふのがこれである。

**下法**　積聚が中に陳莝し、寒熱を内に留結するには必ず下法を用ゐる。陳莝が去つて腸胃が淸潔になれば癥瘕がなくなつて營衞が順調に通ずるのであるから、この點からいへば、下すことが直に補の作用と同一結果になるのである。凡庸な醫者は妄に藥を投じて寒すべきものに反つて熱し、熱すべきものに反つて寒す

(六)飧泄ハ食物ガ不消ノ儘下痢スルヲ云フ。

る。故に下すことが害になるかのやうに謂はれるのである。この下法に就て本草の藥に割當つれば、下劑として寒なるものは戎鹽の鹹、犀角の酸鹹、滄鹽、澤瀉の甘鹹、枳實の苦酸、膩粉の辛、澤漆の苦辛、杏仁の苦甘などであり、下劑の微寒なるものは猪膽の苦であり、下劑の大寒なるものは牙消の甘、大黄、牽牛、瓜蔕、苦瓠、牛膽、藍汁、羊蹄根、苗の苦、大戟、甘遂の苦甘、朴消、芒消の苦鹹であり、下劑の温なるものは檳榔の辛、芫花の苦辛、石蜜の甘、皂角の辛鹹であり、下劑の熱なるものは巴豆の辛であり、下劑の涼なるものは猪、羊血の鹹であり、下劑の平なるものは郁李仁の酸、桃花の苦であり、いづれも皆下藥である　ただ巴豆だけは性の熱なるものだから寒積以外には輕輕しく用ゐてはならぬ　妄に下せばただ患者をして津液を涸竭せしめるだけで留毒は去らず、胸熱し口燥き、更に他病を發生させるものである。凡そ下してならぬものが四種ある。洞泄寒中のもの、表裏倶に虛するもの、厥して脣青く手足冷るもの、小兒の病後慢驚するものの四種は下せば必ずその人を殺すの虞がある。その餘では大積、大聚、大痞、大秘、大燥、大堅いづれも下す以外の良法はな

い。ただ下法を用ゐて寒、熱、積氣の病に的中すればそれで止めねばならぬ。藥を廢して差支ない。

## 病有八要六失六不治

注は神農名例に在る。

## 藥對歲物藥品

立冬の日は菊、卷栢が先づ生ず。陽起石、桑螵蛸の使となる。凡て十物の使は二百草を主り之が長となる。○立春の日に木蘭、射干。柴胡、半夏の使となる。頭痛四十五節を主る。○立夏の日は蜚蠊先づ生ず。人參、茯苓の使となる。腹中七節を主り、神を保し中を守る。○夏至の日は豕首、茱萸先づ生ず。牡蠣、烏喙の使となる。四肢三十二節を主る。○立秋の日は白芷、防風先づ生ず。細辛、蜀漆の使となる。胸背二十四節を主る。

禹錫曰く、この五條は藥對の中に出て居る文であつて、意義甚だ深淵で俗には到底その眞意を解し難いものであるが、藥學上の傳統の源流であるから載することにしたのである。

時珍曰く、これも素問の歲物の意味であると思ふ。上古の雷公藥對に出て居るのであるが、その意義の解釋は傳らなかつたのである。按ずるに楊愼の巵言に、白字本草に相傳ふ、神農より出づとあるが、今その中に引用されたものを見るに、『腸鳴幽幽、勞極洒洒、髮髲仍自還神化』といふ文字やこの五條の文は如何にも素問經の文章の書振に近い。決して後世の醫の眞似し能ふ所ではないと思ふ。この文が立冬の日を以て始としてあるところを見ると、上古の子の月を建てて正月とした時に書かれたものであらうと思はれる。

# 神農本草經目錄

○○時珍曰く、神農の古本草は凡て三卷、三品、全部で三百六十五種、首に名例數條があるだけだつたが、陶氏が別錄を作るに至つて乃ち各部を別けて整理し、三品の置き方も移し改めて更に靑葙、赤小豆の二條を書出したので三百六十七種あることになつた。それに唐、宋に逮んで屢〻變易を試みられたから、舊時の體裁は推想して見やうがない。現今にても又併入されたものが多いのであるから、こゝには此の目だけを存して考古の資料に供したいと思ふのである。

## 上品藥一百二十種

丹砂　雲母　玉泉　石鍾乳　礬石　消石

朴消　滑石　空靑　曾靑　禹餘糧　太一餘糧

白石英　紫石英　五色石脂　菖蒲　菊花　人參

天門冬　甘草　乾地黃　朮　兎絲子　牛膝

茺蔚子　女萎　防葵　麥門冬　獨活　車前子
木香　薯蕷　薏苡仁　澤瀉　遠志　龍膽
細辛　石斛　巴戟天　白英　白蒿　赤箭
菴藺子　菥蓂子　蓍實　赤芝　黑芝　青芝
白芝　黃芝　紫芝　卷柏　藍實　蘼蕪
黃連　絡石　蒺藜子　黃耆　肉蓯蓉　防風
蒲黃　香蒲　續斷　漏蘆　天名精　決明子
丹參　飛廉　五味子　旋花　蘭草　蛇牀子
地膚子　景天　茵蔯蒿　杜若　沙參　徐長卿
石龍芻　雲實　王不留行　牡桂　菌桂　松脂
槐實　枸杞　橘柚　栢實　茯苓　楡皮
酸棗　乾漆　蔓荊實　辛夷　杜仲　桑上寄生
女貞實　蕤核　藕實莖　大棗　葡萄　蓬蘽
雞頭實　胡麻　麻黃　冬葵子　莧實　白冬子

苦菜　龍骨　麝香　熊脂　白膠　阿膠
石蜜　蜂子　蜜臘　牡蠣　龜甲　桑螵蛸

## 中品藥一百二十種

雄黄　雌黄　石硫黄　水銀　石膏　磁石
凝水石　陽起石　理石　長石　石膽　白青
扁青　膚青　乾薑　枲耳實　葛根　栝樓
苦參　茈胡　芎藭　當歸　麻黄　通草
芍藥　蠡實　瞿麥　玄參　秦艽　百合
知母　貝母　白芷　淫羊藿　黄芩　石龍芮
茅根　紫菀　紫草　茜根　敗醬　白鮮皮
酸漿　紫參　藁本　狗脊　萆薢　白兎藿
營實　白薇　薇銜　翹根　水萍　王瓜
地楡　海藻　澤蘭　防已　牡丹　款冬花
石韋　馬先蒿　積雪草　女菀　王孫　蜀羊泉

爵牀　巵子　竹葉　蘗木　吳茱萸　桑根白皮
蕪荑　枳實　厚朴　秦皮　秦椒　山茱萸
紫葳　猪苓　白棘　龍眼　木蘭　五加皮
衛矛　合歡　披子　梅實　桃核仁　杏核仁
蓼實　葱實　薤　假蘇　水蘇　水斳
髮髲　白馬莖　鹿茸　水角鰓　羖羊角　牡狗陰莖
羚羊角　犀角　牛黃　豚卵　麋脂　丹雄雞
鴈肪　鼈甲　鮀魚甲　蠡魚　鯉魚膽　烏賊魚骨
海蛤　文蛤　石龍子　露蜂房　蚱蟬　白殭蠶

## 下品藥一百二十五種

孔公孼　殷孼　鐵粉　鐵落　鐵　鉛丹
粉錫　錫鏡鼻　代赭　戎鹽　大鹽　鹵鹹
青琅玕　礜石　石灰　白堊　冬灰　附子
烏頭　天雄　半夏　虎掌　鳶尾　大黃

石蠶　雀甕　樗雞　斑猫　螻蛄　蜈蚣

馬陸　地膽　螢火　衣魚　鼠婦　水蛭

木虻　蜚虻　蜚蠊　䗪蟲　貝子

# 宋本草舊目錄

李時珍曰く、舊目は錄する必要もないのであるが、特に錄したのは古の蹟を存する所以でもあり、又三品の混亂した狀態を示して、必ずしも古に泥むの必要なきことを知らしめんが爲である。

新舊藥合せて一千八十二種

三百六十種神農本經（白字）

一百八十二種名醫別錄（黑字）

一百一十四種唐本に先に附せるもの。

一百三十三種今附せるもの。（開寶本草に附せるものである）

一百九十四種有名未用、　八十種新補。

一十七種新定（已上は皆宋の嘉祐本草で定めた所のものである）

四百八十八種陳藏器の餘、　二種唐本の餘。

一十三種海藻の餘、　八種食療の餘。
一百種圖經外類（已上は皆唐愼微が續收し補入したものである）
玉石部　上品七十三種　中品八十七種　下品九十三種
草部　上品の上八十七種　上品の下五十三種　中品の上六十二種　中品の下七十八種　下品の上六十二種　下品の下一百五種
木部　上品七十二種　中品九十二種　下品九十九種
人部　三品二十五種
獸部　上品二十種　中品一十七種　下品二十一種
禽部　三品五十六種
蟲魚部　上品五十種　中品五十六種　下品八十一種
果部　三品五十三種
米穀部　上品七種　中品二十三種　下品一十八種
菜部　上品三十種　中品一十三種　下品二十二種
有名未用　一百九十四種

圖經外類　一百種

本草綱目第二卷終

# 本草綱目序例

原文

# 本草綱目序例目錄第一卷上

# 本草綱目序例第一卷上

明　蘄陽李時珍東璧父編輯
日本　理學博士白井光太郎閱

## 序例上

### 歷代諸家本草

神農本草經　［掌禹錫曰］舊說本草經三卷神農所作而不經見漢書藝文志亦無錄焉漢平帝紀云元始五年舉天下通知方術本草者所在軺傳遣詣京師樓護傳稱護少誦醫經本草方術數十萬言本草之名蓋見于此唐李世勣等以梁七錄載神農本草三卷推以爲始又疑所載郡縣有後漢地名似張機華佗輩所爲皆不然也按淮南子云神農嘗百草之滋味一日而七十毒由是醫方興焉蓋上世未著文字師學相傳謂之本草兩漢以來名醫益衆張華輩始因古學附以新說通爲編述本草繇是見于經錄也［寇宗奭曰］漢書雖言本草不能斷自何代而作淮南子雖言神農嘗百草以和藥亦無本草之名惟帝王世紀云黃帝使岐伯嘗味草木定本草經造醫方以療衆疾乃知本草之名自黃帝始蓋上古聖賢具生知之智故能辨天下品物性味合世人疾病之所宜後世賢智之士從而和之又增其品焉［韓保昇曰］藥有玉石草木蟲獸而云本草者爲諸藥中草類最多也

名醫別錄　［李時珍曰］神農本草藥分三品計三百六十五種以應周天之數梁陶弘景復增漢魏以下名醫所用藥三百六十五種謂之名醫別錄凡七卷首敍藥性之源論病名之診次分玉石一品草一品木一品菓

菜一品米食一品有名未用三品以朱書神農墨書別錄進上梁武帝弘景字通明宋末爲諸王侍讀歸隱勾曲山號華陽隱居武帝每咨訪之年八十五卒謚貞白先生其書頗有裨補亦多謬誤〔弘景自序曰〕隱居先生在乎茅山之上以吐納餘暇游意方技覽本草藥性以爲盡聖人之心故撰而論之舊稱神農本經予以爲信然昔神農氏之王天下也畫八卦以通鬼神之情造耕種以省殺生之弊宣藥療疾以拯夭傷之命此三道者歷衆聖而滋彰文王孔子彖象繇辭幽贊人天后稷伊尹播厥百穀惠被群生岐黃彭扁振揚輔導恩流含氣歲踰三千民到于今賴之但軒轅已前文字未傳藥性所主當以識識相因不爾何由得聞至于桐雷乃著在編簡此書應與素問同類但後人多更修飭之爾秦皇所焚醫方卜術不預故猶得全錄而遭漢獻遷徙晉懷奔迸文籍焚靡十不遺一今之所存有此三卷其所出郡縣乃後漢時制疑仲景元化等所記又有桐君采藥錄說其花葉形色藥對四卷論其佐使相須魏晉以來吳普李當之等更復損益或五百九十五或四百四十一或三百一十九或三品混糅冷熱舛錯草石不分蟲獸無辨且所主治互有得失醫家不能備見則智識有淺深今輒苞綜諸經研括煩省以神農本經三品合三百六十五爲主又進名醫別品亦三百六十五合七百三十種精粗皆取無復遺落分別科條區畛物類兼注詔時用土地所出及仙經道術所須并此序畧合爲七卷雖未足追踵前良蓋亦一家撰製吾去世之後可貽諸知音爾

桐君采藥錄〔時珍曰〕桐君黃帝時臣也書凡二卷紀其花葉形色今已不傳後人又有四時采藥太常采藥時月等書

雷公藥對〔禹錫曰〕北齊徐之才撰以衆藥名品君臣性毒相反及所主疾病分類記之凡二卷〔時珍曰〕陶氏前已有此書吳氏本草所引雷公是也蓋黃帝時雷公所著之才增飾之爾之才丹陽人博識善醫歷事北齊諸帝得寵仕終尚書左僕射年八十卒贈司徒封西陽郡王謚文明北史有傳

李氏藥錄 [保昇曰] 魏李當之華佗弟子修神農本草三卷而世少行 [時珍曰] 其書散見吳氏陶氏本草中頗有發明

吳氏本草 [保昇曰] 魏吳普廣陵人華佗弟子凡一卷 [時珍曰] 其書分記神農黃帝岐伯桐君雷公扁鵲華佗李氏所說性味甚詳今亦失傳

雷公炮炙論 [時珍曰] 劉宋時雷斅所著非黃帝時雷公也自稱內究守國安正公或是官名也胡洽居士重加定述藥凡三百種爲上中下三卷其性味炮炙熬煮修事之法多古奧文亦古質別是一家多本于乾寧晏先生其首序論述物理亦甚幽玄錄載于後乾寧先生名晏封著制伏草石論六卷蓋丹石家書也

唐本草 [時珍曰] 唐高宗命司空英國公李勣等修陶隱居所註神農本草經增爲七卷世謂之英公唐本草頗有增益顯慶中右監門長史蘇恭重加訂註表請修定帝復命太尉趙國公長孫無忌等二十二人與恭詳定增藥一百一十四種分爲玉石草木人獸禽蟲魚果米穀菜有名未用十一部凡二十卷目錄一卷別爲藥圖二十五卷圖經七卷共五十三卷世謂之唐新本草蘇恭所釋雖明亦多駁誤禮部郎中孔志約序曰天地之大德曰生運陰陽以播物含靈之所保曰命資亭育以盡年蟄穴棲巢感物之情蓋寡範金揉木逐欲之道方滋而五味或爽時味甘辛之節六氣斯沴易愆寒燠之宜中外交侵形神分戰飲食伺釁成腸胃之眚風濕候隙搆手足之災機纏膚腠莫知救止漸固膏肓期於夭折暨炎暉紀物識藥石之功雲瑞名官窮診候之術草木咸得其性鬼神無所遁情刳麝剸犀驅洩邪惡飛丹煉石引納清和大庇蒼生普濟黔首功侔造化恩邁裁成日用不知于今是賴岐和彭緩騰絕軌於前李華張吳振英聲於後昔秦政煨燔茲經不預永嘉喪亂斯道尚存梁陶弘景雅好攝生研精藥術以爲本草經者神農之所作不刊之書也惜其年代寖遠簡編殘蠹與桐雷衆記頗或踳駮興言撰緝勒成一家亦以琱琢經方潤色醫

業然而時鍾鼎時闕見闕於殊方事非僉議詮釋拘於獨學至如重建平之防巳棄槐里之半夏秋採楡仁冬收雲實謬梁米之黃白混荊子之牡蔓異蘗纏於雞腸合由跋於鳶尾防葵狼毒妄曰同根鈎吻黃精引爲連類鈆錫莫辨橙柚不分凡此比例蓋亦多矣自時厥後以迄于今雖方技分鑣名醫繼軌更相祖述罕能釐正乃復採杜衡于及巳求忍冬于絡石捨陟釐而取莂藤退飛廉而用馬薊承疑行妄曾无有覺疾瘵多殆良深慨嘆既而朝議郎行右監門府長史騎都尉臣蘇恭摭陶氏之乖違辨俗用之紕紊遂表請修定深副聖懷乃詔太尉揚州都督監修國史上柱國趙國公臣無忌大中大夫行尚藥奉御臣許孝崇等二十二人與蘇恭詳撰竊以動植形生因方舛性春秋節變感氣殊功離其本土則質同而効異乖于采摘乃物是而時非名實既爽寒溫多謬用之凡庶其欺巳甚施之君父逆莫大焉於是上稟神規下詢衆議普頒天下營求藥物羽毛鱗介无遠不臻根莖花實有名咸萃遂乃詳探祕要博綜方術本經雖缺有驗必書別錄雖存无稽必正考其同異擇其去取鉛翰昭章定群言之得失丹青綺煥備庶物之形容撰本草并圖經目錄等凡成五十四卷庶以網羅今古開滌耳目盡醫方之妙極拯生靈之性命傳萬祀而无昧懸百王而不朽

藥總訣 [禹錫曰]梁陶隱居撰凡二卷論藥品五味寒熱之性主療疾病及采蓄時月之法一本題曰藥象口訣不著撰人名

藥性本草 [禹錫曰]藥性論凡四卷不著撰人名氏分藥品之性味君臣佐使主病之効一本云陶隱居撰然其藥性之功有與本草相戾者疑非隱居書也[時珍曰]藥性論即藥性本草乃唐甄權所著也權扶溝人仕隋爲祕省正字唐太宗時年百二十歲帝幸其第訪以藥性因上此書授朝散大夫其書論主治亦詳又著脈經明堂人形圖各一卷詳見唐史

千金食治　〔時珍曰〕唐孫思邈撰千金備急方三十卷采摭素問扁鵲華佗徐之才等所論補養諸說及本草關于食用者分米穀果菜鳥獸虫魚爲食治附之亦頗明悉思邈隱于太白山隋唐徵拜皆不就年百餘歲卒所著有千金翼方枕中素書攝生眞錄福祿論三教論老子莊子注

食療本草　〔禹錫曰〕唐同州刺史孟詵撰張鼎又補其不足者八十九種幷舊爲二百二十七條凡三卷　〔時珍曰〕詵梁人也武后時舉進士累遷鳳閣舍人出爲台州司馬轉同州刺史睿宗召用固辭卒年九十因周禮食醫之義著此書多有增益又撰必效方十卷補養方三卷唐史有傳

本草拾遺　〔禹錫曰〕唐開元中三原縣尉陳藏器撰以神農本經雖有陶蘇補集之說然遺沈尙多故別爲序例一卷拾遺六卷解紛三卷總曰本草拾遺　〔時珍曰〕藏器四明人其所著述博極群書精覈物類訂繩謬誤搜羅幽隱自本草以來一人而已膚謭之士不察其該詳惟誚其僻怪宋人亦多刪削豈知天地品物無窮古今隱顯亦異用舍有時名稱或變豈可以一隅之見而遽譏多聞哉如辟虺雷海馬胡豆之類皆隱于昔而用于今仰天皮燈花敗扇之類皆萬家所用者若非此書收載何從稽考此本草之書所以不厭詳悉也

海藥本草　〔禹錫曰〕南海藥譜二卷不著撰人名氏雜記南方藥物所產郡縣及療疾之功頗無倫次　〔時珍曰〕此即海藥本草也凡六卷唐人李珣所撰珣蓋肅代時人收采海藥亦頗詳明又鄭虔有胡本草七卷皆胡中藥物今不傳

四聲本草 [禹錫曰]唐蘭陵處士蕭炳撰取本草藥名上一字以平上去入四聲相從以便討閱無所發明凡五卷進士王收序之

刪繁本草 [禹錫曰]唐潤州醫博士兼節度隨軍楊損之撰刪去本草不急及有名未用之類爲五卷開元以後人也無所發明

本草音義 [時珍曰]凡二卷唐李含光撰又甄立言殷子嚴皆有音義

本草性事類 [禹錫曰]京兆醫工杜善方撰不詳何代人凡一卷以本草藥名隨類解釋附以諸藥制使畏惡相反相宜解毒者

食性本草 [禹錫曰]南唐陪戎副尉劍州醫學助教陳士良撰取神農陶隱居蘇恭孟詵陳藏器諸家藥關于飲食者類之附以食醫諸方及五時調養臟腑之法[時珍曰]書凡十卷總集舊說無甚新義古有淮南王食經一百二十卷崔浩食經九卷竺暄食經十卷膳饈養療二十卷昝殷食醫心鑑三卷婁居中食治通說一卷陳直奉親養老書二卷並有食治諸方皆祖食醫之意也

蜀本草 [時珍曰]蜀主孟昶命翰林學士韓保昇等與諸醫士取唐本草參校增補註釋別爲圖經凡二十卷昶自爲序世謂之蜀本草其圖說藥物形狀頗詳于陶蘇也

開寶本草 [時珍曰]宋太祖開寶六年命尚藥奉御劉翰道士馬志等九人取唐蜀本草詳校仍取陳藏器拾遺諸書相參刊正別名增藥一百三十三種馬志爲之註解翰林學士盧多遜等刊正七年復詔志等重定學士李昉等看詳凡神農者白字名醫所傳者墨字別之幷目錄共二十一卷序曰三墳之書神農預其一百藥既辨本草存其錄舊經三卷世所流傳名醫別錄互爲編纂至梁正白先生陶弘景乃以別錄參其本經朱墨雜書時謂明白

而又較彼功用爲之註釋列爲七卷南國行焉遂乎有唐別加參校增藥餘八百味添註爲二十一卷本經漏功則補之陶氏誤說則證之然而載歷年祀又踰四百朱字墨字无本得同舊註新註其文互缺非聖主撫大同之運永無疆之休其何以改而正之哉乃命盡攷傳誤刊爲定本類例非允從而革焉至于筆頭灰兎毫也而在草部今移附兎頭骨之下半天河地漿皆水也亦在草部今移附玉石類之間敗鼓皮移附于獸皮胡桐淚改從于木類紫鑛亦木也自玉石品而取焉伏翼實禽也由蟲魚部而移焉橘柚附于果實食鹽附于光鹽生薑乾薑同歸一說至于雞腸蘩蔞陸英蒴藋以類相似從而附之仍采陳藏器拾遺李含光音義或討源于別本或傳效于醫家參而較之辨其臧否至于突厥白舊說灰類也今是木根天麻根解似赤箭今又全異去非取是特立新條自餘刊正不可悉數下采衆議定爲印板乃以白字爲神農所說墨字爲名醫所傳唐附今附各加顯註詳其解釋審其形性證謬誤而辨之者署爲今註攷文記而述之者又爲今按義既刊定理亦詳明今以新舊藥合九百八十三種并目錄二十一卷廣頒天下傳而行焉

## 嘉祐補註本草

時珍曰　宋仁宗嘉祐二年詔光祿卿直祕閣掌禹錫尚書祠部郎中祕閣校理林億等同諸醫官重修本草新補八十二種新定一十七種通計一千八十二條謂之嘉祐補註本草共二十卷其書雖有校修無大發明其序略云神農本草經三卷藥止三百六十五種至陶隱居又進名醫別錄亦三百六十五種因而註釋分爲七卷唐蘇恭等又增一百一十四種廣爲二十卷謂之唐本草國朝開寶中兩詔醫工劉翰道士馬志等修增一百三十三種爲開寶本草僞蜀孟昶亦常命其學士韓保昇等稍有增廣謂之蜀本草嘉祐二年八月詔臣禹錫臣億等再加校正臣等被命遂更研覈竊謂前世醫工原診用藥隨效輒記遂至增多槩見諸書浩博難究雖屢加刪定而去取非一或本經已載而所述粗略或俚俗常用而太醫未聞嚮非因事詳著則遺散多矣乃請因其疏捂更爲補註因諸家醫書藥譜所載物品功用並從採掇惟名近迂僻類乎怪誕則所不取自餘經史百家雖非方餌

之急其間或有參說藥驗較然可據者亦兼收載務從該洽以副詔意凡名本草者非一家今以開寶重定本爲正其分布卷類經註雜糅間以朱墨並從舊例不復釐改凡補註並據諸書所說其意義與舊文相參者則從刪削以避重復其舊已著見而意有未完後書復言亦具存之欲詳而易曉仍每條並以朱書其端云臣等謹按某書云某事其別立條者則解于其末云見某書凡所引書唐蜀二本草爲先他書則以所著先後爲次第凡書舊名本草者今所引用但著其所作人名曰某惟唐蜀本則曰唐本云蜀本云凡字朱墨之別所謂神農本經者以朱字名醫因神農舊條而有增補者以墨字間于朱字餘所增者皆別立條並以墨字凡陶隱居所進者謂之名醫別錄並以其註附於末凡顯慶所增者亦註其末曰唐本先附凡開寶所增者亦註其末曰今附凡今所增補舊經未有于逐條後開列云新補凡藥舊分上中下三品今之新補難于詳辨但以類附見如綠礬次于礬石山薑花次于豆蔻扶移次于水楊之類是也凡藥有功用本經未見而舊註已曾引註今之所增但涉相類更不立條並附本註之末曰續註如地衣附于垣衣燕覆附于通草馬藻附于海藻之類是也凡舊註出于陶氏者曰陶隱居云出于顯慶者曰唐本註出于開寶者曰今註其開寶考據傳記者別曰今按今詳又按皆以朱字別書于其端凡藥名本經已見而功用未備今有所益者亦附于本註之末凡藥有今世已嘗用而諸書未見無所辨證者如胡盧巴海帶之類則請從太醫衆論參議別立爲條曰新定舊藥九百八十三種新補八十二種附于註者不預焉新定一十七種總新舊一千八十二條皆隨類附著之英公陶氏開寶三序皆有義例所不可去仍載于首卷云

圖經本草 [時珍曰] 宋仁宗既命掌禹錫等編繹本草累年成書又詔天下郡縣圖上所產藥物用唐永徽故事專命太常博士蘇頌撰述成此書凡二十一卷考證詳明頗有發揮但圖與說異兩不相應或有圖無說或有物失圖或說是圖非如江州菝葜乃仙遺糧滁州青木香乃兜鈴根俱混列圖棠毬子卽赤木瓜天花粉卽栝樓根乃重出條之類亦其小小疏漏耳頌字子容同安人舉進士哲宗朝位至丞相封魏國公

證類本草 [時珍曰] 宋徽宗大觀二年蜀醫唐慎微取嘉祐補註本草及圖經本草合爲一書復拾唐本草陳藏器本草孟詵食療本草舊本所遺者五百餘種附入各部并增五種仍采雷公炮炙及唐本食療陳藏器諸說收未盡者附于各條之後又采古今單方并經史百家之書有關藥物者亦附之共三十一卷名證類本草上之朝廷改名大觀本草慎微貌寢陋而學該博使諸家本草及各藥單方垂之千古不致淪沒者皆其功也政和中復命醫官曹孝忠校正刊行故又謂之政和本草

本草別說 [時珍曰] 宋哲宗元祐中閬中醫士陳承合本草及圖經二書爲一間綴數語謂之別說高宗紹興末命醫官王繼先等校正本草亦有所附皆淺俚無高論

日華諸家本草 [禹錫曰] 國初開寶中明人撰不著姓氏但云日華子大明序集諸家本草近世所用藥各以寒溫性味華實虫獸爲類其言功用甚悉凡二十卷 [時珍曰] 按千家姓大姓出東萊日華子蓋姓大名明也或云其姓田未審然否

本草衍義 [時珍曰] 宋政和中醫官通直郎寇宗奭撰以補註及圖經二書參攷事實覈其情理援引辨證發明良多東垣丹溪諸公亦尊信之但以蘭花爲蘭草卷丹爲百合是其誤也書及序例凡三卷平陽張魏卿以其說分附各藥之下合爲一書

潔古珍珠囊 [時珍曰] 書凡一卷金易州明醫張元素所著元素字潔古舉進士不第去學醫深闡軒岐祕奧參悟天人幽微言古方新病不相能自成家法辨藥性之氣味陰陽厚薄升降浮沉補瀉六氣十二經及隨

證用藥之法立爲主治祕訣心法要旨謂之珍珠囊大揚醫理靈素之下一人而已後人翻爲韻語以便記誦謂之東垣珍珠囊謬矣惜乎止論百品未及徧評又著病機氣宜保命集四卷一名活法機要後人誤作河閒劉完素所著僞譔序文詞調于卷首以附會之其他潔古諸書多是後人依托故駁雜不倫

用藥法象 時珍曰書凡一卷元眞定明醫李杲所著杲字明之號東垣通春秋書易忠信有守富而好施援例爲濟源監稅官受業于潔古老人盡得其學益加闡發人稱神醫祖潔古珍珠囊增以用藥凡例諸經嚮導綱要活法著爲此書謂世人惑于內傷外感混同施治乃辨其脈證元氣陰火飲食勞倦有餘不足著辨惑論三卷脾胃論三卷推明素問難經本草脈訣及雜病方論著醫學發明九卷蘭室祕藏五卷辨析經絡脈法分比傷寒六經之則著此事難知二卷別有癰疽眼目諸書及試效方皆其門人所集述者也

湯液本草 時珍曰書凡二卷元醫學教授古趙王好古撰好古字進之號海藏東垣高弟醫之儒者也取本草及張仲景成無巳張潔古李東垣之書閒附巳意集而爲此別著湯液大法四卷醫壘元戎十卷陰證略例癍論萃英錢氏補遺各一卷

日用本草 時珍曰書凡八卷元海寧醫士吳瑞取本草之切于飲食者分爲八門閒增數品而巳瑞字瑞卿元文宗時人

本草歌括 時珍曰元瑞州路醫學教授胡仕可取本草藥性圖形作歌以便童蒙者我明劉純熊宗立傅滋輩皆有歌括及藥性賦以授初學記誦

**本草衍義補遺**［時珍曰］元末朱震亨所著震亨義烏人字彥修從許白雲講道世稱丹溪先生嘗從羅太無學醫遂得劉張李三家之旨而推廣之爲醫家宗主此書蓋因寇氏衍義之義而推衍之近二百種多所發明但蘭草之爲蘭花胡粉之爲錫粉未免泥于舊說而以諸藥分配五行失之牽强耳所著有格致餘論局方發揮傷寒辨疑外科精要新論風木問答諸書

**本草發揮**［時珍曰］書凡三卷洪武時丹溪弟子山陰徐彥純用誠所集取張潔古李東垣王海藏朱丹溪成無巳數家之說合成一書爾別無增益

**救荒本草**［時珍曰］洪武初周憲王因念旱澇民饑咨訪野老田夫得草木之根苗花實可備荒者四百四十種圖其形狀著其出產苗葉花子性味食法凡四卷亦頗詳明可據近人翻刻削其大半雖其見淺亦書之一厄也王號誠齋性質聰敏集普濟方一百六十八卷袖珍方四卷詩文樂府等書嘉靖中高郵王磐著野菜譜一卷繪形綴語以告救荒略而不詳

**庚辛玉册**［時珍曰］宣德中寧獻王取崔昉外丹本草土宿眞君造化指南獨孤滔丹房鑑源軒轅述寶藏論青霞子丹臺錄諸書所載金石草木可備丹爐者以成此書分爲金石部靈苗部靈植部羽毛部鱗甲部飲饌部鼎器部通計二卷凡五百四十一品所說出產形狀分別陰陽亦可考據焉王號臞仙該通百家所著醫卜農圃琴棋仙學詩家諸書凡數百卷造化指南三十三篇載靈草五十三種云是土宿昆元眞君所說抱朴子注解蓋亦宋元時方士假托者爾古有大清草木方太淸服食經太淸丹藥錄黃白祕法三十六水法伏制草石論諸書皆此類也

**本草集要**［時珍曰］弘治中禮部郎中慈谿王綸取本草常用藥品及潔古東垣丹溪所論序例略節爲八卷別無增益斤斤泥古者也綸字汝言號節齋舉進士仕至都御史

食物本草　[時珍曰] 正德時九江知府江陵汪穎撰東陽盧和字廉夫嘗取本草之繫
于食品者編次此書穎得其稿釐爲二卷分爲水穀菜果禽獸魚味八類云

食鑑本草　[時珍曰] 嘉靖時京口甯原所編
取可食之物略載數語無所發明

本草會編　[時珍曰] 嘉靖中祁門醫士汪機所編機字省之懲王氏本草集要不收草木形狀乃削去本草上中下
三品以類相從菜穀通爲草部果品通爲木部幷諸家序例共二十卷其書撮約似乎簡便而混同反難
檢閱迸之以寡識陋可知掩去諸家更覺零碎
臆度疑似殊無實見僅有數條自得可取爾

本草蒙筌　[時珍曰] 書凡十二卷祁門醫士陳嘉謨撰謨字廷采嘉靖末依王氏集要部次集成每品具氣
味產采治療方法創成對語以便記誦間附已意于後頗有發明便于初學名曰蒙筌誠稱其實

本草綱目　明楚府奉祠　敕封文林郎蓬溪知縣蘄州李時珍東璧撰蒐羅百氏訪采四方始于嘉靖壬子終于萬
曆戊寅稿凡三易分爲五十二卷列爲一十六部部各分類類凡六十標名爲綱列事爲目增藥三百七
十四種方八
千一百六十

## 引據古今醫家書目

[時珍曰] 自陶弘景以下唐宋諸本草引用醫書凡八十四家
而唐愼微居多時珍今所引除舊本外凡二百七十六家

黃帝素問註王冰

天寶單方圖

太倉公方

扁鵲方三卷

華佗方十卷

支太醫方

徐文伯方

秦承祖方

華佗中藏經

范汪東陽方

孫眞人食忌

孫眞人枕中記

孫眞人千金髓方

唐玄宗開元廣濟方

唐德宗貞元廣利方

宋太宗太平聖惠方

張仲景金匱玉函方

張仲景傷寒論成無己註

張文仲隨身備急方

初虞世古今錄驗方

王燾外臺祕要方

姚和衆延齡至寶方

孫眞人千金備急方

孫眞人千金翼方

席延賞方

葉天師枕中記

篋中秘寶方　許孝宗篋中方
錢氏篋中方　劉禹錫傳信方
王紹顏續傳信方　延年秘錄
柳州救三死方　李絳兵部手集方
御藥院方　崔行功纂要方
劉涓子鬼遺方　乘閑集効方
陳延之小品方　葛洪肘後百一方
服氣精義方　謝士泰刪繁方
胡洽居士百病方　孫兆口訣
梅師集驗方　崔元亮海上集驗方
梁師脚氣論（即梅師）　姚僧垣集驗方
孫氏集驗方　孟詵必効方
平堯卿傷寒類要　斗門方

韋宙獨行方　王珉傷寒身驗方
勝金方　文潞公藥準
周應簡要濟衆方　塞上方
王袞博濟方　沈存中靈苑方
救急方　張路大効方
崔知悌勞瘵方　近効方
陳抃經驗方　陳氏經驗後方
蘇沈良方東坡存中　十全博救方
昝殷食醫心鏡　必用方
張傑子母秘錄　楊氏產乳集驗方
昝殷產寶　譚氏小兒方
小兒宮氣方　萬全方
太清草木方　李翺何首烏傳

普救方
神仙服食方
嵩陽子威靈仙傳
寒食散方
賈相公牛經
賈誠馬經已上八十四家係舊本所引
靈樞經
王氷玄密
張杲醫說
黃帝書
褚氏遺書
李濂醫史
秦越人難經
聖濟總錄
劉氏病機賦
皇甫謐甲乙經
宋徽宗聖濟經
劉克用藥性賦
王叔和脈經
張仲景金匱要略
彭祖服食經
巢元方病原論
神農食忌
神仙服食經
宋俠經心錄
魏武帝食制

李東垣醫學發明　東垣辨惑論
東垣脾胃論　東垣蘭室祕藏
東垣試効方　王海藏醫家大法
海藏醫壘元戎　海藏此事難知
海藏陰證發明　羅天益衛生寶鑑
丹溪格致餘論　丹溪局方發揮
盧和丹溪纂要　丹溪醫案
楊珣丹溪心法　方廣丹溪心法附餘
丹溪活套　程充丹溪心法
滑伯仁櫻寧心要　惠民和劑局方
陳言三因方　孫眞人千金月令方
嚴用和濟生方　王氏易簡方王碩
楊子建萬全護命方　繼洪澹寮方

是齋迷指方王貺
楊士瀛仁齋直指方
余居士選奇方
黎居士易簡方
楊氏家藏方楊倓
濟生拔萃方杜思敬
胡濙衞生易簡方
朱端章衞生家寶方
許學士本事方許叔微
雞峰備急方張銳
孫用和傳家祕寶方
王隱居養生主論
眞西山衞生謌
趙士衍九籥衞生方
王方慶嶺南方
嶺南衞生方
初虞世養生必用方
周憲王普濟方一百七十卷
虞摶醫學正傳
李仲南永類鈐方
周憲王袖珍方
傅滋醫學集成
薩謙齋瑞竹堂經驗方
王履溯洄集
葉氏醫學統旨
萬表積善堂經驗方

戴原禮證治要訣
孫氏仁存堂經驗方
醫學指南
劉純玉機微義
陸氏積德堂經驗方
王璽醫林集要
臞仙乾坤祕韞
法生堂經驗方
周良采醫方選要
窺玄子法天生意
陳日華經驗方
醫方大成
吳球活人心統

醫學綱目
戴原禮金匱鉤玄
楊氏頤眞堂經驗方
醫學切問
劉純醫經小學
德生堂經驗方
饒氏醫林正宗
臞仙乾坤生意
劉松石保壽堂經驗方
楊拱醫方摘要
梁氏總要
王仲勉經驗方
方賢奇效良方

劉長春經驗方　吳球諸證辨疑
閻孝忠集効方　禹講師經驗方
趙氏儒醫集要　孫天仁集効方
戴古渝經驗方　瀕湖醫案
試効錄驗方　龔氏經驗方
瀕湖集簡方　經驗濟世方
藺氏經驗方　楊起簡便方
孫一松試効方　阮氏經驗方
坦仙皆効方　董炳集驗方
趙氏經驗方　危氏得効方危亦林
朱端章集驗方　楊氏經驗方
居家必用方　經驗良方
唐瑤經驗方　鄧筆峯衛生雜興

救急易方
張氏經驗方
王英杏林摘要
急救良方
龔氏經驗方
白飛霞韓氏醫通
白飛霞方外奇方
徐氏家傳方
張三丰仙傳方
溫隱居海上方
鄭氏家傳方
王氏奇方
海上仙方
談野翁試驗方
丘瓊山群書日抄
海上名方
包會應驗方
何子元群書續抄
十便良方
孟氏詵詵方
張氏濳江切要
李樓怪證奇方
生生編
邵眞人青囊雜纂
夏子益奇疾方
摘玄方

趙宜眞濟急仙方
端効方
奚囊備急方
王璆百一選方
陳直奉親養老書
吳旻扶壽精方
何大英發明證治
保慶集
神醫普救方
彭用光體仁彙編
王氏究源方
攝生妙用方
濟生祕覽

纂要奇方
王永輔惠濟方
史堪指南方
臞仙壽域神方
世醫通變要法
李延飛三元延壽書
王氏醫方捷徑
保生餘錄
楊炎南行方
傳信適用方
王節齋明醫雜著
艾元英如宜方
王氏手集

蕭靜觀方　錦囊祕覽
唐仲舉方　楊堯輔方
金匱名方　嚴月軒方
鄭師甫方　芝隱方
通妙眞人方　三十六黃方
葛可久十藥神書　蘇遊玄感傳尸論
上淸紫庭追勞方　朱肱南陽活人書
韓祇和傷寒書　龐安時傷寒總病論
吳綬傷寒蘊要　趙嗣眞傷寒論
成無己傷寒明理論　劉河間傷寒直格
陶華傷寒六書　李知先活人書括
陳自明婦人良方　郭稽中婦人方
熊氏婦人良方補遺　胡氏濟陰方

婦人明理論　婦人千金家藏方
便產須知　二難寶鑑
婦人經驗方　錢乙小兒直訣
劉昉幼幼新書　幼科類萃
陳文中小兒方　曾世榮活幼心書
徐用宣袖珍小兒方　張煥小兒方
寇衡全幼心鑑　演山活幼口議
阮氏小兒方　魯伯嗣嬰童百問
活幼全書　鄭氏小兒方
湯衡嬰孩寶鑑　衛生總微論即保幼大全
鮑氏小兒方　湯衡嬰孩妙訣
姚和衆童子祕訣　全嬰方
王日新小兒方　小兒宮氣集

魏直博愛心鑑　高武痘疹管見又名正宗

李言聞痘疹證治　痘疹要訣

李實痘疹淵源　聞人規痘疹八十一論

張清川痘疹便覽　陳自明外科精要

薛己外科心法　外科通玄論

齊德之外科精義　薛己外科發揮

薛己外科經驗方　楊清叟外科祕傳

李迅癰疽方論　周良采外科集驗方

眼科龍木論　飛鴻集

倪惟德原機啓微集　明目經驗方

宣明眼科　眼科針鈎方

咽喉口齒方已上二百七十六家時珍所引者

# 引據古今經史百家書目

時珍曰自陶弘景唐宋已下所引用者凡一百五十一家時珍所引用者除舊本外凡四百四十家

易經注疏 王弼
詩經注疏 孔穎達 毛萇
爾雅注疏 李巡 邢昺 郭璞
尚書注疏 孔安國
春秋左傳注疏 杜預
孔子家語
禮記注疏 鄭玄
周禮注疏
張湛注列子
郭象注莊子
楊倞注荀子
淮南子鴻烈解
呂氏春秋
葛洪抱朴子
戰國策
司馬遷史記
班固漢書
范曄後漢書
陳壽三國志
王隱晉書

沈約宋書　蕭顯明梁史
李延壽北史　魏徵隋書
歐陽修唐書　王瓘軒轅本紀
穆天子傳　秦穆公傳
蜀王本紀　魯定公傳
漢武故事　漢武內傳
壺居士傳　崔魏公傳
李寶臣傳　何君謨傳
李孝伯傳　李司封傳
柳宗元傳　梁四公子記
唐武后別傳　南岳魏夫人傳
三茅眞君傳　葛洪神仙傳
干寶搜神記　紫靈元君傳

劉向列仙傳　徐鉉稽神錄
玄中記　洞微志
郭憲洞冥記　樂史廣異記
劉敬叔異苑　王子年拾遺記
太平廣記　吳均續齊諧記
段成式酉陽雜俎　異術
王建平典術　杜祐通典
異類　何承天纂文
張華博物志　魏略
東方朔神異經　盛弘之荆州記
郭璞注山海經　何晏九州記
宗懍荆楚歲時記　華山記
顧微廣州記　徐表南州記

嵩山記　裴淵廣州記
萬震南州異物志　南蠻記
楊孚異物志　房千里南方異物志
太原地志　劉恂嶺表錄
孟琯嶺南異物志　永嘉記
朱應扶南記　張氏燕吳行紀
南城志　五溪記
王氏番禺記　白澤圖
軒轅述寶藏論　青霞子丹臺錄
斗門經　獨孤滔丹房鑑源
東華眞人煑石法　房室圖
太清草木記　神仙芝草經
異魚圖　太清石壁記

靈芝瑞草經　　狐剛子鍊粉圖
魏王　木志　　夏禹神仙經
四時纂要　　賈思勰音叶齊民要術
三洞要錄　　郭義恭廣志
氾勝之種植書　　八帝聖化經
崔豹古今注　　丁謂天香傳
八帝玄變經　　陸機詩義疏
陸羽茶經　　神仙感應篇
李畋該聞錄　　張鷟朝野僉載
神仙祕旨　　楊億談苑
開元天寶遺事　　修眞祕旨
宣政錄　　鄭氏明皇雜錄
潁陽子修眞祕訣　　五行書

孫光憲北夢瑣言　　左慈祕訣
廣五行記　　歐陽公歸田錄
陶隱居登眞隱訣　　遁甲書
沈括夢溪筆談　　耳珠先生訣
龍魚河圖　　景煥野人閑話
韓終采藥詩　　王充論衡
黃休復茆亭客話　　金光明經
顏氏家訓　　范子計然
宋齊丘化書　　楚辭
李善注文選　　張協賦
本事詩　　江淹集
宋王微讚　　庾肩吾集
陳子昂集　　陸龜蒙詩

梁簡文帝勸醫文已上一百五十一家舊本所引者
許愼說文解字　呂忱字林
周弼六書正譌　周弼說文字原
王安石字說　趙古則六書本義
顧野王玉篇　孫愐唐韻
魏子才六書精蘊　倉頡解詁
丁度集韻　黃公武古今韻會
洪武正韻　陰氏韻府群玉
包氏續韻府群玉　急就章
張揖廣雅　孫炎爾雅正義
孔鮒小爾雅　曹憲博雅
羅願爾雅翼　楊雄方言
陸佃埤雅　埤雅廣義

劉熙釋名　司馬光名苑
陸璣鳥獸草木蟲魚疏　師曠禽經
袁達禽蟲述　淮南八公相鶴經
黃省曾獸經　王元之蜂記
朱仲相貝經　龜　經
張世南質龜論　鍾毓果然賦
馬　經　傅肱蟹譜
李石續博物志　韓彥直橘譜
毛文錫茶譜　唐蒙博物志
蔡襄荔枝譜　蔡宗顏茶對
張華感應類從志　歐陽修牡丹譜
劉貢父芍藥譜　贊寧物類相感志
范成大梅譜　范成大菊譜

楊泉物理論
劉蒙泉菊譜
史正志菊譜
王佐格古論
陳翥桐譜
沈立海棠譜
天玄主物簿
陳仁玉菌譜
王西樓野菜譜
穆修靖靈芝記
戴凱之竹譜
葉庭珪香譜
李德裕平泉草木記
僧贊寧竹譜
洪駒父香譜
周敍洛陽花木記
蘇易簡紙譜
蘇氏筆譜
洛陽名園記
蘇氏硯譜
蘇氏墨譜
張杲丹砂祕訣
杜季陽雲林石譜
九鼎神丹祕訣
張杲玉洞要訣
李德裕黃冶論

昇玄子伏汞圖　桓譚鹽鐵論
大明一統志　韋述兩京記
寶貨辨疑　太平寰宇記
祝穆方輿要覽　稽含南方草木狀
逸周書　酈道元注水經
沈瑩臨海水土記　汲冢竹書
陸禋續水經　臨海異物志
左氏國語　三輔黃圖
陳祈暢異物志　謝承續漢書
三輔故事　曹叔雅異物志
法盛晉中興書　張勃吳錄
薛氏荆揚異物志　後魏書
環氏吳紀　萬震涼州異物志

南齊書　東觀祕記
劉欣期交州記　唐會要
劉義慶世說　范成大桂海虞衡志
五代史　世本
東方朔林邑記　南唐書
類編　東方朔十洲記
宋史　逸史
任豫益州記　遼史
野史　宋祁劍南方物贊
元史　費信星槎勝覽
周達觀眞臘記　吾學編
顧玠海槎錄　劉郁出使西域記
大明會典　朱輔山溪蠻叢笑

袁滋雲南記
陳彭年江南別錄
册府元龜
蜀地志
李肇國史補
馬端臨文獻通攷
茅山記
葛洪西京雜記
古今事類合璧
西涼記
周密癸辛雜志
歐陽詢藝文類聚
永州記
太平御覽
永昌志
江南異聞錄
集事淵海
華陽國志
楚國先賢傳
白孔六帖
太和山志
周密齊東野語
祝穆事文類聚
荆南記
周密浩然齋日鈔
鄭樵通志

周密志雅堂雜鈔　南裔記
陶九成說郛　羅大經鶴林玉露
竺法眞羅浮山疏　虞世南北堂書鈔
陶九成輟耕錄　田汝成西湖志
賈似道悅生隨鈔　葉盛水東日記
南郡記　徐堅初學記
徐氏總龜對類　伏深齊地記
文苑英華　邵桂子甕天語
郡國志　錦繡萬花谷
毛直方詩學大成　鄴中記
洪邁夷堅志　蘇子仇池筆記
廉州記　淮南萬畢術
鮮于樞鈎玄　辛氏三秦記

高氏事物紀原
松窓雜記
金門記
伏候中華古今注
杜寶大業拾遺錄
周處風土記
應劭風俗通
蘇鶚杜陽編
嵩高記
班固白虎通
方勺泊宅編
襄沔記
服虔通俗文
方鎮編年錄
鄧顯明南康記
顏師古刊謬正俗
楊愼丹鉛錄
方國志
杜臺卿玉燭寶典
劉績霏雪錄
荀伯子臨川記
河圖玉版
葉夢得水雲錄
洪邁松漠紀聞
河圖括地象
孫柔之瑞應圖記

河湖紀聞　春秋題辭
許善心符瑞記　王安貧武陵記
春秋運斗樞　夏小正
趙蔡行營雜記　春秋元命包
崔寔四時月令　張匡業行程記
春秋考異郵　月令通纂
金幼孜北征錄　禮斗威儀
王禎農書　張師正倦游錄
孝經援神契　王旻山居錄
段公路北戶錄　周易通卦驗
山居四要　胡嶠陷虜記
京房易占　居家必用
隋煬帝開河記　劉向洪範五行傳

便民圖纂　玉策記
遁甲開山圖　劉伯溫多能鄙事
述征記　南宮從岣嶁神書
臞仙神隱書　任昉述異記
皇極經世書　務本新書
祖冲之述異記　性理大全
兪宗本種樹書　薛用弱集異記
五經大全　起居雜記
陳翺卓異記　通鑑綱目
洞天保生錄　神異記
程氏遺書　林洪山家清供
李元獨異志　朱子大全
閭閻事宜　錄異記

老　子　陳元靚事林廣記
戴祚甄異傳　鶡冠子
事海文山　異聞記
管　子　萬寶事山
祖台之志怪　墨　子
奚囊雜纂　陶氏續搜神記
晏子春秋　三洞珠囊
楊氏洛陽伽藍記　董　子
陶隱居雜錄　太上玄科
賈誼新書　西樵野記
太淸外術　韓詩外傳
琅邪漫鈔　魯至剛俊靈機要
劉向說苑　姚福庚巳編

地鏡圖　杜恕篤論
王清明揮麈餘話　五雷經
盧諶祭法　景煥牧豎閑談
雷書　王叡炙轂子
陳霆兩山墨談　乾象占
葉世傑草木子　韋航細談
列星圖　梁元帝金樓子
孫升談圃　演禽書
蔡邕獨斷　龐元英談藪
吐納經　王浚川雅述
愛竹談藪　謝道人天空經
章俊卿山堂考索　彭乘墨客揮犀
魏伯陽參同契　洪邁容齋隨筆

蔡條鐵圍山叢話
蕭了眞金丹大成
百川學海
侯延賞退齋閑覽
許眞君書
翰墨全書
遯齋閑覽
陶弘景眞誥
文　系
顧文薦負暄錄
朱眞人靈驗篇
朱子離騷辨證
陸文量菽園雜記
太上玄變經
何孟春餘冬錄
王性之揮麈錄
李筌太白經注
黃震慈溪日鈔
趙與時賓退錄
八草靈變篇
類　說
葉石林避暑錄
鶴頂新書
吳淑事類賦
劉禹錫嘉話錄
造化指南

左思三都賦
修眞指南
兪琰席上腐談
魯褒錢神論
劉根別傳
熊太古冀越集
嵆康養生論
涅槃經
李氏仕學類鈔
儲詠祛疑說
楞嚴經
翰苑叢記
造化權輿

姚寬西溪叢話
葛洪遐觀賦
周顛仙碑
胡仔漁隱叢話
綦毋錢神論
法華經
王濟日詢手記
王之綱通徴集
圓覺經
周必大陰德錄
文字指歸
變化論
解頤新語

自然論　潘塤楮記室
趙溍養痾漫筆　劉義慶幽明錄
仇遠稗史　江鄰幾雜志
百感錄　魏武帝集
張耒明道雜志　海錄碎事
魏文帝集　唐小說
瑣碎錄　曹子建集
林氏小說　洽聞說
韓文公集　晁以道客話
龍江錄　柳子厚文集
劉跂暇日記　靈仙錄
歐陽公文集　康譽之昨夢錄
白獺髓　三蘇文集

邢坦齋筆衡
異說
宛委錄
蘇黃手簡
張世南游宦紀聞
高氏蓼花州閑錄
山谷刀筆
何遠春渚紀聞
畢氏幕府燕閑錄
李太白集
東坡詩集
吳澄草廬集
杜子美集
黃山谷集
吳萊淵穎集
王維詩集
宋徽宗詩
楊維禎鐵厓集
岑參詩集
王元之集
宋景濂潛溪集
錢起詩集
梅堯臣詩集
方孝孺遜志齋集
白樂天長慶集
王荆公臨川集

吳玉崑山小稿　元稹長慶集
邵堯夫集　陳白沙集
劉禹錫集　周必大集
何仲默集　張籍詩集
楊萬里誠齋集　張東海集
李紳文集　范成大石湖集
楊升菴集　李義山集
陸放翁集　唐荊川集
左貴嬪集　陳止齋集
焦希程集　王梅溪集
張宛丘集　方虛谷集
葛氏韻語陽秋　蔡氏詩話
古今詩話

錦囊詩對 己上四百四十家時珍所引者

## 采集諸家本草藥品總數

神農本草經三百四十七種 除併入一十八種外 草部一百六十四種 穀部七種 菜部一十三種 果部一十一種 木部四十四種 土部二種 金石部四十一種 蟲部二十九種 介部八種 鱗部七種 禽部五種 獸部一十五種 人部一種

陶弘景名醫別錄三百六種 除併入五十九種外 草部一百三十種 穀部一十九種 菜部一十七種 果部一十七種 木部二十三種 服器部三種 水部二種 土部三種 金石部三十二種 蟲部一十七種 介部五種 鱗部十種 禽部一十一種 獸部一十二種 人部五種

李當之藥錄一種 草部

吳普本草一種 草部

雷斅炮炙論一種 獸部

蘇恭唐本草一百一十一種 草部三十四種 穀部二種 菜部七種 果部一十一種 木部二十二種 服器部三種 土部三種 金石部一十四種 蟲部一種 介部二種 鱗部一種

禽部二種　獸部八種　人部一種

甄權藥性本草四種　草部一種　穀部一種　服器部一種　金石部一種

孫思邈千金食治二種　菜部

孟詵食療本草一十七種　草部二種　穀部三種　菜部三種　果部一種　鱗部六種　禽部二種

陳藏器本草拾遺三百六十九種　草部六十八種　穀部一十一種　菜部一十三種　果部二十種　木部三十九種　服器部三十五種　火部一種　水部二十六種　土部二十八種　金石部一十七種　蟲部二十四種　介部一十種　鱗部二十八種　禽部二十六種　獸部一十五種　人部八種

李珣海藥本草一十四種　草部四種　穀部一種　果部一種　木部五種　蟲部一種　介部二種

蕭炳四聲本草二種　草部一種　服器部一種

陳士良食性本草二種　菜部一種　果部一種

韓保昇蜀本草五種　菜部二種　木部一種　介部一種　獸部一種

馬志開寶本草一百一十一種　草部三十七種　穀部二種　菜部六種　果部一十九種　木部一十五種　服器部一種　土部一種　金石部九種　蟲部二種　介部二種　鱗部一十一種　禽部一種　獸部四種　人部一種

掌禹錫嘉祐本草七十八種　草部一十七種　穀部三種　菜部十種　果部二種　木部六種　服器部一種　水部四種　金石部八種　介部八種　禽部一十三種　獸部一種　人部四種

蘇頌圖經本草七十四種　草部五十四種　穀部二種　菜部四種　果部五種　木部一種　金石部三種　蟲部二種　介部一種　禽部一種　獸部一種

大明日華本草二十五種　草部七種　菜部二種　果部二種　木部二種　金石部八種　蟲部一種　鱗部一種　禽部一種　人部一種

唐愼微證類本草八種　菜部一種　木部一種　土部一種　金石部一種　蟲部二種　獸部一種　人部一種

寇宗奭本草衍義一種　獸部

李杲用藥法象一種　草部

朱震亨本草補遺三種　草部一種　穀部一種　木部一種

吳瑞日用本草七種　穀部一種　菜部三種　果部二種　獸部一種

周憲王救荒本草二種　穀部一種　菜部一種

汪穎食物本草一十七種　穀部三種　菜部二種　果部一種　禽部十種　獸部一種

甯原食鑑本草四種　穀部一種　菜部一種　鱗部一種　獸部一種

汪機本草會編三種　草部一種　果部一種　蟲部一種

陳嘉謨本草蒙筌二種　介部一種　人部一種

李時珍本草綱目三百七十四種　草部八十六種　穀部一十五種　菜部一十七種　果部三十四種　木部二十一種　服器部三十五種　火部十種　水部十一種　土部二十一種　金石部二十六種　蟲部二十六種　介部五種　鱗部二十八種　禽部五種　獸部二十三種　人部一十一種

神農本經名例

上藥一百二十種爲君主養命以應天無毒多服久服不傷人欲輕身益氣不老延年者本上經

中藥一百二十種爲臣主養性以應人無毒有毒斟酌其宜欲遏病補虛羸者本中經

下藥一百二十五種爲佐使主治病以應地多毒不可久服欲除寒熱邪氣破積聚愈疾者本下經

三品合三百六十五種法三百六十五度一度應一日以成一歲倍其數合七百三十名也「陶弘景曰」今按上品藥性亦能遣疾但勢力和厚不爲速効歲月常服必獲大益病既愈矣命亦兼申天道仁育故曰應天一百二十種者當謂寅卯辰巳之月法萬物生榮時也中品藥性療病之辭漸深輕身之說稍薄祛患爲速延齡爲緩人懷性情故曰應人一百二十種當謂午未申酉之月法萬物成熟時也下品藥性專主攻擊毒烈之氣傾損中和不可常服疾愈即止地體收殺故曰應地一百二十五種者當謂戌亥子丑之月法萬物枯藏時也兼以閏之盈數加之若單服或配隸自隨人患參而行之不必偏執也「掌禹錫曰」陶氏本草例神農以朱書別錄以墨書本經藥止三百六十五種今此言倍其數合七百三十名是併別錄副品而言此一節乃別錄之文傳寫既久錯亂所致遂令後世捃摭此類以爲非神農之書率以此故也「時珍曰」神農本草藥分三品陶氏別錄倍增藥品始分部類唐宋諸家大加增補兼或退出雖有朱墨之別三品之名而實已紊矣或一藥而分數條或二物而同一處或木居草部或虫入木部水土共居虫魚雜處淄澠罔辨玉珷不分名已難尋實何由覔今則通合古今諸家之藥析爲十六部當分者分當併者併當移者移當增者增不分三品惟逐各部物以類從目隨綱舉每藥標一總名正大綱也大書氣味主治正小綱也分註釋名集解發明詳其目也而辨疑正誤附錄附之備其體也單方又附于其末詳其用也大綱之下明注本草及三品所以原始也小綱之下明注各家之名所以注實也分注則各書人名一則古今之出處不沒一則各家之是非有歸雖舊章

似乎割析而支脈更覺分明非敢僭越實便討尋爾

藥有君臣佐使以相宣攝合和宜一君二臣三佐五使又可一君三臣九佐使也〔弘景曰〕用藥猶如立人之制若多君少臣多臣少佐則氣力不周也然檢仙經世俗諸方亦不必皆爾大抵養命之藥多君養性之藥多臣療病之藥多佐猶依本性所主而復斟酌之上品君中復有貴賤臣佐之中亦復如之所以門冬遠志別有君臣甘草國老大黃將軍明其優劣皆不同秩也〔岐伯曰〕方制君臣者主病之謂君佐君之謂臣應臣之謂使非上中下三品之謂也所以明善惡之殊貫也〔張元素曰〕爲君者最多爲臣者次之佐者又次之藥之于證所主同者則各等分或云力大者爲君〔李杲曰〕凡藥之所用皆以氣味爲主補瀉在味隨時換氣主病爲君假令治風防風爲君治寒附子爲君治濕防已爲君治上焦熱黃芩爲君中焦熱黃連爲君兼見何證以佐使藥分治之此制方之要也本草上品爲君之說各從其宜爾

藥有陰陽配合子母兄弟〔韓保昇曰〕凡天地萬物皆有陰陽大小各有色類並有法象故羽毛之類皆生于陽而屬于陰鱗介之類皆生于陰而屬于陽所以空青法木故色青而主肝丹砂法火故色赤而主心雲母法金故色白而主肺雌黃法土故色黃而主脾磁石法水故色黑而主腎餘皆以此例推之子母兄弟若榆皮爲母厚朴爲子之類是也

根莖花實苗皮骨肉〔元素曰〕凡藥根之在土中者中半已上氣脈之上行也以生苗者爲根中半已下氣脈之下行也以入土者爲梢病在中焦與上焦者用根在下焦者用梢根升梢降人之身半已上天之陽也用頭中焦用身身半已下地之陰也用梢乃述類象形者也〔時珍曰〕草木有單使一件者如羌活之根木通之莖款冬之花葶藶之實敗醬之苗大青之葉大腹之皮郁李之核蘗木之皮沉香之節蘇木之肌胡桐之淚龍腦

之膏是也有兼用者遠志小草蜀漆常山之類是也有一物兩用者當歸頭尾麻黃根節赤白茯苓牛膝春夏用苗秋冬用根之類是也羽毛鱗介玉石水火之屬往往皆然不可一律論也

有單行者有相須者有相使者有相畏者有相惡者有相反者有相殺者凡此七情合和視之當用相須相使者良勿用相惡相反者若有毒宜制可用相畏相殺者不爾勿合用也

[保昇曰] 本經三百六十五種中單行者七十一種相須者十二種相使者九十種相畏者七十八種相惡者六十種相反者十八種相殺者三十六種凡此七情合和視之 [弘景曰] 凡檢舊方用藥亦有相惡相反者如仙方甘草丸有防已細辛俗方玉石散用栝樓乾薑之類服之乃不爲害或有制持之者譬如寇賈輔漢程周佐吳大體既正不得以私情爲害雖爾不如不用尤良半夏有毒須用生薑取其相畏相制也 [宗奭曰] 相反爲害深于相惡者謂彼雖惡我我無忿心猶如牛黃惡龍骨而龍骨得牛黃更良此有以制服故也相反者則彼我交讎必不和合今畫家用雌黃胡粉相近便自黯妬可證矣 [時珍曰] 藥有七情獨行者單方不用輔也相須者同類不可離也如人參甘草黃蘗知母之類相使者我之佐使也相惡者奪我之能也相畏者受彼之制也相反者兩不相合也相殺者制彼之毒也古方多有用相惡相反者蓋相須相使同用者帝道也相畏相殺同用者王道也相惡相反同用者霸道也有經有權在用者識悟爾

藥有酸鹹甘苦辛五味又有寒熱溫涼四氣

[宗奭曰] 凡稱氣者是香臭之氣其寒熱溫涼是藥之性且如鵞白脂性冷不可言氣冷也四氣則是香臭腥臊如蒜阿魏鮑魚汗韈則其氣臭雞魚鴨蛇則其氣腥狐狸白馬莖人中白則其氣臊沈檀龍麝則其氣香是也則氣字當改爲性字于義方允 [時珍曰] 寇氏言寒熱溫涼是性香臭腥臊是氣其說與禮記文合但自素問以來只以氣味言卒難改易姑從

舊衍[好古曰]味有五氣有四五味之中各有四氣如辛則有石膏之寒桂附之熱半夏之溫薄荷之涼是也氣者天也味者地也溫熱者天之陽寒涼者天之陰辛甘者地之陽鹹苦者地之陰本草五味不言淡四氣不言涼只言溫大溫熱大熱寒大寒微寒平小毒大毒有毒無毒何也淡附于甘微寒即涼也

**及有毒無毒** [岐伯曰]病有久新方有大小有毒無毒固宜常制大毒治病十去其六常毒治病十去其七小毒治病十去其八無毒治病十去其九穀肉果菜食養盡之無使過之傷其正也又曰耐毒者以厚藥不勝毒者以薄藥[王冰曰]藥氣有偏勝則臟氣有偏絕故十分去其六七八九而止也

**陰乾暴乾採造時月生熟** [弘景曰]凡採藥時月皆是建寅歲首則從漢太初後所記也其根物多以二月八月採者謂春初津潤始萌未充枝葉勢力淳濃也至秋枝葉乾枯津潤歸流于下也大抵春寧宜早秋寧宜晚花實莖葉各隨其成熟爾歲月亦有早晏不必都依本文也所謂陰乾者就六甲陰中乾之也又依遁甲法甲子旬陰中在癸酉以藥著酉地也實不必然但露暴于陰影處乾之爾若可兩用益當爲善[孫思邈曰]古之醫者自解採取陰乾暴乾皆如法用藥必依土地所以治病十愈八九今之醫者不知採取時節至于出產土地新陳虛實所以治病十不得五也[馬志曰]今按法陰乾者多惡如鹿茸陰乾悉爛火乾且良草木根苗九月以前採者悉宜日乾十月以後採者陰乾乃好[時珍曰]生產有南北節氣有早遲根苗異收採制造異法度故市之地黃以鍋煑熟大黃用火焙乾松黃和蒲黃樟腦雜龍腦皆失制作僞者也孔志約云動植形生因地舛性春秋節變感氣殊功離其本土則質同而効異乖于採取則物是而時非名實既爽寒溫多謬施于君父逆莫大焉[嘉謨曰]醫藥貿易多在市家諺云賣藥者兩眼用藥者一眼服藥者無眼非虛語也古壙灰云死龍骨苜蓿根爲土黃者麝香搗荔核攙

藿香采茄葉雜𢀖半夏爲玄胡索𠞰松稍爲肉蓯蓉草仁充草豆蔻西呆代南木香熬廣膠入蕎麪作阿膠煮雞子及魚枕爲琥珀枇杷蕋代欵冬驢脚脛作虎骨松脂混麒麟竭番硝和龍腦香巧詐百般甘受其侮甚致殺人歸咎用藥乃大關係非比尋常不可不愼也

## 土地所出眞僞陳新並各有法

［弘景曰］諸藥所生皆的有境界秦漢已前當言列國今郡縣之名後人所增爾江東以來小小雜藥多出近道氣力性理不及本邦假令荆益不通則全用歷陽當歸錢塘三建豈得相似所以療病不及往人亦當緣此又且醫不識藥惟聽市人市人又不辨究皆委採送之家傳習造作眞僞好惡並皆莫測所以鍾乳醋煑令白細辛水漬使直黃耆蜜蒸爲甜當歸酒灑取潤螟蚣朱足令赤螵蛸膠于桑枝以蛇牀當蘼蕪以薺苨亂人參此等既非事實合藥不量剝除只如遠志牡丹纔不收半地黃門冬三分耗一凡去皮除心之屬分兩不應不知取足王公貴勝合藥之日群下竊換好藥終不能覺以此療病固難責效［宗奭］曰凡用藥必須擇土地所宜者則眞用之有據如上黨人參川西當歸齊州半夏華州細辛東壁土冬月灰半天河水熱湯漿水之類其物至微其用至廣蓋亦有理若不推究厥理治病徒費其功［杲曰］陶隱居本草言狼毒枳實橘皮半夏麻黃吳茱萸皆須陳久者良其餘須精新也然大黃木賊荆芥芫花槐花之類亦宜陳久不獨六陳也凡藥味須要專精至元庚辰六月許伯威年五十四中氣本弱病傷寒八九日熱甚醫以涼藥下之又食梨冷傷脾胃四肢逆冷時發昏憒心下悸動吃噫不止面色青黃目不欲開其脈動中有止時自還乃結脈也用仲景復脈湯加人參肉桂急扶正氣生地黃減半恐傷陽氣服二劑病不退再爲診之脈證相對因念莫非藥欠專精陳腐耶再市新藥與服其證減半又服而安凡諸草木昆蟲產之有地根葉花實採之有時失其地則性味少異失其時則氣味不全又況新陳之不同精粗之不等倘不擇而用之其不效者醫之過也唐耿湋詩云老醫迷舊疾朽藥誤新方是矣○歳物專精見後

藥性有宜丸者宜散者宜水煑者宜酒漬者宜膏煎者亦有一物兼宜者亦有不可入湯酒者並隨藥性不得違越　弘景曰又按病有宜服丸服散服湯服酒服膏煎者亦兼參用以爲其制華佗曰病有宜湯宜丸者宜散者宜下者宜吐者宜汗者湯可以蕩滌臟腑開通經絡調品陰陽丸可以逐風冷破堅積進飲食散可以去風寒暑濕之邪散五臟之結伏開腸利胃可下而不下使人心腹脹滿煩亂可汗而不汗使人毛孔閉塞悶絕而終可吐而不吐使人結胸上喘水食不入而死杲曰湯者蕩也去大病用之散者散也去急病用之丸者緩也舒緩而治之也㕮咀者古制也古無鐵刃以口咬細煎汁飲之則易升易散而行經絡也凡治至高之病加酒煎去濕以生薑補元氣以大棗發散風寒以葱白去膈上痰以蜜細末者不循經絡止去胃中及臟腑之積氣味厚者白湯調氣味薄者煎之和滓服去下部之痰其丸極大而光且圓治中焦者次之治上焦者極小稠麪糊取其遲化直至中下或酒或醋取其散之意也犯半夏南星欲去濕者丸以薑汁稀糊取其易化也水浸宿炊餅又易化滴水丸又易化煉蜜丸者取其遲化而氣循經絡也蠟丸取其難化而旋旋取效或毒藥不傷脾胃也元素曰病在頭面及皮膚者藥須酒炒在咽下臍上者酒洗之在下者生用寒藥須酒浸曝乾恐傷胃也當歸酒浸助發散之用也嘉謨曰製藥貴在適中不及則功效難求太過則氣味反失火製四煆炮炙炒也水製三漬泡洗也水火共製蒸煮二者焉法造雖多不離于此酒製升提薑製發散入鹽走腎而軟堅用醋注肝而住痛童便製除劣性而降下米泔製去燥性而和中乳製潤枯生血蜜製甘緩益元陳壁土製竊眞氣驟補中焦麥麩皮製抑酷性勿傷上膈烏豆湯甘草湯漬曝並解毒致令平和羊酥油猪脂油塗燒咸滲骨容易脆斷去穰者免脹抽心者除煩大槩具陳初學熟玩

欲療病先察其源先候病機五臟未虛六腑未竭血脈未亂精神未散服藥必活若病已成可得半愈病勢已過命將難全　弘景曰自非明醫聽聲察色診脈孰能知未病之病乎且未病之人亦無肯自療故齊侯怠于皮膚之微以致骨髓之痾非但識悟之爲難亦乃信受之弗易倉公有言信巫不信醫

死不治也[時珍曰]素問云上古作湯液故爲而弗服中古道德稍衰邪氣時至服之萬全當今之世必齊毒藥攻其中鑱石針艾治其外又曰中古治病至而治之湯液十日不已治以草蘇荄枝本末爲助標本已得神氣乃復曩世之病不本四時不知日月不審逆從病形已成以爲可救故病未已新病復起[淳于意曰]病有六不治驕恣不論于理一不治輕身重財二不治衣食不適三不治陰陽臟氣不定四不治形羸不能服藥五不治信巫不信醫六不治六者有一則難治也[宗奭曰]病有六失失于不審失于不信失于過時失于不擇醫失于不識病六失有一卽爲難治又有八要一曰虛二曰實三曰冷四曰熱五曰邪六曰正七曰內八曰外也素問言凡治病察其形氣色澤觀人勇怯骨肉皮膚能知其情以爲診法若患人脈病不相應既不得見其形醫止據脈供藥其可得乎今豪富之家婦人居帷幔之內復以帛幪手臂既無望色之神聽聲之聖又不能盡切脈之巧未免詳問病家厭繁以爲術疎往往得藥不服是四診之術不得其一矣可謂難也嗚呼

若用毒藥療病先起如黍粟病去卽止不去倍之不去十之取去爲度[弘景曰]今藥中單行一兩種有毒只如巴豆甘遂將軍不可便令盡劑如經所云一物一毒服一丸如細麻二物一毒服二丸如大麻三物一毒服三丸如胡豆四物一毒服四丸如小豆五物一毒服五丸如大豆六物一毒服六丸如梧子從此至十皆以梧子爲數其中又有輕重且如狼毒鉤吻豈如附子芫花輩耶此類皆須量宜[宗奭曰]須有此例更合論人老少虛實病之新久藥之多毒少毒斟量之不可執爲定法

療寒以熱藥療熱以寒藥飲食不消以吐下藥鬼疰蠱毒以毒藥癰腫瘡瘤以瘡藥風濕以風濕藥各

隨其所宜

弘景曰 藥性一物兼主十餘病者取其偏長爲本復觀人之虛實補瀉男女老少苦樂榮悴鄉壤風俗並各不同褚澄療寡婦尼僧異乎妻妾此是達其性懷之所致也 時珍曰 氣味有厚薄性用有躁靜治體有多少力化有淺深正者正治反者反治用熱遠熱用寒遠寒用涼遠涼用溫遠溫發表不遠熱攻裏不遠寒不遠熱則熱病至不遠寒則寒病至治熱以寒溫而行之治寒以熱涼而行之治溫以清冷而行之治清以溫熱而行之木鬱達之火鬱發之土鬱奪之金鬱泄之水鬱折之氣之勝也微者隨之甚者制之氣之復也和者平之暴者奪之高者抑之下者舉之有餘折之不足補之堅者削之客者除之勞者溫之結者散之留者行之燥者濡之急者緩之散者收之損者益之逸者行之驚者平之吐之汗之下之補之瀉之久新同法又曰逆者正治從者反治反治者熱因寒用寒因熱用塞因塞用通因通用必伏其所主而先其所因其始則同其終則異可使破積可使潰堅可使氣和可使必已又曰諸寒之而熱者取之陰熱之而寒者取之陽所謂求其屬以衰之也此皆約取素問之粹言

病在胸膈已上者先食後服藥病在心腹已下者先服藥而後食病在四肢血脈者宜空腹而在旦病在骨髓者宜飽滿而在夜

弘景曰 今方家先食後食蓋此義也又有須酒服者飲服者冷服者熱服者服湯則有疎有數煮湯則有生有熟各有法用並宜詳審 杲曰 古人服藥活法病在上者不厭頻而少病在下者不厭頓而多少服則滋榮于上多服則峻補于下凡云分再服三服者要令勢力相及幷視人之强弱病之輕重以爲進退增減不必泥法

夫大病之主有中風傷寒寒熱溫瘧中惡霍亂大腹水腫腸澼下痢大小便不通奔豚上氣欬逆嘔吐黃疸消渴留飲癖食堅積癥瘕癲邪驚癎鬼疰喉痺齒痛耳聾目盲金瘡踒折癰腫惡瘡痔瘻癭瘤男

子五勞七傷虛乏羸瘦女子帶下崩中血閉陰蝕蟲蛇蠱毒所傷此大略宗兆其間變動枝葉各宜依端緒以收之

〔弘景曰〕藥之所主止說病之一名假令中風乃有數十種傷寒證候亦有二十餘條更復就中求其類例大體歸其始終以本性爲根宗然後配證以合藥爾病之變狀不可一槩言之所以醫方千卷猶未盡其理春秋已前及和緩之書蔑聞而道經略載扁鵲數法其用藥猶是本草家意至漢淳于意及華佗等方今時有存者亦皆條理藥性惟張仲景一部最爲衆方之祖又悉依本草但其善診脈明氣候以意消息之爾至于刳腸剖臆刮骨續筋之法乃別術所得非神農家事自晉代以來有張苗宮泰劉德史脫靳邵趙泉李子豫等一代良醫其貴勝阮德如張茂先輩逸民皇甫士安及江左葛洪蔡謨殷仲堪諸名人等並研精藥術宋有羊欣元徽胡洽秦承祖齊有尚書褚澄徐文伯嗣伯群從兄弟療病亦十愈八九凡此諸人各有所撰用方觀其指趣莫非本草者或時用別藥亦循其性度非相踰越范汪方百餘卷及葛洪肘後其中有細碎單行經用者或田舍試驗之法或殊域異識之術如藕皮散血起自庖人牽牛逐水近出野老麪店蒜齏乃是下蛇之藥路邊地菘而爲金瘡所秘此蓋天地間物莫不爲天地間用觸遇則會非其主對矣顏光祿亦云道經仙方服食斷穀延年卻老乃至飛丹鍊石之奇雲騰羽化之妙莫不以藥道爲先用藥之理一同本草但制御之途小異世法所用不多遠至二十餘物或單行數種歲月深積便致大益卽本草所云久服之效不如俗人微覺便止今庸醫處療皆恥看本草或倚約舊方或聞人傳說便欖筆疏之以此表奇其畏惡相反故自寡昧而藥類違僻分兩參差不以爲疑偶爾值瘥則自信方驗旬月未瘳則言病源深結了不反求諸已虛構聲稱自應貽譴矣其五經四部軍國禮服少有乖越止于事迹非宜爾至于湯藥一物有謬便性命及之千乘之君百金之長可不深思戒愼耶

〔宗奭曰〕人有貴賤少長病當別論病有新久虛實理當別藥蓋人心如面各各不同惟其心不同臟腑亦異欲以一藥通治衆人之病其可得乎

〔張仲景曰〕有土地高下不同物性剛柔食居

亦異是故黃帝與四方之問岐伯舉四治之能且如貴豪之家形樂志苦者也衣食足則形樂而外實思慮多則志苦而內虛故病生於脈與貧下異當因人而治後世醫者委此不行所失甚矣又凡人少長老其氣血有盛壯衰三等故岐伯曰少火之氣壯壯火之氣衰蓋少火生氣壯火散氣況衰火乎故治法亦當分三等其少日服餌之藥于壯老之時皆須別處決不可忽○又云人以氣血爲本世有童男室女積想在心思慮過當多致勞損男則神色先散女則月水先閉蓋憂愁思慮則傷心心傷則血逆竭故神色先散而月水先閉也火既受病不能營養其子故不嗜食脾既虛則金氣虧故發嗽嗽既作木氣絕故四肢乾木氣不充故多怒鬢髮焦筋痿俟五臟傳遍故卒不能死然終死矣此于諸勞最爲難治或能改易心志用藥扶接間得九死一生耳○有人病久嗽肺虛生寒熱以款冬花焚三兩芽俟煙出以筆管吸其煙滿口則嚥之至倦乃已日作五七次遂瘥○有人病瘧月餘又以藥吐下之氣遂弱觀其脈病乃夏傷暑秋又傷風因與柴胡湯一劑安後又飲食不節寒熱復作吐逆不食脇下急痛此名痰瘧以十棗湯一服下痰水數升服理中散二錢遂愈○有婦人病吐逆大小便不通煩亂四肢冷漸無脈凡一日半與大承氣湯二劑至夜半大便漸通脈漸生翌日乃安此關格之病極難治經曰關則吐逆格則不得小便亦有不得大便者○有人苦風痰頭痛顫掉吐逆飲食減醫以爲傷冷物溫之不愈又以丸下之遂厥復與金液丹後譫言吐逆顫掉不省人狂若見鬼循衣摸床手足冷脈伏此胃中有結熱故昏瞀不省人以陽氣不能布于外陰氣不持于內卽顫掉而厥遂與大承氣湯至一劑乃愈○有婦人病溫已十二日診其脈六七至而澁寸稍大尺稍小發寒熱頰赤口乾不了了耳聾問之病後數日經水乃行此屬少陽熱入血室治不對病必死乃與小柴胡湯二日又加桂枝乾薑湯一日寒熱止但云俄臍下急痛與抵當丸微利痛止身涼尚不了了復與小柴胡湯次日云我胸中熱燥口鼻乾又少與調胃承氣湯不利與大陷胸丸半服利三行次日虛煩不寧妄有所見狂言知有燥屎以其極虛不敢攻之與竹葉湯去其煩熱其大便自通中有燥屎數枚狂煩盡解惟欬嗽唾沫此肺虛也不治恐乘虛作肺痿以小柴胡去人參薑棗加乾薑五味子湯一日欬減

二日悉痊○有人年六十脚腫生瘡忽食豬肉不安醫以藥下之稍愈時出外中風汗出頭面暴腫起紫黑色多睡耳輪上有浮泡小瘡黃汁出乃與小續命湯倍加羌活服之遂愈○有人年五十四素羸多中寒小年常服土硫黃數斤近服兎絲有效脉左上二部右下二部弦緊有力五七年來病右手足筋急拘攣言語稍遲遂與仲景小續命湯加薏苡仁一兩以治筋急減黃芩人參芍藥各半以避中寒杏仁只用一百五枚後云尚覺大冷因盡去人參芩芍加當歸一兩半遂安小續命湯今人多用不能逐證加減遂至危殆故舉以爲例

## 陶隱居名醫別錄合藥分劑法則

古秤惟有銖兩而無分名今則以十黍爲一銖六銖爲一分四分成一兩十六兩爲一斤雖有子穀秬黍之制從來均之已久依此用之〔蘇恭曰〕古秤皆複今南秤是也後漢以來分一斤爲二斤一兩爲二兩古方惟張仲景而已涉今秤者用古秤則水爲殊少矣〔杲曰〕六銖爲一分卽二錢半也二十四銖爲一兩古云三兩卽今之一兩云二兩卽今之六錢半也〔時珍曰〕蠶初吐絲曰忽十忽曰絲十絲曰氂四氂曰彖音晝十氂曰分四彖曰字二分半也十彖曰銖四分也四字曰錢十分也六銖曰一分去聲二錢半也四分曰兩二十四銖也八兩曰錙二錙曰斤二十四兩曰鎰一斤半也准官秤十二兩三十斤曰鈞四鈞曰石一百二十斤也方中有曰少許者些子也今古異制古之一兩今用一錢可也

今方家云等分者非分兩之分謂諸藥斤兩多少皆同爾多是丸散用之

丸散云刀圭者十分方寸匕之一准如梧桐子大也方寸匕者作匕正方一寸抄散取不落爲度五匕

者卽今五銖錢邊五字者抄之不落爲度一撮者四刀圭也七卽匙也藥以升合分者謂藥有虛實輕重不得用斤兩則以升平之十撮爲一勺十勺爲一合十合爲一升升方作上徑一寸下徑六分深八分內散藥勿按抑之正爾微動令平爾［時珍曰］古之一升卽今之二合半也量之所起爲圭四圭爲撮十撮爲勺十勺爲合十合爲升十升爲斗五斗曰斛二斛曰石

凡湯酒膏藥云㕮咀者謂秤畢擣之如大豆又吹去細末藥有易碎難碎多末少末今皆細切如㕮咀也［恭曰］㕮咀商量斟酌之也［宗奭曰］㕮咀有含味之意如人以口齒咀嚙雖破而不塵古方多言㕮咀此義也［杲曰］㕮咀古制也古無鐵刃以口咬細令如麻豆煎之今人以刀剉細爾

凡丸藥云如細麻者卽胡麻也不必扁扁略相稱爾黍粟亦然云如大麻子者准三細麻也如胡豆者卽今靑斑豆也以二大麻准之如小豆者今赤小豆也以三大麻准之如大豆者以二小豆准之如梧子者以二大豆准之如彈丸及雞子黃者以四十梧子准之［宗奭曰］今人用古方多不效者何也不知古人之意爾如仲景治胸痺心中痞堅逆氣搶心用治中湯人參朮乾薑甘草四物共一十二兩水八升煑取三升每服一升日三服以知爲度或作丸須雞子黃大皆奇效今人以一丸如楊梅許服之病旣不去乃曰藥不神非藥之罪用藥者之罪也

凡方云巴豆若干枚者粒有大小當去心皮秤之以一分准十六枚附子烏頭若干枚者去皮畢以半

以一枚兩枳實若干枚者去穰畢以一分准二枚橘皮一分准三枚棗大小三枚准一兩乾薑一累者兩准一爲正

凡方云半夏一升者洗畢秤五兩爲正蜀椒一升三兩爲正吳茱萸一升五兩爲正兎絲子一升九兩爲正菴蕳子一升四兩爲正蛇牀子一升三兩半爲正地膚子一升四兩爲正其子各有虛實輕重不可秤准者取平升爲正

凡方云用桂一尺者削去皮重半兩爲正甘草一尺者二兩爲正云某草一束者三兩爲正云一把者二兩爲正

凡方云蜜一斤者有七合猪膏一斤者有一升二合也

凡丸散藥亦先切細暴燥乃擣之有各擣者有合擣者並隨方其潤濕藥如天門冬地黃輩皆先增分兩切暴獨擣碎更暴若逢陰雨微火烘之既燥停冷擣之［時珍曰］凡諸草木藥及滋補藥並忌鐵器金性尅木之生發之氣肝腎受傷也惟宜銅刀竹刀修治乃佳亦有忌銅器者並宜如法丸散須用青石碾石磨石臼其砂石者不良

凡篩丸散用重密絹各篩畢更合于臼中擣數百遍色理和同乃佳也巴豆杏仁胡麻諸膏膩藥皆先熬黃擣合如膏指攪莫結切視泯泯乃稍稍入散中合研擣散以輕疎絹篩度之再合擣匀

凡煮湯欲微火令小沸其水依方大略二十兩藥用水一斗煮取四升以此爲准然利湯欲生少水而多取汁補湯欲熟多水而少取汁不得令水多少用新布兩人以尺木絞之澄去垽濁紙覆令密溫湯勿用鐵器服湯寧小沸熱則易下冷則嘔涌【之才曰】湯中用酒須臨熟乃下之【時珍曰】陶氏所說乃古法也今之小小湯劑每一兩用水二甌爲准多則加少則減之如劑多水少則藥味不出劑少水多又煎耗藥力也凡煎藥並忌銅鐵器宜用銀器瓦罐洗淨封固令小心者看守須識火候不可太過不及火用木炭蘆葦爲佳其水須新汲味甘者流水井水沸湯等各依方詳見水部若發汗藥必用緊火熱服攻下藥亦用緊火煎熟下消黃再煎溫服補中藥宜慢火溫服陰寒急病亦宜緊火急煎服之又有陰寒煩躁及暑月伏陰在內者宜水中沈冷服

凡漬藥酒皆須細切生絹袋盛入酒密封隨寒暑日數漉出滓可暴燥微擣更漬亦可爲散服【時珍曰】別有釀酒者或以藥煮汁和飯或以藥袋安置酒中或煮物和飯同釀皆隨方法又有煮酒者以生絹袋藥入罈密封置大鍋中水煮一日埋土中七日出火毒乃飲

凡建中腎瀝諸補湯滓合兩劑加水煮竭飲之亦敵一劑皆先暴燥【陳藏器曰】凡湯中用麝香牛黃犀角羚羊角蒲黃丹砂芒消阿膠輩須細末如粉臨時納湯中攪和服之

凡合膏初以苦酒漬令淹浹不用多汁密覆勿洩云晬時者周時也從今旦至明旦亦有止一宿者煮膏當三上三下以洩其熱勢令藥味得出上之使匝匝沸乃下之使沸靜良久乃止中有薤白者以兩頭微焦黃爲候有白芷附子者以小黃色爲度以新布絞去滓滓亦可酒煮飲之摩膏滓可傅病上膏

中有雄黃朱砂麝香輩皆別擣如麪絞膏畢乃投中疾攪勿使沉聚在下有水銀胡粉者於凝膏中研令消散

[時珍曰] 凡熬貼癧疽風濕諸病膏者先以藥浸油中三日乃煎之煎至藥枯以絹濾淨煎熱下黃丹或胡粉或密陀僧三上三下煎至滴水成珠不散傾入器中以水浸三日去火毒用者用松脂者煎至成絲傾入水中拔扯數百遍乃止俱宜謹守火候勿令太過不及也其有朱砂雄黃龍腦麝香血竭乳香沒藥等料者並待膏成時投之黃丹胡粉密陀僧並須水飛瓦炒過松脂須鍊數遍乃良

凡丸中用蠟皆烊投少蜜中攪調以和藥

[杲曰] 丸藥用蠟取其固護藥之氣味勢力以過關膈而作效也若投以蜜下咽亦易散化如何得到臟中若有毒藥反又害之非用蠟之本意也

凡用蜜皆先火煎掠去其沫令色微黃則丸藥經久不壞

[雷斅曰] 凡鍊蜜每一斤止得十二兩半是數火少火過並不得用也修合丸藥用蜜只用蜜用餳只用餳用糖只用糖勿交雜用必瀉人也

## 采藥分六氣歲物

岐伯曰厥陰司天爲風化在泉爲酸化清毒不生少陰司天爲熱化在泉爲苦化寒毒不生太陰司天爲濕化在泉爲甘化燥毒不生少陽司天爲火化在泉爲苦化寒毒不生陽明司天爲燥化在泉爲辛化濕毒不生太陽司天爲寒化在泉爲鹹化熱毒不生治病者必明六化分治五味所生五臟所宜乃

可言盈虛病生之緒本乎天者天之氣本乎地者地之氣謹候氣宜無失病機司歲備物則無遺主矣歲物者天地之專精也非司歲物則氣散質同而異等也氣味有厚薄性用有躁靜治保有多少力化有淺深上淫于下所勝平之外淫于內所勝治之〔王氷曰〕化于天者爲天氣化于地者爲地氣五毒皆五行之氣所爲故所勝者不生惟司天在泉之所生者其味正故藥工專司歲氣所收藥物則所主無遺略矣五運有餘則專精之氣藥物肥濃使用當其正氣味也不定則藥不專精而氣散物不純形質雖同力用則異矣故天氣淫于下地氣淫于內者皆以所勝平治之如風勝濕酸勝甘之類是也

## 七方

岐伯曰氣有多少形有盛衰治有緩急方有大小又曰病有遠近證有中外治有輕重近者奇之遠者偶之汗不以奇下不以偶補上治上制以緩補下治下制以急近而偶奇制小其服遠而奇偶制大其服大則數少小則數多多則九之少則二之奇之不去則偶之偶之不去則反佐以取之所謂寒熱溫涼反從其病也〔王氷曰〕臟位有高下腑氣有遠近病證有表裏藥用有輕重單方爲奇複方爲偶心肺爲近肝腎爲遠脾胃居中腸臓胞膽亦有遠近識見高遠權以合宜方奇而分兩偶方偶而分兩奇近而偶制多數服之遠而奇制少數服之則肺服九心服七脾服五肝服三腎服一爲常制也方與其重也寧輕與其毒也寧善與其大也寧小是以奇方不去偶方主之偶方不去則反佐以同病之氣而取之夫微小之熱折之以寒微小之冷消之以熱甚大寒熱則必能與異氣相格聲不同不相應氣不同不相合是以反其佐以同其氣復令寒熱參合使其始同終異也　時珍曰逆者正治從者反治反佐卽從治也謂熱在下而上有寒邪拒格則寒藥中入熱藥爲佐下膈之

後熱氣既散寒性隨發也寒在下而上有浮火拒格則熱藥中入寒藥爲佐下膈之後寒氣既消熱性隨發也此寒因熱用熱因寒用之妙也溫涼倣此［完素曰］流變在乎病主病在乎方制方在乎人方有七大小緩急奇偶複也制方之體本于氣味寒熱溫涼四氣生于天酸苦辛鹹甘淡六味成于地是以有形爲味無形爲氣氣爲陽味爲陰辛甘發散爲陽酸苦涌泄爲陰鹹味涌泄爲陰淡味滲泄爲陽或收或散或緩或急或燥或潤或輭或堅各隨臟腑之證而施藥之品味乃分七方之制也故奇偶複者三方也大小緩急者四制之法也故曰治有緩急方有大小

大方　［岐伯曰］君一臣二佐九制之大也君一臣三佐五制之中也君一臣二制之小也又曰遠而奇偶制大其服近而奇偶制小其服大則數少小則數多多則九之少則二之［完素曰］身表爲遠裏爲近大小者制奇偶之法也假如小承氣湯調胃承氣湯奇之小方也大承氣湯抵當湯奇之大方也所謂因其攻裏而用之也桂枝麻黃偶之小方也葛根青龍偶之大方也所謂因其發表而用之也故曰汗不以奇下不以偶［張從正曰］大方有二有君一臣三佐九之大方病有兼證而邪不一不可以一二味治者宜之有分兩大而頓服之大方肝腎及下部之病道遠者宜之王太僕以心肺爲近腎肝爲遠脾胃爲中劉河間以身表爲遠身裏爲近以予觀之身半以上其氣三天之分也身半以下其氣三地之分也中脘人之分也

小方　［從正曰］小方有二有君一臣二之小方病無兼證邪氣專一可一二味治者宜之有分兩少而頻服之小方心肺及在上之病者宜之徐徐細呷是也［完素曰］肝腎位遠數多則其氣緩不能速達于下必大劑而數少取其迅急下走也心肺位近數多則其氣急下走不能升發于上必小劑而數多取其易散而上行也王氏所謂肺服九心服七脾服五肝服三腎服一乃五臟生成之數也

**緩方**　［岐伯曰］補上治上制以緩補下治下制以急急則氣味厚緩則氣味薄適其病所遠而中道氣味之者食而過之無越其制度也［王冰曰］假如病在腎而心氣不足服藥宜急過之不以氣味飼心腎藥凌心心復益衰矣餘上下遠近例同［完素曰］聖人治上不犯下治下不犯上治中上下俱無犯故曰誅伐無過命曰大惑［好古曰］治上必妨下治表必遠裏用黃芩以治肺必妨脾用蓯蓉以治腎必妨心服乾薑以治中必僭上服附子以補火必涸水［從正曰］緩方有五有甘以緩之之方甘草糖蜜之屬是也病在胸膈取其留戀也有丸以緩之之方比之湯散其行遲慢也有品件衆多之緩方藥衆則遞相拘制不得各騁其性也有無毒治病之緩方無毒則性純功緩也有氣味俱薄之緩方氣味薄則長于補上治上比至其下藥力已衰矣

**急方**　［完素曰］味厚者爲陰味薄者爲陰中之陽故味厚則下泄味薄則通氣氣厚者爲陽氣薄爲陽中之陰故氣厚則發熱氣薄則發汗是也［好古曰］治主宜緩緩則治其本也治客宜急急則治其標也表裏汗下皆有所當緩所當急［從正曰］急方有四有急病急攻之急方中風關格之病是也有湯散蕩滌之急方下咽易散而行速也有毒藥之急方毒性能上涌下泄以奪病勢也有氣味俱厚之急方氣味俱厚直趨于下而力不衰也

**奇方**　［王冰曰］單方也［從正曰］奇方有二有獨用一物之奇方病在上而近者宜之有藥合陽數一三五七九之奇方宜下不宜汗［完素曰］假如小承氣奇之小方也大承氣抵當湯奇之大方也所謂因其攻下而爲之也桂枝麻黃偶之小方也葛根青龍偶之大方也所謂因其發散而用之也

**偶方**　［從正曰］偶方有三有兩味相配之偶方有古之二方相合之偶方古謂之複方皆病在下而遠者宜之有藥合陰數二四六八十之偶方宜汗不宜下王太僕言汗藥不以偶則氣不足以外發下藥不以奇則藥毒攻而

致過意者下本易行故單行則力孤而微汗或難出故併行則力齊而大乎而仲景制方桂枝汗藥反以五味爲奇大承氣下藥反以四味爲偶何也豈臨事制宜復有增損乎

**複方**　[岐伯曰]奇之不去則偶之是謂重方[好古曰]奇之不去複以偶偶之不去複以奇故曰複複者再也重也所謂十補一泄數泄一補也又傷寒見風脉傷風得寒脉爲脉證不相應宜以複方主之[從正曰]複方有三有二方三方及數方相合之複方如桂枝二越婢一湯五積散之屬是也有本方之外別加餘藥如調胃承氣加連翹薄荷黄芩巵子爲凉膈散之屬是也有分兩均齊之複方如胃風湯各等分之屬是也王太僕以偶爲複方今七方有偶又有複豈非偶乃二方相合複乃數方相合之謂乎

本草綱目第一卷上終

# 本草綱目序例第一卷下

## 序例上

### 十劑

徐之才曰藥有宣通補洩輕重澀滑燥濕十種是藥之大體而本經不言後人未述凡用藥者審而詳之則庶所遺失矣宣劑［之才曰］宣可去壅生薑橘皮之屬是也［杲曰］外感六淫之邪欲傳入裏三陰實而不受逆于胸中天分氣分窒塞不通而或噦或嘔所謂壅也三陰者脾也故必破氣藥如薑橘藿香半夏之類瀉其壅塞［從正曰］俚人以宣爲瀉又以宣爲通不知十劑之中已有瀉與通矣［仲景曰］春病在頭大法宜吐是宣劑即涌劑也經曰高者因而越之木鬱則達之宣者升而上也以君召臣曰宣是矣凡風癇中風胸中諸實痰飲寒結胸中熱鬱上而不下久則嗽喘滿脹水腫之病生焉非宣劑莫能愈也吐中有汗如引涎追淚嚏鼻凡上行者皆吐法也［完素曰］鬱而不散爲壅必宣以散之如痞滿不通之類是矣攻其裏則宣者上也泄者下也涌劑則瓜蒂巵子之屬是矣發汗解表亦同［好古曰］經有五鬱木鬱達之火鬱發之土鬱奪之金鬱泄之水鬱折之皆宣也敎曰宣揚制曰宣朗君召臣曰宣喚臣奉君命宣布上意皆宣之意也［時珍曰］壅者塞也宣者布也散也鬱塞之病不升不降傳化失常或鬱久生病或病久生鬱必藥以宣布敷散之如承流宣化之意不獨涌越爲宣也是以氣鬱有餘則香附撫芎之屬以開之不足則補中益氣以運之火鬱微則山巵青黛以散之甚則升陽解肌以發之濕鬱微則蒼朮白芷之屬以燥之甚則風藥以勝之痰鬱微則南星橘皮之屬以化之甚則瓜蒂藜蘆之屬以涌之血鬱微則桃仁紅花以行之甚則或吐或利以逐之食鬱微則山查神麴以消之甚則上涌下利以去之皆宣劑也

通劑　[之才曰] 通可去滯通草防已之屬是也 [完素曰] 留而不行必通以行之如木通防已之屬攻其內則留者行也滑石茯苓芫花甘遂大戟牽牛之類是也 [從正曰] 通者流通也前後不得溲便宜木通海金沙琥珀大黃之屬通之痺痛鬱滯經隧不利亦宜通之 [時珍曰] 滯留滯也濕熱之邪留于氣分而爲痛痺癃閉者宜淡味之藥上助肺氣下降通其小便而洩氣中之滯木通猪苓之類是也濕熱之邪留于血分而爲痺痛腫注二便不通者宜苦寒之藥下引通其前後而洩血中之滯防已之類是也經曰味薄者通故淡味之藥謂之通劑

補劑　[之才曰] 補可去弱人參羊肉之屬是也 [杲曰] 人參甘溫能補氣虛羊肉甘熱能補血虛羊肉補形人參補氣凡氣味與二藥同者皆是也 [從正曰] 五臟各有補瀉五味各補其臟有表虛裏虛上虛下虛陰虛陽虛氣虛血虛經曰精不足者補之以味形不足者補之以氣五穀五菜五果五肉皆補養之物也 [時珍曰] 經云不足者補之又云虛則補其母生薑之辛補肝炒鹽之鹹補心甘草之甘補脾五味子之酸補肺黃蘗之苦補腎又如伏神之補心氣生地黃之補心血人參之補脾氣白芍藥之補脾血黃芪之補肺氣阿膠之補肺血杜仲之補腎氣熟地黃之補腎血芎藭之補肝氣當歸之補肝血之類皆補劑不特人參羊肉爲補也

洩劑　[之才曰] 洩可去閉葶藶大黃之屬是也 [杲曰] 葶藶苦寒氣味俱厚不減大黃能洩肺中之閉又泄大腸大黃走而不守能洩血閉腸胃渣穢之物一洩氣閉利小便一洩血閉利大便凡與二藥同者皆然 [從正曰] 實則瀉之諸痛爲實痛隨利減芒消大黃牽牛甘遂巴豆之屬皆瀉劑也其催生下乳磨積逐水破經洩氣凡下行者皆下法也 [時珍曰] 去閉當作去實經云實者瀉之實則瀉其子是矣五臟五味皆有瀉不獨葶藶大黃也肝實瀉以芎藭之辛心實瀉以甘草之甘脾實瀉以黃連之苦肺實瀉以石膏之辛腎實瀉以澤瀉之鹹是矣

**輕劑**　之才曰輕可去實麻黃葛根之屬是也從正曰風寒之邪始客皮膚頭痛身熱宜解其表內經所謂輕而揚之也癰瘡疥痤俱宜解表汗以泄之毒以薰之皆輕劑也凡薰洗蒸灸熨烙刺砭導引按摩皆汗法也時珍曰當作輕可去閉有表閉裏閉上閉下閉表閉者風寒傷營腠理閉密陽氣怫鬱不能外出而爲發熱惡寒頭痛脊强諸病宜輕揚之劑發其汗而表自解也裏閉者火熱鬱抑津液不行皮膚乾閉而爲肌熱煩熱頭痛目腫昏瞀瘡瘍諸病宜輕揚之劑以解其肌而火自散也上閉有二一則外寒內熱上焦氣閉發爲咽喉閉痛之證宜辛凉之劑以揚散之則閉自開一則飲食寒冷抑遏陽氣在下發爲胸膈痞滿閉塞之證宜揚其淸而抑其濁則痞自泰也下閉亦有二有陽氣陷下發爲裏急後重數至圊而不行之證但升其陽而大便自順所謂下者舉之也有燥熱傷肺金氣膹鬱竅閉于上而膀胱閉于下爲小便不利之證以升麻之類探而吐之上竅通而小便自利矣所謂病在下取之上也

**重劑**　之才曰重可去怯磁石鐵粉之屬是也從正曰重者鎭縋之謂也怯則氣浮如喪神守而驚悸氣上硃砂水銀沈香黃丹寒水石之倫皆體重也久病咳嗽涎潮于上形羸不可攻者以此縋之經云重者因而減之貴其漸也時珍曰重劑凡四有驚則氣亂而魂氣飛揚如喪神守者有怒則氣逆而肝火激烈病狂善怒者並鐵粉雄黃之類以平其肝有神不守舍而多驚健忘迷惑不寧者宜硃砂紫石英之類以鎭其心有恐則氣下精志失守而畏如人將捕者宜磁石沈香之類以安其腎大抵重劑壓浮火而墜痰涎不獨治怯也故諸風掉眩及驚癇痰喘之病吐逆不止及反胃之病皆浮火痰涎爲害俱宜重劑以墜之

**滑劑**　之才曰滑可去著冬葵子榆白皮之屬是也完素曰澀則氣著必滑劑以利之滑能養竅故潤利也從正曰大便燥結宜麻仁郁李之類小便淋瀝宜葵子滑石之類前後不通兩陰俱閉也名曰三焦約約者束也宜先以滑劑潤養其燥然後攻之時珍曰著者有形之邪留著于經絡臟腑之間也便尿濁帶痰涎胞胎癰腫之類是矣皆宜滑藥以引去其留著之物此與木通猪苓通以去滯相類而不同木通猪苓淡泄之物去濕熱無形之邪

葵子楡皮甘滑之類去濕熱有形之邪故彼曰滯此曰著也大便澀者波稜牽牛之屬小便澀者車前楡皮之屬精竅澀者黃蘗葵花之屬胞胎澀者黃葵子王不留行之屬引痰涎自小便去者則半夏茯苓之屬引瘡毒自小便去者則五葉藤萱草根之屬皆滑劑也半夏南星皆辛而涎滑能洩濕氣通大便蓋辛能潤能走氣能化液也或以爲燥物謬矣濕去則土燥非二物性燥也

澀劑 [之才曰] 澀可去脫牡蠣龍骨之屬是也 [完素曰] 滑則氣脫如開腸洞泄便溺遺失之類必澀劑以收斂之 [從正曰] 寢汗不禁澀以麻黃根防風滑泄不已澀以豆蔻枯礬木賊罌粟殼喘嗽上奔澀以烏梅訶子凡酸味同乎澀者收斂之義也然此種皆宜先攻其本而後收之可也 [時珍曰] 脫者氣脫也血脫也精脫也神脫也脫則散而不收故用酸澀溫平之藥以斂其耗散汗出亡陽精滑不禁泄痢不止大便不固小便自遺久嗽亡津皆氣脫也下血不已崩中暴下諸大亡血皆血脫也牡蠣龍骨海螵蛸五倍子五味子烏梅榴皮訶黎勒罌粟殼蓮房椶灰赤石脂麻黃根之類皆澀藥也氣脫兼以氣藥血脫兼以血藥及兼氣藥氣者血之帥也脫陽者見鬼脫陰者目盲此神脫也非澀藥所能收也

燥劑 [之才曰] 燥可去濕桑白皮赤小豆之屬是也 [完素曰] 濕氣淫勝腫滿脾濕必燥劑以除之桑皮之屬濕勝于上以苦吐之以淡滲之是也 [從正曰] 積寒久冷吐利腥穢上下所出水液澄澈清冷此大寒之病宜薑附胡椒輩以燥之若病濕氣則白朮陳皮木香蒼朮之屬除之亦燥劑也而黃連黃蘗梔子大黃其味皆苦苦屬火皆能燥濕此內經之本旨也豈獨薑附之儔爲燥劑乎 [好古曰] 濕有在上在中在下在經在皮在裏 [時珍曰] 濕有外感有內傷外感之濕雨露嵐霧地氣水濕襲于皮肉筋骨經絡之間內傷之濕生于水飲酒食及脾弱腎強固不可一例言也故風藥可以勝濕燥藥可以除濕淡藥可以滲濕洩小便可以引濕利大便可以逐濕吐痰涎可以祛濕濕而有

熱苦寒之劑燥之濕而有寒辛熱之劑燥之不獨桑皮小豆爲燥劑也濕去則燥故謂之燥

潤劑　[之才曰]濕可去枯白石英紫石英之屬是也[從正曰]濕者潤濕也雖與滑類少有不同經云辛以潤之辛能走氣能化液故也鹽消味雖鹹屬眞陰之水誠濡枯之上藥也人有枯涸皴揭之病非獨金化蓋有火以乘之故非濕劑不能愈[完素曰]津耗爲枯五臟痿弱榮衛涸流必濕劑以潤之[好古曰]有減氣而枯有減血而枯[時珍曰]濕劑當作潤劑枯者燥也陽明燥金之化秋令也風熱怫甚則血液枯涸而爲燥病上燥則渴下燥則結筋燥則强皮燥則揭肉燥則裂骨燥則枯肺燥則痿腎燥則消凡麻仁阿膠膏潤之屬皆潤劑也養血則當歸地黃之屬生津則麥門冬栝樓根之屬益精則蓯蓉枸杞之屬若但以石英爲潤藥則偏矣古人以服石爲滋補故爾

劉完素曰制方之體欲成七方十劑之用者必本于氣味也寒熱溫涼四氣生于天酸苦辛鹹甘淡六味成乎地是以有形爲味無形爲氣氣爲陽味爲陰陽氣出上竅陰味出下竅氣化則精生味化則形長故地產養形形不足者溫之以氣天產養精精不足者補之以味辛甘發散爲陽酸苦涌泄爲陰鹹味涌泄爲陰淡味滲泄爲陽辛散酸收甘緩苦堅鹹耎各隨五臟之病而制藥性之品味故方有七劑有十方不七不足以盡方之變劑不十不足以盡劑之用方不對證非方也劑不蠲疾非劑也此乃太古先師設繩墨而取曲直叔世方士乃出規矩以爲方圓夫物各有性制而用之變而通之施于品劑其功用豈有窮哉如是有因其性爲用者有因其所勝而爲制者有氣同則相求者有氣相尅則相制

者有氣有餘而補不足者有氣相感則以意使者有質同而性異者有名異而實同者故蛇之性上竄而引藥蟬之性外脫而退翳虻飲血而用以治血鼠善穿而用以治漏所謂因其性而爲用者如此弩牙速產以機發而不括也杵糠下噎以杵築下也所謂因其用而爲使者如此浮萍不沈水可以勝酒獨活不搖風可以治風所謂因其所勝而爲制也如此麻木穀而治風豆水穀而治水所謂氣相同則相求者如此牛土畜乳可以止渴疾豕水畜心可以鎭恍惚所謂因其氣相尅則相制也如此熊肉振羸兔肝明視所謂其氣有餘補不足也如此鯉之治水鶩之利水所謂因其氣相感則以意使者如此蜜成於蜂蜜溫而蜂寒油生於麻麻溫而油寒茲同質而異性也蘼蕪生於芎藭蓬蘽生於覆盆茲名異而實同者也所以如此之類不可勝舉故天地賦形不離陰陽形色自然皆有法象毛羽之類生於陽而屬於陰鱗甲之類生於陰而屬於陽空青法木色青而主肝丹砂法火色赤而主心雲母法金色白而主肺磁石法水色黑而主腎黃石脂法土色黃而主脾故觸類而長之莫不有自然之理也欲爲醫者上知天文下知地理中知人事三者俱明然後可以語人之疾病不然則如無目夜遊無足登涉動致顚殞而欲愈疾者未之有也

雷斅炮炙論序曰若夫世人使藥豈知自有君臣既辨君臣寧分相制秖如栨毛今鹽草也霑溺立銷班腫

之毒象膽揮黏乃知藥有情異鮭魚插樹立便乾枯用狗膽塗之以犬膽灌之插魚處立如故也却當榮盛無名無名異形似玉
仰面又如石灰味別止楚截指而似去甲毛聖石開盲明目而如雲離日當歸止血破血頭尾劾各不同頭止血尾破血蕤
子熟生足睡不眠立據弊箄淡鹵常使者甑中箄能淡鹽味如酒霑交今蜜枳繳枝又云交加枝鐵遇神砂如泥似粉石經鶴糞化
作塵飛桉見橘花似髓斷絃折劍遇鸞血而如初以鸞血煉作膠粘折處鐵物永不斷海竭江枯投游波燕子是也而立泛令鉛
拒火須使修天今呼爲補天石如要形堅豈忘紫背有紫背天葵如常食葵菜祇是背紫面青能壓鉛形留砒住鼎全賴宗心別有宗心草今呼石竹不是食
者櫻心恐誤其草出欻州生處多虫獸雌得芹花其草名爲立起其形如芎藭花色青可長三尺已來葉上黃斑色味苦澁堪用煑雌黃立住火立便成庚硇遇赤鬚其草名赤鬚今呼爲虎鬚
草是用煑硇砂即生火火留金鼎水中生火非猾髓而莫能海中有獸名曰猾以髓入在油中點水水中火生不可救之用酒噴之即止勿於屋下收長齒生牙賴雄
鼠之骨末其齒若年多不生者取雄鼠脊骨作末揩折處齒立生如故髮眉墮落塗半夏而立生眉髮墮落者以生半夏莖杵之取涎塗髮落處立生目辟眼䁾有五
花而自正五加皮其葉有雄雌三葉爲雄五葉爲雌須使五葉者作末酒浸飲之其目䁾者正腳生肉桉裩繫菪根腳有肉桉者取莨菪根於裩帶上繫之感應永不痛囊皺漩多

夜煎竹木多小便者夜煎萆薢一件服之永不夜起也　體寒腹大全賴鸕鷀若患腹大如鼓米飲調鸕鷀末服立枯如故也　血泛經過飲調瓜子甜瓜子內仁搗作末去油飲調服之立絕　咳逆數數酒服熟雄天雄炮過以酒調一錢服立定也　遍體疹風冷調生側附子旁生者爲側子作末冷酒服立瘥也　陽虛瀉痢須假草零搗五倍子作末以熟水下之立止也　久渴心煩宜投竹瀝　除癥去塊全仗消硇消碙卽碙砂消石二味於乳鉢中研作粉同鍛了酒服神効也　益食加觴須煎蘆朴不食者弁飲酒少者煎逆水蘆根弁厚朴二味湯服　強筋健骨須是蓯鱓蓯蓉弁鱓魚二味作末以黃精汁丸服之可力倍常也出乾寧記中　駐色延年精蒸神錦黃精自然汁拌細研神錦於柳木甑中蒸七日了以木蜜丸服顏貌可如幼女之容色也　知瘡所在口點陰膠陰膠卽是甑中氣垢少許於口中可知臟腑所起直至住處知痛乃可醫也　產後肌浮甘皮酒服產後肌浮酒服甘皮立愈　口瘡舌拆立愈黃蘇口瘡舌拆以根黃塗蘇炙作末含之立瘥　腦痛欲亡鼻投消末頭痛者以消石作末內鼻中立止　心痛欲死速覓延胡以延胡索作散酒服之立愈　如斯百種是藥之功某忝遇明時謬看醫理雖尋聖法難可窮微略陳藥餌之功能豈溺仙人之要術其制藥炮熬煮炙不能記年月哉欲審元由須看海集某不量短見直錄炮熬煮炙列藥制方分爲上中下三卷有三百件名具陳于後

氣味陰陽

陰陽應象論曰積陽爲天積陰爲地陰靜陽躁陽生陰長陽殺陰藏陽化氣陰成形陽爲氣陰爲味味歸形形歸氣氣歸精精歸化精食氣形食味化生精氣生形味傷形氣傷精精化爲氣氣傷於味陰味出下竅陽氣出上竅淸陽發腠理濁陰走五臟淸陽實四肢濁陰歸六腑味厚者爲陰薄者爲陰中之陽氣厚者爲陽薄者爲陽中之陰味厚則泄薄則通氣薄則發泄厚則發熱辛甘發散爲陽酸苦涌泄爲陰鹹味涌泄爲陰淡味滲洩爲陽六者或收或散或緩或急或潤或燥或耎或堅以所利而行之調其氣使之平也 [元素曰] 淸之淸者發腠理淸之濁者實四肢濁之濁者歸六腑濁之淸者走五臟附子氣厚爲陽中之陽大黃味厚爲陰中之陰茯苓氣薄爲陽中之陰所以利小便入手太陽不離陽之體也麻黃味薄爲陰中之陽所以發汗入手太陰不離陰之體也凡同氣之物必有諸味同味之物必有諸氣氣味各有厚薄故性用不等 [杲曰] 味之薄者則通酸苦鹹平是也味之厚者則泄鹹苦酸寒是也氣之厚者發熱辛甘溫熱是也氣之薄者滲泄甘淡平涼是也滲謂小汗泄謂利小便也 [宗奭曰] 天地既判生萬物者五氣耳五氣定位則五味生故曰生物者氣也成之者味也以奇生則成而耦以耦生則成而奇寒氣堅故其味可用以耎熱氣耎故其味可用以堅風氣散故其味可用以收燥氣收故其味可用以散土者冲氣之所生冲氣則無所不和故其味可用以緩氣堅則壯故苦可以養氣脉耎則和故鹹可以養脉骨收則强故酸可以養骨筋散則不攣故辛可以養筋肉緩則不壅故甘可以養肉堅之而後可以耎收之而後可以散欲緩則用甘不欲則弗用用之不可太過太過亦病矣古之養生治疾者必先通乎此否則能已人之疾者蓋寡矣

李杲曰夫藥有溫涼寒熱之氣辛甘淡酸苦鹹之味也升降浮沉之相互厚薄陰陽之不同一物之內

氣味兼有一藥之中理性具焉或氣一而味殊或味同而氣異氣象天溫熱者天之陽涼寒者天之陰天有陰陽風寒暑濕燥火三陰三陽上奉之也味象地辛甘淡者地之陽酸苦鹹者地之陰地有陰陽金木水火土生長化收藏下應之也氣味薄者輕淸成象本乎天者親上也氣味厚者重濁成形本乎地者親下也

【好古曰】本草之之味有五氣有四然一味之中有四氣如辛味則石膏寒桂附熱半夏溫薄荷涼之類是也夫氣者天也溫熱天之陽寒涼天之陰陽則升陰則降味者地也辛甘淡地之陽酸苦鹹地之陰陽則浮陰則沉有使氣者使味者氣味俱使者先使氣而後使味者先使味而後使氣者有一物一味者一物三味者一物一氣者一物二氣者或生熟異氣味或根苗異氣味或溫多而成熱或涼多而成寒或寒熱各半而成溫或熱者多寒者少寒不爲之寒或寒者多熱者少熱不爲之熱不可一途而取也或寒熱各半晝服則從熱之屬而升夜服則從寒之屬而降或晴則從熱陰則從寒變化不一如此況四時六位不同五運六氣各異可以輕用爲哉

六節臟象論云天食人以五氣地食人以五味五氣入鼻藏於心肺上使五色修明音聲能彰五味入口藏于腸胃味有所藏以養五氣氣和而生津液相成神乃自生又曰形不足者溫之以氣精不足者補之以味

【王冰曰】五氣者臊氣湊肝焦氣湊心香氣湊脾腥氣湊肺腐氣湊腎也心榮色肺主音故氣藏于肺而明色彰聲也氣爲水之母故味藏于腸胃而養五氣【孫思邈曰】精以食氣氣養精以榮色形以食味味養形以生力精順五氣以靈形受五味以成若食氣相反則傷精食味不調則損形是以聖人先用食禁以存生後制藥物以防命氣味溫補以存精形

## 五味宜忌

岐伯曰木生酸火生苦土生甘金生辛水生鹹辛散酸收甘緩苦堅鹹耎毒藥攻邪五穀爲養五果爲助五畜爲益五菜爲充氣味合而服之以補精益氣此五者各有所利四時五臟病隨所宜也又曰陰之所生本在五味陰之五宮傷在五味骨正筋柔氣血以流腠理以密骨氣以清長有天命又曰聖人春夏養陽秋冬養陰以從其根二氣常存春食涼夏食寒以養陽秋食溫冬食熱以養陰

五欲　肝欲酸心欲苦脾欲甘肺欲辛腎欲鹹此五味合五臟之氣也

五宜　青色宜酸肝病宜食麻犬李韭赤色宜苦心病宜食麥羊杏薤黃色宜甘脾病宜食粳牛棗葵白色宜辛肺病宜食黃黍雞桃葱黑色宜鹹腎病宜食大豆黃卷猪栗藿

五禁　肝病禁辛宜食甘粳牛棗葵心病禁鹹宜食酸麻犬李韭脾病禁酸宜食鹹大豆豕栗藿肺病禁苦宜食麥羊杏薤腎病禁甘宜食辛黃黍雞桃葱【思邈曰】春宜省酸增甘以養脾夏宜省苦增辛以養肺秋宜省辛增酸以養肝冬宜省鹹增苦以養心四季宜省甘增鹹以養腎【時珍曰】五欲者五味入胃喜歸本臟有餘之病宜本味通之五禁者五臟不足之病畏其所勝而宜其所不勝也

五走　酸走筋筋病毋多食酸多食令人癃酸氣澀收胞得酸而縮卷故水道不通也苦走骨骨病毋多食苦多食令人變嘔苦入下脘三焦皆閉故變嘔也甘走肉肉病毋多食甘多食令人悗心甘氣柔潤胃柔則緩緩則蟲動故悗心也辛走氣氣病毋多食辛多食令人洞心辛走上焦與氣俱行久留心下故洞心也鹹走血血病毋多食鹹多食令人渴血與鹹相得則凝則胃汁注之故咽路焦而舌本乾〇九鍼論作鹹走骨骨病毋多食鹹苦走血血病毋多

食
苦

五傷 酸傷筋辛勝酸苦傷氣鹹勝苦甘傷肉酸勝甘辛傷皮毛苦勝辛鹹傷血甘勝鹹

五過 味過于酸肝氣以津脾氣乃絕肉胝䐢而唇揭味過于苦脾氣不濡胃氣乃厚皮槁而毛拔味過于甘心氣喘滿色黑腎氣不衡骨痛而髮落味過于辛筋脈沮弛精神乃失筋急而爪枯味過于鹹大骨氣勞短絕抑脈凝澀而變色 [時珍曰] 五走五傷者本臟之味自傷也即陰之五宮傷在五味也五過者本臟之味伐其所勝也即臟氣偏勝也

## 五味偏勝

岐伯曰五味入胃各歸所喜酸先入肝苦先入心甘先入脾辛先入肺鹹先入腎久而增氣物化之常氣增而久夭之由也 [王冰曰] 入肝爲溫入心爲熱入肺爲清入腎爲寒入脾爲至陰而四氣兼之皆爲增其味而益其氣故各從本臟之氣久則從化故久服黃連苦參反熱從苦化也餘味傚此氣增不已則臟氣偏勝必有偏絕臟有偏絕必有暴夭是以藥不具五味不備四氣而久服之雖暫獲勝久必致夭故絕粒服餌者不暴亡無五味資助也 [杲曰] 一陰一陽之謂道偏陰偏陽之謂疾陽劑剛勝積若燎原爲消狂癰疽之屬則天癸竭而榮涸陰劑柔勝積若凝水爲洞泄寒中之病則眞火微而衞散故大寒大熱之藥當從權用之氣平而止有所偏助令人臟氣不平夭之由也

## 標本陰陽

李杲曰夫治病者當知標本以身論之外爲標內爲本陽爲標陰爲本故六腑屬陽爲標五臟屬陰爲本臟腑在內爲本十二經絡在外爲標而臟腑陰陽氣血經絡又各有標本焉以病論之先受爲本後傳爲標故百病必先治其本後治其標否則邪氣滋甚其病益蓄縱先生輕病後生重病亦先治其輕後治其重則邪氣乃伏有中滿及病大小便不利則無問先後標本必先治滿及大小便爲其急也故曰緩則治其本急則治其標又從前來者爲實邪後來者爲虛邪實則瀉其子虛則補其母假如肝受心火爲前來實邪當於肝經刺榮穴以瀉心火爲先治其本於心經刺榮穴以瀉心火爲後治其標用藥則入肝之藥爲引用瀉心之藥爲君經云本而標之先治其本後治其標是也又如肝受腎水爲虛邪當於腎經刺井穴以補肝木爲先治其標後于肝經刺合穴以瀉腎水爲後治其本用藥則入腎之藥爲引補肝之藥爲君經云標而本之先治其標後治其本是也

升降浮沉

李杲曰藥有升降浮沉化生長收藏成以配四時春升夏浮秋收冬藏土居中化是以味薄者升而生氣薄者降而收氣厚者浮而長味厚者沈而藏氣味平者化而成但言補之以辛甘溫熱及氣味之薄者卽助春夏之升浮便是瀉秋冬收藏之藥也在人之身肝心是矣但言補之以酸苦鹹寒及氣味之

厚者卽助秋冬之降沉便是瀉春夏生長之藥也在人之身肺腎是矣淡味之藥滲卽爲升泄卽爲降佐使諸藥者也用藥者循此則生逆此則死縱令不死亦危困矣○王好古曰升而使之降須知抑也沈而使之浮須知載也辛散也而行之也橫甘發也而行之也上苦泄也而行之也下酸收也其性縮鹹耎也其性舒其不同如此鼓掌成聲沃火成沸二物相合象在其間矣五味相制四氣相和其變可輕用哉本草不言淡味涼氣亦缺文也

味薄者升　甘平辛平辛微溫微苦平之藥是也

氣薄者降　甘寒甘涼甘淡寒涼酸溫酸平鹹平之藥是也

氣厚者浮　甘熱辛熱之藥是也

味厚者沈　苦寒鹹寒之藥是也

氣味平者兼四氣四味甘平甘溫甘涼甘辛平甘微苦平之藥是也

李時珍曰酸鹹無升甘辛無降寒無浮熱無沈其性然也而升者引之以鹹寒則沈而直達下焦沈者引之以酒則浮而上至顚頂此非窺天地之奥而達造化之權者不能至此一物之中有根升梢降生升熟降是升降在物亦在人也

四時用藥例

李時珍曰經云必先歲氣毋伐天和又曰升降浮沈則順之寒熱溫涼則逆之故春月宜加辛溫之藥薄荷荊芥之類以順春升之氣夏月宜加辛熱之藥香薷生薑之類以順夏浮之氣長夏宜加甘苦辛溫之藥人參白朮蒼朮黃蘗之類以順化成之氣秋月宜加酸溫之藥芍藥烏梅之類以順秋降之氣冬月宜加苦寒之藥黃芩知母之類以順冬沈之氣所謂順時氣而養天和也經又云春省酸增甘以養脾氣夏省苦增辛以養肺氣長夏省甘增鹹以養腎氣秋省辛增酸以養肺氣冬省鹹增苦以養腎氣此則既不伐天和而又防其太過所以體天地之大德也昧者捨本從標春用辛涼以伐木夏用鹹寒以抑火秋用苦溫以泄金冬用辛熱以涸水謂之時藥殊背素問逆順之理以夏月伏陰冬月伏陽推之可知矣雖然月有四時日有四時或春得秋病夏得冬病神而明之機而行之變通權宜又不可泥一也〇王好古曰四時總以芍藥爲脾劑蒼朮爲胃劑柴胡爲時劑十一臟皆取決于少陽爲發生之始故也凡用純寒純熱之藥及寒熱相雜並宜用甘草以調和之惟中滿者禁用甘爾

五運六淫用藥式

厥陰司天巳亥年　風淫所勝平以辛涼佐以苦甘以甘緩之以酸瀉之王注云厥陰氣未爲盛熱故以涼藥平之〇淸反勝之治

以酸溫佐以甘苦

少陰司天子午年　熱淫所勝平以鹹寒佐以苦甘以酸收之○寒反勝之治以甘溫佐以苦酸辛

太陰司天丑未年　濕淫所勝平以苦熱佐以酸辛以苦燥之以淡泄之○濕上甚而熱治以苦溫佐以甘辛以汗爲故（身半以上濕氣有餘火氣復鬱則宜解表流汗而袪之也）○熱反勝之治以苦寒佐以苦酸

少陽司天寅申年　火淫所勝平以酸冷佐以苦甘以酸收之以苦發之以酸復之（熱氣已退時發動者是爲心虛氣散不歛以酸收之仍兼寒助乃能除根熱見太甚則以苦發之汗已便涼是邪氣盡汗已猶熱是邪未盡則以酸收之已汗又熱又汗復熱是臟虛也則補其心可也）○寒反勝之治以甘熱佐以苦辛

陽明司天卯酉年　燥淫所勝平以苦溫佐以酸辛以苦下之（制燥之法以苦溫宜下必以苦宜補必以酸宜瀉必以辛）○熱反勝之治以辛寒佐以苦甘

太陽司天辰戌年　寒淫所勝平以辛熱佐以甘苦以鹹瀉之○熱反勝之治以鹹冷佐以苦辛

厥陰在泉寅申年　風淫于內治以辛涼佐以苦以甘緩之以辛散之（風喜溫而惡淸故以辛涼勝之以苦隨所利也木苦急以甘緩之木苦抑以辛散之）

○清反勝之治以酸溫佐以苦甘以辛平之

少陰在泉卯酉年　熱淫于內治以鹹寒佐以甘苦以酸收之以苦發之熱性惡寒故以鹹寒熱甚于表以苦發之不盡復寒制之寒制不盡復苦發之以酸收之甚者再方微者一方可使必已時發時止亦以酸收之　○寒反勝之治以甘熱佐以苦辛以鹹平之

太陰在泉辰戌年　濕淫于內治以苦熱佐以酸淡以苦燥之以淡泄之濕與燥反故以苦熱佐以酸淡利竅也　○熱反勝之治以苦冷佐以鹹甘以苦平之

少陽在泉巳亥年　火淫于內治以鹹冷佐以苦辛以酸收之以苦發之火氣大行于心腹鹹性柔耎以制之以酸收其散氣大法須汗者以辛佐之

○寒反勝之治以甘熱佐以辛苦以鹹平之

陽明在泉子午年　燥淫于內治以甘辛以苦下之溫利涼性故以苦下之　○熱反勝之治以辛寒佐以苦甘以酸平之以和爲利

太陽在泉丑未年　寒淫于內治以甘熱佐以苦辛以鹹瀉之以辛潤之以苦堅之以熱治寒是爲摧勝折其氣也　○熱反勝之治以鹹冷佐以甘辛以苦平之

李時珍曰司天主上半年天氣司之故六淫謂之所勝上淫于下也故曰平之在泉主下半年地氣司之故六淫謂之淫于內外淫于內也故曰治之當其時而反得勝巳之氣者謂之反勝六氣之勝何以徵之燥甚則地乾暑勝則地熱風勝則地動濕勝則地泥寒勝則地裂火勝則地涸是也其六氣勝復主客證治病機甚詳見素問至眞要大論文多不載

### 六腑五臟用藥氣味補瀉

肝　膽　溫補涼瀉　辛補酸瀉　　心小腸　熱補寒瀉　鹹補甘瀉

肺大腸　涼補溫瀉　酸補辛瀉　　腎膀胱　寒補熱瀉　苦補鹹瀉

脾　胃　濕熱補寒涼瀉各從其宜　甘補苦瀉　　三焦命門　同心

張元素曰五臟更相平也一臟不平所勝平之故云安穀則昌絕穀則亡水去則營散穀消則衛亡神無所居故血不可不養衛不可不溫血溫氣和營衛乃行常有天命

### 五臟五味補瀉

肝○苦急急食甘以緩之甘草以酸瀉之赤芍藥實則瀉子甘草○欲散急食辛以散之川芎以辛補之細辛虛則補母地黃黃蘗

心○苦緩急食酸以收之五味子以甘瀉之甘草參芪實則瀉子甘草○欲耎急食鹹以耎之芒消以鹹補之澤瀉虛則補母生薑

脾○苦濕急食苦以燥之白朮以苦瀉之黃連實則瀉子桑白皮○欲緩急食甘以緩之炙甘草以甘補之人參虛則補母炒鹽

肺○苦氣逆急食苦以泄之訶子以辛瀉之桑白皮實則瀉子澤瀉○欲收急食酸以收之白芍藥以酸補之五味子虛則補母五味子

腎○苦燥急食辛以潤之黃蘗知母以鹹瀉之澤瀉實則瀉子芍藥○欲堅急食苦以堅之知母以苦補之黃蘗虛則

補母子 五味

張元素曰凡藥之五味隨五臟所入而爲補瀉亦不過因其性而調之酸入肝苦入心甘入脾辛入肺鹹入腎辛主散酸主收甘主緩苦主堅鹹主耎辛能散結潤燥致津液通氣酸能收緩斂散甘能緩急調中苦能燥濕堅耎鹹能耎堅淡能利竅○李時珍曰甘緩酸收苦燥辛散鹹耎淡滲五味之本性一定而不變者也其或補或瀉則因五臟四時而迭相施用者也溫涼寒熱四氣之本性也其于五臟補瀉亦迭相施用也此特潔古張氏因素問飮食補瀉之義舉數藥以爲例耳學者宜因意而充之

## 臟腑虛實標本用藥式

肝藏血屬木膽火寄于中主血主目主筋主呼主怒

本病諸風眩運僵仆强直驚癎兩脇腫痛胸肋滿痛嘔血小腹疝痛痃瘕女人經病

標病寒熱瘧頭痛吐涎目赤面青多怒耳閉頰腫筋攣卯縮丈夫癩疝女人少腹腫痛陰病

有餘瀉之

瀉子　甘草

行氣　香附　芎藭　瞿麥　牽牛　靑橘皮
行血　紅花　鼈甲　桃仁　莪蒁　京三稜　穿山甲　大黃　水蛭　虻虫　蘇木　牡丹皮
鎭驚　雄黃　金箔　鐵落　眞珠　代赭石　夜明砂　胡粉　銀箔　鉛丹　龍骨　石決明
搜風　羌活　荆芥　薄荷　槐子　蔓荆子　白花蛇　獨活　防風　皂莢　烏頭　白附子　殭蠶　蟬蛻

不足補之

補母　枸杞　杜仲　狗脊　熟地黃　苦參　萆薢　阿膠　兎絲子
補血　當歸　牛膝　續斷　白芍藥　血竭　沒藥　芎藭
補氣　天麻　柏子仁　白朮　菊花　細辛　密蒙花　決明　穀精草　生薑

本熱寒之

瀉木　芍藥　烏梅　澤瀉
瀉火　黃連　龍膽草　黃芩　苦茶　猪膽
攻裏　大黃

標熱發之

和解　柴胡　半夏

解肌　桂枝　麻黄

心藏神爲君火包絡爲相火代君行令主血主言主汗主笑

本病諸熱瞀瘛驚惑譫妄煩亂啼笑罵詈怔忡健忘自汗諸痛痒瘡瘍

標病肌熱畏寒戰慄舌不能言面赤目黄手心煩熱胸脇滿痛引腰背肩胛肘臂

　火實瀉之

瀉子　黄連　大黄

氣　甘草　人參　赤茯苓　木通　黄蘗

血　丹參　牡丹　生地黄　玄參

鎭驚　硃砂　牛黄　紫石英

　神虛補之

補母　細辛　烏梅　酸棗仁　生薑　陳皮

氣　桂心　澤瀉　白茯苓　伏神　遠志　石菖蒲

血　當歸　乳香　熟地黃　沒藥

本熱寒之

瀉火　黃芩　竹葉　麥門冬　芒消　炒鹽

涼血　地黃　巵子　天竺黃

標熱發之

散火　甘草　獨活　麻黃　柴胡　龍腦

脾藏智屬土爲萬物之母主營衛主味主肌肉主四肢

本病諸濕腫脹痞滿噫氣大小便閉黃疸痰飲吐瀉霍亂心腹痛飲食不化

標病身體胕腫重困嗜臥四肢不舉舌本强痛足大趾不用九竅不通諸痙項强

土實瀉之

瀉子　訶子　防風　桑白皮　葶藶

吐　豆豉　巵子　蘿蔔子　常山　瓜蒂　鬱金　虀汁　藜蘆　苦參　赤小豆　鹽湯　苦茶

下　大黃　芒消　青礞石　大戟　甘遂　續隨子　芫花

土虛補之

補母　桂心　茯苓

氣　人參　黃芪　升麻　葛根　甘草　陳皮　藿香　葳蕤　縮砂　木香　扁豆

血　白朮　蒼朮　白芍　膠飴　大棗　乾薑　木瓜　烏梅　蜂蜜

本濕除之

燥中宮　白朮　蒼朮　橘皮　半夏　吳茱萸　南星　草豆蔻　白芥子

潔淨府　木通　赤茯苓　豬苓　藿香

標濕滲之

開鬼門　葛根　蒼朮　麻黃　獨活

肺藏魄屬金總攝一身元氣主聞主哭主皮毛

本病諸氣膹鬱諸痿喘嘔氣短欬嗽上逆欬唾膿血不得臥小便數而欠遺失不禁

標病洒淅寒熱傷風自汗肩背痛冷臑臂前廉痛

氣實瀉之

瀉子　澤瀉　葶藶　桑白皮　地骨皮
除濕　半夏　白礬　白茯苓　薏苡仁　木瓜　橘皮
瀉火　粳米　石膏　寒水石　知母　訶子
通滯　枳殼　薄荷　乾生薑　木香　厚朴　杏仁　皂莢　桔梗　紫蘇梗
　氣虛補之
補母　甘草　人參　升麻　黄芪　山藥
潤燥　蛤蚧　阿膠　麥門冬　貝母　百合　天花粉　天門冬
斂肺　烏梅　粟殼　五味子　芍藥　五倍子
　本熱淸之
清金　黄芩　知母　麥門冬　巵子　沙參　紫苑　天門冬
　本寒溫之
溫肺　丁香　藿香　欵冬花　檀香　白豆蔻　益智　縮砂　糯米　百部
　標寒散之

解表　麻黄　葱白　紫蘇

腎藏志屬水爲天一之源主聽主骨主二陰

本病諸寒厥逆骨痿腰痛腰冷如氷足胻腫寒少腹滿急疝瘕大便閉泄吐利腥穢水液澄澈淸冷不禁消渴引飮

標病發熱不惡熱頭眩頭痛咽痛舌燥脊股後廉痛

水强瀉之

瀉子　大戟　牽牛

瀉腑　澤瀉　猪苓　車前子　防已　茯苓

水弱補之

補母　人參　山藥

氣　知母　玄參　補骨脂　砂仁　苦參

血　黄蘗　枸杞　熟地黄　鎖陽　肉蓯蓉　山茱萸　阿膠　五味子

本熱攻之

下　傷寒少陰證口燥咽乾大承氣湯

本寒溫之

溫裏　附子　乾薑　官桂　蜀椒　白朮

標寒解之

解表　麻黃　細辛　獨活　桂枝

標熱涼之

清熱　玄參　連翹　甘草　猪膚

命門爲相火之原天地之始藏精生血降則爲漏升則爲鉛主三焦元氣

本病前後癃閉氣逆裏急疝痛奔豚消渴膏淋精漏精寒赤白濁溺血崩中帶漏

火强瀉之

瀉相火　黃蘗　知母　牡丹皮　地骨皮　生地黃　茯苓　玄參　寒水石

火弱補之

益陽　附子　肉桂　益智子　破故紙　沈香　川烏頭　硫黃　天雄　烏藥　陽起石　船茴香　胡桃　巴戟天　丹砂　當歸　蛤蚧　覆盆

精脫固之

澀滑　牡蠣　芡實　金櫻子　五味子　遠志　山茱萸　蛤粉

三焦爲相火之用分布命門元氣主升降出入游行天地之間總領五臟六腑營衛經絡內外上下左右之氣號中淸之府上主納中主化下主出

本病諸熱瞀瘛暴病暴死暴瘖躁擾狂越譫妄驚駭諸血溢血泄諸氣逆衝上諸瘡瘍痘疹瘤核

上熱則喘滿諸嘔吐酸胸痞脇痛食飲不消頭上出汗

中熱則善饑而瘦解㑊中滿諸脹腹大諸病有聲鼓之如鼓上下關格不通霍亂吐利

下熱則暴注下迫水液渾濁下部腫滿小便淋瀝或不通大便閉結下痢

上寒則吐飲食痰水胸痺前後引痛食已還出

中寒則飲食不化寒脹反胃吐水濕瀉不渴

下寒則二便不禁臍腹冷疝痛

標病惡寒戰慄如喪神守耳鳴耳聾嗌腫喉痺諸病胕腫疼酸驚駭手小指次指不用

實火瀉之

汗　麻黃　柴胡　葛根　荊芥　升麻　薄荷　羌活　石膏

吐　瓜蔕　淡鹽　虀汁

下　大黃　芒消

虛火補之

上　人參　天雄　桂心

中　人參　黃芪　丁香　木香　草果

下　附子　桂心　硫黃　人參　沈香　烏藥　破故紙

本熱寒之

上　黃芩　連翹　梔子　知母　玄參　石膏　生地黃

中　黃連　連翹　生芐　石膏

下　黃蘗　知母　生芐　石膏　牡丹　地骨皮

標熱散之

解表　柴胡　細辛　荊芥　羌活　葛根　石膏

膽屬木爲少陽相火發生萬物爲決斷之官十一臟之主主同肝
本病口苦嘔苦汁善太息澹澹如人將捕狀目昏不眠
標病寒熱往來痁瘧胸脇痛頭額痛耳痛鳴聾瘰癧結核馬刀足小指次指不用
實火瀉之
瀉膽　龍膽　牛膽　豬膽　生蕤仁　生酸棗仁　黃連　苦茶
虛火補之
溫膽　人參　細辛　半夏　炒蕤仁　炒酸棗仁　當歸　地黃
本熱平之
降火　黃芩　黃連　芍藥　連翹　甘草
鎭驚　黑鉛　水銀
標熱和之
和解　柴胡　芍藥　黃芩　半夏　甘草
胃屬土主容受爲水穀之海主同脾

本病噎膈反胃中滿腫脹嘔吐瀉痢霍亂腹痛消中善饑不消食傷飲食胃管當心痛支兩脇

標病發熱蒸蒸身前熱身後寒發狂譫語咽痺上齒痛口眼喎斜鼻痛鼽衄赤瘡

胃實瀉之

濕熱　大黃　芒消

飲食　巴豆　神麴　山查　阿魏　硇砂　鬱金　三稜　輕粉

胃虛補之

濕熱　蒼朮　白朮　半夏　茯苓　橘皮　生薑

寒濕　乾薑　附子　草果　官桂　丁香　肉豆蔻　人參　黃芪

本熱寒之

降火　石膏　地黃　犀角　黃連

標熱解之

解肌　升麻　葛根　豆豉

大腸屬金主變化爲傳送之官

本病大便閉結泄痢下血裏急後重疝痔脫肛腸鳴而痛

標病齒痛喉痺頸腫口乾咽中如核鼽衄目黃手大指次指痛宿食發熱寒標

腸實瀉之

熱　大黃　芒消　桃花　牽牛　巴豆　郁李仁　石膏

氣　枳殼　木香　橘皮　檳榔

腸虛補之

氣　皂莢

燥　桃仁　麻仁　杏仁　地黃　乳香　松子　當歸　肉蓯蓉

濕　白朮　蒼朮　半夏　硫黃

陷　升麻　葛根

脫　龍骨　白堊　訶子　粟殼　烏梅　白礬　赤石脂　禹餘糧　石榴皮

本熱寒之

清熱　秦艽　槐角　地黃　黃芩

本寒溫之

溫裏　乾薑　附子　肉豆蔻

標熱散之

解肌　石膏　白芷　升麻　葛根

小腸主分泌水穀爲受盛之官

本病大便水穀利小便短小便閉小便血小便自利大便後血小腸氣痛宿食夜熱旦止

標病身熱惡寒嗌痛頷腫口糜耳聾

實熱瀉之

氣　木通　猪苓　滑石　瞿麥　澤瀉　燈草

血　地黄　蒲黄　赤茯苓　牡丹皮　巵子

虛寒補之

氣　白朮　楝實　茴香　砂仁　神麴　扁豆

血　桂心　玄胡索

本熱寒之

降火　黃蘗　黃芩　黃連　連翹　巵子

標熱散之

解肌　藁本　羌活　防風　蔓荊

膀胱主津液爲胞之府氣化乃能出號州都之官諸病皆干之

本病小便淋瀝或短數或黃赤或白或遺失或氣痛

標病發熱惡寒頭痛腰脊强鼻窒足小指不用

實熱瀉之

泄火　滑石　猪苓　澤瀉　茯苓

下虛補之

熱　黃蘗　知母

寒　桔梗　升麻　益智　烏藥　山茱萸

本熱利之

降火　地黃　梔子　茵蔯　黃蘗　牡丹皮　地骨皮

標寒發之

發表　麻黃　桂枝　羌活　蒼朮　防巳　黃芪　木賊

引經報使潔古珍珠囊

手少陰心　黃連　細辛　　手太陽小腸　藁本　黃蘗

足少陰腎　獨活　桂　知母　細辛　　足太陽膀胱　羌活

手太陰肺　桔梗　升麻　葱白　白芷　　手陽明大腸　白芷　升麻　石膏

足太陰脾　升麻　蒼朮　葛根　白芍　　足陽明胃　白芷　升麻　石膏　葛根

手厥陰心主　柴胡　牡丹皮　　足少陽膽　柴胡　青皮

足厥陰肝　青皮　吳茱萸　川芎　柴胡

手少陽三焦　連翹柴胡　上地骨皮　中青皮　下附子

本草綱目序例第一卷下終

# 本草綱目序例目錄第二卷

序例下

藥名同異　相須相使相畏相惡諸藥
相反諸藥　服藥食忌
姙娠禁忌　飲食禁忌
李東垣隨證用藥凡例
陳藏器諸虛用藥凡例
張子和汗吐下三法　病有八要六失六不治
藥對歲物藥品　神農本草經目錄
宋本草舊目錄

# 本草綱目序例第二卷

## 序例下　藥名同異

五物同名　獨搖草　羌活　鬼臼　鬼督郵　天麻　薇蘅

四物同名　堇　堇菜　蒴藋　烏頭　石龍芮　　苦菜　貝母　龍葵　苦苣　敗醬

鬼目　白英　羊蹄　紫葳　麂目　　紅豆　赤小豆　紅豆蔻　相思子　海紅豆

白藥　桔梗　白藥子　栝樓　會州白藥　　豚耳　豬耳　菘菜　馬齒莧　車前

三物同名　美草　甘草　旋花　山薑　　山薑　美草　蒼朮　杜若

蜜香　木香　多木香　沈香　　女萎　萎蕤　蔓楚　紫葳

鬼督郵　徐長卿　赤箭　獨搖草　　王孫　黃芪　猢猻　牡蒙

百枝　萆薢　防風　狗脊　　接骨草　山蒴藋　續斷　攀倒甑

虎鬚　款冬花　沙參　燈心草　　鹿腸　敗醬　玄參　斑龍腸

解毒子　苦藥子　鬼臼　山豆根　　羊乳　羜羊乳　沙參　枸杞

豕首　猪頭　蠡實　天門冬　　山石榴　金罌子　小蘗　杜鵑花
狗骨　犬骨　鬼箭　猫兒刺　　苦薏　敗醬　苦參　酸漿草
仙人杖　枸杞　仙人草　立死竹　　木蓮　木饅頭　木蘭　木芙蓉
白幕　天雄　白英　白薇　　立制石　理石　礜石　石膽
守田　半夏　菵草　狼尾草　　水玉　半夏　玻瓈　水精石
芑　地黄　薏苡　白黍　　黄牙　金　硫黄　金牙石
石花　璚枝葉　烏韮　鍾乳石汁　　淡竹葉　水竹葉　碎骨子　鴨跖草
牛舌　牛之舌　車前　羊蹄　　虎膏　虎脂　豨薟　天南星
酸漿　米漿水　燈籠草　三葉酸草　　石龍　蜥蜴　葒草　絡石
木蜜　大棗　蜜香　枳椇　　石蜜　乳糖　櫻桃　蜂蜜

**二物同名**　淫羊藿　仙靈脾　天門冬　　黄芝　芝草　黄精
黑三稜　京三稜　烏芋　　知母　蝭母　沙參　　地精　人參　何首烏
龍銜　蛇含　黄精　　金釵股　釵子股　忍冬藤　　薺苨　桔梗　杏葉沙參

神草　人參　赤箭
仙茅　長松　婆羅門參
千兩金　淫羊藿　續隨子
逐馬　玄參　丹參
香菜　香薷　羅勒
杜蘅　杜若　馬蹄香
孩兒菊　蘭草　澤蘭
地血　紫草　茜草
蕳根　蘭草　防風
黃昏　合歡　王孫
甘露子　地蠶　甘蕉子
龍珠　赤珠　石龍芻
烏韭　石髮　麥門冬

芰草　黃芪　菱
水香　蘭草　澤蘭
墻蘼　蛇床　營實
百兩金　牡丹　百兩金草
地筋　白茅根　菅茅根
香蘇　爵牀　水蘇
漏蘆　飛廉　鬼油麻
木芍藥　牡丹　赤芍藥
藥實　貝母　黃藥子
夜合　合歡　何首烏
雷丸　竹苓　兎葵
不死草　卷柏　麥門冬
地葵　蒼耳　地膚子

長生草　羌活　紅茂草
兒草　知母　芫花
香草　蘭草　零陵草
牡蒙　紫參　王孫
都梁香　蘭草　澤蘭
鼠姑　牡丹　鼠婦蟲
蘭根　蘭草　白茅
白及　連及　黃精
夏枯草　乃東草　茺蔚
藏棋　黃芪　旋覆花
馬薊　朮　大薊
苦薏　野菊　蓮子心
紫河車　蚤休　人胞衣

伏兎　飛廉　茯苓
馬肝石　何首烏　烏鬚石
益明　茺蔚　地膚
香茅　鼠麴草　菁茅
旱蓮　鱧腸　連翹
羊婆奶　沙參　蘿藦子
鬼鑊　鬼釵草　馬齒爛竹
地椒　野小椒　水楊梅
鹿葱　萱草　藜蘆
鳳尾草　金星草　貫衆
妓女　萱草　地膚苗
天豆　雲實　石龍芮
羊腸　羊之腸　羊桃

草蒿　青蒿　青葙子
火杴　茺蔚　豨薟
千金藤　解毒之草　陳思岌
麗春　罌粟　仙女蒿
石髮　烏韭　陟釐
大蓼　葒草　馬蓼
血見愁　茜草　地錦
斑杖　虎杖　攀倒甑
地節　葳蕤　枸杞
扁竹　扁蓄　射干
紫金牛　草根似巴戟　射干
重臺　蚤休　玄參
白草　白斂　白英

黄蒿　鼠麴　黄花蒿
露葵　葵菜　蓴
忍冬　金銀藤　麥門冬
仙人掌　草名　射干
蘭華　蘭草　連翹
石衣　烏韭　陟釐
山葱　茖葱　藜蘆
雞腸草　蘩縷之類　鵞不食草
芒草　芭茅　莽草
莞草　白芷　茵芋
通草　木通　通脫木
臙脂菜　藜　落葵
更生　菊　雀翹

燕尾草　蘭草　慈姑
地菌　草　赤地利
水萍　浮萍　慈姑
象膽　象之膽　蘆薈
冬葵子　葵菜　姑活
屛風　防風　水萫
天葵　菟葵　落葵
鹿藿　野綠豆　葛苗
菩提子　薏苡　無患子
鬼蓋　人參　地菌
石南　風藥　南藤
黃瓜　胡瓜　栝樓
白馬骨　獸之骨　又木名

白昌　商陸　水菖蒲
紅內消　紫荊皮　何首烏
林蘭　石斛　木蘭
水葵　水蓴　蓴
馬尾　馬之尾　商陸
三白草　候農之草　牽牛
赤葛　何首烏　烏歛母
水花　浮萍　浮石
景天　愼火草　螢火蟲
相思子　木紅豆　郎君子蟲
蘿摩　雀瓢　百合
胡菜　胡荽　芸薹
金罌　金櫻子　安石榴

臭草　雲實　茺蔚
龍鬚　席草　海菜
承露仙　人肝藤　伏雞子根
杜蘭　石斛　木蘭
水芝　芡實　冬瓜
鷄臼　烏相木　鷂鳩鳥
猢猻頭　鱧腸　地錦
酸母　酸模　酢漿草
山芋　山藥　旱芋
王瓜　土瓜　菝葜
雞骨香　沈香　降眞香
甜藤　甘藤　忍冬
胡豆　蠶豆　豌豆

杭子　山査　楊梅　　金盞銀臺　水仙花　王不留行　　木綿　古貝　杜仲

水栗　菱實　萍蓬草根　　陽桃　獼猴桃　五斂子　　胡王使者　羌活　白頭翁

獐頭　獐首　土菌　　獨搖　白楊　扶移　　菥蓂　大薺　白棘

桑上寄生　桑耳　　鼠矢　鼠糞　山茱萸　　苦心　知母　沙參

日及　木槿　扶桑　　芨　菫　烏頭　　烏犀　犀角　皂莢

梫木　桂　又木名　　大青　大青草　扁青石　　茢　蕁　女菀

文蛤　海蛤　五倍子　　樺木　樺皮　木芙蓉　　絡石　草　石

榛　榛子　厚朴　　果蠃　蠮螉　栝樓　　風藥　石南　澤蘭

將軍　大黃　硫黃　　椁　鼠李　漆柿　　石鯪　絡石藤　穿山甲

冬青　凍青　女貞　　石芝　芝草　石腦　　櫬　梧桐　木槿

鉛華　胡粉　黃丹　　處石　慈石　玄石　　石腦　石芝　太一餘糧

寒水石　石膏　凝水石　　石綠　綠青　綠鹽　　石英　紫石英　水晶

石鹽　礬石　光明鹽　　蜃　車螯　蜃蛟　　石蠶　沙虱　甘露子

占斯　樟寄生　雀甕蟲
地雞　土菌　鼠婦
青蚨　蚨蟬　銅錢
飛生　飛生蟲　鼯鼠
負盤　蜚蠊　行夜
白魚　鱊魚　衣魚
人魚　鯑魚　鯢魚
水狗　獺　魚狗鳥
鬼鳥　姑獲鳥　鬼車鳥
朝開暮落花　木槿　狗溺臺

鷸　田間小鳥　魚狗鳥
沙虱　水蟲　石蠶
蟪蛄　蟬　螻蛄
蝸蠃　蝸牛　螺螄
黃頰魚　鱤魚　黃顙魚
魚師　有毒之魚　魚狗鳥
鯊魚　吹沙魚　鮫魚
山雞　翟雉　鷩雉
醴泉　瑞水名　人口中津

地蠶　蠐螬　甘露子
鴂　伯勞　杜鵑
鼯鼠　螻蛄　鼹鼠
負蠜　鼠負　阜螽
土龍　蚯蚓　鼉龍
魚虎　土奴魚　魚狗鳥
天狗　獾　魚狗鳥
扶老　禿鶖　靈壽木
無心　薇銜　鼠麴草

## 比類隱名

鬼油麻　漏蘆
草續斷　石龍芻

土青木香　馬兜鈴
甜桔梗　薺苨
杜牛膝　天名精

野天麻　茺蔚
山牛蒡　大薊
野脂麻　玄參

甜葶藶 菥蓂 水羊乳 丹參 天蔓菁 天名精
草甘遂 蚤休 黃芫花 蕘花 杏葉沙參 薺苨
野雞冠 青葙子 山莧菜 牛膝 黃大戟 芫花
胡薄荷 積雪草 龍腦薄荷 水蘇 青蛤粉 青黛
野紅花 大戟 竹園荽 海金沙 野園荽 鵝不食草
野胡蘿蔔 草鴟頭 貫衆 野茴香 馬芹
野甜瓜 土瓜 野萱花 射干 野天門冬 百部
黑狗脊 貫衆 草血竭 地錦 水巴戟 香附
土細辛 杜衡 獐耳細辛 及已 草鳶頭 鳶尾
草天雄 草如蘭狀 草附子 香附 土附子 草烏頭
木藜蘆 鹿驪 山蕎麥 赤地利 金蕎麥 羊蹄
鬼蒟蒻 天南星 山大黃 酸模 牛舌大黃 羊蹄
土草薢 土茯苓 刺猪苓 土茯苓 白菝葜 萆薢

赤薜荔　赤地利　龍鱗薜荔　長春藤　夜牽牛　紫菀
便牽牛　牛蒡　山甘草　紫金藤　水甘草
木甘草　草雲母　雲實　草硫黃　芡實
草鍾乳　韭菜　草鼈甲　乾茄　山地栗　土茯苓
羞天草　海芋　羞天花　鬼臼　土質汗　茺蔚
茅質汗　野蘭　漏盧　木天蓼
木芙蓉　拒霜　木蓮蓬　木饅頭　胡韭子　補骨脂
野槐　苦參　草麝香　鬱金香　石菴蕳　骨碎補
硬石膏　長石　白靈砂　粉霜　野茄　蒼耳
木半夏　野生薑　黃精

## 相須相使相畏相惡諸藥

出徐之才藥對今益以諸家本草續增者

甘草　朮苦參乾漆爲之使　惡遠志　忌猪肉
黃芪　茯苓爲之使　惡白鮮龜甲

人參　茯苓馬藺爲之使　惡鹵鹹溲疏　畏五靈脂

桔梗　節皮爲之使　畏白及龍膽龍眼　忌猪肉　伏砒

葳蕤　畏鹵鹹

朮　防風地楡爲之使　忌桃李雀肉菘菜青魚

貫衆　雚菌赤小豆爲之使　伏石鍾乳

遠志　得茯苓龍骨冬葵子良　畏眞珠飛廉藜蘆齊蛤

玄參　惡黃耆乾薑大棗山茱萸

丹參　畏鹹水

白頭翁　蠡實爲之使　得酒良

沙參　惡防已

黃精　忌梅實

知母　得黃蘗及酒良　伏蓬砂鹽

狗脊　萆薢爲之使　惡莎草敗醬

巴戟天　覆盆子爲之使　惡雷丸丹參朝生

淫羊藿　薯蕷紫芝爲之使　得酒良

地楡　得髮良　惡麥門冬　伏丹砂雄黃硫黃

紫參　畏辛夷

白及　紫石英爲之使　惡理石　畏杏仁李核仁

右草之一

黃連　黃芩龍骨理石爲之使　忌猪肉　畏牛膝欵冬　惡冷水菊花玄參白殭蠶白鮮芫花

黃芩　龍骨山茱萸爲之使　惡葱實　畏丹砂牡丹藜蘆

柴胡　半夏爲之使　惡皂莢　畏女菀藜蘆

防風　畏萆薢　惡乾薑藜蘆白歛芫花

苦參　玄參爲之使　惡貝母漏蘆菟絲子　伏汞雌黃焰消

貝母　厚朴白微爲之使　惡桃花　畏秦艽莽草礜石

細辛　曾青棗根爲之使　忌生菜狸肉　惡黃芪狼毒山茱萸　畏滑石消石

右草之二

胡黃連　忌猪肉　惡菊花玄參白鮮

秦艽　菖蒲爲之使　畏牛乳

前胡　半夏爲之使　惡皂莢　畏藜蘆

羌獨活　蠡實爲之使

白鮮　惡桔梗茯苓萆薢螵蛸

龍膽　貫衆赤小豆爲之使　惡地黃防葵

白微　惡黃芪乾薑大棗山茱萸大黃大戟乾漆

當歸　惡蕳茹濕麪　制雄黃　畏菖蒲生薑海藻牡蒙

蛇牀　惡牡丹貝母巴豆

白芷　當歸爲之使　惡旋復花　制雄黃硫黃

芍藥　須丸烏藥沒藥爲之使　惡石斛芒消　畏消石鼈甲小薊

補骨脂　得胡桃胡麻良　惡甘草　忌諸血芸薹

蓬莪茂　得酒醋良

零陵香　伏三黃硃砂

積雪草　伏硫黃

右草之三

芎藭　白芷爲之使　畏黃連　伏雌黃

藁本　惡蕳茹　畏青葙子

牡丹　忌蒜胡荽　伏砒　畏兎絲子貝母大黃

杜若　得辛夷細辛良　惡柴胡前胡

縮砂蜜　白檀香豆蔻人參益智黃蘗茯苓赤白石脂爲之使　得訶子鼈甲白蕪荑良

香附子　得芎藭蒼朮醋童子小便良

澤蘭　防已爲之使

香薷　忌山白桃

菊花　朮枸杞根桑根白皮青葙葉爲之使

艾葉　苦酒香附爲之使

薇銜　得秦皮良

紅藍花　得酒良

漏蘆　連翹爲之使

葈耳　忌猪肉馬肉米泔

蘆筍　忌巴豆

右草之四

地黃　得酒麥門冬薑汁縮砂良　惡貝母　畏蕪荑　忌葱蒜蘿蔔諸血

菴藺　荊子薏苡爲之使

茺蔚　制三黃砒石

夏枯草　土瓜爲之使　伏汞砂

續斷　地黃爲之使　惡雷丸

飛廉　得烏頭良　忌麻黃

天名精　垣衣地黃爲之使

麻黃　厚朴白微爲之使　惡辛夷石韋

牛膝　惡螢火龜甲陸英　畏白前　忌牛肉

紫菀 款冬爲之使 惡天雄藁本雷丸遠志瞿麥 畏茵蔯

女菀 畏鹵鹹

冬葵子 黄芩爲之使

麥門冬 地黄車前爲之使 惡欵冬苦芙苦瓠 畏苦參青葙木耳 伏石鍾乳

欵冬花 杏仁爲之使 得紫菀良 惡玄參皁莢消石 畏貝母麻黄辛夷黄芩黄芪連翹青葙

佛耳草 欵冬爲之使

決明子 蓍實爲之使 惡大麻子

瞿麥 牡丹蘘草爲之使 惡螵蛸 伏丹砂

葶藶 榆皮爲之使 得酒大棗良 惡白殭蠶石龍芮

車前子 常山爲之使

女青 蛇銜爲之使

藎草 畏鼠負

蒺藜 烏頭爲之使

右草之五

大黄 黄芩爲之使 惡乾漆 忌冷水

商陸 得大蒜良 忌犬肉 伏硇砂砒石雌黄

狼毒　大豆爲之使　惡麥句薑　畏醋占斯密陀僧

蕳茹　甘草爲之使　惡麥門冬

澤漆　小豆爲之使　惡薯蕷

莨菪　畏蟹犀角甘草升麻綠豆

常山　畏玉乳　忌葱菘菜伏砒石

附子　地膽爲之使　得蜀椒食鹽下達命門　惡蜈蚣豉汁　畏防風甘草人參黃芪綠豆烏韭童溲犀角

白附子　得火良

天南星　蜀漆爲之使　得火牛膽良　惡莽草　畏附子乾薑防風生薑　伏雄黃丹砂焰消

鬼臼　畏垣衣

狼牙　蕪荑爲之使　惡地榆棗肌

大戟　小豆爲之使　得棗良　惡薯蕷　畏菖蒲蘆葦鼠屎

甘遂　瓜蒂爲之使　惡遠志

蓖麻　忌炒豆　伏丹砂粉霜

藜蘆　黃連爲之使　惡大黃　畏葱白

天雄　遠志爲之使　惡腐婢豉汁

烏頭　遠志莽草爲之使　惡藜蘆豉汁　畏飴糖黑豆冷水　伏丹砂砒石

半夏　射干柴胡爲之使　惡皂莢海藻飴糖羊血　畏生薑乾薑秦皮龜甲雄黃

羊躑躅　畏巵子　惡諸石及麪　伏丹砂硇砂雌黃

芫花　決明爲之使　得醋良

石龍芮　巴戟爲之使　畏蛇蛻皮吳茱萸

鉤吻　半夏爲之使　惡黄芩

右草之六

兔絲子　薯蕷松脂爲之使　得酒良　惡藿菌

牽牛子　得乾薑青木香良

栝樓根　枸杞爲之使　惡乾薑　畏牛膝乾漆

天門冬　地黄貝母垣衣爲之使　忌鯉魚　畏曾青浮萍　制雄黄硇砂

萆薢　薏苡爲之使　畏前胡柴胡牡蠣大黄葵根

莽草　畏黑豆紫河車

蕁麻　畏人溺

五味子　蓯蓉爲之使　惡葳蕤　勝烏頭

紫葳　畏鹵鹹

黄環　鳶尾爲之使　惡茯苓防己乾薑

何首烏　茯苓爲之使　忌葱蒜蘿蔔諸血無鱗魚

土茯苓　忌茶

白斂　代赭爲之使

威靈仙　忌茶麪湯

茜根　畏鼠姑　制雄黄

防已　殷孽爲之使　惡細辛　畏萆薢　女菀鹵鹼　殺雄黄消石毒

絡石　杜仲牡丹爲之使　惡鐵落　畏貝母菖蒲　殺孽毒

右草之七

澤瀉　畏海蛤文蛤

石菖蒲　秦皮秦芁爲之使　惡麻黄　地膽　忌飴糖羊肉鐵器

石斛　陸英爲之使　惡凝水石巴豆　畏雷丸殭蠶

石韋　滑石杏仁射干爲之使　得菖蒲良　制丹砂礬石

烏韭　垣衣爲之使

右草之八

柏葉柏實　瓜子桂心牡蠣爲之使　畏菊花羊蹄諸石及麪麴

桂　得人參甘草麥門冬大黄黄芩調中益氣　得柴胡紫石英乾地黄療吐逆　畏生葱石脂

辛夷　芎藭為之使　惡五石脂　畏菖蒲黃連蒲黃石膏黃環

麒麟竭　得蜜陀僧良

右木之一

黃蘗木　惡乾漆　伏硫黃

杜仲　惡玄參蛇蛻皮

桐油　畏酒　忌烟

槐實　景天為之使

皂莢　柏實為之使　惡麥門冬　畏人參苦參空青　伏丹砂粉霜硫黃硇砂

欒華　決明為之使

沈香檀香　忌見火

丁香　畏鬱金　忌火

厚朴　乾薑為之使　惡澤瀉消石寒水石　忌豆

乾漆　半夏為之使　畏雞子紫蘇杉木漆姑草蟹　忌猪脂

楝實　茴香為之使

秦皮　苦瓠防葵大戟為之使　惡吳茱萸

巴豆　芫花為之使　得火良　惡蘘草牽牛　畏大黃藜蘆黃連蘆笋醬豉豆汁冷水

## 右木之二

桑根白皮　桂心續斷麻子爲之使

山茱萸　蓼實爲之使　惡桔梗防風防已

溲疏　漏蘆爲之使

蔓荊子　惡烏頭石膏

石南　五加皮爲之使　惡小薊

酸棗　惡防已

五加皮　遠志爲之使　畏玄參蛇皮

牡荊實　防已爲之使　惡石膏

欒荊子　決明爲之使　惡石膏

## 右木之三

茯苓茯神　馬蘭爲之使　得甘草防風芍藥麥門冬紫石英療五臟　惡白斂米醋酸物　畏地楡秦艽牡蒙龜甲雄黃

雷丸　厚朴芫花蓄根荔實爲之使　惡葛根

桑寄生　忌火

竹瀝　薑汁為之使

占斯　茱萸為之使

右木之四

杏仁　得火良　惡黃芩黃芪葛根　畏蘘草

桃仁　香附為之使

榧實殼　反綠豆殺人

秦椒　惡栝樓防葵畏雌黃

蜀椒　杏仁為之使　得鹽良　畏款冬花防風附子雄黃橐吾冷水麻仁漿

吳茱萸　蓼實為之使　惡丹參消石白堊　畏紫石英

食茱萸　畏紫石英

石蓮子　得茯苓山藥白朮枸杞子良

蓮蕊鬚　忌地黃葱蒜

荷葉　畏桐油

右果部

麻花　蟅蟲為之使

麻仁　畏茯苓牡蠣白微

小麥麪　畏漢椒蘿蔔

大麥　石蜜爲之使

罌粟殼　得醋烏梅橘皮良

大豆　得前胡杏仁牡蠣烏喙諸膽汁良　惡五參龍膽猪肉

大豆黃卷　得前胡杏子牡蠣天雄烏喙鼠屎石蜜良　惡海藻龍膽

諸豆粉　畏杏仁

右穀部

生薑　秦椒爲之使　惡黃芩黃連天鼠糞　殺半夏南星莨菪毒

乾薑　同

蘹香　得酒良

菥蓂子　得荊實細辛良　惡乾薑苦參

薯蕷　紫芝爲之使　惡甘遂

雚菌　得酒良　畏雞子

六芝　並薯蕷爲之使得髮良　得麻子仁牡桂白瓜子益人　畏扁青茵蔯蒿

右菜部

金 惡錫 畏水銀翡翠石餘甘子驢馬脂

朱砂銀 畏石亭脂慈石鐵 忌諸血

生銀 惡錫 畏石亭脂慈石荷葉蕈灰羚羊角烏賊骨黃連甘草飛廉鼠尾龜甲生薑地黃羊脂蘇子油 惡羊血馬目毒公

赤銅 畏蒼朮巴豆乳香胡桃慈姑牛脂

黑鉛 畏紫背天葵

胡粉 惡雌黃

錫 畏五靈脂伏龍肝羖羊角馬鞭草地黃巴豆蓖麻薑汁砒石硇砂

諸鐵 制石亭脂 畏慈石皂莢乳香灰炭朴消硇砂鹽滷猪犬脂荔枝

右金石之一

玉屑 惡鹿角 畏蟾肪

玉泉 畏款冬花青竹

青琅玕 得水銀良 殺錫毒 畏雞骨

白石英 惡馬目毒

紫石英 長石爲之使 得茯苓人參芍藥主心中結氣 得天雄菖蒲主霍亂 惡鮀甲黃連麥句薑 畏扁青附子及酒

雲母　澤瀉爲之使　惡徐長卿羊血　畏鮀甲礬石東流水百草上露茅屋漏水　制汞伏丹砂

丹砂　惡慈石　畏鹹水車前石韋皁莢決明瞿麥南星烏頭地榆桑椹紫河車地丁馬鞭草地骨皮陰地厥白附子　忌諸血

水銀　畏慈石砒石黑鉛硫黃大棗蜀椒紫河車松脂松葉荷葉穀精草金星草萱草夏枯草黃芩子鴈來紅馬蹄香獨脚蓮水慈姑瓦松忍冬

汞粉　畏慈石石黃黑鉛鐵漿陳醬黃連土茯苓忌一切血

粉霜　畏硫黃蕎麥稈灰

## 右石之二

雄黃　畏南星地黃萵苣地榆黃芩白芷當歸地錦苦參五加皮紫河車五葉藤鵞腸草雞腸草鵞不食草圓桑葉蝟脂

雌黃　畏黑鉛胡粉芎藭地黃獨帚益母羊不食草地榆瓦松五加皮冬瓜汁

石膏　雞子爲之使　畏鐵惡莽草巴豆馬目毒公

理石　滑石爲之使　惡麻黃

方解石　惡巴豆

滑石　石韋爲之使　惡曾青　制雄黃

不灰木　制三黃水銀

五色石脂 畏黃芩大黃官桂

白石脂 燕屎爲之使 惡松脂 畏黃芩黃連甘草飛廉毒公

孔公孽 木蘭爲之使 惡朮細辛 忌羊血

石鍾乳 蛇牀爲之使 惡牡丹玄石牡蒙人參朮 忌羊血 畏紫石英蘘草韭實獨蒜胡葱胡荽麥門冬猫兒眼草

殷孽 惡防已 畏朮

## 右石之三

陽起石 桑螵蛸爲之使 惡澤瀉雷丸菌桂石葵蛇蛻皮 畏兎絲子 忌羊血

玄石 畏松脂柏實菌桂

禹餘糧 牡丹爲之使 制五金三黃

赤石脂 惡大黃松脂 畏芫花豉汁

黃石脂 曾青爲之使 惡細辛 畏蜚蠊黃連甘草忌卯末

慈石 柴胡爲之使 惡牡丹莽草 畏黃石脂 殺鐵毒消金伏丹砂養水銀

代赭石 乾薑爲之使 畏天雄附子

太一餘糧 杜仲爲之使 畏貝母菖蒲鐵落

空青曾青　畏菟絲子

石膽　水英爲之使　畏牡桂菌桂辛夷白微芫花

礬石　得火良鉛丹棘鍼爲之使　畏水　惡馬目毒公虎掌細辛鷲屎　忌羊血

砒石　畏冷水綠豆醋青鹽蒜消石水蓼常山益母獨帚菖蒲莨律波薐萵苣鶴頂草三角酸鵞不食草

礞石　得焇消良

右石之四

大鹽　漏蘆爲之使

朴消　石葦爲之使　畏麥句薑京三稜

凝水石　畏地楡

消石　火爲之使　惡曾青苦參苦菜　畏女菀杏仁竹葉粥

硇砂　制五金八石　忌羊血　畏一切酸漿水醋烏梅牡蠣卷柏蘿蔔獨帚羊蹄商陸冬瓜蒼耳蠶沙海螵蛸羊䯒骨羊躑躅魚腥草河豚魚膠

蓬砂　畏知母芸薹紫蘇甑帶何首烏鵞不食草

石硫黃　曾青石亭脂爲之使　畏細辛朴消鐵醋黑錫猪肉鴨汁餘甘子桑灰益母天鹽車前黃蘗石葦蕎麥獨帚地骨皮地楡蛇牀蓖麻菟絲蠶沙紫荷波稜桑白皮馬鞭草

礬石　甘草爲之使　惡牡蠣
畏麻黃紅心灰藋

綠礬　畏
醋

## 右石之五

蜜蠟　惡芫花
齊蛤

蜂子　畏黃芩芍藥白前牡蠣
紫蘇生薑冬瓜苦蕒

露蜂房　惡乾薑丹參黃
芩芍藥牡蠣

桑螵蛸　得龍骨止精
畏旋覆花戴椹

白殭蠶　惡桔梗茯苓茯神
萆薢桑螵蛸

晚蠶沙　制硇砂礵
消粉霜

斑蝥　馬刀爲之使　得糯米小麻子良　惡膚青豆花
甘草　畏巴豆丹參空青黃連黑豆靛汁葱茶醋

芫青地膽葛上亭長　並同
斑蝥

蜘蛛　畏蔓菁
雄黃

水蛭　畏石灰
食鹽

蠐螬　蜚蠊爲之使
惡附子

蜣螂　畏石膏羊角
羊肉

衣魚　畏芸草莽
草萵苣

䗪蟲　畏皁莢菖蒲
屋遊

蜚虻　惡麻黃

蜈蚣　畏蛞蝓蜘蛛白鹽雞屎桑白皮

蚯蚓　畏葱鹽

蝸牛蛞蝓　畏鹽

右蟲部

龍骨龍齒　得人參牛黃黑豆良畏石膏鐵器　忌魚

龍角　畏蜀椒理石乾漆

鼉甲　蜀漆爲之使畏芫花甘遂狗膽

蜥蜴　惡硫黃斑蝥蕪荑

蛇蛻　得火良畏慈石及酒

白花蛇烏蛇　得酒良

鯉魚膽　蜀漆爲之使

烏賊魚骨　惡白及白歛附子

河豚魚　畏橄欖甘蔗蘆根糞汁魚茗木烏蓲草根

右鱗部

龜甲　惡沙參蜚蠊　畏狗膽

鼈甲　惡礬石理石

牡蠣　貝母爲之使　得甘草牛膝遠志蛇牀子良　惡麻黃吳茱萸辛夷　伏硇砂

蚌粉　制石亭脂硫黃

馬刀　得火良

海蛤　蜀漆爲之使　畏狗膽甘遂芫花

右介部

伏翼　莧實雲實爲之使

夜明沙　惡白斂白微

五靈脂　惡人參

右禽部

羖羊角　菟絲子爲之使

羊脛骨　伏硇砂

羖羊屎　制粉霜

牛乳　制秦艽不灰木

馬脂駝脂　柔五金

阿膠　得火良薯蕷爲之使　畏大黃

牛黃　人參爲之使　得牡丹菖蒲利耳目　惡龍骨龍膽地黃常山蜚蠊　畏牛膝乾漆

犀角　松脂升麻爲之使　惡雷丸雚菌烏頭烏喙

熊膽　惡防已地黃

鹿茸　麻勃爲之使

鹿角　杜仲爲之使

鹿角膠　得火良　畏大黃

麋脂　忌桃李　畏大黃

麝香　忌大蒜

猬皮　得酒良　畏桔梗麥門冬

猬脂　制五金八石　伏雄黃

右獸部

相反諸藥凡三十六種

甘草　反大戟芫花甘遂海藻

大戟　反芫花海藻

烏頭　反貝母栝樓半夏白歛白及

河豚　反煤炲荊芥防風菊花桔梗甘草烏頭附子

柿　反蟹

藜蘆　反人參沙參丹參玄參苦參細辛芍藥狸肉

蜜　反生葱

## 服藥食忌

甘草　忌猪肉菘菜海菜

蒼耳　忌猪肉馬肉米泔

仙茅　忌牛肉牛乳

牛膝　忌牛肉

商陸　忌犬肉

黃連胡黃連　忌猪肉冷水

桔梗烏梅　忌猪肉

半夏菖蒲　忌羊肉羊血飴糖

陽起石雲母鍾乳礵砂礜石　並忌羊血

丹砂空青輕粉　並忌一切血

吳茱萸　忌猪心猪肉

補骨脂　忌猪血芸薹

荆芥　忌驢肉　反河豚一切無鱗魚蟹

巴豆　忌野猪肉菰筍蘆筍醬豉冷水

薄荷　忌鼈肉

常山　忌生葱生菜

牡丹　忌蒜胡荽

鼈甲　忌莧菜

當歸　忌濕麪

地黃何首烏　忌一切血葱蒜蘿蔔

細辛藜蘆　忌狸肉生菜

紫蘓天門冬丹砂龍骨　忌鯉魚

蒼朮白朮　忌雀肉青魚菘菜桃李

麥門冬　忌鯽魚

附子烏頭天雄　忌豉汁稷米

厚朴蓖麻　忌炒豆

威靈仙土茯苓　忌麪湯茶

丹參茯苓茯神　忌醋及一切酸

凡服藥不可雜食肥猪犬肉油膩羹鱠腥臊陳臭諸物

凡服藥不可多食生蒜胡荽生葱諸果諸滑滯之物

凡服藥不可見死尸產婦淹穢等事

## 妊娠禁忌

烏頭　附子　天雄　烏喙　側子　野葛　羊躑躅

桂　南星　半夏　巴豆　大戟　芫花　藜蘆

薏苡仁　薇蘅　牛膝　皂莢　牽牛　厚朴　槐子

桃仁　牡丹皮　欓根　茜根　茅根　乾漆　瞿麥

蕳茹　赤箭　草三稜　茼草　鬼箭　通草　紅花

蘇木　麥蘖　葵子　代赭石　常山　水銀　錫粉

硇砂　砒石　芒消　硫黃　石蠶　雄黃　水蛭

䖟蟲　芫青　斑蝥　地膽　蜘蛛　螻蛄　葛上亭長

蜈蚣　衣魚　蛇蛻　蜥蜴　飛生　䗪蟲　樗雞

蚱蟬　蠐螬　蝟皮　牛黄　麝香　雄黄　兎肉

蟹爪甲　犬肉　馬肉　驢肉　羊肝　鯉魚　蝦蟇

鰍鱓　龜鼈　蟹　生薑　小蒜　雀肉　馬刀

## 飲食禁忌

猪肉忌　生薑　蕎麥　葵菜　胡荽　梅子　炒豆　牛肉　馬肉　羊肝　麋鹿　龜鼈　鵪鶉　驢肉

猪肝忌　魚鮓　鵪鶉　鯉魚腸子

羊肉忌　梅子　小豆　豆醬　蕎麥　魚鮓　猪肉　醋酪　鮓

白狗血忌　羊　雞

驢肉忌　鳧茈　荊芥　茶　猪肉

牛肝忌　鮎魚

猪心肺忌　飴　白花菜　吳茱萸

羊心肝忌　梅　小豆　生椒　苦筍

犬肉忌　菱角　蒜　牛腸　鯉魚　鱓魚

牛肉忌　黍米　韭薤　生薑　猪肉　犬肉　栗子

牛乳忌　生魚　酸物

| 忌 | 物 |
|---|---|
| 馬肉忌 | 倉米 生薑 蒼耳 粳米 猪肉 鹿肉 |
| 麞肉忌 | 梅 李 生菜 鴿 蝦 |
| 雞肉忌 | 胡蒜 芥末 生葱 糯米 李子 魚汁 犬肉 鯉魚 兎肉 獺肉 鷩肉 野雞 |
| 雉肉忌 | 蕎麥 木耳 蘑菰 胡桃 鯽魚 猪肝 鮎魚 鹿肉 |
| 鴨子忌 | 李子 鼈肉 |
| 雀肉忌 | 李子 醬 牛肝 |
| 鯽魚忌 | 芥末 蒜 糖 猪肝 雞雉 鹿肉 猴 |
| 魚鮓忌 | 豆藿 麥醬 蒜 綠豆 |
| 鱸魚忌 | 乳酪 |

| 忌 | 物 |
|---|---|
| 兎肉忌 | 生薑 橘皮 芥末 雞肉 鹿肉 獺肉 |
| 麋鹿忌 | 生菜 菰蒲 雞 鮠魚 雉 蝦 |
| 雞子忌 | 同 雞 |
| 野鴨忌 | 胡桃 木耳 |
| 鵪鶉忌 | 菌子 木耳 |
| 鯉魚忌 | 猪肝 葵菜 犬肉 雞肉 |
| 青魚忌 | 豆藿 |
| 黃魚忌 | 蕎麥 |
| 鱘魚忌 | 乾筍 |

鮰魚忌　野猪　野雞

鰍鱓忌　犬肉　桑柴煑

螃蟹忌　荆芥　柿子　橘子　軟棗

李子忌　蜜　漿水　鴨　雀肉　雞　獐

桃子忌　鼈肉

枇杷忌　熱麪

銀杏忌　鰻鱺

諸瓜忌　油餅

蕎麥忌　猪肉　羊肉　雉肉　黄魚

鮎魚忌　牛肝　鹿肉　野猪

鼈肉忌　莧菜　薄荷　芥菜　桃子　雞子　鴨肉　猪肉　兎肉

蝦子忌　猪肉　雞肉

橙橘忌　檳榔　獺肉

棗子忌　葱　魚

楊梅忌　生葱

慈姑忌　茱萸

沙餹忌　鯽魚　笋　葵菜

黍米忌　葵菜　蜜　牛肉

綠豆忌　榧子　鯉魚鮓

生葱忌　蜜　雞　棗　犬肉　楊梅

胡荽忌　猪肉

莧菜忌　蕨　鼈

梅子忌　猪肉　羊肉　獐肉

生薑　猪肉　牛肉　馬肉　兎肉

乾筍忌　砂糖　鱘魚　羊心肝

胡桃忌　野鴨　酒　雉

炒豆忌　猪肉

韭薤忌　蜜　牛肉

胡蒜忌　魚鱠　魚鮓　鯽魚　犬肉　雞

白花菜忌　猪心肺

鳧茈忌　驢肉

芥末忌　鯽魚　兎肉　雞肉　鼈

木耳忌　雉肉　野鴨　鵪鶉

栗子忌　牛肉

## 李東垣隨證用藥凡例

風中六腑　手足不遂先發其表羌活防風爲君隨證加藥然後行經養血當歸秦艽獨活之類隨經用之

風中五臟　耳聾目瞀先疎其裏三化湯然後行經獨活防風柴胡白芷川芎隨經用之

破傷中風　脉浮在表汗之脉沈在裏下之背搐羌活防風前搐升麻白芷兩傍搐柴胡防風右搐加白芷

傷風惡風　防風爲君麻黄甘草佐之

六經頭痛　須用川芎加引經藥　太陽蔓荊　陽明白芷　太陰半夏　少陰細辛　厥陰吳茱萸　巔頂藁本

眉稜骨痛　羌活白芷黄芩

嗌痛頷腫　黄芩鼠粘子甘草桔梗

眼暴赤腫　防風芩連瀉火當歸佐酒煎服

風熱牙疼　喜冷惡熱生苄當歸升麻黄連牡丹皮防風

傷陰惡寒　麻黄爲君防風甘草佐之

風濕身痛　羌活

肢節腫痛　羌活

眼久昏暗　熟苄當歸爲君羌防爲臣甘草甘菊之類佐之

腎虛牙疼　桔梗升麻細辛吳茱萸

風濕諸病 須用羌活白朮

一切痰飲 須用半夏風加南星熱加黃芩濕加白朮陳皮寒加乾薑

諸欬嗽病 五味爲君痰用半夏喘加阿膠佐之不拘有熱無熱少加黃芩春加川芎芍藥夏加梔子知母秋加防風冬加麻黃桂枝之類

諸嗽有痰 半夏白朮五味防風枳殼甘草

有聲有痰 半夏白朮五味防風

熱喘欬嗽 桑白皮黃芩訶子

熱喘燥喘 阿膠五味麥門冬

諸瘧寒熱 柴胡爲君

不思飮食 木香藿香

風冷諸病 須用川烏

風熱諸病 須用荊芥薄荷

欬嗽無痰 五味杏仁貝母生薑防風

寒喘痰急 麻黃杏仁

水飮濕喘 白礬皂莢葶藶

氣短虛喘 人參黃芪五味

脾胃困倦 參芪蒼朮

脾胃有濕 嗜臥有痰白朮蒼朮茯苓豬苓半夏防風

上焦濕熱　黄芩瀉肺火

下焦濕熱　酒洗黄蘗知母防已

腹中脹滿　須用薑制厚朴木香

腹中實熱　大黄芒消

宿食不消　須用黄連枳實

胸中痞塞　實用厚朴枳實虛用芍藥陳皮痰熱用黄連半夏寒用附子乾薑

諸氣刺痛　枳殼香附加引經藥

脇痛寒熱　須用柴胡

小腹疝痛　須加青皮川楝子

中焦濕熱　黄連瀉心火

下焦濕腫　酒洗漢防已龍膽草爲君甘草黄蘗爲佐

腹中窄狹　須用蒼朮

過傷飲食熱物　大黄爲君冷物巴豆爲丸散

胸中煩熱　須用巵子仁茯苓

六鬱痞滿　香附撫芎濕加蒼朮痰加陳皮熱加巵子食加神麯血加桃仁

諸血刺痛　須加當歸詳上下用根稍

胃脘寒痛　須加草豆蔻吳茱萸

臍腹疼痛　加熟芐烏藥

諸痢腹痛　下後白芍甘草爲君當歸白朮佐之○先痢後便黃蘗爲君地楡佐之○先便後痢黃芩爲君當歸佐之○裏急消黃下之後重加木香藿香檳榔和之○腹痛用芍藥惡寒加桂惡熱加黃芩不痛芍藥減半

水瀉不止　須用白朮茯苓爲君芍藥甘草佐之穀不化加防風

小便黃澀　黃蘗澤瀉

小便不利　黃蘗知母爲君茯苓澤瀉爲使

心煩口渴　乾薑茯苓天花粉烏梅禁半夏葛根

小便餘瀝　黃蘗杜仲

莖中刺痛　生甘草梢

肌熱有痰　須用黃芩

虛熱有汗　須用黃芪地骨皮知母

虛熱無汗　用牡丹皮地骨皮

潮熱有時　黃芩午加黃連未加石膏申加柴胡酉加升麻辰戌加羌活夜加當歸

自汗盜汗　須用黃芪麻黃根

驚悸恍惚　須用茯神

一切氣痛　調胃香附木香破滯氣青皮枳殼泄氣牽牛蘿蔔子助氣木香藿香補氣人參黃芪冷氣草蔻丁香

一切血痛　活血補血當歸阿膠川芎甘草凉血生地黃破血桃仁紅花蘇木茜根玄胡索郁李仁止血髮灰棕灰

上部見血　須用防風牡丹皮剪草天麥門冬爲使

中部見血　須用黃連芍藥爲使

下部見血　須用地楡爲之使

新血紅色　生地黃炒梔子

陳血瘀色　熟地黃

諸瘡痛甚　苦寒爲君黃芩黃連佐以甘草詳上下用根稍及引經藥○十二經皆用連翹○知母生地黃酒洗爲用○參芪甘草當歸瀉心火助元氣止痛○解結用連翹當歸藁本○活血去血用蘇木紅花牡丹皮○脉沈病在裏宜加大黃利之○脉浮爲表宜行經芩連當歸人參木香檳榔黃蘗澤瀉○自腰已上至頭者加枳殼引至瘡所○加鼠粘子出毒消腫○加肉桂入心引血化膿○堅不潰者加王瓜根黃藥子三稜莪茂昆布

上身有瘡　須用黃芩防風羌活桔梗上截黃連下身黃蘗知母防風用酒水各半煎○引藥入瘡用皂角針

下部痔漏　蒼朮防風爲君甘草芍藥佐之詳證加減

婦人胎前　有病以黃芩白朮安胎然後用治病藥發熱及肌熱者芩連參芪腹痛者白芍甘草

產後諸病　忌柴胡黃連芍藥渴去半夏加白茯苓喘嗽去人參腹脹去甘草血痛加當歸桃仁

小兒驚搐　與破傷風同

心熱　搖頭咬牙額黃黃連甘草導赤散

肝熱　目眩柴胡防風甘草瀉青丸

脾熱 鼻上紅瀉黃散　　肺熱 右腮紅瀉白散

腎熱 額上紅知母黃蘗甘草

## 陳藏器諸虛用藥凡例

夫衆病積聚皆起於虛也虛生百病積者五臟之所積聚者六腑之所聚如斯等疾多從舊方不假增損虛而勞者其弊萬端宜應隨病增減古之善爲醫者皆自採藥審其體性所主取其時節早晚早則藥勢未成晚則盛勢已敗今之爲醫不自採藥且不委節氣早晚又不知冷熱消息分兩多少徒有療病之名永無必愈之效此實浮惑聊復審其冷熱記增損之主爾

虛勞頭痛復熱加 枸杞葳蕤　　虛而欲吐加 人參

虛而不安亦加 人參　　虛而多夢紛紜加 龍骨

虛而多熱加 地黃牡蠣地膚子甘草　　虛而冷加 當歸芎藭乾薑

虛而損加鍾乳棘刺蓯蓉巴戟天

虛而多忘加茯神遠志

虛而吸吸加胡麻覆盆子柏子仁

虛而驚悸不安加龍齒沙參紫石英小草若冷則用紫石英小草若客熱即用沙參龍齒不冷不熱皆用之

虛而身強腰中不利加磁石杜仲

虛而勞小便赤加黃芩

虛而冷加隴西黃芪

虛而小腸利加桑螵蛸龍骨雞膍胵

虛而損溺白加厚朴

虛而大熱加黃芩天門冬

虛而口乾加麥門冬知母

虛而多氣兼微欬加五味子大棗

虛而多冷加桂心吳茱萸附子烏頭

虛而客熱加地骨皮白水黃芪白水地名

虛而痰復有氣加生薑半夏枳實

虛而小腸不利加茯苓澤瀉

髓竭不足加生地黃當歸

肺氣不足加天門冬麥門冬五味子　心氣不足加上黨參茯神菖蒲

肝氣不足加天麻川芎藭　脾氣不足加白朮白芍藥益智

腎氣不足加熟地黃遠志牡丹皮　膽氣不足加細辛酸棗仁地榆

神昏不足加硃砂預知子茯神

張子和汗吐下三法

人身不過表裏氣血不過虛實良工先治其實後治其虛麤工或治實或治虛謬工則實實虛虛惟庸工能補其虛不敢治其實舉世不省其誤此余所以著三法也夫病非人身素有之物或自外入或自內生皆邪氣也邪氣中人去之可也攬而留之可乎留之輕則久而自盡甚則久而不已更甚則暴死矣若不去邪而先以補劑是盜未出門而先修室宇眞氣未勝而邪已橫鶩矣惟脉脫下虛無邪無積之人始可議補爾他病惟先用三法攻去邪氣而元氣自復也素問一書言辛甘發散淡滲泄爲陽酸苦鹹涌泄爲陰發散歸于汗涌歸于吐泄歸于下滲爲解表同于汗洩爲利小便同于下殊不言補所

謂補者辛補肝鹹補心甘補腎酸補脾苦補肺更相君臣佐使皆以發腠理致津液通氣血而已非今人所用溫燥邪僻之補也蓋草木皆以治病病去則五穀果菜肉皆補物也猶當辨其五臟所宜毋使偏傾可也若以藥爲補雖甘草苦參久服必有偏勝增氣而夭之慮況大毒有毒乎是故三法猶刑罰也梁肉猶德敎也治亂用刑治治用德理也余用三法常兼衆法有按有蹻有揃有導有減增有續止醫者不得余法而反詆之哀哉如引涎漉涎取嚏追淚凡上行者皆吐法也薰蒸渫洗熨烙針刺砭射導引按摩凡解表者皆汗法也催生下乳磨積逐水破經洩氣凡下行者皆下法也天之六氣風寒暑濕燥火發病多在上地之六氣霧露雨雪水泥發病多在乎下人之六味酸苦甘辛鹹淡發病多在乎中發病者三出病者亦三風寒之邪結搏于皮膚之間滯于經絡之內留而不去或發痛注麻痺腫痒拘攣皆可汗而出之痰飲宿食在胷膈爲諸病皆可涌而出之寒濕固冷火熱客下焦發爲諸病皆可泄而出之吐中有汗下中有補經云知其要者一言而終是之謂也

吐法　凡病在胷膈中脘已上者皆宜吐之考之本草吐藥之苦寒者瓜蒂巵子茶末豆豉黃連苦參大黃黃芩辛苦而寒者常山藜蘆鬱金甘而寒者桐油甘而溫者牛肉甘苦而寒者地黃人參蘆苦而溫者青木香桔梗蘆遠志厚朴辛苦而溫者薄荷芫花菘蘿辛而溫者蘿蔔子穀精草葱根鬚杜衡皂莢辛而寒者膽礬石綠石青辛而溫者蝎梢烏梅烏頭附子尖輕粉酸而寒者晉礬綠礬虀汁酸而平者銅綠甘酸而平者赤小豆酸而溫者飯漿鹹而寒者

青鹽滄鹽白米飲甘而寒者牙消辛而熱者砒石諸藥惟常山膽礬瓜蒂有小毒藜蘆芫花烏附砒石有大毒他皆吐藥之無毒者凡用法先宜少服不涌漸加之仍以雞羽探之不出以虀投之不吐再投且投且探無不吐者吐至瞑眩慎勿驚疑但飲冰水新水立解强者可一吐而安弱者作三次吐之吐之次日有頓快者有轉甚者引之未盡也俟數日再吐之吐後不禁物惟忌飽食酸鹹硬物乾物油肥之物吐後心火既降陰道必强大禁房室悲憂病人既不自責必歸罪于吐法也不可吐者有八性剛暴好怒喜淫者病勢已危老弱氣衰者自吐不止者陽敗血虛者吐血咯血衄血嗽血崩血溺血者病人粗知醫書不辨邪正者病人無正性反復不定者左右多嘈雜之言者皆不可吐吐則轉生他病反起謗端雖懇切求之不可强從也

汗法　風寒暑濕之邪入于皮膚之間而未深欲速去之莫如發汗所以開玄府而逐邪氣也然有數法有溫熱發汗寒涼發汗薰漬發汗導引發汗皆所以開玄府而逐邪氣也以本草校之荊芥薄荷白芷陳皮半夏細辛蒼朮天麻生薑葱白皆辛而溫者也蜀椒胡椒茱萸大蒜皆辛而熱者也青皮防巳秦艽其辛而平者乎麻黃人參大棗其甘而溫者乎葛根赤茯苓其甘而平者乎桑白皮其甘而寒者乎防風當歸其甘辛而溫者乎官桂桂枝其甘辛而大熱者乎厚朴桔梗其苦而溫者乎黃芩知母枳實苦參地骨皮柴胡前胡其苦而寒者乎羌活獨活其苦辛而微溫者乎升麻其苦甘且平者乎芍藥其酸而微寒者乎浮萍其辛酸而寒者乎凡此皆發散之屬也善擇者當熱而熱當寒而寒不善擇者反此則病有變也發汗中病則止不必盡劑凡破傷風小兒驚風飧泄不止酒病火病皆宜汗之所謂火鬱則發之也

下法　積聚陳莝于中留結寒熱于內必用下之陳莝去而腸胃潔癥瘕盡而營衛通下之者所以補之也庸工妄投當寒反熱當熱反寒故謂下爲害也致以本草下之寒者戎鹽之鹹犀角之酸鹹滄鹽澤瀉之甘鹹枳實之苦

酸膩粉之辛澤漆之苦辛杏仁之苦甘下之微寒者猪膽之苦下之大寒者牙消之甘大黃牽牛瓜蒂苦瓠牛膽藍汁羊蹄根苗之苦大戟甘遂之苦甘朴消芒消之苦鹹下之溫者檳榔之辛芫花之苦辛石蜜之甘皂角之辛鹹下之熱者巴豆之辛下之涼者猪羊血之鹹下之平者郁李仁之酸桃花之苦皆下藥也惟巴豆性熱非寒積不可輕用妄下則使人津液涸竭留毒不去胸熱口燥轉生他病也其不可下者凡四洞泄寒中者表裏俱虛者厥而唇青手足冷者小兒病後慢驚者誤下必致殺人其餘大積大聚大痞大秘大燥大堅非下不可但須寒熱積氣用之中病則止不必盡劑也

病有八要六失六不治　註見神農名例

藥對歲物藥品

立冬之日菊卷柏先生爲陽起石桑螵蛸使凡十物使主二百草爲之長○立春之日木蘭射干爲柴胡半夏使主頭痛四十五節○立夏之日蜚蠊先生爲人參茯苓使主腹中七節保神守中○夏至之日豕首茱萸先生爲牡蠣烏啄使主四肢三十二節○立秋之日白芷防風先生爲細辛蜀漆使主胸背二十四節

禹錫曰五條出藥對中義旨淵深非俗所究而是主統之本故載之 時珍曰此亦素問歲物之意出上古雷公藥對中而義不傳爾按楊慎卮言云白字本草相傳出自神農今觀其中如腸鳴幽幽勞極洒洒髮髲仍自還神化及此五條文近素問決非後世醫所能爲也此文以立冬日爲始則上古以建子爲正也

# 神農本草經目錄

時珍曰 神農古本草凡三卷三品共三百六十五種首有名例數條至陶氏作別錄乃拆分各部而三品亦移改又拆出青葙赤小豆二條故有三百六十七種逮乎唐宋屢經變易舊制莫考今又併入已多故存此目以備考古云耳

## 上品藥一百二十種

丹砂　雲母　玉泉　石鍾乳　礬石　消石　朴消　滑石
空青　曾青　禹餘糧　太一餘糧　白石英　紫石英　五色石脂　菖蒲
菊花　人參　天門冬　甘草　乾地黃　朮　兎絲子　牛膝
茺蔚子　女萎　防葵　麥門冬　獨活　車前子　木香　薯蕷
薏苡仁　澤瀉　遠志　龍膽　細辛　石斛　巴戟天　白英
白蒿　赤箭　菴䕡子　菥蓂子　蓍實　赤芝　黑芝　青芝
白芝　黃芝　紫芝　卷柏　藍實　蘼蕪　黃連　絡石
蒺藜子　黃耆　肉蓯蓉　防風　蒲黃　香蒲　續斷　漏蘆
天名精　決明子　丹參　飛廉　五味子　旋花　蘭草　蛇牀子
地膚子　景天　茵蔯蒿　杜若　沙參　徐長卿　石龍芻　雲實
王不留行　牡桂　菌桂　松脂　槐實　枸杞　橘柚　柏實

茯苓　楡皮　酸棗　乾漆　蔓荊實　辛夷　杜仲　桑上寄生
女貞實　蕤核　藕實莖　大棗　葡萄　蓬蘽　雞頭實　胡麻
麻黃　冬葵子　莧實　白冬子　苦菜　龍骨　麝香　熊脂
白膠　阿膠　石蜜　蜂子　蜜蠟　牡蠣　龜甲　桑螵蛸

中品藥一百二十種

雄黃　雌黃　石硫黃　水銀　石膏　磁石　凝水石　陽起石
理石　長石　石膽　白青　扁青　膚青　乾薑　葈耳實
葛根　栝樓　苦參　茈胡　芎藭　當歸　麻黃　通草
芍藥　蠡實　瞿麥　玄參　秦艽　百合　知母　貝母
白芷　淫羊藿　黃芩　石龍芮　茅根　紫菀　紫草　茜根
敗醬　白鮮皮　酸漿　紫參　藁本　狗脊　萆薢　白兎藿
營實　白薇　薇銜　翹根　水萍　王瓜　地楡　海藻
澤蘭　防已　牡丹　款冬花　石韋　馬先蒿　積雪草　女菀
王孫　蜀羊泉　爵牀　巵子　竹葉　蘗木　吳茱萸　桑根白皮
蕪荑　枳實　厚朴　秦皮　秦椒　山茱萸　紫葳　猪苓
白棘　龍眼　木蘭　五加皮　衛矛　合歡　彼子　梅實

桃核仁　杏核仁　蓼實　葱實　薤　假蘇　水蘇　水斳
髮髲　白馬莖　鹿茸　牛角鰓　羖羊角　牡狗陰莖　羚羊角　犀角
牛黃　豚卵　麋脂　丹雄雞　鴈肪　鼈甲　鮀魚甲　蠡魚
鯉魚膽　烏賊魚骨　海蛤　文蛤　石龍子　露蜂房　蚱蟬　白殭蠶

下品藥一百二十五種

孔公孽　殷孽　鐵粉　鐵落　鐵　鉛丹　粉錫　錫鏡鼻
代赭　戎鹽　大鹽　鹵鹹　青琅玕　礜石　石灰　白堊
冬灰　附子　烏頭　天雄　半夏　虎掌　鳶尾　大黃
葶藶　桔梗　莨菪子　草蒿　旋覆花　藜蘆　鉤吻　射干
蛇含　常山　蜀漆　甘遂　白歛　青葙子　雚菌　白及
大戟　澤漆　茵芋　貫衆　蕘花　牙子　羊躑躅　芫花
姑活　別覊　商陸　羊蹄　萹蓄　狼毒　鬼臼　白頭翁
羊桃　女青　連翹　石下長卿　䕡茹　烏韭　鹿藿　蚤休
石長生　陸英　藎草　牛扁　夏枯草　屈草　巴豆　蜀椒
皂莢　柳華　楝實　郁李仁　莽草　雷丸　梓白皮　桐葉
石南　黃環　溲疏　鼠李　松蘿　藥實根　蔓椒　欒華

淮木　大豆黃卷　腐婢　瓜蒂　苦瓠　六畜毛蹄甲　燕屎　天鼠屎
鼺鼠　伏翼　蝦蟇　馬刀　蟹　蛇蛻　猬皮　蠮螉
蜣螂　蛞蝓　白頸蚯蚓　蠐螬　石蠶　雀甕　樗雞　斑猫
螻蛄　蜈蚣　馬陸　地膽　螢火　衣魚　鼠婦　水蛭
木虻　蜚虻　蜚蠊　䗪蟲　貝子

宋本草舊目錄　李時珍曰舊目不錄可也錄之所以存古蹟也又以見三品之混亂不必泥古也

新舊藥合一千八十二種
三百六十種神農本經 白字
一百八十二種名醫別錄 墨字
一百一十四種唐本先附
一百三十三種今附 開寶所附
一百九十四種有名未用　八十二種新補

一十七種新定　已上皆宋嘉祐本草所定者

四百八十八種陳藏器餘　二種唐本餘

一十三種海藥餘　八種食療餘

一百種圖經外類　已上皆唐愼微續收補入者

玉石部　上品七十三種　中品八十七種　下品九十三種

草　部　上品之上八十七種　上品之下五十三種　中品之上六十二種　中品之下七十八種　下品之上六十二種　下品之下一百五種

木　部　上品七十二種　中品九十二種　下品九十九種

人　部　三品二十五種

獸　部　上品二十種　中品一十七種　下品二十一種

禽　部　三品五十六種

蟲魚部　上品五十種　中品五十六種　下品八十一種

果　部　三品五十三種

米穀部　上品七種　中品二十三種　下品一十八種

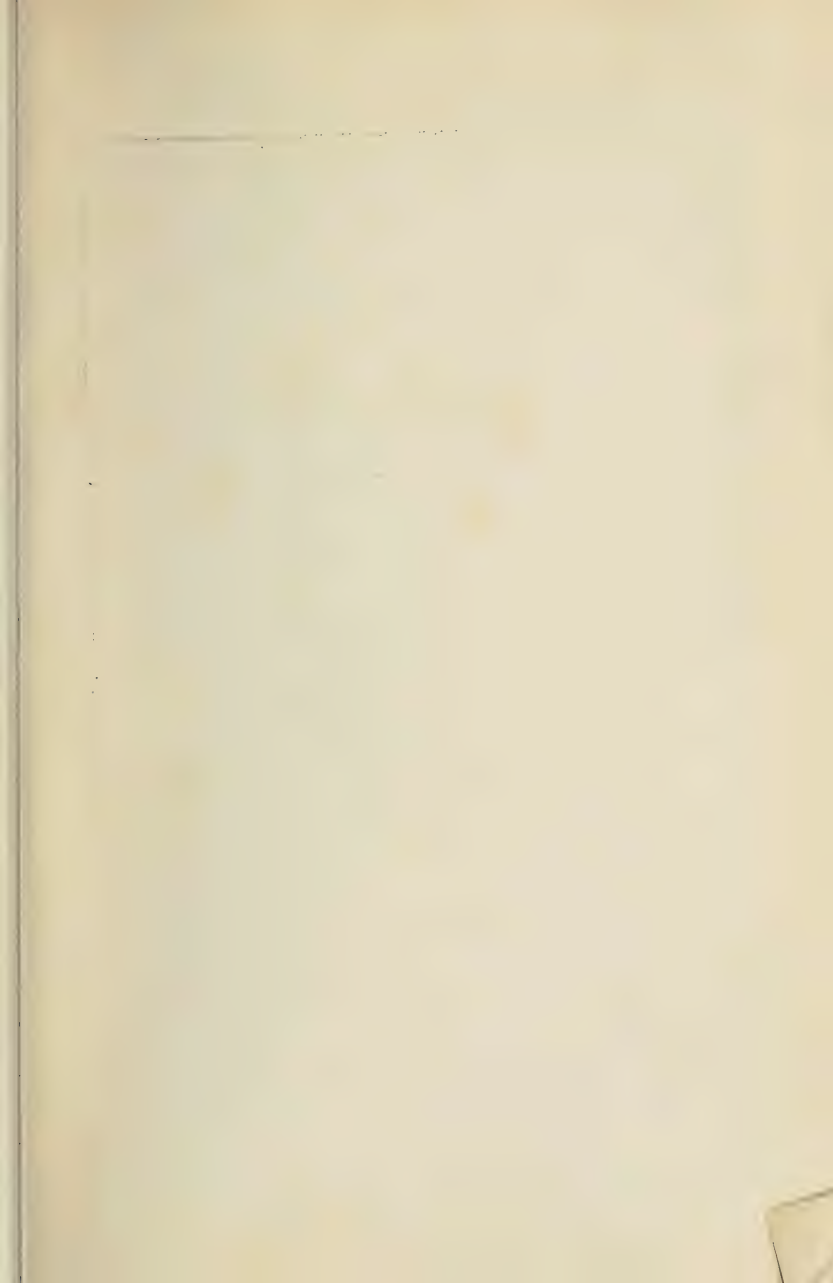
菜　部　上品三十種　中品一十三種　下品二十二種

有名未用　一百九十四種

圖經外類　一百種

本草綱目第二卷終

以上本草綱目序例二卷原文は、和刻寛永版、寛文版並に金陵本、その他原著者李時珍が引用せる諸書を參校して、頭註國譯本草綱目の底本としたものである。序例は、本草學の大綱を提示した尤も重要なる一門なるが故に、特に本册に附載して、本書原文と譯文一斑との對照に資した次第である。

譯出者　鈴木眞海　記

昭和四年六月十一日印刷
昭和四年六月十三日發行

頭註國譯本草綱目（第一冊）
非賣品

監修兼翻譯者　白井光太郎
翻譯者　鈴木眞海
東京市日本橋區通三丁目八番地
發行者　和田利彦
東京市日本橋區通三丁目八番地
印刷者　木村諭吉
東京市日本橋區通三丁目八番地

刊行所　春陽堂
電話日本橋五一・六四一・三七八八
振替口座東京一六一七

東京・日東印刷株式會社印行・本郷